
蒼の月 鴉

之ち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蒼の月 鶴

【Zコード】

Z2054T

【作者名】

之ち

【あらすじ】

魔術師の弟子・東堂夙夜

高校受験を目前に控えた氷上恭司

将来にも今にも現実味を見出せない白瀬トオル

新宿という街と三人の少年を中心に繰り広げられる青春物語。

「た、助け、てくださ、い

第一声はいつもここから始まる。なにかしらのトラブルに巻き込まれた人間だけがこの場所へとやってくるのだ。

喉の奥から必死に絞り出した声は確かに事務所にいた一人の耳に聴こえた。その声はまるで何年も使っていたようで上手く言葉が出てこないようでもあった。歳はまだ若く十七、八頃だとうのに喉は声を出すには錆びていた。彼女は黒のセーラー服を着ているので学生だと確認できる。胸元に赤いネクタイがあるだけで他は黒ばかり。手と首より上に随分と光を避けていたのか血管が薄らと浮かんで白くなつた肌がある。顔は俯いていてはつきりと見えないが向かいに座る魔女には事務所へ入ってきた時に見た美女の顔があつた。黒の瞳は大きく、まつげは長く、鼻は小さく薄い桃色の唇は年相応より艶をもつとして男の視線を得るには十分な色気を振り撒く。

全てが完璧なように見える彼女は身体を震わせている。

壊れかけた音楽プレイヤーが出すような途切れた声で彼女はまた「助けてください」と告げた。その声にも喉の痛みが雑音として混ざっていた。あまりにも耳障りだつたため事務所の奥にあるソファーから一人の少年が起き上がる。

「きやつ」と女学生が肩を上げる。

少年の姿はソファーに埋まつていて見えなかつたのだ。女学生を出迎えたのも今座つているソファーに招いたのも魔女だつた。

少年は着ている学生服と同じまだあどけなさの残る男子だ。学生服は長年使い切つた学校指定のもの。堅苦しいのか前のボタンを全部外していく無地のTシャツが見えている。

「お客様の前よ。もつと凜々しく」

黙つたまま首だけ頷く。

「ごめんなさいね。ちょっと眠つてないのよ、あの子」

女学生がふたたび足を振るわせ始める。

「まずは落ち着きなさい。何に怯えているのか知らないけれどここには貴女を脅かすものは何も無いわよ。せっかくの美貌が俯いていては台無じじゃない。顔をお上げなさい」

動き出す少年はささつと歩き書類の海が造つた山を搔き分けるよう進む。その先にはコーヒーメーカーがあり手馴れた仕草でスイッチを押した。魔女はその行動を見ることなく感じ取り震える美少女の隣りへ移動する。襟元から薔薇の香りがして女学生が顔を上げた。肩に置いた手は確かに暖かく人の温もりが伝わる。不思議と少女の不安や恐怖というものがたつたそれだけで和らいでいく。魔女は見る、少女の目は赤く腫れていた。まるで朱肉でも塗つたように瞳が赤く酷く傷ついているように見えた。

「どうぞ」と少年がコーヒーを一つカップに入れて差し出した。

彼の手元には自分の分と見られるもう一つのカップがあった。少年がカップに口をつけるのを見て少女もそうしようと思った。だが、黒い沼のような水面に映つた自分の顔にひどく驚いて泣き出してしまつた。どうすることなく魔女と少年は彼女が泣き止むのを待つことにした。

新宿駅より数分歩きビルの森の中に入ると暗い洞窟のような路地がある。関係のある人間でさえ歩くのを止めたがるような人気の無い道だ。表側から見るような派手な看板がなければ外灯もない。夜になれば表の通りとは全く別の世界が変化する。そんな通りのある一つのビルに魔女は店を構えている。

洗敷事務所。とくに何をしているかは明記していないこの看板はビルの一階にあるテナント表記プレートを占領していた。ビルは五階建て。一階あたり部屋は一つだが狭くない。魔女の事務所も三人掛けソファーを長机を挟んで二つあるし魔女の仕事机だつて窓を背

後に設置されている。少年が寝ていたソファーは一人掛けだが壁際にある。ただ、問題は事務所に溢れるノートや雑貨の類が邪魔をする。魔女と女学生が話をするソファーは高く積み上げられた紙の山に閉じ込められていくようだった。加えて仕切り壁を隔てて奥には給湯室とトイレ。まだこの他に一部屋存在する。魔女はその一室で眠る事もあった。

一部屋だったビルの構造を弄つていて。

外の世界と断絶されたこのビルには他のテナントはなく魔女は空き放題使つていて。以前は一階に喫茶店があつたがさすがに客がこないのですぐに消えてしまった。以来、いつもコーヒーメーカーで作ったコーヒーばかり飲んでいた。

少女が泣き止むまで三十分くらいかかった。その間、少年は携帯電話を弄繰り回しああでもないこうでもないといった表情で過ごしていた。またメールの着信音が度々流れていた。

魔女は少女から離ることは無くずっと背中を摩つていた。泣き止むきっかけは「にゃ～」と言つ鳴き声だった。昼の間、非常に短い間だが僅かに太陽の光が差し込むことがある。その光で身体を温めようとする猫が一匹居る。黒い毛をした黄金色の瞳をした猫。どうやら猫は光りを追つているようで場所を変えながら鳴いていた。

「落ち着いた？」

魔女はそれこそ全世界の男がそれだけで堕ちてしまうような笑顔で微笑んだ。いや語弊がある、男であつても女であつてもだ。彼女の優雅さに性別は問題にならない。いや、性別さえも超えるだろう。「す、すみま……せ、ん」

口を開く事さえ難しいのか。それとも声が出ないのか。彼女の声は小さく擦り切れている。このまま声が出なくなつてもおかしくないようになつた。

「その声、もっと聴かせてけよつだい、綺麗な声なのよ」

魔女は少女の唇に指でそつと触れる。じんと肉の触れた感覚が彼女を襲う。指は顎から喉を伝つていく。薔薇が開花する時のような神

秘的で淡い感触だった。少女の吐息に触れて魔女はなにかを呟いた。

「すいません」

壊れかけたプレーヤーはすっかり直ったようだ。少女自身、自分の声に驚いた。何か特別な事をしたわけでもない。魔女はただ当たり前のことをしただけである。少女の声はまるで彼岸花のような色をしていると少年はふと思つた。少女の着ている制服のネクタイが彼女の黒という色を払拭させるほど毒々しく輝いていたからかもしれない。毒とは対照的に美しくどこまでも淡く透き通る声が少女の口からは発せられる。それでいて響く。きっと彼女が唄を歌えば誰もがその声に酔いしれるだろう。

「どうして、私の声？」

「女はもっと優雅にしなくてわね」

魔女は少女の近くで微笑んだ。彼女の姿から察するにまだ二十代に見える。歳の近い姉のような彼女に心はさらり落ちしていく。とは云うもののやはり魔女なのだ。容姿からだけでは想像できないほどの包容力と艶かしさが少女には伝わっている。もしも魔女が女学生を好いてこのまま押し倒されても彼女は抵抗しないだろう。そんな魔女はワンサイズ下のような身体のラインがピッタリと見えるスーツを上着なしで着ていた。その下の肉体から女をこれでもかと見せ付けながら少女の傍を離れた。再び対面に座つた魔女は「ゆつくりと話して頂戴」と告げる。

少年は自分が寝ていたソファーアの肘に腰を預けるように立つと少女の声に耳を傾ける。この場から去る気配は無い。少女は冷めかけたコーヒーを一口含むと喉の渴きを潤して話を始めた。

「私、ストーカーなんです」

あまりにも酷い始まりだった。突然の告白に少年はコーヒーを噴出しそうになつた。ぎりぎりの所で留めたのでなんとか周囲を汚さずにはいた。少女の言葉はそれだけでとまつた。何一つ感じていよいよ表情で魔女は「それで？」と催促する。

「私、ある男の子が好きで……ずっと見てたんです」

「ずっと？　ずっととと詫うのはどれくらい？」

「四ヶ月と十三日と半日です。彼を見た日からずっと見ています……

だから憶えてるんです」

「で、助けて欲しいのは貴女かしら？」

魔女の問いに少女は黒い髪を揺らして否定した。なんて綺麗な黒髪なんだと魔女も感心した。きっと彼女の髪に指を這わせれば気持ちいいだろう。

「違います。助けて欲しいのは相手の男の子なんです」

「……誰から？」

「私です」と少女は言った。

少女はまだ震えている。少年と魔女は互いに目を合わせた。見たところ震えている少女におかしな所は無い。何かに怯えて恐怖し震えている。それ以外にはなにもない。ストーカーだと自分で言ったその内容についてそれがどの程度の物なのか不明。しかし女学生が人を殺すようには見えない。しかし女学生が刃物を持って振るう姿を想像するとちょっとは様になるんじやないかと少年は想像する。

「なぜ、貴女はその男の子を殺すことになるの？　それに解つていいのなら自制できるでしょう」

「無理なの」

魔女の言葉を遮りそうになっていた。

少女の声は全身を震わせて発生した。俯いたままの少女は机に両腕を這わせて長く伸びた爪を立てる。その指が痛むのを見ていられなかつたのか魔女はそっと手を握る。呼吸を整えた少女が小さく呟いた。

「ドッペルさんって知っていますか？」

今度は魔女が首を横に振る。すると今まで声を出す事の無かつた少年が一人の間に新しい波を注いだ。

「それなら俺が知っています。半年くらい前になりますが、ある雑誌の企画で作った都市伝説です。読者参加型のちょっとした恋のおまじないですよ」

魔女に話す少年の言葉は丁寧であった。魔女の口元が緩む。

「ほう、なら説明してくれるか、ぼうや。知つての通り私はそいつた雑学には疎い」

「雑学って言つほどのもんじゃないですよ。それと先に言つときますけど俺が知つてるのは最初の頃のものですからね。その企画の最終形態がどんなものになつていたかは知りませんよ」

「なによそれ？ 中身が変わるみたいじゃない」

「さつき言つた通り雑誌の企画なんですよ。みんなで新しい恋のあまりないを作らうつていう。結構、人気があつたらしいんですけどね」

「らしい？」

「生憎、俺は女じゃないのでその手の雑誌は買わないんです。クラスの女子がそういう話をしてたんで聞いたことがある程度で確か連載していた雑誌は……」

少年が言葉に詰まる。その名前を思い出せつとするがなかなか出てこないようだった。少女が顔を上げて「リリイです」と小さく呟く。少年ははつとして「それだ」と答える。

「で？」

「そのドッペルさんつていうのは最初、好きな相手が今、どこで、何をしているか、知りたくないかといつ物だつたんですよ。ドッペルゲンガ つてあるじゃないですか。あれですよ、あれを作つて知つちゃおうみたいな。そんで願いを叶えるためにもう一人の自分が気になる相手を見てくれる、報告してくれるという内容だつたんです」

少年が一応の説明をすると少女は「そうです」と告げ話を紡ぐ。

「リリイでのドッペルさんはまず自分の携帯電話で自分の携帯電話にかけるんです。当然ですが通話中になります。それを三回繰り返すと不思議な事に繋がるんです。でも向こうは何も言わないし答えない。でもこれでいいんです。後は電話に向かつて好きな相手の名前を伝えれば電話は勝手に切れるんです」

直つたばかりのプレーヤーは本来の能力で音を出す。

「怪しいわね。そんな奇妙な方法なの？ まるでホラー映画のようじゃない？ しかもその手法ではじまる都市伝説云々は山ほど在るわよ」

「そこがいいんです。まるで魔術のような非現実的な入り方が好きなんですよ、たぶん」

溜め息をつく魔女。

「それで貴女はやつたのね？ その儀式を」

「はい。まさか本当に出来るとは思わなかつたしこんな事になるなんて思わなかつたものですから」

「ドッペルさんとやらがなぜ相手を殺す事に繋がるのかしら？」

少年は首を振つた。彼の知つていることはもうないらしい。代わりに女学生が口を開く。

「電話の向こうで相手の名前を聞いたドッペルさんはそのまま行動に出るんです。でもこの時点ではまだ姿も形も無くてただ見ているだけなんです。説明すると目だけ浮いているんですよ、こゝ、ほんやうと。で、時が経つにつれてドッペルさんの観ているものが目に映るんです。視覚を押し付けられるんです。最初は何が起きたのか理解できませんでしたが事態を把握できたころはもう部屋に籠つたままになつていました」

「それでどうやつて生活していたの？」

「ドッペルさんの視覚が送られてくる時は見ているときだけなんです。どうやらドッペルさんは集団行動している時や個室のような閉鎖された場所に居る時は見れないようなんです。だから彼が学校に居る時やトイレに入つた時なんていうのは見えないんです。だから朝から昼は寝ていられるんです。そんな生活にもすぐに慣れましたよ、一ヶ月もすればそれが普通になりました。もちろん学校は休学になつたしアルバイトもお稽古事も全部止めましたが」

「それで放つておくとどうなるの？ ただ見ているだけなら殺す事にはならないでしょ」

女学生の問題は殺してしまつとこりう」と。

「ドッペルさんに意識が芽生えるんだそうです。私の場合、まだそこまでいっていらないんですがじきにそつなるでしょ。ドッペルさんが自分のことを見て欲しいと思い始め姿も形も使つた本人とそつくりになるそうです。そのドッペルさんの衝動が激しくなると相手の子を殺してしまつんだそうです」

「暴走ですね」

「そのとおりです。ドッペルさんが暴走するんです。好きな相手を監視するだけの存在だつたドッペルさんに気持ちが生まれるんです。自我をもつてしまい自分を見て欲しいって思うようになるそうです。その不満が積もり殺す事になるそうです。それと同時に恋の障害も取り除くらしいです」

「障害つて?」

「所謂、恋敵でしょうか。同じ相手を好きになつた別の子です」「他人に攻撃するなんてけつこう危ないこと付け加えたわね。でも解く方法があるんでしょ」

「はい。対象となつた子と恋愛対象になればすぐにドッペルさんは消えます」

「他には?」

「対象の死亡だけ」

「それで助けてほしいということね。随分と傲慢なおまじないね。好きになつた相手が振り向かなかつたら殺せばいいなんて馬鹿馬鹿しいわ」

「そんな事思つてないわ! 私が使つたのは四ヶ月前よ。でもその後、いろいろと追加されていくし雑誌が廃刊になつた後もネットで話は続くし……」

再び俯ぐ。しばりく震えてぴたりと止まつた。少年は携帯電話を取り出す。

「それとおまじないをかけた本人はドッペルさんと出会つと死んでしまつていう情報が追加されました。そしてドッペルさんの目で

すけれど見ているところより解るんです。ですから私が見ている物はきちんと認識できます。なんていうか頭の中にイメージみたいな感じでもやもやって

「どう説明していいのか解らないのだろう。少女は身振り手振りで表現しようとするが上手くなかった。その混乱にも似た感情が溢れ出してきたため目から涙がこぼれだす。

「無理して説明する必要はないわよ。言いたい」とは解るわ。そして、ぼつや。そのドッペルさんの解決方法は?」

携帯電話を弄っていた少年が画面を魔女にみせる。

「ありましたよ。対象との恋愛を叶える事、または対象の死亡を確認することとのことです。わざと聞いたとおりこの一つだけですね。このどちらかが確認できれば自然消滅すると書いてあります。かなりH格です。

「相手の子とはどうなの?」

少女は首を横に振った。それどころか出た答えは「まだ話をした事も無い」という一言。少年と魔女は彼女がはじめに言った言葉を思い出す。ストーカーなのだ。それなら口を利いていなくても納得できた。加えてドッペルさんからのイメージがやつてきてからは外出する事も少なくなつていて。声をかけるタイミングは無かつた。

「つまり貴女は話をした事も無い子を好きになつたの?」

「はい」

「一旦惚れかと一人して思つ。それしかないだろうと。そして事態の解決に相当な労力を必要とするとなると呆れそうになつた。

「で、その相手の名前は? それくらいは知つているんでしあう」

「……氷上恭司、くんです」

必死に絞り出した名前。その名前に少年が驚く。女学生は傍に置いてあつた鞄から写真を取り出した。

「ドッペルさんが送つてくるんです。どうやって届けるのか作ったのか解りませんがこつやつて写真とUSBメモリに動画を詰め込んで送つてくるんです」

そう言つて次々と出す写真には背が高く整つた顔立ちの男が写っている。少女と一緒に写つていればそれは見事な美男美女のベストカップルとして拍手を浴びそうな相手であった。写真を手にとつて少年は強く口にした。

「この仕事、やらせてください」

声をあげるまで時間は掛からなかつた。少年が自分から志願することに疑念や雜念は無かつた。そもそも当然のようない放つた。

「解つたわ。この件はぼうやに任せるよ」

「今さらですけれど信じてくれるんですか？ こんな話」

「このような話を信じるのか。至極当然の事である。だが、『これは

そう言つとこるよ』と魔女は優雅に告げた。

いつもの『ぐべっぐべっぐ』の上に押し倒されていた。敷かれた布団を二人分の体重で限界まで押し付けて家庭教師であるところの遙さんは僕の股間と自分の股間を密接にして跨つている。怪しい笑みはいつもおり勉強のあとで彼女が提唱するお楽しみタイムが始まつて三分のことだった。彼女のなすがままにする僕はあつと/or>う間に押し倒された。

「今日はね、最後だから大サービスよ」

そういうつて僕のシャツのボタンがひとつ、またひとつと外されいく。当然、僕は男なのでシャツの下には何も着ていない。彼女の指が乳首やら心臓の上あたりをくすぐつてくる。もう慣れたはずのいつも Skinner シップだというのにぞくりといつ背中に走る妙な感覚。指はそのままゆっくりとじっくりと這つていき一人の接点へと進行した。腰の辺りに差し掛かるとびくつとした。電気のようなものが走つた。

「やっぱり可愛いわ。手放したくないわね、恭司くん」

「だつたらまた来ればいいじゃないですか。遙さんが来たい時に

「駄目、なのよ。決めたの」

彼女の行為はもう一年近く続いていた。限りなく性行為に近い Skinner シップ。始めたのは彼女の方で僕はそれを受け入れただけだ。股間の接点へ指が到達すると今度は状態をまげて僕の胸に突き出したピンクの肉がぬるりと来る。纏わりつく涎がひんやりとさせたかと思うと肉の持つ暖かみが胸をくすぐる。そのまま首の方へと近づいてきた。

「ごめん。今日は仕事があるから首は駄目なんだ」

そう言つと口はぴたりと止まつて左へと向かつた。

「「こんなことしてるとて知つたら恭司のファンはビックリのかしらね」

「知らないよ。ファンなんていかどうかもわからないでしょ」

「そうかしら? ここ半年で恭司は見違えるほど……いえ、以前にもましていやらしくなつたわよ。ああ、違うわね。男前になつたわよ」

「それ、いらっしゃんでも違ひますわよ」

「ふふふ。でも本当にいい男よ。このまま恵子さんの言われる通りにお手伝いなんかじゃなくつて本格的にモデルや俳優を目指しなさいよ。きっと群がつてくる女の子を着替えるようにとつかえひつかえできるわよ。男にとつては夢のような日々だと思つわ」

耳元で囁く。「それって楽しいのかな」と返すと遙さんは「きっと楽しいわよ。女の子つですごく抱き心地がいいのよ」と腕を広げて自慢した。今、僕の身体と密着している彼女は同性愛者である。いわゆる百合、レズと呼ばれる部類にはいる。そんな彼女が僕のよ

うな男に対してもう一つの行為をするのは彼女曰く異性に対しても興味があるのだといつたことだ。同性愛者であり異性にも興味があると彼女は言う。それはバイじやないのかと尋ねると恋愛対象には絶対にならないし恭司くん以外にはこういったことはしないと言つた。つまり男の身体に興味があるだけなのだ。そしてそれは成熟した男ではなく成長途中の中学生を対象に興味を抱いているのだと告げられた。そんな告白をされたのは遙さんが僕の家庭教師になって一ヶ月ほど経つたころだつた。単純に女の身体に興味があるかと問われたときに僕は世の中の男子十割がそう答えるようにありますと答えた。すると彼女はそのまま着ていた衣類を脱いでみせてくれた。はじめて見た女性の身体は細く綺麗だつた。自分より四つも上のお姉さんだというのに頭も良くて運動もできるのに、彼女の身体は小さかつた。全力で抱きしめたらきっと折れるだろうなんて考えた。ブレジャーのしたにある一つのふくらみは同業者の見せるようなものとは全く違つていた。大きくは無いが掌にすっぽりとおさまる。

どのくらいの力加減で揉めばいいのかわからないのでゆっくりと力を込めていく。これがまた凄くて力を込めるといつは凝縮するのだがすぐに押し返されるのだ。それがやけに気持ちのいい物体で何度も揉んでいた。それが初日の事だ。それからずっと週に一回、こんなことが続いている。

その間、僕は一度もセックスをすることはなかつた。それは遙さんが拒んだというよりできないと言つたから。事実、僕が彼女の股間に何をしてもどこをどうしても一切濡れる事は無かつた。彼女は僕に謝るような事は一切言う事はない。

「私が男と寝る事が出来ないからよ」と言い続けた。

「さて、今日も一度だけ抜いてあげる。最後なんだから好きな方法を言いなさい。何でもしてあげるわよ。手コキでも足コキでもフェラでもなんでもよ、そうね……膝裏、脇なんでもござれよ」

「そんな選択肢を出されると僕はまるで変態みたいじゃないですか」「あらいいじやない。普通なんて一番つまらないのよ。ちょっとくらいヘンタイっぽいほうが私の好みだもの。ふふつ、なんならまたコスプレしてあげよっか？ バイト先の制服持つてきてるわよ」

遙さんは秋葉原にあるメイド喫茶で週に三日バイトしている。その制服は店の内容から解るようにメイドの衣装で黒を基調としたミニスカでふりふりなのだ。少し前に休日出勤になつて制服を持って来た時がある。太ももまである二ソックスと短いスカートの間にはなぜか男の視線を吸い込むブラックホールが存在していたのには大変、驚いた。世の中の男はみんな一緒なんだと遙さんは言つていた。

「じゃあ口でしてあげる」

初めてのとき、口でするのは嫌じやないのかと尋ねたことがある。遙さんは僕の、男の性器を舐めるのは非常に面白いと答えた。「嫌悪しているわけじやないの。人間として興味はあるのよ」と本人もその辺は良く解らないらしい。

彼女の口の中に入ると温いゼリーのような感触を下半身で感じた。

女性の場合、下の口がなんて台詞がエッチな本でよくあるが男の場合はなんていうのかな、なんて考えながら快感に溺れた。

「でもなんで今日で最後なんです？ また来ればいいじゃないですか。もしかして母さんにバレたとか？」

スキンシップを終えて普段着に着替えると彼女は帰る仕度をはじめた。僕の出したものを味わいながら喉を降つていくところを見ているとどうしてか罪悪感のようなものがこみ上げてきた。

「単に生活が忙しくなるのよ。ほら、一ヶ月前に私の父さんが亡くなつたって言つたでしょ。そのせいで大学を辞めるかもしれないのよ。来年の受験勉強を手伝えないのは哀しいけれどね。こればかりは仕方ないわ」

「そう、なんだ」と言つて哀しくなつた。

「なに？ 哀しい？ もつオナニーのお手伝いしてくれる女がいなくなつて淋しいのかしら、恭司くんは」

「そうじゃないよ」とちょっと怒る。遙さんはそうやつて僕の感情に起伏を与えてくれる。そして優しく笑つて家を出て行く。玄関まで送つた。できれば家の前まで送るよと言つたが、「どうせすぐそこじゃない。もし会いたくなつたらいつでも来なさい。それにケーパンだつてしまつてるでしょ。でも抜きたいからつて言うのはなしよ。そういうのは出来る相手を見つけなさいよね」と実の姉が叱るようと言つた。

遙さんが夕焼けの道を歩いていく。これまでのことをいろいろと思い返したが結局、スキンシップの事ばかり甦つてきた。彼女の親とうちの親は友人関係にあるらしくきんじょでも交友関係の深い家だ。遙さんは都内、いや日本でも有名な立命館や東大と並ぶ大学に通つており僕が目指しているM高校の卒業生である。つまり僕がこれから歩むだろうとされる道を既に歩いた憧れの対象もあるわけだ。そんな彼女は頭の悪い後輩をなんとかしようと家庭教師を買ってでた。平均以下だった僕の悪い頭を鍛えるには相当、大変だつただろう。けれど彼女の教え方は最高で僕は通つている中学で突如

トップクラスになった。この行為になにか応えられないかと思つたが残念ながら僕はまだ中学生でお金もなにもない。だから母さんのためにもM高校の受験には受かりたいと思う。

振り返つて氷上の表札を見た。帰宅する時、学校へ行くときいつも思う事がある。今日なにをしたか、明日へ向けて何をするか。表札には恵子と恭司という僕の名前ふたつだけがある。父親の名前はない。遙さんは一ヶ月前に死んだといったがうちの家はもつと前だ。僕がまだ幼稚園にも入る前に交通事故によつて死亡した。僕は父さんがどういった人だつたか知らない。憶えてもいない。時折、母さんが似てきたわねなんて言うけれど僕にはわからない。氷上家が所有する唯一の財産はこの家だけだ。最近では東京の中にある古びた町並みだつた景観も消滅し始め古い日本家屋は氷上家くらいになつてきた。周囲の家、遙さんの住むアパートを含めて全て洋風になつた。昭和以前の名残を残したうちの家はまるでタイムスリップしてきたような雰囲気があつた。まあそれは単純にお金が無くて改装なんて出来ないだけだ。と僕は思つてゐる。でもそれとは逆にこの古臭さが堪らなく好きだ。そして玄関を空けて中へ入る。

風情溢れすぎる建築物となつた家の中には誰一人いない。僕はいつものように台所へ向かつてお茶を淹れる。居間には小さなテレビと書類がわんさかと置いている。書類は母さんの仕事道具の一つである。母さんは物書きをしており雑誌のコラムや小説を書いている。普段はこの一階にある居間でカタカタとキーボードを叩いている。取材や担当の編集者に会うため出かけることもある。今日は雑誌の撮影があり現場へ出向いている。そこへはこの後、僕も行くことになつてゐる。

渋めのお茶で喉を潤すとそろそろだなと時間を確認。さて、行くかとバッグを持って家を出る。鍵を降ろすとがしゃんと大きい音を立てて戸が閉まる。夕暮れを背に駅に向かつた。家から駅まで十五分もかかる。同じ東京でも都心とはえらい差がある。けれどそんなただ歩くだけの時間も嫌いじやない。

僕の通う中学には部活をしないという選択が出来る。ところもちょっと前に部活しなければならないのはおかしいとそれこそ頭のおかしな親が学校へ講義し部活に対する姿勢を変えざるを得なかつたわけだ。とくに素晴らしい成果を上げていた運動関係はなく文科系もとくに凄いという訳でもなかつた為、学校側は自由にしてしまつた。そのおかげで放課後は自由になつた。僕はといつと夕方の時間はほとんど家にいる。五時になると通つていてる塾へと出向くわけだがそれも毎日じゃない。

母の仕事の関係で雑誌のモデルを頼まれている。いつからモデルをやつしているか自分でも覚えていない。母さんに言われるがままに始めたんだと思う。非常に曖昧だが僕がモデルをすることで母さんの評判がまたよくなるわけだ。それならそれでいいや、と続けていふ。そう僕は氷上恭司ではなく氷上恵子の息子として見られることが多い。僕としては受験期間を除いては頼まれる限りはやつておこうと決めている。

駅につくと新宿駅までの切符を買つて一番最初に来た電車に乗つた。帰宅途中の高校生や同学年らしい中学生が電車の中にはわんさかといた。同じ年頃でも随分と僕は違つてゐる。そりや年相応の背丈でもなければ顔つきも違う。よく大学生かと見間違われる。だからモデルとして仕事が来るわけだ。僕自身も自分の事は気にいつてゐる。といつてもナルシストじゃない。普通に嫌いじゃないということだ。

電車は夕暮れの赤い町を横切つて新宿についた。まだ日は落ちそくにもない。ゆっくり脚を動かして歩く。混雑する駅のホームを抜けると携帯電話で時間を確認した。最近買い換えたばかりのメタリックブルーの新型が表示していたのは十六時三十分。撮影スタジオに集合する時間まであと一時間半もある。おそらく母さんも新宿にきていないだろ。スタジオに行つても邪魔になるだらうしどこかで時間を潰そう。

適当に歩いてゐるとコンビニがあつた。外から見ると何人も横に

並んで雑誌を読んでいる。サラリーマンというのは立ち読みが本当に好きなようだ。スーツ姿の男が全部で七人一斉に雑誌や漫画を読んでいる。それは非常に不気味だった。僕も並ぼうと思つたけれど入る隙間が無いのであきらめる。

次は書店だつた。立ち読みするならこいつのほうがいいか。コンビニより種類も多いので入ることに決めた。どういうわけか、コンビニよりも人の数は少ないようと思えた。広いはずの店内がそれに増して広く映る。僕はファッショング雑誌のコーナーへと直進してこれから撮影する雑誌の名前を探した。

雑誌の名前は「リリィ」というらしい。女性誌という名前は無いが記事の内容からすると女性雑誌に分類される。男が見るような特集は組まれていないようだつた。表紙には黒い髪の女性が載つていて大きく美耶子最誕などと書かれていた。やけにキラキラしている表紙を捲つてみると中はけつこうシックで表紙の女性のインタビューが載つていた。

インタビュー中の写真らしき物が掲載されているがおせじではなく本当に綺麗な人だと思つた。三枚のしゃしんがあるがどれも笑顔らしきものはない。が、よく見れば彼女の口元が少し、ほんの少しだけ笑つていていた。なんといつか笑顔ではなく微笑みだと感じる。そしてなにより驚いたのはインタビューをしていて女性はあろうことか僕の母だつた。そういう母さんが言つていたことを思い出した。最近、お気に入りのモデルがいるとかどうとか。多分、彼女の事なんだろうな。

しばらくリリイを読んでいるとお客が増え始めた。さすがに男が読むような雰囲気ではないなと空気をよんでも場を去ることにした。それというのも誰かに見られていくような気配がしたからである。店員の目が気になつたのかもしれない。

漫画の単行本が平積みにされている場所をとおり文庫本コーナーへと入る。なにか読みたいようなものはないかと新刊を見てまわつたが特に欲しいものがなかつたので書店を出る事にする。まだ時間

はあつた。

少し歩くとまたコンビニだった。今度のコンビニは小さかつたが本を置いてある場所には誰もいなかつた。丁度いいのであと少し時間潰しておこう。するとまたあの女性の表紙が目に入った。売れているのかな、と手を伸ばした直後、僕の手が白く小さな手と触れた。

「あつ」

触れた指先はすぐに引っ込んだ。その先にはどういうわけか極上の美女が立つていた。学校の帰りなのか黒いセーラー服に赤いネクタイという格好をしている。上品過ぎるほどの容姿と相まってお人形のような姿だ。でもなによりその制服はよく知っている。何年か前の遙さんを思い出した。よくこの制服で家に来ていた。M高校の制服だ。極上の美女は学校指定のタイツも穿いている。

「ほ、ほしいの？」

一步下がつてそう言った。なぜか引き気味だ。それもそつか、女性雑誌に手を伸ばす男つて不思議だもの。

「いえちょっと気になつてただけ、だから」

彼女が顔を伏せるようにすると前髪が邪魔をして表情が見えない。できれば引かれたくは無い……がそれは無理なんだろうな。彼女は「いいのよ、私もちよつと気になつただけだから」と言って僕に雑誌を強引に押し付けた。それを持つと彼女はそのままコンビニを走つて出て行つてしまつた。悪い事をした、ような気がした。でもなんて綺麗なんだ。それもそうだ。走つていく時の脚の動きが一般人とは違つていた。自分の身体中心に脚の着地点をあわせている。モデルの歩き方だ。もしかすると僕と同じようにモデルの仕事をしているのかもしねりない。僕の身長が百七十とすると、彼女の背が同じくらいだつたからありえない話じやない。いや、モデルよりも女優の卵なのかも、と妄想は尽きない。

「なにやってるんだ、恭司」

「べつに何もしてないよ」と振り返つて言った。僕に声をかける男

子というのはほとんど決まっている。その場にいたのは中学のクラスメイトで親友の東堂夙夜だった。僕とは違つてレジで支払いが終つてゐるらしい。どうさりと買い込んだパンを入れたレジ袋を持つていた。

「仕事熱心だな」と呟つのでどういうわけか考へた。僕の胸元にはさつき極上の美女に渡されたリリイがあつた。夙夜は僕がモデルの仕事をしている事を知つてゐる。彼の身長は丁度、雑誌に目が行く程度だ。百六十くらいだろうか。どういうわけか年下の僕のほうが大きい。夙夜はクラスこそ一緒に小学校のころに二年間、事故と治療でブランクがある。僕が十四歳で彼は十六・本来なら高校生だ。「今からこの雑誌の撮影があるんだよ」

「なるほど、俺も仕事なんだ」

「解つてゐよ。やっぱり今日も遅いのか？」

「当然。多分、一緒に帰るのは無理っぽいな。新宿からまた移動するだろうしな」

夙夜は新宿駅近くでアルバイトをしている。雇い主はお互い共通の友達である白瀬トオルの叔母で洗敷千影さんという美女だ。一度だけだが会つたことがある。どういうわけか僕らの周りには美女が多い。大変喜ばしく思う。その千影さんの元で万屋……何でも屋のような事をしているらしい。金目的なのかと聞いた事があるがそんなことは絶対になかった。夙夜の家は大変な金持ちで世間で言うセレブになる。日本国内では名前を出しても微妙なのが海外、特に英國、欧州では有名なホテルの会社を経営しているらしい。その割に夙夜はそんな事とは無縁なように僕達と変わらない学生だった。すぐには仲良くなつた僕は数少ない友人である。

「まあいいや。それよりその胸にいる人つて曾我部美耶子だよな」「そうだね」

「もしかして今から会つのか？ 綺麗だよな」

「知らないよ。詳しく聞いてないからね、どうしたの？ 珍しいじやないか夙夜が女に向かつて綺麗だなんて」

「羨ましいな、と。年上のお姉さんって最高だもの」

「夙夜がそんな事を言つなんてますます珍しいな」

「好きな人に似てるんだ。容姿がね、だから結構お気に入り」

「京都の」と言つと肯いた。

夙夜は休みの日になると度々京都へ行く。その理由は女絡みである。詳しくは聞いていないがどうやら好きな人がいて会いに出かけているらしい。それが結構な回数だと聞くところ、そこはちょっとだけ普通の庶民とは感覚が違うのかもしね。そんなに関西に岡かけるお金は持つていらない。

「恭司も好きだろ？ 黒髪の美女つて」

「好き、なのかな」

自分でも良く解らないな。女性の好みはこれといってない。まだ人を好きになつたことはないな。初恋つてしたことがあるのかすら不鮮明だ。多分無いな。遙さんはあいつたことをしたけれど彼女に対する思いというのは憧れや尊敬だ。それも女性という部分じゃない。

「おつと、そろそろ行くわ。あんまり遅いと怒られる」

「そうだね、僕もスタジオに行くよ」

そう言つて僕達はコンビニを中心に逆へと歩きはじめた。

撮影スタジオはざわざわと賑わつている商店が並ぶ大通りから三つ外れた場所にある。周囲には駐車場が多く存在し特に目立つような店は無い。出勤、退社の時間なら駐車場を利用している人たちが歩いているが今日はそうでもないみたいだつた。スタジオは外から見るとやけに無骨でコンクリート剥き出しの壁に囲まれている。重い扉を開けてはいるとすぐに地下へと階段が続いている。一階には受け付けだけが存在している。僕は入館許可証をみせて降りて行く。降りるとスタッフの人たちが大声を上げていた。カメラマンの大沼さんが僕に気づくと「まだ準備中なんだ」と言つたので待つことにして、このスタジオにはモデルの待機室もきちんと完備してあるのでそちらへ向かつた。

「あら、さつきのイケメン君じゃないの」
びっくりした。

スタジオの暗い雰囲気を完全にぶち壊したのはさつきの極上の美女だった。彼女はコンビニで会った時とは全くの別人のようになに笑顔で僕を迎える。並べられている壁掛けの鏡を前に彼女はメイクをしていたようだ。彼女と会うのはこれで二度目のはずなのになぜか他にもどこかであつた事がある様に思えた。

「どうも」

「緊張しなくてもいいわよ。隣り座りなさいな」

ぽんぽんと彼女は隣りの回転椅子を叩く。今回は僕が声がまともに出なかつた。拙い返事だつたと自分でも思つ。彼女の言うとおりに隣りの椅子に腰をおろした。

「メイクしてあげましょうか？」

荷物を降ろしている最中、とつぜん言われた。

「大丈夫です。あとで母さんがやつてくれますから」

「母さんって？」

「僕、母さんの手伝いでモデルやつてて、いつもメイクは母さんがするんです。他の人にさせると怒るんですよ」

彼女は僕の言葉のあとしばらく何かを考えるように黙つた。そして「もしかして」と話をつなげた。

「恵子さんの息子さん……の恭司くん？」

「そうです、けど」

彼女が身を乗り出してこちらを見る。黒髪の下にある美しい顔が数センチ先にまで押し迫つてきた。子供っぽい仕草に思えたがそんなことはない。子供の無邪気さではなく大人の余裕というのが内面から伝わってきた。遙さんに似ているなと思いました。「へえ」となぜかニヤニヤする。その次は足先からじーっと見上げていく。

「なに？」

「なつて観察しているのよ。あの恵子さんの息子さんがどういつた男の子なのかをね。うへん、顔はまあ良いわね八十点。現代のイ

ケメンと呼ばれる芸能人と並んでいるわね。髪型もまあ……似合つてる。真面目で優しい優等生といったところかしら。学校でモテるでしょ」

「どうかな、自分じゃわからないよ」

「でも身体の出来がイマイチね、四十点。細身であつても適量の筋肉はつけなさい、服の上からでも貪相なのがわかつてしまつわ。それじゃいざという時、女の子を護れないわよ」

会つたばかりの、それも知り合いの息子に点数をつけるのつてどうなんだ。言いたい放題な彼女を見ていると美女からわがままなお姫様にさえ変貌を遂げていくようだ。

「……最後に眼の形がお母様にそつくりね。百点よ」

いろいろと言われたけど許すことにする。

「あのさ、そうやって人の採点するのつていつものことなの？　ええつと……」

そういうえば僕は彼女の名前も知らない。自己紹介はなしで進んでいたことに気づいた。

「もしかして私の事、知らないのかしら」

「知らない」と告げると雑誌リリイを渡された。「表紙」と短く呴いたので見ると曾我部美耶子が載っている。交互に見る。ああどこかで見たことがあると思つていたらと納得できた。

「曾我部美耶子さん」

「フルネームでどうも。氷上恭司君。私のことは美耶子でいいわよ。苗字で呼ばれるのは好きじゃないの。呼んだら承知しないわよ」

指をびしっと差される。しかし彼女の瞳がウインクして憎ぞマイナス百点、可愛らしさプラス百点になつた。

「点数の事だけどね気に入つた人にだけするわ。嫌だつた？」

普通、嫌です。けれど首を横に振つた。でも彼女は悪気があるよう思えない。人を貶すならもつと違つた表現をしたほうがいいんじゃないかな、と言いたかつたが多分僕が言つたところで彼女は変えないだろうな。彼女はバッグから出したミネラルウォーターを口

に含んだ。

「母さんは知り合いなの？」

「そうよ。以前、ちょっと仕事で一緒になつた事があつたの。私、ここ半年は休業していたんだけど彼女に誘われてまたはじめようになつたのよ。いい人よね、私なんかに才能があるつていうんだもの。お母さんの事好き？」

照れる事はなんかない。僕ははつきりと頷く。彼女も嬉しそうに笑つた。はじめて見た笑顔だつた。

「そういうえば私の事知らないなら教えてあげよつか？」

「知ってるよ。美耶子さんだつて解つたからそういうえる。実はここへ来る前にこの雑誌呼んだんだ。さすがにいきなり目の前に現わわると解らないもんだね」

「そう、そうね。あのインタビューどう？」

「どうと言われても……よかつた？ よ

また沈黙。視線が定まつていないのであちこち見回して声を出す。いちいちリアクションがおかしい。その不思議なところが魅力的な女性だ。

「私ね、ああいつたことは好きじゃないの。ほら、私つてへんじよ？」

自覚はあるんだな。不思議ちゃんとかじやないようだけど。天然ボケなら手におえない。どれだけ一目惚れしたつていつも帳消しに出来るんじやないかと思えるスキルだ。

「人と話すの苦手なのよ。でも恵子さんに言われたの。モデルの仕事なら人と話すことが仕事つてわけじやないつて。恵まれた身体を武器にしなさいって言つてくれたの」

「仕事つて高校は？」

アルバイトじやないのかな。今も彼女は制服を着ている。それも僕が目指しているM高校のものを。

「当然、通つてるわ。見たでしょ私の制服姿。綺麗だつた？ 図星みたいね。高校は行けつてお父様から言われていてね、仕方なく、

仕方なーべ通つてゐるのよ

「M高校は仕方なくで通えるよつた所じやないよ」

M高校は都内最高クラスとして有名だ。例え中学の頃、学年トップだつたとしても入学すればすぐに平均の仲間入りと塾で聞いた。

僕の言葉に彼女が笑つた。いや、嘲笑つた。

「例え都内最高クラスつて言つてもね、結局は日本の学校なのよ。でもそんな事知つてゐるつてことはもしかして目指していたりするのかしら？」

彼女は田つきがやけに刺々しい。そして言葉がきつい。おまけに笑い方はふふふと優越感に浸つてゐるようなお声。

「それでも僕は必死に勉強して入試に控えてるんだ」

ちょっと頭に来た。声が大きくなつたかもしない。いや卑屈になつて聽こえたかもしれない。けれど彼女は「知つてゐるわ」と返してきた。

「伺つてゐるのよ、恵子さんから。恭司はいつも勉強ばっかりしてゐて。綺麗な家庭教師もいるんでしょ？」

恥ずかしいな。

「確かに家庭教師さんはもうじき辞めるんじやなかつたかしら？ どうしてもつていうなら高校受験手伝つてあげましょつか？ 私と繋がつておつて面接で言えばそれ相応の対処もされるわ」

「なんで？」

「私の家、あの高校では有名だもの。なんていつのかしら／＼かしらね」

「そういう卑怯なのは遠慮します。第一、まともなお手伝いじゃないよね」

「じゃあまともにお勉強して入れるの？」

「入つてみせるさ。そのためにずっと勉強漬けなんだ、できなきや時間がもつたいたいよ」

僕がそう言うと彼女は「それは避けたいわね」と言つた。話の隙をつくように待機室のドアがいきなり開いた。

「入るわよ

「どうやら仕事の開始時刻のようだ。母さんがやつてきた。仕事に出かけていたのかスース姿でいる。すぐに僕の隣りにいる曾我部美耶子に気づいた。彼女もまたすぐに立ち上がりお辞儀した。

「お久しぶりです、恵子さん」

「美耶子ちゃん、綺麗になつたわね。恭司、もう挨拶はした?」

「ええ、とてもいい子ですわ。恭司くん」

「さつきまでは大違いだ、どうやら母さんのことを好いてくれているのは嘘じやないようだ。入ってきたばかりですぐだが母さんがメイクの道具を取り出す。まるで釣りで使うあの大きなバッグの如く大きなボックスを化粧台において僕のメイクに取り掛かる。すると当然だけれど僕は話すことが出来ない。母さんはメイクに集中し始め隣りにいた美耶子さんは時折、母さんと話すだけになつた。まあこんなもんだろう。

メイクが終るとすぐにスタッフが駆けつけてきた。僕たちは撮影スタッフに言われるがままだつた。そのまま仕事は何事もなく進み終わつた。なんてことはない、いつものとおり渡される服に着替えて写真をとるだけ。ただ今回は女性向けだつたため僕の出番はほとんどなかつた。これなら何も僕じやなくても良いんじやないかなと思う。母さんにそれとなく聞くとなんでもこの雑誌のスポンサーからの「」指名だつたようだ。そのスポンサーがどこで僕を知ったのか疑問だけどおそらく母さんが言つたんだろう。歩く宣伝みたいなものだから。

「それじゃあね、恭司くん。おつかれさま」

「お疲れ様です」

「また会えるといいわね」

最後の笑顔は嫌味もなにもなかつた。ただ彼女に對して綺麗だといつ印象しか与えてくれなかつた。そして彼女の身体からは甘い香水の香りがした。社交辞令だとわかつていてもやはり嬉しい。あのキツい言葉遣いとは違うこの雰囲気。やっぱり卑怯なくらいの美人

だ。

「悪いけど母さんはまだ仕事なのよ。先に帰つてなさい」

また言われるがままに動く。だけどここに残つてもすることがないし迷惑になる。それに少しでも勉強時間を増やしておきたい。今日は塾に欠席届をだしているし今から行つても間にあわない。仕方なく家に戻ることにした。スタジオを出るとひんやりとした風が身体を包んだ。一人きりになつたと思い知らされる。新宿駅までの道のりを歩く中、僕は遙さんのことを思い返していた。スキンシップと称してやつっていたこと、M高校や大学のこと色々なことを話した。その人は今、近くに住んでいるのに遠くに行つてしまつたようだ。

また同時に曾我部美耶子のことを頭に描いていた。撮影中の最中、服の着替え中にちらりと彼女の裸身が見えた。「見た」ではなく「見えた」である。決して故意じやない。そのときこれでもかと真っ白い肌に僕は視線は釘付けになつた。夕方、一度射精しているというのにだ。

あれだけの美人でスタイルも最高ならやはり彼氏はいるんだろう。雑誌の特集ではそういうことは書いていなかつたけれどそれは誰でも書かないだろうから不思議じやない。だけどあの話し方は独特だな。ユニークって言えばそうだけどどうも棘がある。きっと彼氏は大変だろう。

「よう恭司！」

新宿駅の前でまた夙夜が立つていた。今度は何ももつていなかつた。買出しじゃなさそうだ。夙夜はこちらへと近づいてくる。なぜかな、周囲を見回して何かに軽快しているように見えた。といつても泥棒が低姿勢で首を左右に振るような素振りはなく視線だけ動かしてクールに歩く。

「仕事は終つたのか？」

「さつきね。どうしたの？」

「なんでもないよ。ちょっと気になることがあつてね、今日ヘンな奴見なかつたか？」

何を基準にヘンな奴なのか。ここは新宿だ。ヘンな奴なら「」
ろいる。たとえばすぐそこベンチに腰掛けているおっさん。見か
けは普通だけど目がおかしい。濁つた瞳が動かない。その視線の先
には金融会社の看板がある。その隣りには今にも下着の見えそうな
ギャルが数人。露出度が高いああいうのは簡便被りたい。

でも夙夜が捜しているような人は僕は見ていないはずだ。「見て
いないよ」と告げると夙夜は辺りを見回すと行ってしまう。どうや
ら買出し途中ではないにしろ仕事中だというのは変わらないみたい
だ。そんな夙夜は僕の事などすぐに忘れたように仕事へ戻つていく。
いつものことなので気にすることも無い。僕からすれば親友にあ
ただけラッキーなんだ。

三

電車の中でも家への道も風呂に入っている間も眠るまでずっと「また会えるといいわね」と言つた彼女の顔が頭から離れなかつた。僕もまた会えるといいな。

二人の女性が頭のなかでぐるぐると回つていた。せつかくの週末はどういうわけか気分が優れなかつた。

金曜日、空はまるで僕の頭の中がそのまま出てきたように曇つていた。遙さんは当然のように僕に連絡をしてくることはなかつた。彼女のいない部屋は空虚なものだ。勉強机に向かう事も無かつた。学校から帰るなりベッドに倒れこんで天井を見た。携帯電話のメモリーをじーっと見つめているだけで気づけば一時間が過ぎていた。彼女のことこれだけ意識したのは初めてだつた。こんな思いが続くなら一度アルバイト先のメイド喫茶にでもいってみようと思った。そして気づいた、そういうえば一度も行った事が無いことに。秋葉原に行つた事は殆ど無かつた。何度かCDを買いに行つたが正直いうと圧倒された。路上にはアニメかゲームかの可愛いキャラクターの大きな看板がどこの店の前にも置いてあつてそこら中にメイドのコスプレをした呼び込みがいる。店の中からはまたアニメの曲らしき音楽が鳴り響いていた。僕は人込みに付き合ひきれなくなつてすぐにはダウンした。もう一度行く気にはならないな。

土曜の朝は寝坊した。いつも乗つている電車に乗り遅れたがそのおかげでトオルと会つた。別の中学校へ通つている。彼と朝出会うときは決まつて僕が寝坊した時だけだ。べつにトオルの始業時間が遅いわけじゃない。ほほ、一緒だ。簡単にいふとトオルはどんな事どうでもいいらしい。彼に言わせると僕は真面目すぎるらしい。電車のなかで少しだけ放したがまた女子が僕の事を噂していたと言つ

てきた。どうやら少し前に撮った写真が掲載されたらしく評判がいいみたいなのだ。周囲ではそういう話を聞くらしいが本人に話が来ないのは同様の訳なんだろうか。

「告られたこととか無いのか？」

「ない、とは言えないな。でもそんなにショッちゅうじゃないよ」

「回数は問題じゃねえよ。で、付き合つたのか？」

「無理。なんていうかそう言つ氣になれないんだ」

トオルは僕の返事に勿体無いと言つた。でも、好きでもない女の子からの告白で付き合つようなことは無いだろ。第一、僕はその子の事を何一つ知らなかつたんだと続けた。すると「そつからはじめるんじやねーか」なんて言つ。僕はそんなトオルに「そつちこそモテルだろ?」と言つと「オレの場合、兄貴がな」と下を向いてしまつた。深く聞いたことは無いけれどトオルの兄は相当モテルらしい。家庭環境が「ちやんちやん」としているらしく詳しく述べては聞いていない。そして会つた事も無い。そんな他愛ない話をして電車を降りた。学校は退屈な授業ばかりだつた。どういうわけか夙夜は休みだつた。教師も知らなかつたようで理由を知つていてる者はいるかと聞いていたが誰も応えられなかつた。こういうとき、僕に話が回つてくるが当然、知らないと応えた。どうせ、仕事絡みだろ?とは思つけれどそれは秘密だ。

「ねえ氷上君。進学調査のアンケート書いてくれた?」

休み時間になると胸にメロン一つ詰め込んだような女生徒がやって来ていつた。ここつて中学校だよなと意味不明な衝撃に襲われた。同じクラスの女子かどうかも憶えていないその子はもじもじしていた。アンケートに関しては持つてきていたので渡す。

「ありがと」

子供っぽさが残る声だつた。僕の顔を見ないように彼女は下を向いていた。その子が教室を出て行くとクラスメイト達がこちらへとやってくる。そのうちの一人が森下さんと言い女子の一人が美希ちゃんと言つていたので名前は森下美希などとわかつた。毎年、ク

ラスメイトがランダムに入れ替わるし僕は特に女子と口を利く機会もないのに彼女の名前が解らなかつた。「どうだつた?」と聞かれたが「なにが?」と応えた。何に対しても答えを求められたのだろうかわからず、言つと女子達は深い溜め息と落胆の声をあげて散らばつていつた。男子は「森下さん可愛いよな」と賛同を求めてきたので「ああ、そうだね」と言つた。事実だつた。肩までの髪はさらさらとしていて目なんかくりつとしていた。肩幅も狭く身体のラインは小さいのに胸だけは発展途上を越えて主張しまくつていた。けれど僕には彼女に対してそれほど興味は得られなかつた。

僕はずっと美耶子さんを思い描いていた。遙さんのことを考えていても何も得られない。なら少しでもいい思い出を見ていたほうがいいと思つたからだ。クラスメイトとの話のあと思い出したのは「相手を見つけなさい」という言葉だつた。あの言葉は多分、彼女を作つたほうがいいつことなんだろうな。

昼はすぐに訪れた。夕方まで図書館で一人、勉強をしていた。僕の実力ではまだM高校へ入学できるレベルじゃない。まだ一年あるけれどそんなものはあつという間だと最高の家庭教師さんは言つていた。大先輩の言つ事は聞くのが吉。時間があるときは意識を向けて必ず勉強する。四時間ほど勉強して塾へと向かつた。

日曜は朝からずつと家にいた。母さんは「せつかくの休みなんだから遊びに行けば」と言つが生憎、遊ぶ友達はいない。トオルとは友達だけど一緒にいると色々と人が増えてくる。夙夜はおそらく仕事でそれどころじゃないだろう。僕はずつとテレビを見て過ごした。夕方頃、携帯電話にメールが届いた。差出人はCDショップの店員、左近寺さんだつた。内容は「リヴィア・アイアサンの新しいCD入つたよ」というもので僕はすぐに「明日行く」と返信した。

リヴィア・アイアサンというのはインディーズのバンドで一年位前から活動しているらしい。僕の周りではなぜかみんな聴いていてお勧めだと言われたのがきっかけになる。その後、勉強中に聴く事も多い。ライブにも何度も足繁く通つてはいる。自分自身、よくハマつたなど

歓心するくらいお気に入りだ。ショップの店員左近寺さんはトオルの紹介で面白い人だ。インディーズ音楽専門のショップというのは忙しくないようで彼はレジの隣りにモニターをつけていつもゲームをしていた。店に来る客は大体が知っている人物らしく盗みをやるような奴はないよと言つて笑っていたのも憶えている。

夕飯を食べた後はじっくりとリヴィア・アイサンの音楽に浸りながらドイツ語の勉強をした。M高校は日本語と英語の二つは出来て当然らしい。どこのエリート集団だと最初は思ったものだ。そういうえば美耶子さんはあの学校でどういうわけかとてつもない権力をもつているんだよな。と、何気なく思い返した。

僕の週末はこうして終つた。何でだろうか心にぽつかり丸い穴が空いたようだつた。

月曜日になるといつものように学校へ登校した。夙夜が学校へ来ていた。教室へ入るなり僕を連れだした。一人で屋上へ上がつていたあと少し話することになつた。でも話の中身はたいしたものじゃない。やっぱり新宿の時と一緒に変な奴を見なかつたかというものだつた。

「どんな奴を捜しているんだよ？」

「そうだな、全く言葉を話さずじつと見ているだけの奴かな」

「それ、なんなの？ 新手のいやがらせ」

「違うよ。まあ見てい無いなら問題ないな」

「見たらどうなるんだ？ まさか死ぬのか」

「それはない。安心しな、死ぬ事は無い。それとトオルがまた言ってたぜ、あいつはモテすぎるつて」

夙夜にもそんなことを話していたのか。「そんなことないよ」と

僕は返す。夙夜は首を横に振つて「やれやれ」と言つた。

「まあモテルかどうかは別として周りが結構気にしてるんだ。彼女作つたらいいじゃないか。好きな子はいないのか」

僕は恥ずかしくなつて「いないよ」と言つた。その直後に予鈴がなつて二人して教室へと戻つた。この日の授業は滞りなく終つた。

休憩時間に夙夜がさつきの話を振り返る事は無かつた。僕と同じようリヴィア・アイサンのCDを買うと言っていた。でも今日のところは行けないようだ。僕は一人でショップへと向かう事になった。

学校が終ると塾までの時間が一時間程度あった。すぐに駅に向かつて走った。ショップは新宿駅の人通りが多いところから外れたところにある。まあ人の多いところでインディーズ専門のショップ被淘汰されずに存在するなんてまず無理なんだろうな。雑居ビルが多く並ぶなかでカラースプレーで見事なまでに落書きされた看板が一つだけ目立つ。両隣の店はCD・ショップのことを良く思っていないようだった。

ショップへ向かう途中には大きくて長い歩道橋がある。ビルとビルをつなぐ大事な役目をおびた橋だ。その橋から僕に向かつて凄まじい光が放たれた。一瞬目が眩んで何が起きたのかパニックに陥りそうだった。なにかが反射したんだろうともう一度橋を見ると誰かがこちらに向かつて手を振っていた。橋の上には当然、その人以外にも人はいる。恥ずかしくないのかと思ったがその人物はどんな行為も美化してしまつほど極上さをもつっていた。

「お久しぶりね、恭司君」

慌てて駆け寄ると髪型を変えた美耶子さんがいた。以前はストレートだったのに今日はウェーブがかかっていた。撮影の帰りなのか制服は着ていない。Tシャツの上に軽そうな薄いジャケットとジーンズというラフな格好をしていた。それでも充分に色っぽく特にその胸から腰のラインにかけて芸術のような曲線をみせていた。

「髪形えたんだ」

「これ？ 違うわよ。さつきまで撮影だったの。そこでストレートじゃあわないので無理やり変えられたのよ」

そう言って話す彼女の手にはさつき光を反射させた物が握られていた。丸い長い棒みたいだった。

「なあに、じつと見て。そんなに珍しいかしら。ライフル用のスコープって」

「なんでそんなもの持つてるの？」

「私の趣味なのよ。モデルガン。女の子達からはおかしいって言われるけどね。でも堪らなく好きなの、ターゲットをスコープで狙つているとき、引き金を引く時の機械が軋む音。他にもスポーツカー やパソコンなんかね。どうおかしいでしょ」

「そんなことないよ」

「あら嬉しいわね。で、本音は？」

「ちょっと変かな。でも僕は好きだよ、だつてみんな一緒につまらないでしょ。興味を抱く対象なんてのは人それぞれじゃないか」

「じゃあそんな恭司君はどんな物に興味を抱くのかしら？」

「そうだね、たとえば音楽かな。今もCDを買いに向かっているところなんだ」

そう言つと美耶子さんはするつと僕の腕に巻きついた。

「じゃあそこまで一緒に行きましょ！」

それはいいけど胸が当たつていい。ううこののは言つた方がいいのだろうか。でも腕に付き纏う感触はまるで美耶子さんの方から押し付けてくる感じだつた。自意識過剰かな。

「どう、私の胸。気持ちいい？」

「はつ？ なにを！」

こきなりで越えが裏返つてしまつた。まるで動搖しているみたいじゃないか。遙さんで免疫は充分出来てゐると思つたけれどどうやら隙をつかれると駄目らしい。

「なにをつて……あのね、この私が胸を当てるんの

よ。少しは緊張とかドキドキとかないの？」

「し、してるよ。当然じゃないか」

「よかつたわ。恭司君あまり表情を表に出さないからどうなのか判断しづらこのよ」

「そうへ」

「やうよ。今だつて私の胸が当たつても顔色変えないじゃない。もし正常な男子なら股間を抑えて前かがみになるべきよ」

「それどうこうの理論だよ」

「だつて童貞でしょ？」

「そりやそりだけど、僕の年齢でアンケート取つたら大部分が童貞だろうね。もし否童貞がいたらそれはそれで危ないよ」

「あつさり認めるのね。男子つてそういうの恥ずかしいんじやないの？」

「普通は女の子が恥ずかしがるんだけどね。僕の場合、そんなことどうだつていいのかもしれない」

「自分の事でしょ。ま、恭司君みたいに格好良かつたら余裕も出るでしょうね」

こんな下世話な会話を続けながら僕は目的のショップへと辿り着いた。さすがにお嬢様な美耶子さんはショップの看板を見て落胆とショックを隠せないようだつた。なんというか見世物小屋でも見るような感じで店に入つていぐ。するとすぐに強烈な爆音が響いて心臓が跳ね上がる。店の中は店員である左近寺さん直筆のプラカードがわんさかとぶら下がつていてそれこそ全部のCDに解説が加えられていた。

「いらっしゃい！ 誰かと思えば噂のイケメン君じゃないか！ おやおやおや～今日は彼女連れかい？」

「彼女？違うよ。モデルの仕事仲間だよ」

腕を握つていた力が急に強くなつたように思えた。それに美耶子さんは左近寺さんから隠れるように縮こまつっていた。言つちゃ何だがM高校の生徒がこんないかにもな店に来る事はないだろう。外見もそつだがちよつと低俗すぎる。左近寺さんもいるだけで電灯代わりになれるほど金髪に革ジャンを着てている。しかも首にはぜりぜりと光る棘のようなアクセが巻きついている。

「いやいや」二人、なかなかのお似合いですぜ。いやあ～やつぱりモテルね～

「そんなことよ」

バツと右手で僕の言葉が止められた。「解つてると、解つてます

よ」と言つてCDを差し出しきた。ジャケットには青い龍が水面より飛び出す画がプリントされていた。僕はすぐに財布を取り出して料金を払つた。美耶子さんは僕の腕から放れることができなかつたのでちょっと面倒だつた。その時、美耶子さんが気分を悪くしてそうに見えて僕はショックをすぐに出た。

「またね~」

届託の無い、ストレス一つなさそなあつけらかんとした笑顔で左近寺さんは見送つてくれた。「大丈夫?」と声をかけると小さく肯いた。また歩道橋のところまで来ると美耶子さんが急に立ち止まつて僕から離れた。

「私、用事があるから帰るわ」

唐突に振り返つて彼女は歩いていつてしまつた。声を出す直前、何かに気づいたようだつたけれどそれが何なのか僕は解らなかつた。周囲を見回しても何か変なものは無かつた。ともかく彼女を送りつにも時間がなく僕は塾へと向かう事を余儀なくされた。

夜、美耶子さんのケータイに電話しようかと思つたが塾でちよつとした噂があつて鬼になつていていた。高等部になにやら凄い美人が来ていたらしい。中等部ではその美人を一目見ようといつもは勉強ばかりやつてるガリ勉までもが浮き足立つていて。それとクラス委員長の森下さんが一緒のクラスにいたことに気づいた。今までずっと一緒にだつたらしいが僕は気づかなかつた。

家に帰ると僕は寝るまでずっとCDを聴いていた。非常にソフトな楽曲だつた。以前のCDは比較的ハードなロックばかりだつたが今回は色々と挑戦したと書かれていた。また、近々大発表があると告知されていた。

美耶子さんとの出会いからもつすぐ一週間が経つ。それはつまり生活の変化からそれだけの時間が経つたと言つ事。部屋での勉強は思つようにはかどる気配は無かつた。やはり一人きりでいると息が詰まる。でも受験への意識がなくなつたわけじやない。夕方まで学校へ通いその後は塾へ向かう。家に帰れば夜の十時に近づくような

文字通り朝から晩まで一日中勉強漬けになっていた。

学校から塾へ向かう途中の事、妙な感覚に苛まれた。どういうわけかずっと誰かの視線を感じていた。とにかく一人きりで歩いているとずっと誰かがこっちを見ているような感覚だ。それが肌を刺激して鳥肌が立つた。これが自意識過剰ならそれでいいんだがどうも気分が悪い。

視線は塾の中へ入つてしまえば感じなくなつた。被害もあるわけじゃないから放つておけばいいだろう。通つている塾では最初から今年何度目になるかわからないテストを終らせた。もうすぐ夏休みになる。そうなれば塾の授業も長くなる。今は夏期講習前の実力検定になるため時間的には早く終る。もう夜の八時になりそうだった。家に帰ればいつもより一時間ほど早く着く計算だ、今日は早く帰ろう。そう思つて荷物を纏め始めた矢先、エレベーターの前では大量の待ち人がいた。どうやら高等部も授業が終つたらしい。みんなあきらめて階段を使つていた。仕方ない、僕も階段で降りようとした時、踊り場で声をかけられた。

「ねえ、氷上君」

振り向いたそこには僕を追いかけてきた女子がいた。走つてくるその間、激しく上下するその胸のふくらみに言い知れぬほどの刺激と感動を得た。クラス委員長だった。

「なに？ ええっと……森下さん」

彼女とこうやつて話すのは実に初めてのことだ。というよりあ的一件が無ければ彼女の名前も知らなかつた。こうやつて名前を呼ぶことも出来なかつただろう。彼女は前方への成長は群を抜いているようだが上へは止まつてゐる。僕の場合上への成長が多い。つまるところ彼女こと森下美希さんを見下ろしている訳だ。おかげで全てを吸い込むブラックホールいや違うな落ちれば抜け出せない底なし地獄の如く暗闇が見える。その暗闇は衣服の隙間から見える双璧のことだ。

「よかつた。私の名前、憶えてくれてたのね」

「まあね。森下さん、僕に何か用？」

「そんな言い方ないんじやない。まあいいか、氷上君あんまり人付き合いやくないし」

ちょっと冷たい言い方だつただろうか。僕自身では普通に言つたつもりなんだがどうやら彼女はそんな風には聽こえなかつたようだ。

「はつきり言うね」

「私ね、けつこう氷上君のこと見てるからこの程度のことを言つても嫌われないつて知つてるの。それにしても学校一の人気を持つても本人にその気が無かつたらこんなものなのかな」

今度は胸を張つて言われた。心底その胸の大きさに度肝を抜かれる。確かに嫌いにはならない。打たれ強いのかな。それともまさかMなのか。美耶子さんとの会話中もけつこう酷い事を言われてなんとも思わないし……自分の今後が危ぶまれる。

「でねでね、本題なんだけど、もしよかつたら今週の日曜日、一緒に勉強でもしないかな～って思つちゃつたりするんだけど、どうかな？」

なぜ一言ずつリアクションを起しすのか？ 森下さんは再び上目

使いになると左右に体を振る。揺れる揺れる。

「えつと何で僕と？」

冷静に返す。顔色は変えないよ。

「ん？ 氷上君の志望校つてM高校でしょ。だつたら同じだな～つて」

以前、志望校調査なるものがあつてそんな話をしていた。当然ながら僕はM高校へ第一志望としている。第一、第三は適当に書いた。

「同じM高校志望同士なら敵じやないの、なのに一緒に勉強？」

「氷上君つて本当にM高校志望なの。あそこは男子と女子で合格人数が違うのよ」

「そうなの？ でもそんな事書いてなかつたけど」

「あれ？ 書いてなかつたんだっけ？ 父さんが言つてたから間違いないと思つんだけどな」

「お父さん何者？」

「教師よ。でもM高校じゃなくて大学だけどね。なんでも教師仲間
にM高校の先生がいろいろ聞いたみたいなの。たとえば今回は
テストより面接が肝だとか」

「凄い情報だね、ふうん。でもそれでなんで僕と一緒に？ 正直、
僕と一緒に勉強してもあまり効率よくないと思うけど」

「効率の問題じゃないんだけど？ 楽しいかもしないよ」

「勉強だよ」

「そうよ、勉強。でも一人でやるより一人のほうがきつといいわ。
協力する事で道が開くこともあるよ」

積極的だな。森下さんは上目に僕を見て「どう？ どう？」と答
えを迫つてくる。そこにはまるで勉強以外の目的がある様にみえた。
これつてもしかして……もしかするのかな。自意識過剰か。またか
と僕は自分で頭を横に振つた。

「で、勉強するのかな？ しないのかな？」

首をかしげながらの行動へうつる森下さん。やばいな、可愛い。
クラスにこんな子いたんだ。

「ええっと、特に用事は……」

「あら、恭司君じゃない」

また声をかけられた。おかげで僕の返事はかき消された。グッド
なのがバッグなのか解らない微妙なタイミングだ。ともかく声のし
たほうへ目を向けると階段の上には美耶子さんがいた。今日はM高
校の制服を着ていた。学校帰りなんだろうな。しかし一つ疑問があ
る。なぜ彼女がここにいるんだ？

「ねえ、氷上君！」

いきなりの事にびっくりして棒立ちになつていていた僕を森下さんに
引き戻した。そして彼女はバッグからさわっとメモ帳を取り出して
何か書き出した。

「なに？」

「これ！」

力強く僕に向けた。

「私の携帯電話の番号なの。もしよかつたら返事お願い！」

美耶子さんが現われたすぐに態度が豹変したかのようにメモを僕に渡すと森下さんは階段を下りていってしまった。渡されたメモを見ると090から始まる電話番号が載っている。それをじっと見ていると降りてきた美耶子さんが僕の上から覗き込んできた。これまた超絶美人の横顔が現われる。

「もしかしてお邪魔だつたかしら」

喋るたびに息がかかる。傍に来ると解つたけれどなんていい臭い

なのか。香水かな。なにか柑橘系の匂いがする。

「別に。そんなことないけど……つてなんでここにいるの？」

「なんでって、学生が塾にいる理由なんてひとつでしょ。塾生だからに決まってるわ」

「だけど今まで」

「会わなかつた、でしょ。同じ塾つて言つてもここは高等部と中等部じゃ開始時間も終了時間も違つでしょ。でも私驚いてるのよ。もまさか一緒に塾に通つていたなんて思いもしなかつたから当然よ。今日はエレベーターが混んでいたから階段を使って帰ろうとしただけよ。そしたらなにやら女の子と楽しそうに会話しているイケメンを発見しただけよ」

「誰がイケメンだよ、恥ずかしいな。

「そのイケメンつていうのやめない」

「なぜ？」謙遜する必要ないわよ。恭司君はその言葉が持つている意味を見事現している最高の逸材ともいえるわ

「煽てないでよ。それなんかそういう風に言わると逆効果だ」

「ならなんて言えばいいかしらね。草食系男子？」

「テレビとか流行に流されすぎじゃない？」

「テレビなら見ないわ。勿論、流行なんて知らないもの。モデルの仕事で皆使つてゐるのよ。嫌でも覚えてしまうわ。恭司君はテレビ見ないの？」ちよつと中二でしょ、お笑い番組に夢中になる時期じゃ

ない」

「僕は中一病じゃないよ」

「あらそつ

「そうです」

まつたく。でもやつぱり彼女と話していく嫌な気分にはならないそりやこんな美人と話が出来るだけで幸せな気分になるつていうのもあるけど。もしかすると僕は本当にM気質なのかも知れない。

「で、呼び方だけハンサム君は？」

「続けるの、それ？ しかも昭和くさいよ。もう普通に恭司君でいいよ。妙な言い方造られるのは勘弁してください」

「面白くないわね。私の父は相手にあだ名をつけて心底面白がつていたわよ」

そっぽ向く。こんな事を云うのもなんだけど嫌な人だ。

「だからってイケメンや草食系つていうのは安易なんじゃないかな。マスコミの印象刷り込みがすごいんだろうけど」

「言つたでしょ、私じゃなくて周囲よ。私はテレビなんてほとんど見ないわ。それよりさつきの女の子、胸が大きかつたわね。好きなのが？」

「なにが？」

「なにがつておつきいおっぱいに決まつてるでしょ」

「そんな事聞いてどうするの？」

「おつきいのが好きなら私は毎日自分で揉むわ。揉んで大きくするわ。普通くらいなら問題ないわね。でも小さいのが好きなど変態なら私はシカトするわね」

「なんで小さいのが好きだとド変態なのさ。大人の人でも小さい人はいるでしょ」

「女からすれば好きな男がどういった胸の大きさが好きか興味あるものよ」

「それって」

「特に意味は無いわよ。でも恭司君のことはもっと知りたいと思つ

わ。だつて弄りがいがあるもの」

「顔色一つ変えない。もしかしてつと思つたが期待はずれか、なんて僕は何を期待していたのか。

「そこなんだね、普通可愛かつたわねとかじゃないの？」

「普通、ね。私、普通なんて嫌いよ。普通が一番とか言う人がいるけれどあんなものは逃げてるだけよ。上を目指さない人たちの言い訳よ。結局他人が認めるのは一部の変人や奇人なのよ。で？　あの胸の大きな子は誰？」

「無茶苦茶言つて、またそこなんだ。食いつくな、まあいいや、クラスメイトだよ」

「そうなの？　彼女じゃないのね。がっかりね」

美耶子さんは階段に腰をおろして座つた。下品だと思つてしまつたが美耶子さんの姿がそんなことを完全に打ち消すオーラを持つていた。おかげで僕の目はずつと立ちっぱなしで疲れた女神が腰をおろしただけに見えた。

「なんですか？」

「曲がりにも恭司君は私の恩人の息子さん。しかもその息子さんは性格こそ穏やかなれどルックスは最高なのよ。彼女の一人や一人侍らしていくてもおかしくないでしょう」

「なんか僕のこと馬鹿にしてない？」

「してないわ、恭司君は馬鹿にしてもまるで動じないでしょ。ただ低俗な言葉では満足しないようだつたから変えただけよ。恭司くんのことは気に入ってるのよ。ただの男なら相手にしないわ。そこらの石ころよ」

容姿を褒めてくれるのは嬉しいけどどこか喜べない。

「ともかく僕のことはおいといてクラスメイトと一緒に勉強しないかと誘われてただけだよ」

「それって！　デートじゃない！？」

女神が立つた。座つたばかりの女神が立つた。疲労などものともせずに美耶子さんはぐわっと飛び上がつて言った。さすがにこれに

は驚いた。僕はあまりに食いつきが良すぎたので一歩後退してしまつた。

「違うよ、勉強会みたいなもんだよ。でも、なんでそんなに驚くのさ？ さつきまでからかつてたのに」

「お、驚いてなんかないわ。それで、するの？ しないの？」

「なんだかな。今日はやたらこの手の質問を受ける。女の子はこういった話が好きなのか。答えを早くに求められるのも多い。たかが勉強を一緒にするだけなのに。いやたかがだからなのか。混乱しそうだ。第一この問題に美耶子さんは関係ない」

「美耶子さんには関係ないでしょ」

「冷たいわよ。年下の男の子に今、彼女が出来るかどうかっていうのは気になるものよ」

「僕は女の子と付き合つとか考えた事は無いよ」

「恭司くんつて好きな女の子のタイプはあるの？」

「言われても答えはない。第一、考えた事が無いんだ。いつも勉強ばかりだからそういうことに頭が働かない。周りは恋愛話に興味津々みたいだけど僕だけ違うみたいだ」

「困った顔するわね。じゃあ私なんてどう？」

「えっ！？」

いきなりで声が裏返つてしまつた。すると「可愛い」と笑われた。

「あのね、からかわないでよ」

「で、さつきの子とはするの？ しないの？」

「答えを求めるのはあきらめないんだな。僕の言葉が届いてるのかどうか不安だよ」

「僕の問題じゃないか。そんなに聞きたいの？」

「聞きたいわ。だつて恭司君とあの子なんだかお似合いなんですよ」

の

「どういつ風にお似合いなのか自分ではわからない。もしかして焼き餅か。いやまさか、そんなことはない。ないだろ？」

「実際のところ決めてないよ。ただの勉強だつて考えもあるしね」

明後日まで時間はあるし携帯電話の番号も持つてゐるんだから明日には答えるけど

「はつきりしないのね」

「突然すぎたんだよ。だいたいこっちはクラスが一緒にでくらうしか知らないなかつたんだから。話をしたのだってやつのが初めてなんだ」

「じゃあなた? 一度も話をした事のないクラスメイトが志望校が同じつて理由に便乗してアプローチを仕掛けてきたわけね」

「そう……なのかな?」

「そうよ。わからないの? 鈍いわよ」

そんなに熱くななくたつていいいじゃない。ふと時計に目をやると九時だつた。結局いつもと変わらない時間だ。家に戻ればいつもと同じくらいになる。これじゃ早く終つた意味が無い。美耶子さんと会えたのは嬉しいけれどあまり遅くなるのはよろしくない。

「僕の心は傷ついたよ」

「軟弱ね」

「そう、軟弱なの。だから帰るよ。美耶子さんも早く帰つたほうが良いよ。最近は物騒らしいから」

「もう帰るの? 残念ね、私はもう少しここにいるわ」

なぜかわからず首をかしげると「迎えが来るのよ」と続ける。

「だから私はここを離れられないの。といつても後十分くらいだけどね」

そんなことを云われたら帰りづらいじゃないか。もう時間はいつもと一緒になんだからたつた十分なら変わらないな。

「じゃあ……わ。もう少し居ようかな。邪魔じゃなかつたらだけど」

今度は美耶子さんが首をかしげた。

「だつてほかの生徒は皆帰つたようだし一人つきりつていつのも嫌でしょ」

「一人は慣れてるからいいわよ。でもどうじてもつていうなら居て

もいいわ」

「わかつたよ」

別にそこまでして居たいという訳じゃないけれどここで一人つりにするようなことはできない。だつて今はどこも物騒だから。

「帰らないのね」

「どうしても居たいからね。それでさ、初めて会つた時に言つてた勉強を教えてもらうつて話だけど」

「したわね、断られたあの件ね」

「断つたのは裏から手を回すみたいな話さ。で、勉強つてさ。一人でやるより複数でやつたほうがいいのかな？ もうきの話は置いといて」

「実際、大学にまで進学した遙さんと一緒にいた時のほうが今よりも遙つていたかもしね。そうなると後の一年はペースが落ちるな。それは困る。」

「家庭教師や自分より頭のいい人間ならいいでしょうね。でも同じレベルの人間が集まつてやつてもたいした成果は上がらないと思うわ。特に少しでも遊びを意識する人が一人でもいればそれは大変なことになるでしちゃうしね」

美耶子さんはゆっくりと歩いて窓ガラスを見下ろした。僕も隣りに立つ。窓の下には塾帰りの生徒を乗せていく車がたくさんある。

「私のように上から教える事に素晴らしい能力を持つ人間なら勉強することに意義があるかもしね」

「教えるの得意なの？」

「別に得意じゃないわよ。そういうた能力に長けていると言つたのよ。中学の時なんかは同級生と勉強しているといつまにか先生役になつてたわ」

高校の友達相手に教えたりしているのかな。なんだか凄いスバルタに思える。問題を間違えると鞭でビシバシつて感じだ。

「じゃあ一緒に勉強するとかなり捲るの？」

「それどころじゃないわ。M高校の隅々まで知ることができるものよ。

なんていっても学生だからいろんなことを教えられるわ。それに教師全員への印象MAXよ」

「そっか、やっぱり一人でするよりもいいのかも」

「でしあうね。何事も一人でやるには限界といつものがあるわね」いい情報が入ったところで美耶子さんの鞄から聞き覚えのある音が鳴った。モーティアルトのジュピターだった。びっくりだ、僕の携帯電話も一緒に着信音なんだな。

「ちょっとごめんなさいね。なに?」

電話を取り出して再び驚いた。メタリックブルーの輝きが姿を現す。着信音だけじゃなくて携帯電話も一緒にじゃないか。

「わかつたわ。ありがと」

電話をきる美耶子さん。同じ物を使っているつていうのは偶然なんだろうけどちょっとびっくりだ。

「迎えが着たわ」

驚きながら下を見るとやけに大きな車が停まっていた。

「そ、そっか。じゃあ帰ろうか。アドバイスありがと」

「お役に立てたのならよかつたわ」

何にしろ、今日は一日の最後にとてつもないサプライズを得たことに満足する。しかし美耶子さんと出会う頻度が多いな。もしかするここまでに何度もお互いに見てているのかもしれないな。

「それじゃあここで」

塾の入り口で別れる。美耶子さんは塾の向かい側に停まっていた黒のメルセデスに乗り込むとすぐに行ってしまった。しばらくメルセデスが消えるまで僕は立ち尽くしたままだった。脚が動く事は無かつた。急いでいたはずの帰宅はもうすでに意味がなく頭の中はいっぱいだった。

ただ偶然が重なつただけだ。美耶子さんとの出会いもケータイが一緒なのも全部、偶然。でもその偶然が何時まで続くのかな。けつこう自分で愉しみになつていてるなと自覚した。

何もかもに考えに答えを求める僕の思考は停止したようにプツ

ンと途切れそうになる。気を失うわけじゃない。簡単だ、僕の意識は完璧に彼女に向いているだけの事だ。

翌日、学校で森下さんへ返事をしようとしたが彼女は欠席していた。もしかして僕からの返事を待つて夜通し起きていたのかもしれない。そんな彼女は風邪をひいて欠席なんてことにでもなったのだと考えたがそれほど彼女が馬鹿なわけがないと首を振った。教師が言うにはそんな陳腐なことではなくどうやら彼女は両親の都合で近く、転校する事になつて今日は学校へしばらく来られないのだと説明した。その言葉には驚いた。教師の話によると森下さんは両親の都合で東京から遠く離れた関西の方へ移り住むのだとこう。なのに彼女は僕にいきなり接してきた。しかも進路希望も同じだ。彼女はどうしたかったのだろうか。僕は携帯電話に記憶させた電話番号を押せずにいた。

さりに翌日のこと、この否は創立記念日で学校は休みになる。当然、特別に宿題が出されてしまつただけだ。森下さんへの返事をうやむやにしたまま僕は呼び出された。「悪いけど宿題みせてくれないか」と僕を誘い出したのは親友こと夙夜だった。夙夜は僕の家に来た事が無いのでできるだけわかり易い場所を待ち合わせにしてきた。彼の家は僕の家から随分とはなれている。同じ東京でも住む場所は全く違っている。僕の家の周辺にはたいして施設と呼べるもののが無いが一件だけ町の中心になる建物が存在している。図書館である。住宅街と繁華街を結ぶように存在する道に大きな庭園と一緒にあるこの図書館は近所の学生達の拠り所であり奥様方の憩いの場としても使われている。駐輪場へ自転車を止めて約束の場所へ向かった。

「わるいな

「そう思つならちゃんと宿題しような。それとも仕事が大変なの?」

「そうこうこと

悪い悪いと笑う夙夜へノートを渡す。宿題と言うのは数学の問題集だ。おそらく僕の親友は貸したノートを丸写しする気だろ。問

題は無い。問題があるとするなら提出できなかつた場合の居残り授業くらいか。その辺はきつちりとやる学校だ。

「それでも宿題する時間もないのか？」

「僕のノートをしまう夙夜。黒い革製のトートバッグにすとんと落ちる。

「学校があるなしに関わらず最近は一日中ずっと調査中だからな。とてもじゃないけど宿題なんかやつてる場合じゃないんだ」

「前に搜してた変な奴のこと？ そいつにいつたい何をしたんだ？」

少し間を置いてから答えてくれた。

「まだ何もしてないよ。したら大変なんだ。だから先に見つけたい夙夜の仕事について僕は深く知らない。もし必要なら教えるとずっと前に教えてくれた。別に絶対の秘密といつわけじゃないと以前に聞いたが僕は知ろうと思わなかつた。

「時間があつたら少しは話も出来るんだけどな

「仕方ないよ。お仕事でしょ」

一人してうなずいた。その辺はクールにいこう。子供のように駄々を捏ねるのはよくない。そして笑つて別れる事にした。夙夜と少し話しただけで僕の気はまぎれた。

そういうふういう訳かここへ来るまでに美耶子さんを見たのだ。家から図書館までの道のりに駅はない。当然、近所に住む人達以外に図書館を利用する人はいない。美耶子さんの家がどこなのかは知らないけれど近所じゃないはずだ。この辺りは極普通の庶民しか住んでいない。彼女の家のような華やかさは皆無だ。せいぜい日曜の昼にホームパーティーとしてバーベキューでもやるくらいだ。それに母さんの事だ、家に密として招いているはずだ。

美耶子さんは自転車で走つていて僕をじつと見つめていた。声をかけようと近寄つたが生憎の赤信号で停められてしまつた。そして車が遮つた瞬間、彼女は姿を消していった。

まったく幻を見てしまつほどに僕はいかれてしまつたのだろうか。それとも勉強ばかりに頭を使いすぎてノイローゼにでもなつてている

のか。そういうれば最近ではあの痛いほどに感じていた視線も和らいだように思える。

だけじせつかぐだ、図書館へやつてきたのだから少しは勉強しよ。図書館の中はほどよく涼しく空調管理がなされていた。中にはやはりといづべきか学生が多く皆、机に向かって黙々と勉強していた。僕も同じように参考書を取り出して始める。いや、はじめようとしたんだ。

「あら恭司君じやない。奇遇ね」

一度あることは二度あるといづ謠がある。けれど偶然や奇遇で済ませられない事もある。とくにさつき僕を無視して消えてしまったような人からそんな風に声をかけられると思つてもみない苛立ちのよつな感情が溢れてくる。

「約一週間で約束なしに四度も会えばもつ奇跡に近いよね。それから狙つてる?」

美耶子さんは僕の目の前に立つていて。わざわざ無視したの。僕が声をかけよつと近寄れば逃げるの。自分からは寄つてくれる。そりや綺麗だし可愛いけど。

「そうかもね。でも限りなく奇跡に近い偶然もあるかも」

「よしてよ」

何でかな、いい気分にはならない。美耶子さんは好きなのに。根に持つような性格じゃないけれど彼女がどうたとこつ事に僕は苛立つていた。

彼女は黒髪に指を這わせながら僕をからかうよつな笑みを浮かべた。

「じゃあ聞くけど美耶子さん、近所に住んでるの?」

「いいえ。私の家は新宿よ。ここから一時間はかかるわね

「なら何でこんなところにいるの?」僕を追いかけてきた?「

「そうだったり?」

「ならなんであつたか、こきなり消えてどつかに行くよつなことするのさ?」

表情が変わった。どういう意味かわかつていよいよだ。けれどあの姿形は彼女だつた。じつと僕を見ていた彼女は僕の視界に入つていた。間違いない。

「なんの話よ」

「ここへ来るまでのこと。僕が自転車に乗つてここまで来る途中、じつと見てたでしょ。声をかけようと近寄つたのにすぐにどつか行つちゃつたじやないか」

「知らないわ」

「じゃあ僕も知らないよ」

美耶子さんに背を向ける。そのまま図書館から出て駐輪場へと向かつた。ずっと彼女はついて来る。でも僕はどうしても今日、一緒にいたいとは思わなかつた。「ごめん」と一言呟つてから図書館を後にした。

後にしてから考えた。どうするべきか、と。このまま家へ帰るのは癪だ。自転車のハンドルを切つて家とは別の方向へ進路を取る。幸いポケットには財布が入つてし荷物は参考書が一冊だけだ、たいして重くない。しかもまだ昼にすらなつていないので。だから駅に向かう。別の場所へ行けば少しは気が晴れるだろう。勉強する気分じやもうないんだ。それこそ一日と全財産を使ってでも遊びたい。

どこへ行こうかと迷いながら電車に乗つた。それこそ適当だ、一番安い百二十円の切符を買って改札を抜ける。行き先で支払えばいい。なんなら東京を一日中ぐるぐる回つているのもいいかもしねない。景色を観ているだけで満足できる。

否、できなかつた。腰が痛くなつてきて一度降りる事にする。そこで今度こそ偶然に出会つてしまつた。

「あれあれ？ 氷上君じやないの」

「森下さん」

森下さんはベンチに腰を下ろして電車を待つていたようだ。そんな彼女の目の前に僕は出でてしまった。突然現われた彼女に対しても

うしようかと思つた。言葉が上手く出なかつた。

「こんなところで何してゐるの？」

駅を見ればその言葉は当然のこと。周囲に繁華街はなく遊ぶよつな場所も無い駅だ。周囲を見れば住宅街が広がつてゐる。僕は無意識のうちにけつこう遠くまできていたんだな。驚くべきは東京をぐるぐる回るつといつ最初の考え方も消し去つていてことだ。

「森下さんこそなにしてるの？」

「ここ私の地元なの」

「そなんなんだ。僕は適当に遊びに行こうかなつて」

「遊びに行くなら逆じゃない？ 普通、都心でしょ。ここには何も無いわよ」

もう一度、ぐるりと見回す。やっぱり住宅が広がるだけの僕の望む遊びには無関係なように見える。それどころか少し鬱陶しがられているように見える。そりやそうだ、勉強止めて一日中、遊ぼうなんて考えていふようなやつなんだから。

「ほかに誰かいるの？」

「いないよ。僕一人」

「いつも一緒に東堂君は？」

「いつもってわけじゃないよ。まあ一緒にいるけど今日は違うよ。さつき別れたんだ。正真正銘、今日は一人ぼっちなんだ」

「ふーん。じゃあ一人で遊ぶの」

「ああ」

どういうわけか電車が来てもいらないのに森下さんは立ち上がる。

「なら……なら私とデートしてください！」

彼女の一言は僕の休日と傷ついた心に刺さつた。

四

喧嘩別れの憂さ晴らしは森下さんの発言から、デートと姿を変えていった。内容ともかく誘った彼女もまんざらではなかつたように思える。彼女はよく笑つていた。その日、帰る前にちょっとこれから話しかけたわけだ。やはり引越しは決定したもので、いまさら取り消す事は出来ないみたいだ。この前、僕を誘つたのは思い出を作りたかったのだと彼女の口から聞く。今週が終わると時機早々に転校していなくなつてしまつらしい。ただ、彼女はそれでもM高校への進学は諦めていないうらしくそれを含めて僕と会いたかったといった。

早く連絡すればよかつた、申し訳ないなと云うと今、こいつやつてデートできている事で満足なのだと笑顔で返された。それが本心なのだとしたら僕は非常に嬉しいがちょっと後ろめたい。

そんな日が終わつて次の朝、登校すると夙夜がなにやら真剣な顔でやつてきた。

「放課後、話があるから残つてろ」

こういつた夙夜の顔は見た事は無かつた。いつになく真剣なその表情に授業は手につかなかつた。ずっと何の話なのか考へるばかりだつた。しかもその話に触れようとすると夙夜は放課後まで待てと云つて聞かなかつた。

授業の内容も頭に入らない。給食だつて喉を通らなかつた。これほどのプレッシャーを受けたのは初めてモデルの撮影を行つた時以来だつた。だつて夙夜の目がマジだつたから。そんな一日はゆつくりゆつくり病身を刻む音が聞こえてくるほどの速度で過ぎていつた。放課になると夙夜に連れられてやつてきたのは今は使われていない旧校舎だ。旧校舎は耐震問題のため去年から使われてい

といつても現在の校舎で入りきらない資材置き場として重宝されている。僕も教材を取りに何度か来たが日を増す事に古びていくのが感じ取れた。生徒にとつては面倒なだけの長い廊下を渡つてやつてくる。埃だらけの一階を後にして一階に進むと見たことの無いテープがあつた。いや、似たようなものなら知つてはいる。実物を見たことは無いけれどドラマなんかで警察が使う黄色いテープ。それが蜘蛛の巣のように何本も貼り付けられている。夙夜はそんなことも関係ないようでテープの隙間を縫うように進んでいく。

「大丈夫だよ、俺が仕掛けただけだ」

先へと進む彼が云つた。仕掛けたつて勝手にこんな事していいのか。テープをみれば教室の壁にきつちりと取り付けられている。それが幾十にも貼られ外部から出入りを遮断していた。これ、見つかつたら怒られるだろうな。

「ここから先は特別な空間になつてゐる。俺のバイト先みたいなもんだ。必要の無い人間はここへ絶対には入れない」

そう言つてテープのバリケードを指差す。そのバイト先がどんな所かは知らないけれど多分、先生達に見つかる事はないつて事だろう。

「まだ修行中だからああいつた見やすい道具が必要なんだ。それは簡便な」

「べつに気にしないよ。それよりこんな所に来てどうするんだ? もしかして仕事関係なの?」

「最近変わつた奴を見なかつたかつていつたろ? どうだ心当たりは無いか」

「特にないけど」

返事をすると「じゃあ」と話を切り替えてまた話を進める。

「そうか。これからちょっと……いや今日一日、付き合つてもううんだけど時間は大丈夫か?」

「構わないさ。それにもしも駄目でも無理やりつき合わせるんだろ?」

夙夜が笑つて流した。今から何が起きたのか不安と愉しみ半分で待つことにした。塾の予定はあるけれど一日くらいどうつてことは無い。連絡は入れておくよと告げると軽く「いいよ」と返事した。

旧校舎の中を歩き続けやがて僕たちは最も奥から一番目の教室の前で止まつた。先には廊下が少し続いているものの階段は無い。そして一つだけ教室が残つていた。夙夜は足を止めた教室へ入つてく。僕も続く。

使われなくなつた教室には何もない。薄汚れてしまつた床が広がり黒板ももう使われていない。外からの夕焼けがやけに眩しく感じた。教室の中央にはすでに机を二つ並べなにやら道具の用意もされていた。

日が沈み真っ暗になつた旧校舎はまるでお化け屋敷にみえる。老朽化が激しいと見えるこの校舎は外からの風に自然と冷えてきた。その間、ずっと夙夜は忙しそうに走り回つていた。誰もいない場所で僕は暇つぶしに夙夜が持つていた小説を貸して貰つて読んでいた。「これを持つてろ」

夙夜が差し出してきたのはお守りだつた。赤い布袋で包まれている。やけに熱かつた。

「それを持つていればさつきテープがあつた場所からこっち側にいる限りは誰にも見つからない。だからそれを持つてじつと立つてろ。それで恭司は助かる」

僕が助かる。すると僕が狙われているつてことなのか。

「どういう意味なんだよ」

「それは見てれば解るさ。それより事が終わるまで、俺が教室を出るまでは何があつても絶対に話をするな」

理解できないがどうやらこれから何か始まるらしい。ふざけている様な事もないだろう。彼の言うとおりにしたほうがいい。

さらに時間が経つ。一人で少しばかり話しをしていたが急に夙夜が立ち上ると教室の扉が開いた。

「こんなところに呼び出してどうしたのよ？ それに何よその格好

入ってきたのは美耶子さんだつた。彼女は僕のほうを見ていない。視線は夙夜に向けられている。美耶子さんの言葉遣いもそうだが二人が知り合いだと言う事のほうが驚きだつた。夙夜は彼女が来るまでの時間に一人であれこれ設置し着替えていた。今、黒の学生服はなく変わりに神社の神主が着ているような着物となつていて。しかし上下共に黒い出で立ちで両腕を広げると広い袖が羽のように見える。

「用件はもうわかつてゐるだる」

「でも恭司君がいなじやない」

「まあな。今回のゲストを招くための餌になつてもらつたからな」
びつくりだ。本当に美耶子さんは僕が見えていよいよだ。そして夙夜はそれが当然だというよつに話を続ける。それにしても美耶子さんの表情は薄暗いせいか少し険しく見える。

「恭司のことは後だ。今はアンタと少し話をしなきやならない」

一息、入れる。教室の中央に陣取つた夙夜は机の上に置いたお茶のペットボトルに手を伸ばす。机の上にはノートブックPCが一台設置されそこから教室のブラウン管テレビにコードが延びている。夙夜は空いている手でテレビのリモコンを捜査してスイッチを入れた。

「ドッペルさんの件だが……事態は俺が思つていたよりも深刻だつたらしくてさ。おかげで一人、軽症を負つた。アンタにもその情報は伝わつてゐるはずだ」

「知つてゐるわ。昨日の夜に見せられたもの」

「被害者は恭司と俺のクラスメイトの委員長だ。彼女は昨日のデータの帰りにやつに襲われたよ。安心しろ、アンタの眼にも見えたとおり彼女は俺が守つたよ。さすがに実体化したドッペルさんは人間とは別物で焦つたけどな」

「そうね、君……死にかけたものね」

「あれには驚いた。たかが呪いの一種だ、戦闘力は皆無だと思つていたが握力七十はあつただろうな。委員長をかばつた時に一発もら

つたが危なかつたよ

「ふふつ」

「軽い話じやないんだ、笑うなよ」

「けつこうゾクゾクしたのよ。仕方ないじやない」

「何もかもが初耳だつた。何より穏やかじやない。森下さんが怪我をしたなんて聴いていなかつた。今日も引越しのための欠席だとばかり思つていた。でも夙夜が嘘をついているのは思えない。なら森下さんは今頃……。

「彼女は幸い襲い掛かつてきた相手を見ることはなかつたし一瞬で氣を失つたからなにも覚えていなかつたよ。怪我もかすり傷だ、すぐ治る。どこで怪我をしたかすらわからぬいだろうな。ちょっと擦りむいた程度のものだから不思議じやないさ」

よかつた。でもどうしてそんな……だいたいドッペルさんつてなんだ。怪我をさせた人物がいるはずだ。そのドッペルさんとこののがその犯人なのか。

「実体化したドッペルさんに対し早急に対処しなければならないと確信した」

「どうやつて止めるのよ？ もつ実体化したんでしょ。それを倒せば」

「無理だな。昨日戦つて解つたんだ。あれは倒してもすぐに復活する。簡単に言つなら目的達成まで動きつづけるゾンビだな」

「じゃあどうするのよ」

「そのために今、ここにいるんだ」

両腕を広げる夙夜。

「ドッペルさんが消える方法は一つ。対象と恋愛対象になる事。つまり恋人同士になるつてことだ。そしてもう一つ、対象の死亡だ。今回のケースでは恭司が死ぬつてことだ」

心臓が一瞬だけ大きく跳ねた。僕が死ぬ。僕が死ぬつてなんだよ。

「そうよ。それを止めるために仕事を依頼しに行つたのよ」

「でも無理だ。アンタが事務所にやつてくるのが遅すぎた」

「どういう意味よ」

「時間が無いってことさ。だからって簡単に諦めるわけにはいかなかつたよ、何て言つたつて今回、生死がかかっているのは俺の親友だからな。対象の死亡でこの事件を終わらせるようなことはしたくなかった」

「なんですか？」

「仕方の無い事だ」

PCのキーボードを叩く。今まで真っ黒だったテレビに映像が流れ出した。そのモニターにはどこかの教室らしき部屋が映った。よく見れば画面には誰かが椅子に座っているのが見える。

「恭司君！」

美耶子さんが叫んだ。僕は見つかったのかと思ったがどうやらモニターに向かって叫んだようだ。そして僕もその光景を見て声をあげそうになつた。なぜなら椅子に座っているのは僕自身だった。

「なにしてるの！ 親友なんですよ」

「そうだよ。でもな、タイムリミットだ。今回の事件を完璧な形で終わらせる方法はこれしかない」

そう言つて夙夜は携帯電話を取り出した。操作するとモニターの中で何か音がした。

「聴こえるか、恭司」

モニターから音が聞こえた。まるで教室全体に声が響いているようだ。モニターの中の僕は身体を動かして答えた。どうやら身体は椅子に縛られて動けないらしい。

「どこの教室よ！」

「隣りだ。でも無駄だ、教室の扉も窓も完全に封鎖している。人の力じゃ開けられない

「恭司君を殺すつもり」

「俺が殺すんじゃない。殺すのはドッペルさんだ。ほらアンタには解つてゐるはずだ。奴が今、どこにいるか

美耶子さんの脚は震えている。そして教室の外から足音が聞こえ

た。「シンシンとゅっくりと近づくその音に彼女は振り返った。

「早く！ なんとかして！」

「俺は何もしない。例え今、恭司を助けてもその後また追つてくる。それどころか恭司の関係者全員を殺すだろうな。それが望みか？」あまりにも酷い言い方だつた。これが仕事なのか。美耶子さんは自ら歩みより夙夜の肩を掴んだ。

「助けなさいよ」

「なら方法は一つだ」

在り得なかつた。夙夜が胸元から取り出したのは銃だつた。拳銃、ハンドガンと言えばいいのだろうか。銀と茶の一色がきらりと輝く。「銃火器に詳しいアンタなら解るだろう？ ベレッタPX4本物だ。これで自分の頭を吹き飛ばせ」

「な、なにを？」

「ドッペルさんを消したいならその根を絶つしかないって事だ。自分で蒔いた種だ、自分で決着をつけるしかない」

そういうて美耶子さんへベレッタを渡す。彼女の腕はその重さに一度ぐらつと揺れた。

「頭に密着させて撃てば一撃であの世へ逝ける。その後に残るのは頭に火傷を負つた死体だけだ。恭司は助かる」

震えている。どうすることも出来ない彼女はその場で震えている。僕はお守りを強く握つた。夙夜の目がこつちを見た。一瞬だつたけれどその目が動くなと言つていた。美耶子さんはその場でうずくまつていて。その後ろを影が一つ横切つた。僕の目には美耶子さんがもう一人映つた。僕も美耶子さんも一人いる。意味がわからない。この状況を把握できているのは一人だけだ。

「どうする？」

「い……や、いやよ」

「だろうな、でも」

モニターに変化がおきた。いるはずの無い一人の分身がそこにいてお互に見つめている。そこには美耶子さんは目の前にいる彼

女と全く同じ姿で進んでいく。一人の距離は縮まつて彼女の腕はそれが最初からそうだつたように僕の首を掴んだ。

なんて酷い光景だ。自分では想像できない事が今、目の前で起きていた。モニターの中の僕は抵抗などしなかつた。

「いやあああああああ！」

美耶子さんが叫んだ。

「いや！ 放して！ いやあああああ！」

まるで自分が首を絞めているみたいだ。パニックになつていく彼女を放つておきたくない。しかしまつも夙夜が僕を止めた。その時、口元が動いた。「後少しだ」そう見えた。モニターの中で僕がぐつたりと倒れた。

自分が死んだようだつた。

そこで倒れているのは明らかに僕だ。誰でもない。僕だ。そしてその場にいた二人目の美耶子さんは何事も無かつたように消えた。一切動いていない。ただその場で消えた。

「あ……」

「事件解決だ」

「なにが」

美耶子さんが頭を上げる。

「なにが解決よ！」

銃を夙夜へ向けた。けれど動じる事はなかつた。そこにじつと立つていてる。眼を真つ赤に睛らした美耶子さんは鬼のような表情で夙夜を睨む。

「撃つてみろ」

躊躇いはなかつた。引き金をすぐに引いた。けれど銃は弾丸を発射しなかつた。ただスライドしただけだつた。弾が入つていない。

「えつ？」

何度も引き金を引くが動く事は無いし弾が出る事は無い。

「アンタが死んで事件が解決するならこの問題は大したことはないんだ。そいつは盛り上げる為の道具だ。ああ、勿論本物だから返し

てもらひ「ゼ」

といつてすつと取り戻した。

「今回の事件の解決策は一つ。対象と恋人関係になるか対象の死亡だ。俺は前者も後者も考えたよ。だから恭司との接点を作ったんだ」「何を言つてゐるのよ」

「アンタ、言つたじやないか話をしたことも無いんだって。だから接点を作つて無理やりにでも一人をくつつけようとしたのさ。最初はそうだつたる？ 思い出してくれ。一人で恭司を落とす方法を色々と模索しただろ」

「ええ。そうだつたわね」

「だけど無理だつた。それどころか最後には恭司を怒らせちまつた。それが最後の引き金だ。ドッペルさんは実体化してしまつた」

夙夜は話を続ける。

「アンタがストーカーだらうがなんだらうが恭司が好きならそれでいいと思つたんだぜ。まあ好き過ぎるつてのもちよつと恐いけどな。特に別宅にあつた恭司の写真はびつくりだ。壁一面なんだから」

「部屋に入つたの？」

「ああ。本当に恭司が好きなのかつてことを確認したかつたんだ」「そう……引くでしょ」

「まあな。でも心のそこから好きなら声をかければよかつたんだよ。なにもあんなものに頼る必要は無いんだ。アンタはとても綺麗なんだから」

「そんなのもうどうでもいいわ」

美耶子さんは全身の力が抜けたようにその場で座つた。

「どうでもいいか……実はさ、あのモニターに映つてるのは本物じゃないんだ」

「えつ」

「恭司、俺はもう行くぜ。後はお前の気持ち次第だ」

そう言つて教室を出て行つてしまつた。最後、出て行くときに手を振つた。後は僕の気持ち次第か。そうだな、彼女にいう事がある。

最後は背中を押されるよつになつたけれどそんなことはビビつでもいい。僕はお守りを放す。するとモニターのなかの僕は姿を消した。まるで螢の光が溢れたように光りの粒子となつて消えた。

「美耶子さん」

何度か声をかける。彼女は泣いたまま僕を見た。どう映つているだろうか。幽靈と間違えていないだろうか。本物だとわかるように彼女に触れる。触れた彼女の頬は太陽のように熱かった。その熱で融かされそうになつた。「ごめんね」と言つた。言わなきや駄目だと思つた。

「…………うそ…………なんで」

「最善の方法だつたんだろうね。そのドッペルさんていうのが何か詳しく述べ知らないよ。でも夙夜は僕たち一人を助ける方法を使つたんだと思う」

美耶子さんの眼は真つ赤に腫れていた。すぐ下の床には涙でできただろう水溜りまで出来てゐる。

「ずっとそこにいたの？」

画面を見て気づいたようだ。さつきの倒れた僕はもういない。彼女には僕しか映つていない。

「うん。見てた」

彼女は僕から顔を背ける。

「私のこと嫌になつたでしょ。当然よね、こんなストーカー」

「嫌いじゃないよ」

「嘘よ」

言葉に力が無かつた。いつもは彼女が優位に立つてゐたのに。今じゃ逆だ。

「本当だよ。ストーカーってことは美耶子さんは僕のことが好きつてことでしょ」

肯いた。

「僕も美耶子さんのこと好きだよ」

「…………嘘」

「本当。確かに会話の端々に小ばかにするような言葉が入っているけどそれって……個性でしょ。なんていうかゴニーケ？ そうゴニーケ」

「でも図書館で」

「そりや僕だつて立て続けに会つて馬鹿にされればね。それにあの時、無視したつて言つたけどあれはドッペルさんだつたんでしょう？ それなら美耶子さんが嘘をついていなかつたわけだ。なら謝るのには僕だ」

美耶子さんの手をじつと見る。

「好きになつたんだ。付き合つてくれださい」

「……嘘よ」

「本当だよ」

「本当なの？」

「小さくうなずく。」のままだと全部、嘘になつてしまいそうだ。信じてもうう方法は無いかな。ああ、あるじゃないか。

美耶子さんの唇を奪つた。桃の味がした。

「で、でも、私、変なのよ。変つていつてもちょっとのいやらじやなくて四六時中君のことばかり考へてるし、その……性欲も強いし。だつて恭司君の子と見ながらいつもやつてたのよ」

又、凄い事を言つ。なんだろうかパーンくつたのか。でも今回の内容は僕的、いや男にとつて最高のネタでもあるからOKだな。

「それは嬉しいよ」

「えつ？」

「僕も男」

もう一度、キス。彼女の唇はふつくらとしていてまた桃の味がした。人生最大の力の入れ込みだつた。

「好き！ 好き！ 好き！」

返つてきたのは好きといふ言葉と抱きしめ行為。そして僕はあつといつ間に倒れた。というより倒された。彼女の長い髪が僕の顔をくすぐつてくる。赤く腫れあがつた眼が僕を見つめてくる。

「こまま私の物になつて」

さすがにこの体勢までは考え付かない。さつきも言つたが僕も男だ。こいつは出来る事なら僕が上でいたい。押し倒されるのはもう止めにしよう。

「さすがにテンションでやるのは良くないよ。徐々にね」

彼女の瞳が訴えてくる。強い意思を持っていた。たぶん、目まぐるしく変わった環境に頭がおかしくなつてゐるんだろう。それは僕も一緒だけだ。

でも、駄目だ。なにより非誠実だらう。

僕は美耶子さんへ……初めて出来た彼女へ「ダメ」と告げた。彼女はゆつくりとじっくりと考えて物凄いスピードでうなずいた。もしかすると相当面倒なのかもしれないが僕は彼女のこと好きになつたのは事実だ。僕は彼女の熱を感じながらずつと付き合つていこうと心に決めた。

友人、氷上恭司の窮地を救つて約一年。巡り巡つて春を過ぎた。つまり東堂夙夜をはじめとする中学三年生たちの生活は高校受験が近付く一学期の中盤に差し掛かっていた。そんな六月の事、日差しが強まるなかで教師達は生徒たちの進路先を真剣に考えていた。が、東堂夙夜は進路先など定まつていなかつた。すべてにおいて優先する師、洗敷千影は少年にどこの高校を受けると指示していなかつたからである。学校の教師がいうには夙夜の成績なら大半の高校に受かるだろうと言つたが彼らの言葉に興味はなく意味がなかつた。彼等が教師という立場にいても自分の師は唯一、一人しかいないのだ。そんな夙夜は教師たちにM高校を進められてうんざりしていた。

M高校は東京人なら誰でも知る有名進学校である。通つている生徒は卒業すれば九割九部は大学へと進学する。就職する生徒は奇跡的なまでに少ない。入学すればもちろん勉強ばかりの日々になる。そうなれば夙夜の今の生活は不可能になるだろう。だから選択肢に含まれない。夙夜にとって高校の選び方はプライベートに回せる時間が多ければ多いほどよいのだ。ちなみに進学しないという選択肢はない。親との約束でもあり千影も絶対としている。

M高校といえば友人、氷上恭司はどうするのかと案じる。彼は一年前の一件以来、曾我部美耶子と彼氏彼女の関係となつて勉強を続けている。モデルのバイトもしていて学校以外の場所ではほとんど会わなくなつてしまつていて。そんな彼の目標はM高校で間違いない。

なぜなら彼女となつた美耶子も復学している。ドッペルさんにより登校出来なかつた休学中の遅れを取り戻そうとしていた。二人とも頭はいいきつとM高校で先輩後輩の仲になる。

さりに気を回したのは白瀬トオルだった。クラスの中で特に気の合つ人物は彼ぐらいなもの。白瀬トオルは目標だったプロボクサーへの道が閉ざされてからというもの適当な毎日を送っている。勉強するわけでもなく趣味と呼べるものに執着するわけでもなく日常生活をのらりくらりと過ごしている。間違つてもM高校へ進学するような奴じゃないが最近はほんの少しだけ授業を真面目に受けている。周りが受験に少なからず対応し始めている。現在、夙夜は教師から進路先について考えておきなさいとやんわりと言わされて事務所へやつてきた。

事務所には千影がいつものように新聞を読み漁つており夙夜がやつてくるなり空になつたコップを差し出してきた。コップを持つて新しい珈琲を造つうと備え付けのキッチンで珈琲メーカーの電源を点ける。

親から「高校へは行つて欲しい」「できれば大学に通わせてやつてくれ」と千影に伝えているんだうななどとぼつりぼつりと垂れてくる珈琲に目を落している。両親は健在だが日本にはいない。父親はイギリスの本社に滞在し母親もついて行つたきり。日本へ戻つてくるのは一年に四回ほど。夙夜の生活はすべて千影に任せきつている。

実際のところ高校進学はひとつつの課題である。成績は悪くはないがあまり時間を取られる場所にはいきたくない。できれば勉強も適当で済むような場所がいい。一件だけ妙に都合のいい高校がある。

「結局、葛葉高校ぐらいしかないよな

「なにをぼやいているの?」

独り言だったが聞こえていたようだった。千影は新聞に目をやつたまま声をかけた。

「進学先ですよ。どこにしようかなって」と返事をすると「あ、そんなこと」とぼつりと呟いた。そこには一切感情がないように思えるほど冷たい音がした。

「けつこう真剣に迷つてたりするんですよ」

「そんなこと迷うほど の事でもないわ。どうせ大学に進学するんでしょう。だったら高校は適当でいいのよ。大事なのは最終学歴なんだから」

そのとおりだ。大学に入学した当時なら、ざ知らず大人になればどこの大 学を卒業したか問われることがあっても高校は聞かれない。そんなものだ。だがそれでも当時となる現在にとつてみればけつこうな悩みどころである。

「そんなに悩むなら皆が行くところに行けばいいじゃない。私は進学さえすればどこだつていいと思つてるのよ。ああ、でもこっちの仕事に差し支えがある高校は駄目よ。夙夜はこっちがメインであつちはサブなんだから」

「解つてます」

「ひとつとは魔術師たちの世界。
あつちとは人間社会。

明確な差を持つ二つの世界は混在しながら時を刻んでいる。東堂夙夜の住む世界はまだどつちにでも転ぶ中立の立場である。今なら人として暮らしていける。

珈琲豆がろ過されぽつぽつと滴り落ちるのをじつと眺めていると事務所の外からコンクリートを反響して近付く足音に気付いた。壁は決して薄くはないが夙夜も千影も耳が言いから聴こえるのだ。しかし千影は気にもしていないうにテーブルの広げた新聞紙の山へと読んでいた分を置いた。そして次の分を抜いて手にした。

夙夜はとうとう何杯か淹れられるようにセットしてキッチンを出る。まだ千影の分さえ淹れられていない。そんな彼女にひと目くれてから玄関となる扉から鳴る音に視線を移した。

客人は返事を待つ事無くドアノブを回す。この事務所にやつてくる人物は全員がそうする。ドアをノックしても返事は返つてこない。恐る恐るあける扉というのも一興である。

籠つていた空気が外気と混ざる。コンクリートで冷やされた外の風が混ざると悩みをかき消したようだった。

「なかなか速いご到着だったわね」

千影が見ていた新聞紙から目を離して客を視線に入れる。客はとつと無言でいつもそうやつていて千影の対面に座った。新聞の山をのせたテーブルを挟んだソファーに座つたのは高価そうな黒い着物の男だ。頭髪は白と黒が半々で肩よりも伸びている。髭も生やしており口元のたるみを隠している。年齢は五十ぐらいで室内の誰よりも年上である。対面に座つている千影を目は悪どく濶んでいた。

「千影ちゃんの顔が見たくなつただけだよ」

につこりと微笑んだがその腹の中に溜まつた狂氣は隠せていなかつた。

この男の名前は依知川藤一郎。新宿の歓楽街や駅周辺に強い勢力をを持つ依知川組の頭である。洗敷千影の事務所にやつてくるのはなにも善人だけとは限らない。世間を知らない平凡な中学生からこういつた組の連中まで千差万別。

「追う！ お前らも入つて来い」

頭の声が外へと漏れる。するとどうぞろと黒いスーツの集団が室内を埋め尽くしていく。当然、彼らはサラリーマンではない。全員、肩ががつしりしており分厚い胸板をしている。いざというときは身を呈して銃弾に晒せる壁になる素質はある。そのなかにとびつきり大きなアメフトの選手に見える男も一人ほどいた。営業などできないだらう眉間に深いしわを作つた一重顎の男もいる。全員が怪訝な表情を作つていた。

夙夜はまたこいつらかと思いながらやつてくる連中に目を向けていた。依知川組がやつてくるのはもう何度目だろうか。一二度や三度ではすまない。これまで事務所を使用する理由は千影を弁護士としてである。彼女は弁護士の資格を所持している。人間社会で魔術師が生きていくにはそれなりに稼がなくてはならないのだ。

また弁護士としての千影を頼ってきたのなら自分には仕事はないなと思いながら夙夜は壁際に立つ。自分の周りを男達が囲んで千影が見えなくなる。スーツ姿の男達の背中を見ていると一人の男が他とは違う様子だつたのに気づく。スーツ姿の連中の先頭に立つてゐる人物だ、オールバックの髪に顎鬚をまばらに生やした男である。歳は夙夜の倍ほど。三十前半。屈強な男達に引けを取らない威圧感を持つてゐる。彼だけがソファーに座る頭の隣りに立つていた。

「今日は大勢なのね。なにがあつたのかしら？」

「おい、篠崎」と依知川がオールバックに言った。するとオールバックの男は一礼して「人を捜してもらいたいのです」と短く言った。人捜しは弁護士の分野ではない。「洗敷事務所はこういつた件にも心強いと聞いております。どうかご協力願えませんか」

名刺はなく腕も出さない。目も動かさないで直立不動だった。最初から馴れ合つつもりはないんだと夙夜は思いながら横目に見る。

「人捜しなら興信所にでも行きなさいな。それともヤクザが人を捜すのは知られたくないことがあるからかしら？」

「妙な詮索はしないでくれんか？」

依知川が右の眉だけ上げて言った。同時にキッチンから珈琲メーカーが音をたてて室内にいる全員の気を引いた。

「するつもりは無いわ。その人捜しに必要だから聞いてるのよ。ぼうや、珈琲を配つてあげて」

「はい」

とはいえて出来上がつたのは三人分。室内の男達を数えるとどうやつても足りるはずはない。インスタントならすぐにできるかと立ち上がるうとしたが「いや、必要ない」と依知川が口にした。すると「のようよ、で？」と千影が話の続きを催促した。夙夜は足を止めてまた耳を傾ける。

「俺たちのしのぎの一つだが女が傷つけられてね。その犯人を追つてゐる。ああもちろん新聞には載つてない」

篠崎と呼ばれた男はテーブルに山積みになつてゐた新聞を横目に

言つ。

「その“しおざ”とやらを教えてもらえるかしり?」
「女のアンタにやきついと思うけど、それにあんな子供がいるようじや……」

口を閉ざして夙夜を見る。どんなしのぎでもいさと興味なさげにしていた夙夜だったが馬鹿にされたように感じる。たいていの事ならすでに理解しているのだと言つてやりたかったが無言で立つ。魔術師として千影の下にやつてきた日、その日からもう随分と経つ。過ぎる日々のなかには彼らヤクザと世間一般に呼ばれる組織の非道よりもえぐいものも見てしまった。大体の事なら唾を飲まずして受け入れられる。

「なにか勘違いしてるみたいだけど仕事をするのはこの子よ。私は必要な仕事かどうか判断するだけ」

「はあ?」

どつと笑いが起きる。笑わなかつたのは一人だけ頭の依知川藤一郎だけである。立つて並んでいた巨漢の男達は笑いを抑えられなかつた。仕方がない事でもある。彼らの身長は最低でも百八十、体重は八十五といったところ。細い太いはあつても誰もが戦士として戦うだろう。比べて夙夜の身体は細く軽い。背も低くとても彼らに太刀打ちできそうに見えない。

「ちょっと待つてくれ、どう見たつて中坊だろうが! 馬鹿にしてんのか! アクション映画の主人公だってこうも差がありや実力ははつきりしてる」

篠崎は両腕を肩へとあげて掌を天秤のようにして笑う。あまりに馬鹿馬鹿しいと。

「じゃあ一人選んで相手してみなさい。上の階が空いてるわ。夙夜、今の実力を見せてみなさい」

「へーい」とこれまた興味のない返事をした夙夜は壁から離れて事務所の扉を誰よりも早く抜けていった。構成員たちが近付くと体格差はよく解る。夙夜の頭は構成員たちの肩のあたりを上下するだけ

である。口元の笑いを堪えきれない男達はすつと歩いていく少年を嘲笑っていた。

「篠崎、今回の件はお前に任してある。好きにするがええ、わしはここまでじゃ」

「はい」と返事をする。

今度は方向を変えて先に進んでいく夙夜へ「おい」と篠崎が声をかけて追っていく。事務所を出ると先を行く夙夜が足を止めて待っていた。そして夙夜がいたのは下ではなく上であった。続いて篠崎の部下が事務所を出て行く。ぞろぞろと出てくる黒服の男達が数人残る。

「いいの？ 彼らに任せて」

「今回の件で一番、頭をいっておるのは源じゃ。わしは千影ちゃんを紹介してやろうと思つただけにすぎん。なんでじやろうな、奴らに持ち合わせる氣なんぞないのに」

「顎鬚をさすりながら千影を見る。

依知川藤一郎が千影を紹介した理由はただひとつしかない。彼の気分などそこには意味はない。ただ、東堂夙夜に必要な仕事だからである。この事務所に張つてている結界がそつさせている。必要なない仕事はこの事務所にやつてこない。

「それじゃわしは帰るよ。今日はなんもないが宜しく頼むよ」「見ていかないの？ 嘘噏を見るの、好きなんじゃないの？」

「自分のところの組員がやられるところを見たい物好きはおらんよ」残つた構成員を連れて依知川は事務所を出て行つた。入り口の扉は半透明のガラスがついており影くらいなら判別できる。依知川は言つたとおり下へと降りていき誰も上つてかなかつた。

洗敷事務所が借りている雑居ビルには他に使用者はいない。一階、二階ともに無人である。二階は仕切りのないコンクリートの一室で階段を登りドアを開くと廃虚と間違えそうな空間が目に広がる。足元には塵か砂利かわからぬくずが散乱し革靴の底に音を拾わせた。

壁は塗装が剥げ白とグレーが入り混じっている。長い間放置されているようだつた。

一階の事務所と同じ広さのはずだが物がないため広く感じる。そのなかで夙夜は中央に立つと首を回し関節を鳴らした。

身体を跳ねさせてリズムを取る。「いつでもいいぜ」と男達に声をかけると誰が行くと相談もないまま篠崎が「松風、お前がいけ」と名指しした。松風は一番、身体の大きな男だつた。夙夜と対峙すると差が大人と子供ほどあつた。しかも人の顔を驚愕みにできそうな大きな掌を持っている。拳をぱきぱきと鳴らせると誰もが任せようと事の次第を見ることにした。

「ぼうず！ ちと痛いが我慢しろよ！」

勢いよく駆け出すと瞬時に間合いを詰めて拳を繰り出した。風圧だけでも人間を吹き飛ばすかというほどの直球ストレート。風など吹いたことのなかつただろう空間に突如巻き上がる。埃が地面から吹き上げたが夙夜の身体には何一つあたりはしなかつた。夙夜の目にはまるでスローモーションのように映つていて足裏を滑らすだけだつた。複雑な動きではない。身体を少しづらせば回避できる。余分な力を使わずに初撃を流す。

篠崎をはじめとする構成員達の目には鮮やか過ぎる動きが見えていた。

「てめえ！」

一発目の拳もまた空振りに終わる。一発貰えば臓器が押しつぶされる一撃に夙夜は真っ向から向き合つている。なにも恐れではない。単なる暴力だけでは捉える事の出来ない力の差がある。足のステップだけで距離を測つて男の拳を回避していく。二発目、三発目、四発目と繰り出されるうちに距離が縮まっていく。いつのまにか夙夜は壁へと移動していたのだ。

「どうした？ いつまで逃げるつてんだ、ああ？ もう逃げる場所もないつてのによー！」

にやにやと下品な笑いを浮かべて近寄る。夙夜はとこうと汗一つ

かかず涼しいままだった。ただ足の動きは止めずにリズムは取つづけていた、壁際にいる今でも変わらない。

「終わりにしてやる！」

逃げる場所をなくしたように見えた。構成員達の目には仲間の背中しか見えていなかつた。繰り出される腕が上がり落ちる。すると男のわき腹から夙夜がするりと抜け出してくる。屈めば男と壁の間をすり抜けることぐらい余裕だつた。振り落される拳は空をきる。すかさず背後に回つた夙夜を追いかけると同時に松風の視界は暗闇へと陥つた。

大きな身体は壁に倒れこみ決着はついた。

振り向いた瞬間のこと、夙夜の身体は小さな台風の如く回転し男の眉間に強烈な蹴りを見舞つたのだ。全身の筋肉をバネにした一撃は大男であろうとも仕留めた。

「やるな～」

まだ身体は蹴り終わつたポーズで止まつていた。小さな身体に似合わず足は長い。背が伸びればモデルにだつてなれるだらうと篠崎は拍手しながら感激していた。

「鮮やかだつたぜ、これだつたら仕事も任せられる」

「なんなら全員で來てもいいぜ」と言つと構成員達はかつとなつたが篠崎が止めた。夙夜の動きは紛れもなく慣れていた。練習だけで身につくものじゃない。彼は自分にこの場所を教えた組長の意向をようやく目の当たりにして手を叩いた。

「改めて仕事を頼みたい。篠崎源一郎だ」

「東堂夙夜だ、よろしくな」

どちらの手も炎のように熱かつた。

今日も朝陽の昇りを波止場で見る。

ここ二年間、住居にもなった軽自動車のなかで目を醒ますと目をこすつてあくびをする。自分の口臭にだつて気づき始めた今日この頃。車内に籠つた空気を変えるためドアを開ける。いつたん外に出るとシートで固まつていた身体がばきばきと音を立てて元に戻つていぐ。

意外なことに腹はならない。いつもなら空腹で第一にあくびより先に腹が鳴る。そういうえば、と昨夜を思い出す。気前のいい派遣先の弁当を食つたんだと腹を押さえて一度ぽんぽんと叩く。オレにとつて一食分浮いたのは気分がいい。

朝陽が昇つていくのをじつと見る。背後でLEDの光る自販機が恨めしい。なんならぶつ壊して中身を強奪してもいいけどそもそもいかない。この港はあと十分もすれば職員がやってきてにぎやかになる。夜中を過ごすには人がいないから最適だけど長居できない。今日もそろそろ車のエンジンを点けなきやならない。

シートに戻つてエンジンを点火する。軽くふぬけた音とともに尻の下が震える。

さて、今日はどこへ行こうか。今頃やつらは血相変えて俺を捜しているはずだ。太陽に向かつて笑いがこみ上げてくる。良い気分だ。愉快極まりない。あの爺の赤くなつた顔がまた甦つてくる。直接見たわけじゃないがきっと青筋立ててキレているはずだ。

事の発端はオレが姿をくらます三年前よりもちょっと前だ。依知川組がしきつっていた麻薬売買に関与していた頃にまでさかのぼる。依知川藤一郎……やつの下で働いていた頃だ。何人かいる下つ端売人のうちオレはけつこう頑張つていた。他の奴らは三十を超えたお

つさんばかりで昼間は動きたくないとかいう肩ばかりだつた。だから、奴はオレを他の売人とはちょっとだけ扱いを変えていた。その頃のこと。

組長じきじきにオレを呼びつけてきた。最初はマジで怖かつたけどやつの屋敷の大きさには度肝を抜かれたのは今でもよく憶えてる。オレの家が家賃三万五千円のボロにボロを足したような部屋だつていうのにやつの屋敷は部屋がいくつもありやがる。おまけに殿部屋もオレの部屋の何倍も大きいから顎が外れそうになつた。そんな屋敷を後ろに張りついて歩いていくとある暗い部屋に入れられた。

真つ暗で太陽の光どころか電灯もない。逃げ道だつた扉は外から押さえつけられて出られなくなると部屋の中でがさがさと動く物体と出くわした。

あの女を見たのはその日が最初だつた。

なつていつたつけか……そうだ……依知川琴音だ。

暗い部屋の中にいたのはあの女だ。歳はいくつだつたが憶えてないが成人はしてない。あの女はオレに頭を下げて交尾を強請つてきやがつたんだ。最高だつた。断る気なんていつさいなかつたからな。尻の穴まで味わつた。あんな女はどこの娼婦リストにもいやしねえ。全部が極上だつた。

事が終わるとオレを待つっていたのはやつの部下どもだ。あいつ、あのでつかい篠崎源一郎が立つていた。殺されるかと思いきやいつも報酬を手渡してきやがつた。あの篠崎の目はいつでも刺してやるといつた恐怖が溢れていた。

それからも事あるごとにオレは屋敷に招かれた。

問題が発生したのはオレが売人を辞めてからだ。元々、こんなやばい仕事を長く続けるつもりはなかつた。警察だつて警戒区域を増やしていくし自警団みたいなのが出来てからやりにくくなつたからだ。

とはいえヤツらから放れられたオレは別の仕事についていたがそれも長くは続かなかつた。

そして三年前のある日だ。

時間つていうのは経てばやつぱり変わるものでの女の見たときは心臓が早く早くと鼓動していく。息ができなくなるほどに苦しくなつていつのまにか女を追つていた。

ヤツの娘がなんでこんなところにいるんだという疑問をその時は頭のどこにも浮かべられなかつた。ただ後ろをついていつて歩いただけだ。女が入つて行つたのはマンションの部屋だ。ビルにでもあるマンションで別に特別なにかがあるわけじゃなかつた。セキュリティだつてないし誰でも出入りできる。

女の入つた部屋の前で立ち止まると男がオレの後ろからやつてきた。奇妙すぎた。男の風貌はオレより年上で中央から横分け。眼鏡をかけてればオタクに見えるよつないヒヨーリーマン。

男はいつさい躊躇せずに女の部屋へと入つていつた。オレはその男が女と付き合つているのかと思つたがそうは思えない出来事が目の前で行なわれる。部屋の扉が開かれると今度は別のおっさんが出てきた。

どうなつてるんだ？

頭の中でどうにか整理しようとするが答えには辿りつけないまま新しい男がやつてきて入つて行つた。そこでの部屋だ。オレが通された部屋が場所を変えたんだとオレは判断した。だとしたらこの部屋は……。

その日の夜、いつたんは部屋に戻つたがあの女を抱いた時の感触が甦つて堪らなくなつていて。どんな麻薬よりも刺激的なあの身体をもう一度味わいたい。だが普通に抱いただけではあの感触を超えないだろ。妄想の中で女を味わつていると一度だけ誤つて爪を立てたときがあつた。女の身体がぐつと良くなつた瞬間でもある。オレは台所から包丁を持って車に乗つていた。

女の部屋に着くまで時間は掛からなかつた。抜き身の包丁を片手に男たちが出入りする部屋を見る。よく見ればわかる。出入りしている男たちはその部屋にだけ立ち入る。そして一時間も経たない

ちに帰つていいく。

ちょっと休憩する、ちょっとトイレに行くというだけのように見える。オレは人気の静まつた夜中、三時になつてから行動にでた。部屋に入ると男の姿はない。やけに精子臭い空間に足を踏み入れる。女は、と捜すとベッドにいた。ドアが開きっぱなしで誰でも入れるようになつていて。赤い光が壁の上からこつちをみていた。どうやら監視付きらしい。オレの姿はこの時、すでに見られていた。だが女を目の前にしたオレはもうそんなことには興味がなくなつていた。

女を犯した。

声をあげ誰かに見られていることで普通よりも音を大きくしている感じがあつた。おそらくあの赤い光を放つてているカメラに対してだろう。オレの顔もばつちり写つていて。けどもうここまで来たら引き下がれない。持つてきた包丁で女の身体を切つた。いやあ、あの時は最高に笑えた。清ました表情が一瞬にして青くなつて叫んだとき、オレの一物が絞めつけられた。これが最高だつた。どんな女よりも気持ちいいのだ。

オレが切りつけるたびに女が叫んできつく絞める。どこでカメラで監視している奴らがやつてくるか解らなかつた。オレは内心、早く逃げなけりやと思つてたんだろう。恩の中に一発放出するとさつさと部屋を出て車へと載つて乗り込んだ。それからだ、オレの死に物狂いで逃げる生活がはじまつた。

今日も依知川琴音を思い出して何発か出せるほど記憶にこびりついている。

あの感触はまだ憶えている。黒い髪に白色めいた艶のある身体。触れれば柔い筋肉で脂肪は少ない。骨まで触れることのできる細い身体だつた。彼女の身体が今、どうなつているかは知らないがもう一度、やりたいもんだ。

涎を袖口で拭いて携帯電話を見る。今日の仕事はないよつだ。

俺は依知川琴音に傷をつけた日から逃亡を重ねて三年。日雇い、

現金支給の条件でのみ仕事をして生活費を稼いでいる。必要なのは車のガソリン代と飯代だけだ。月に四万もあれば十分いい物は食べた。あとは暇な日にマンションへ空き巣に入ることがちょっとした趣味になった。金目の物と現金さえ手にすればテレビやパソコンのような電子機器に目もくれず拝借して去つた。今、財布の中には諭吉が三人。まだ当分は逃げられる。そのうちに昨日のような部屋を見つけるとしよう。

この三年の中で幸運なことに出会つたのは先週のこと。飯を食うため空き巣に入った時だ。時間は夕方だつたか、俺は奇妙な部屋だと思った。

部屋の主は女。髪は黒で年齢は一十前半だった。瘦せていたが胸は大きかった。ただ変な事に俺を見ても女はなにも驚かなかつたのだ。最初、侵入したときは誰もいなかつた。俺は顔を隠していた黒いマスクで部屋の中を物色していると女が帰つてきた。下見もろくにしなかつた自分のせいだとおもつたが相手は女だ。

丁度いい、頂くとするか。

逃走し続けてすっかりと渴いていた餓えを満たすためにそろそろ女を食べたくなつていて。俺は物陰に隠れて獲物を待つた。女は俺の侵入に気付いてあらずすぐに部屋儀に着替え始める。彼女の身体は細かい傷がついていてどこかで俺の心が萎えていた。

やはり喰らう女は聖女のように美しくなくてはならない。

だが、渴きを抑えられず俺は女を後ろから抑えると「動くな」とどすの効いた声で脅した。しかし女は恐怖など感じていなかつた。

無表情のまま着替えをしようとして俺を振りほどこうとする。叫び声はおろか俺という人物に気付いていないように振舞う女に俺は手を退けた。

するとどうだろうか。女は暴れず「さつさとしたら」と小声で言ったのだ。あまりにも淡々とした女は俺に対し催促するかのようだつた。こうなると自分が何をしているのか解らなくなる。

なにより驚いたのはチャイムも鳴らさず玄関が開くと男が入つて

きた。男は俺と同じように黒いマスクで顔を隠していた。

同業者？

そんなはずあるかと否定して男を見た。だが男も同じだった。名前も顔も知らないが奴は俺を長年の友人を見るような瞳で観て頭を下げる。女はジャージのような服を着ているが俺たちには見向きもない。テーブルの前に座るとテレビを点けて目を向けた。

部屋に入ってきた男はそんな女に向かって歩くとわき腹から手を差し込んで何も言わずジャージを捲り上げた。

抵抗はない。それどころか自ら腕を上げて脱がせやすくしている。ジャージを脱がせると音なの白いブラジャーが露わになる。続いて男は女を立たせると尻を叩き一気にジャージを引きずり降ろした。純白のパンティーまでも露わになつたとき俺はよつやく思い出した。

た。

依知川琴音だ。

システムはすべて一緒だ。

目の前で男が女の性器を舐めまわし始めた。やつぱりそうだ。俺はついている。あの屋敷で見た光景とまったく同じだ。あの爺、二年も同じ事やってやがった。

じつくりと一人の行為を見ているとようやくどばかりに濡れてきた性器に男が猛りだつた男根を挿入した。さすがに声をだした女はスイッチが入ったように喘ぎ始める。

あの爺の趣味ならこの部屋はビデオで監視されている。俺が入つてどれだけ時間が経つた？そとはすでに暗くなっている。一時間以上経つていてるはず……もし奴らが俺を追つているなら飛んでくるはずだがその気配はない。

男が「ふう」と言つて行為を終えるとまるで使い捨てオナホールのように女を捨てて俺の肩を叩いてやりとした。股間の一物をしまふと部屋を後にした。残されたオレはというとレイプされた後の

女をして目にして性欲よりも深い欲求を漲らせていた。

放心状態の女は股間から白濁液を滴らせていた。女も少なからず感じていて別の液がてらてらと輝いていた。浅ましい売女がなにをしているんだという感情が溢れ過去のあの日が甦る。

完全に再生だ。

あの少女を食つた日のことと同じように女を食つた。

細い腕を折ると豚のよつた悲鳴をあげた。さつきまであんあんと喘いでいた喉から泡を吹いたようだつた。これがたまらない。今の俺は刃物は使わない、琴音の時とは違う。刃物で傷をつけるとすぐに楽しめなくなつてしまつ。ひたすらに腕力で強引に折つて曲げて剥ぎ取つた。

爪を剥ぐとさうに大きな悲鳴となる。

性器に爪を立てて悲鳴を食る。

だが、やりすぎた。

女の悲鳴を聞いて駆けつけたのは奴らじやない。騒音を撒き散らしてやつてきたのは警察だ。ドアを叩き大声をあげる。女も叫び始めてようやく正気に戻つた。オレは入つてきた窓から逃げることとなつた。次はもっと上手くやる必要がある。

よく観察すればこれと同じ部屋を見つけることは簡単だろつ。

またこの快感に出会えるならオレは何度だって危険をおかしてもいい。

最後に部屋につけられたカメラに中指を立てて挑発して部屋を後にした。

「箱娘ねえ」

事務所一階での大男との戦闘が終わると夙夜を混ぜた一団は車に乗つていた。夙夜に倒された大男こと松風は五分も経たずに意識を取り戻して立ち上がつた。だが自分が倒れたことも解らないくらい感覚はなかつた。一連の動きを見て夙夜に対するイメージを変えた篠崎は握手を交し三階から降りた。

すでに依知川藤一郎と数人はいなくなつておりスースの男の数は激減している。今回の事件の依頼人である篠崎源一郎の乗ってきた車は八人乗りの黒塗りワゴン車だった。全面の窓を半透明にして中が映らないようにしていた。とくに見られて困るようなものは無さそうに見えたがやはり彼らを隠すには最適だと考えを改めた。黒服の集団が車一台につめて乗つていての光景は目に付いてしまう。

夙夜を一番後ろの窓際に座らせると篠崎が隣りに座る。あとの構成員たちがぞろぞろと入つてくると車はすぐにいつぱいになつてしまつ。エンジンが付き静かに走り出すと篠崎はようやく今回の事件について話をはじめた。

「そう、箱娘」

「つまり風俗でも稼げないほどの借金をかかえた女が二十四時間、犯され放題、見放題つていう部屋で暮らす。男は大金使つて女を利用できるつてわけか」

「そうだ」

箱娘。

篠崎源一郎の話によると彼らのしのぎの名前である。彼ら依知川組の組長、依知川藤一郎の趣味から始まつたもの。最初、箱娘は屋敷にいるものとされた。もちろん依知川組の屋敷である。昔から依知川組は合法、非合法関係なく金さえ稼げれば手を出す。そのなかでも麻薬による収益は利益の大半を占めていた。町に売人を放つて市民から金を得る。1990年代よりも今のほうが稼げると篠崎は言った。大麻やコカインを欲しがつている市場そのものの変化が原因と説明し今では主婦や学生がいいリピーターになつていて、あまり聞きたくない話だつたが事実である。

少しばかりの溜め息と共に説明は続けられた。

麻薬の売買は構成員ではなく外部の人間で構成されている。売人に渡すまでが依知川組の動きであり直接市場で売買を行なう者は組内にはいない。売人には小額ではあつたがその売上に応じて報酬が与えられていた。普通の生活をおくる人間にとつては少なく彼らの

ようにはその日暮らしの遊び人には大金となるほどの報酬だった。所詮、世間一般では暮らしていける人間などいない。何度も逮捕され刑務所暮らしに慣れた者も大勢いる。

今の世の中、まつとうに生きるのは馬鹿馬鹿しいと彼らは口をそろえるらしい。

そのなかには金で満足する者だけではない。金よりも酒、酒よりも女。自分の身分では抱けないような女。その点が依知川藤一郎にとつて好都合だった。ことの始まりはある男。男への報酬はこれまで現金だったがある日、屋敷の一室へと通された。

裸で仕切られた縁側の部屋だ。しかし部屋の中に入ると太陽の光は届かなくなる。裸は光を遮断するよう加工されており闇を作り出していた。中にいるのは少女とも女ともつかぬ美女。髪は黒で細身。胸は生長の途中ではあつたが手に納まるほど。

部屋へ案内した依知川藤一郎は姿を消していた。男に対し少女は無抵抗だった。誰かの介入があるわけでもない。男の前で着物を脱ぎ始めた少女はまっさらな身体を見せ付け、男の本能をかきたてる。まるで自分から誘惑するように。

男たちは溜まらず手をかける。それでも誰も助けには来なかつた。名前も知らない少女はただ必死に絶えていた。涙を流し声を枯らして時が過ぎるのを待つていた。男が交尾を終えると身体を震わせて泣いた。男は我に戻るなり部屋を出る。大抵の場合こうなつた。

構成員の誰かが男を捕まえて事情を話す。今回の報酬だと。男の手には現金はない。身一つであつた。だがその報酬を拒めるはずもなく見分不相応の極上の美女をその手にかける。

篠崎の説明によれば彼らへの報酬に一円たりとも払いたくないと。いう組側の考え方と依知川藤一郎の趣味によるものとのこと。報酬を女の身体に置き換えると一人あたり数十万浮く。さらには売人たちの動きが活発になる作用も含まれた。また組頭である依知川は男と少女の交尾を別の部屋から監視するように見ていたのだ。

彼の性癖である。

他人のセックスに強い刺激を得るようだ。とくに身内や親しい間柄の女性だとさらといいらしい。とんだ変態だ。

これが発端。だが少女の役をするには普通の人間では持たなかつた。試行錯誤を重ねた結果、現在の箱娘となつた。

借金の返済が滞つた者、組に立てついた者、理由は何でもいい。逃げられる場所を全て潰し身一つとなつた女を作り上げ箱に閉じ込める。といつても出入りは彼女らも自由。三時間以上の外出はできないという制約はついているが部屋の中に絶対いなければなるайこともない。

コンクリートのマンションの一室を使ひCDカメラを散りばめる。監視とネットによる動画配信用のこと。篠崎達は車から監視をしているらしくネットの動画配信サービスの管理と共に行なつてゐると言す。部屋に立ち入ることはないらしく緊急時以外はほうつているらしい。

「普通こんな話を聞いたら皆気持ち悪がるもんだが……どうなんだ？」

「べつに」と素氣ない返事。話を聞く前とそれほど変わらない表情でいた。

「説明を聞くだけならイメージはそれほどでもないさ。それにそういうゲスなことをやつてる連中はどこにだつていることぐらい解つてる。なにもあんたらだけがそうじゃないだろ」

逃げる場所がない車中で大口を叩く。夙夜という少年に篠崎は見えない自信と力を感じたような気がした。部下の松風は決して弱くはない。身体の大きさ、人生の経験量。すなわち喧嘩の数は絶対に多いはずだ。なのに一瞬のうちに倒した少年は信頼できるに値する。

「あんたじやなくつて源。源つて呼んでくれ

「源？」

「あんたとか篠崎さんとか言わると背中が痒くなつてくる」

と言いながら本当に背中を搔く。事務所にいた時とは雰囲気が変わっていた。硬いイメージのあつた構成員たちも今はそれぞれ隣の

男たちと会話していたりする。しかもその内容がまるで学生の会話のようにも聽こえるから肩の緊張は完全になくなっていた。

「じゃあ源さん」

「好きにしな。で、俺たちが追つてる奴の事だ」

懐から写真を取り出すと夙夜に見えるように胸の辺りに差し出した。受け取りこそしなかったが視線を落して写真を見た。金髪に薄い眉毛。半分ぐらいしか空いてない目と磨り減った頬の男の顔がある。

「こいつの名前は樋上太一。数年前まで俺たちの組で麻薬の売人をやつてたやつだ」

「今は？」

「姿を消してる。箱娘は最初、屋敷でやつてたつて言つたろ？ その頃の売人だつたんだが突然辞めやがつた。まあ理由はよくあることだが普通に就職したいってなんだからそうさせたんだ」

「いいことじやないか」

「そりなんんだがな。こいつ、やつちやならない事をしでかした。箱娘に手を出したのさ。最初の被害にあつた女は今も入院してる。二人目は腕の骨が折られるわ、爪を剥がれるわと使い物にならなくなつてゐる。おまけにカメラへ向かつてファックだ。俺たちは絶対に許さねえ」

説明する篠崎の顔色がだんだんと赤くなつていく。身体も震えている。彼の怒りはとても強いものだと誰でもわかる反応だった。しかし夙夜はその怒りに共感することはできなかつた。なぜなら怒りを露わにする彼もまた怒りを買う者だから。忘れてはならないのはこの仕事は下種同士の問題であるということ。

千影のもとで仕事を開始する際、彼女からいくつか仕事の内容について説明を受けた。まず仕事は正義と悪に分別できるものではない。自分は正義の味方ではなく依頼人の見方であるということ。例え敵に警察がいたとしても例外はない。守るべき者を見失わないとされた。

「で、これからどうに行くのさ」

「まずは一番田の現場だ。お前だつて見たいだう?」

「お前じやない。夙夜だ」

篠崎が自分を源と呼べと言つたように夙夜も言つた。くすりと笑つて写真をしまうと篠崎は「わかつた、これからは夙夜と呼ぶよ」と肩を叩いて前に座つている連中から缶コーヒーを一本貰つた。一本を夙夜に渡すと蓋を開けて飲みはじめる。夙夜は腰のあたりで震えを感じ携帯電話を取り出す。當時バイブにしている携帯は着信音を鳴らしたことはない。

『本日のお帰りは何時ころになられますか？　お食事はどうなさいます？　北岡めぐみ』と書かれていたメールだつた。北岡めぐみは現在、東堂家の住み込みメイドである。両親が海外で暮らしており妹の玲子は学生寮に住んでいる。東堂家は彼女と夙夜の二人で暮らしているようなものだつた。彼女からのメールは必ず夕方の四時半に送られてくる。今日のように仕事が入ると家に帰る時間は極端に遅くなる。夙夜は『先に食べてていいよ』と書いて送つた。

車は事務所のある新宿駅から離れた住宅街へと入つていく。二十四時間の無人型駐車場で停車させると篠崎は他の構成員たちを残して夙夜だけを連れて外へ出る。「お前らはちょっと待つてくれ。大勢で行くとまた問題になる」と言つてドアを閉めた。

車中で聞いていた第二の現場へと向かつて二人が篠崎のオールバックと風貌は抜き身の刀のように歩行者を遠ざける。もし車に残つた連中も一緒に来るとなつたらそれだけで通報されるんじやないかと背中を見ながら思う。

「現場はどこにあるんだ」

「すぐそこだ、先に言つとくけど現場はもう片付けがすんでるから何もないぞ」

「それでも一度見ておいたほうがいい。だろ？」

「ああ」

無駄な話はせずに歩いていく。夕暮れの道はやはり夕食の買い物

に出かけていた主婦が歩いており篠崎を見ては避けていく。その後ろを歩いている夙夜はもう少しどうにかならないのかとその筋丸出しの男に溜め息をついた。

駐車場から五分も経たないうちにマンションの門をくぐつしていく。門といつても外壁の切れ目みたいなもので三人で手を繋いで通ればぴつたりなくらいの幅しかない。さらにマンションの壁には黒いヒビがうつすらと入っている。地震の影響ではないだろう、おそらくは老朽化によるひび割れだ。足を止めていると篠崎がどんどんと進んでいく。玄関のところで姿を見失いそうになり慌てて追いかけた。

「おい、おっさん。例の部屋の鍵だ」

玄関には薄いガラス越しに管理人と見られる初老の男性が腰掛けていた。篠崎がガラスに腕を当てて言つと男は迷わずにつと鍵を取り出して渡した。小さな鍵をぎゅっと握るように受け取るとまた歩き出す。

「何階？」

「三階だ。エレベーターはないからな」

そんなことは聴いていなかつた。このマンションの構造だつて知らない夙夜にとって部屋の場所も解らないだけだつたが確かにエレベーターがあるようには見えなかつた。管理人だろう男は篠崎の後に入ってきた少年に訝しげな目で見ていたが振向いた瞬間に目を足元に落す。

外壁に沿つて作られている階段を一人して登つていく。真直で見るとやはり壁が汚くなつていて、建設当時は白だつたろう壁は黒くくすんでいる。かなりの時間が経つていて事を知らせていて、古いマンションなんだろうと感じながらどんどん進んでいく篠崎の後ろを歩いていくとようやく三階へと着く。マンションの住民の誰とも会わずに着いた現場の部屋。そこは赤が強めの茶系色のドアがあつた。男から受け取つた鍵を差し込むとぎい、と金属の擦れる音がして開いた。

「ここが現場だ」

玄関口に立つ。が、別に妙なところはない。フローリングの床は傷もついていないし壁も綺麗だ。部屋のなかへ入っても違和感はなかった。それでも周囲を隈なく見てみると壁と床の間に妙な穴があつたり穴から黒い影のよつた線が浮き上がつていて、さつきの説明の中で篠崎はここへ直接やつてくる会員以外にもオンラインで動画を見るだけの会員もいると言つていたのを思い出す。

「箱娘つてのはさ、オンラインでも見れるんだよな」

「ああ。会員の数もかなりだ。ん？ カメラなら外しているが。ここ の部屋は警察もやつてきてばれたからな」

「警察は何て？」

「圧力をかけて潰したよ。このマンションだつてうちの所有物だから文句はでてない。あるんだつたら出て行けつてことだ」

部屋の中を歩いていく。風呂場もリビングも寝室に使いそうな部屋も全部一通り見るが何もない。最後に犯人である樋上太一が侵入してきたという窓へと向かう。「ここは弄つてないんだよな」と聞くと篠崎は「ああ」と返事する。この部屋は地上三階にある。窓を開けると隣家との間は一メートル以上足場が離れている。マンションの外壁が隣家の屋根まで伸びている。マンションの足飛んだだけじや掘まれない。しかもその壁の幅は同年代の女子の足裏ほどもない。

「樋上はここから逃げたんだよな」と聞くとまた「ああ」と返事。どうやって逃げられるのか。たとえここから隣家の屋根に飛び乗つてもその先は？ わずかに並の運動神経じゃ持たない。しかも逃走時には警察だつていた。逃走経路を思考する。窓から飛び屋根に乗りさらに飛び降りて走りさる樋上を想像していた。

かなり足は速いと思う。

「なあ現場の録画映像とかないの？」

「あるぞ。次に行く場所に全部あるんだが、もう行くか？」

「そうしよう。樋上が部屋に入る前に見ておきたい。多分、次にやる時は手際が良くなつてゐるはずだ」

再び車が走り出す。篠崎はハンドルを持つ男に合流するぞと言つたが夙夜が待つたを掛けた。少年の一言に車が一度、停まつてまた動き出す。篠崎は夙夜の要望によつて第二現場の周りをゆっくりと走り出す。第二現場のマンション付近は大通りから一本中へ入つている。片側一斜線から対向車が来た時は人の通れる隙間もないほどの道へと変貌する。樋上が逃走しただらうルートを思考する。例の窓が見えると車内から前方を見る。かなり先の方まで一本道が続いている。姿を消せるような場所は見当たらない。樋上が逃げるとき、やつてきた警官もいた。奴はどうやつて逃げたのか。窓から足場になりそうな場所までは高低差が激しい。自分たちのいる地上に降りるまで段階を踏んでも難しい。

「まだか？」

運転席で声がする。後ろから車が迫つてきている。また窓のほうへと目を向ける。もう一度、犯人の動きを想像する。樋上の身体能力が常人よりも少し上回つているだけなのか。とするしかない。夙夜は「もういいよ」と言つて自分の席へと戻つた。後ろの車は衝突する事無く尻についた。

「樋上の情報は？　まさか写真だけって事はないだろ、あるならくれないか」

隣には篠崎が座つている。元々、組が雇つていた売人、ならば写真だけのはずはない。篠崎がバッグから一枚のA5ダブルリングノートを取り出した。コンビニでも売つているものだ。そこから何ページかめくつて夙夜へと渡す。先に見た写真をクリップで留めた細かい字だつた。樋上の情報というよりは彼のプロフィールから行動情報も記載されている。なかには当時、住んでいた場所まで載つていた。

「ここに行けばいいんじゃないのか？」

「事件の後から戻つてない。そりやそりや、んな馬鹿なやつはないさ。それに今じゃもう別の奴が住んでる」

「そりやそりや……じゃあこの携帯電話の番号も無駄つてわけだな」

「そつちも繋がらない」

すでに新宿駅から随分と遠ざかる。景色も変わり果て歓楽街は一切ない。建造物が大小バラバラのビルとマンションにだけになると走る車もまばらになつた。夙夜たちを乗せた黒塗りのワゴンが大通りから姿を消したのは夕陽も落ちるころだつた。うつすらとした夜の色に染められはじめると人目を避けるように長く太いビルの間にある駐車場の奥へと侵入した。駐車場はビルに囲まれており出入り口以外は塞がれている。一番奥には黒いワゴンが停まつている。今、到着したワゴンと同型だつた。停車してもエンジンは切れなかつた。篠崎が夙夜だけに行くぞと言つ。

「お前らは組に戻つて別件にあたれ。俺は今日も朝まで監視する」乗つてきたワゴンは二人を降ろすとすぐに後退していく。すでに停まつっていたほうのワゴンのドアを一度叩いて開いた。

「おう！ お前ら、元気にしてたか」

まるで友達に言つようになつた篠崎は笑顔で乗り込む。開いたドアの間から見た車内の様子はさつきとは別物だつた。車の中というのシートがあるものだが目前の空間にはシートはなくモニターの電光ばかりが輝きあつてゐる。

「これは」

「凄いだろ。ここが箱娘の監視部屋だ」

篠崎の言葉に中にいた男達もにやりと笑う。まるで子供が自分たちだけが知つてゐる秘密基地に新しい友達を招いたような印象。

ワゴンの中はシートが先頭の一席のみとなつてゐる。代わりに胸のうちで抱えられそなへくらゐのモニターが五つ並んでゐる。モニターの背後から伸びる配線を隠すように置かれた机にはパソコンが並んでいて一人の構成員はじつとモニターに目を配つてゐる。彼らは車輪つきの軽そうな椅子に座つてゐる。

次にモニターへと視線を移すとすぐさま目を背けたくなるような映像が目に入る。すでに客がいたようだ。左端のモニターにはBとアルファベットが貼られており映像は男女の交わりを映していた。妙だったのは男は覆面をしていたことだ。音はないようで映像だけが淡々と流れている。

「おつようやく反応したな。こいつが客と娘だ」「しかめた表情に篠崎が言葉を足す。

「理解はしてたさ」と返事をして田を背けない。男女の間に情がないことは一目見れば解る。女の田は虚ろで男と視線を交そうともしている。

「どうだ？ 野郎は出たか」

「ずっと見てますけどまだですね」と一人が答える。

篠崎が構成員と会話を始めると夙夜は一人の背後に立つてモニターを覗き込む。どの画面にも一人の女性が映っている。どの部屋も同じように見えた。生活用具はあるが何かがおかしい。生活感がない。また部屋の端が妙に汚かったりする。映像の端々でティッシュやらタオルが散乱していた。パソコンのほうへと田を向けると五つの動画が一斉に動いている。またモニターに田を向けると同じ映像だ。

「こいつがネット配信分で、こつちは直接見てる分だ。別角度も見てみるか？」篠崎と話していなかつたほうが夙夜へ言つた。彼は田を片時もモニターから離さない。

「いや、いい」と返事を返すと「面白いのに」と無表情のまま言った。

今のところ、男の姿は一人分で最初に見たモニター以外には女が一人でいる姿が映っているだけだ。

「なんだよ、今日は暇だな。ネットの利用率は」

「アクセス数も少ないですよ。いつもだつたらもうと多いんですけどね」

篠崎がモニターのチャンネルを弄ると面白いように部屋の角度が

変わっていく。ネットの動画配信サービスも通常利用もやはり樋上の一戻を田の当たりにした頃から下がるいつぱうらじい。

監視カメラはリビング一つでも窓側上、ベッド中央から、ベッドに平行と一部屋に三箇所設置されている。他にも玄関に風呂場とまだ代わる。部屋の隅から隅まで見渡せるようになっていた。まるでテレビのチャンネルを変えるようにしていること記号のついた画面に一人の男がやってきた。

肩幅が広く少し猫背の男は黒い覆面をしていて人相は知れない。男側のルールのひとつだろう。この動画は会員なら誰もが見れる、つまり自分の顔を晒すなどあつてはならない。

「おつ丁度いいに客だ。音まわせよ」

「わかつてますつて」

男四人であるでAV鑑賞のように画面を見る。キーボードとマウスをちょっと弄れば車中に音が漏れ出す。この部屋の画と車中に広がった音が合わさると奇妙な感覚に陥る。まるでこの車も部屋の一部のように思えてくる。侵入してきた男の歩く音も物を動かす音も全部がそこにあるように鳴る。すると夙夜以外の三人の股間が盛り上がりっていた。これからはじまる行いを理解して本能が身体を動かしている。

夙夜だけが冷静で部屋の中でセックスが行なわれても勃起しなかつた。とてもじゃないが趣味じゃないと目を逸らして車を出たくないほどだ。夙夜以外の男がモニターに釘付けになるなか一人だけ同じ映像から別のことを考えていた。

「どうやって侵入を防ぐべきか、と。

「どうやって犯人を、樋上を捕まえるか、と。

「被害者は今どうしてるんだ?」

「どっち?」と隣りにいた男が言つた。するとすぐに篠崎が「第二の被害者は病院にいる。第一は面会謝絶だ」と言つ。その声が重く

を感じられた。会わせてくれと書いて会わせてくれるよつな軟らかさは感じられなかつた。

「Eの女たちは事件の事を知つてゐるのか?」

「知らない。この女達はこの生活を続けてもらひただけだ」

まるで道具のように言い放つ。その言葉の意味はそのままだらつ。彼らにとつて箱娘にかける心などあるはずはない。モニターの中で腰を振る女は恍惚の表情などなく口蓋を閉じて歯を食いしばつている。

「言つとくが俺たちは糞だ。承知してゐる。でもな、この女どもも負けないくらいだ。例えばこのこの女。こいつは最低の尻軽だ。しかも男に貢ぐ癖がある。男を作つては貢いで借金を重ねる。いつだつたかな、うちの金貸しから金を借りたわけ。当然、利子は大きい。とてもまともな職じや稼げない」

腰を振る男がびくびくと痙攣したように震えている。一度黒てたのだろう。

「そのうち、俺らがやつてゐる風呂屋にきて何でもするからと土下座した。もう全部、俺たちの組に漫かつたわけだ」

「あの時つて源さん、風呂屋も管理してたんですね。西新宿の大変だつたでしょ」

「だがやらなきゃならなかつた。俺がこじままで来るのには頭よりも身体を使うつきやなかつたからな。でな、風呂屋で稼いだ金でも返せないよつな借金をして、拳銃逃げよつとしたわけよ。夙夜、お前ならどうする?」

「捕まえるな」

「ビンゴ。捕まえた。でもそれで済ませられる話じやない。俺たちは慈善事業やつてるんじやないからな。あの女の借金は今いくらだつたかな?」

「二千万くらいいつかね」

「箱娘の相場だ。DもEも同じさ。男の借金や自分で作った借金やらと理由は色々だが全員一致してるのは肩だつてこと」

次に「あれ？」とモニターを見ていた男が声を出す。全員がそのモニターにひきつけられたが理由は緊張感のないもの。やつてきた男は早々と事を終わらせ処理をしていたのだ。

「あ～らり。もう終わっちゃったよ。もう一発やりやいいのに」最初のモニターも事を終えていた。随分と暇になると「なあ夙夜、飯でも食いにいかないか？」と篠崎は自分の腹を押さえる。モニターのなかは事後処理をする女が一人にテレビを見る女が三人。いつ桶上がやつてくるか解らない中で緊張のない映像が映っている。車内も同じで緊張感はまるでない。篠崎の提案にのることにした。秘密基地のようなワゴン車から外へ出るとすでに外は暗くなつていた。いかにも夕食時で自然と腹が減る。

「コンクリートの上を歩き出すと「夙夜は食いたいもんとかあるのか？」とまるで友達のように話しがけてくる。「なんでもいいさ。ここひで食える飯屋は？」と返すと「まかせろ！」と胸を叩く。

さすがに人の行き交いがあり言葉はなかつた。さすがに公然の場所でできる話ではない。住宅街のなかに別の光があり看板が光つていた。夙夜としては腹に入れば何でも良かつたが篠崎はどんどんと先へ行つてしまつ。十分も歩いたあと、ようやく足が止まる。

「ここだ」

これまでに通つてきた店とは様子の違つたラーメン屋があつた。看板だけが掲げられている。客を呼び込むような媚は売らないという頑固さが良く解る店だ。戸を開くとすぐに中から反応が返つてきた。

「らつしゃい…… つて源か」

「悪かつたな。ラーメンふたつな、それとギョーザとチャーハン」「あいよ」

店の中は静かで客はいない。夕食時の飯屋の雰囲気ではなかつた。注文が通るとすぐに調理が始つた。適当な席に座ると篠崎は勝手にコップを一つ手にして水を汲んだ。カウンターのなかにいる店主は何も言わなかつた。

「いくつかしておきたい話がある

「おつなんだ？」

「まだこの仕事の報酬とか時間とかそういうことを話してなかつた。まず報酬。これは依知川組に直接行くと思う。報酬内容は千影先生が決める手はずになつてゐるから俺は知らない」

「千影先生……あああ、あの綺麗な人ね。の人何者？」

「言えない。で、時間についてだ。昼間は学校があるから行動できない。でも桶上が現れたら連絡してくれ、すぐ動く」携帯電話の番号を取り出してみせる。「基本的な活動時間は学校が終わる三時から朝までだ。なにか源さんのほうで確認しておく事は？」

「ないよ。俺は頭の情報を信じてるしあの一戦を見た。信頼はしてる。桶上にだつてそうだ。俺たちは部屋をずっと監視する。奴が現れたら連絡する。何も俺たちはお前に全部押し付けることはないぜ、ちょっと手を貸して欲しいだけさ」

「ちょっと、ね」

「へい、ラーメンお待ち」

二人のいる席ではなくカウンターに置かれる。篠崎は立ち上がりわざわざ取りに行く。店内には三人しかいないため店主がその場を離れないと運ばれない。文句の一つもなく取りに行く様は馴れているものだ。席に戻つてくると注文したラーメンの味を確認する。注文する時に何もつけずただラーメンと言つて何が出てくるのか、そういうふうと店内を見渡すとメニューえない。篠崎の手にあるラーメンはううすらとした塩の香りを運んだ。

「さあ食おうぜ」

事務所にやつてきた時との差は増すばかり。問題となつてゐる箱娘についても話す事は少なく本当に考えているのかという疑問さえ感じる。彼から仕事に取り組む姿勢があまり見えない。

ラーメンを食べ始めるとすぐに「ギョーザとチャーハンだ」と言われた席を立つ。店主は作り終えると椅子に座つて新聞を見始める。量は多く味はしつかりとしている。濃い目の塩スープは食欲を搔き立てる。二人は話も忘れて腹の中へと流し込むように食べた。

水を飲んで一服する。しかしその一服すら夙夜にとつてはもつた
いなく思えた。その思いは表情となつて顔に現れ対面に座つて
いる男の目に見えた。

「仕事に真面目に取り組んでくれるのは俺としちゃ嬉しいんだが、
もひつちよつと愛想よくつてもいいんじやないか？」

「コップから手を放して目を合わせると見かけでは想像できないほ
どの殺氣めいた意を有無を言わさず飲込まれる。

「それは箱娘の内容を知れば皆、同じような反応をするんじやない
か。それに関わりたくないっていう奴だつて出てくるだろ」

「だろうな。その点じゃお前は物分りがいいな」

「違う。割り切つてるんだ」

「俺だつてそうさ。ここだけの話、できればこの仕事を辞めるきつ
かけを探して。俺だつて割り切らなきやできねえよ。でもな、仕
事と関係なく樋上の野郎は許せねえ」

肩が震えている。怒りが爆発する寸前、火山の噴火前のように。こ
れまでの彼の行動や言動からもしかすると、と親近感が募る。仕事
で出会う人間には最低限の感情だけで当たるのが常だが夙夜はそ
うでなかつた。少年は誰にたいしても情をもつ。だからこそ仕事を達
成することができた。篠崎源一郎といて感じたのは彼がその筋の人
間ぼさがないこと。部下とのやり取りは下品などころがあつたが見
ていて悪い気はしない。

「あんたいい人なのかもな」

「そんなんじやないさ」

否定するがそれさえ謙遜に見える。

「なんで源さんがこの件でうちの事務所に来たんだ？　うちの事務
所は客を選ぶんだ。誰でも来るわけじやない。強い意志を持つた人
間がやつてくる。源さんにはそれがないように思える」

「強い意志か」と考え込むが答えらしきものは出ない。

「俺は樋上つて野郎を捕まえる。仕事だからな。でもそれ以上にないにあるつて言つなら今、聞く。俺にとつては珍しいんだ。こういふの」

「こういつのつてのは？」

「人探しとかただの人間を捕まえるつていつことさ」
目標である樋上の素性はまだ知れないがどうも魔術的な要素が絡んでいそうにない。ヤクザと元売人とのいざこぎでしかない。なぜ、千影は自分に必要だと思ったのか解らない。夙夜に与えられる仕事はすべて必要なものだけだと言うのに。

そうやつて疑問が残る中、篠崎は自分の答えをようやく口にした。「強い意志つていうのがあるんなら多分、俺の感情なんだろうな。簡単に言えば復讐だ。第一の被害者はな、俺の大事な奴だったんだ。今もそうさ。あの子はこっちの世界にいちゃいけなかつたんだ。そいつをあの野郎は壊しやがつた。今も入院生活だ、箱娘がどうとかつていうのは正直俺はどうでもいいんだ」

「そうか」

「そうだ」

しばらく互いの目をじつと見る。一人、会話の外でちよつと覗く店長が一人の関係を示唆したがどうにも只事ではない目をしていた。そうやつているうちに携帯電話のバイブが夙夜の腰で震える。震動音がその場に区切りを作ったのか「なら、全力で協力する」と口にした。

「仕事が終わるまで下種と下種の追いかけっこでよかつたんだ。その下種同時の争いを食い物にする下種がもう一匹やつてきた。それでよかつたんだ。でも源さんはそうじやない。仕事を辞めるきつかけは作れないだろうけど樋上は捕まえてやる。絶対にだ」

「俺も同じさ、おっさん、勘定だ」

「あいよ」とばかりに店長の元へと行く。夙夜が自分の分を払おうとすると篠崎は止めた。勘定を払つている間に携帯電話を確かめる。

『ハロハロ～オレ、トウマ。源ちゃんと一緒なんだ～へえ～。今、近くのコンビニにいるから寄んなよ』

あまりにも軽い内容で綴られている文章だったが現状を知つてゐるよつた内容であることに間違いない。差出人は荒垣トウマとなつてゐる。勘定を終えると外に出ると「この近くにコンビニがある？」と聴いた。

「コンビニか……あつちに一件あるな。なにか買つのか？ だつたら」

「いや、一人で行く。先に戻つてて」「わかつた」

篠崎の言葉を遮つて一人歩き出す。後ろからやつてくる気配はなく、彼は言われたとおり車へと戻つていく。言われたとおりにすぐコンビニは見つかった。駐車場もない小さな店だったが路肩に不自然な車が一台停まつていて。篠崎たちの車が黒塗りだったのに対しこちらは白一色で六人乗りだつた。この仕事をはじめるよりも少し前から見る憶えのある車だ。この車があるとこつことはコンビニのなかに踏みに入る。

缶ジュースやペットボトルの並ぶ棚の前にやつてくると連中の一人が横に立ち「へえヤクザに力貸すんだ～」と声をかけてきた。いや、実際には独り言に近い。知り合つてからどれだけ時間が経つたか解らないほどの男、荒垣トウマである。派遣会社の社員で朝から晩まで働いているはずの男。

「源ちゃんつてなに？」

「篠崎源一郎だから源ちゃん」

田もくれずに返事はする。一人の話に誰も耳を持たなかつた。金色の髪に細く高い背のトウマは見慣れたスーツ姿で隣りに立つ。二人の男に接点など誰があると思うのか解らないほどである。彼を抜いた連中は周りを囲むように他の客を立ち寄せ付けようとした。

「なるほど、で、いつもは新宿駅で遊んでる連中連れてなにやつてた。

んの？」「

「夙夜の監視」

「マジ？」「

「マジよ。うちちらの鴉がヤクザとつるむなんてちよつとジホラシー超えちやうかも」

「俺はお前達の仲間じゃないよ。俺はいつだって中立だ。今回はたまたま依頼人がヤクザだったってだけ」

「ふーん。ま、いいけどね。でもさ、依知川には気をつけときなよ目と目の間、眉間より少し下に人差し指を向けられる。

「やつばなにがあるのか？」「

「あるよ。麻薬から人身売買までたっぷりとね。俺らが売人潰しやつてるから最近じゃ上がりが少ないだろ？けど」

「樋上が売人を辞めたというのが三年前。トウマが回りの連中を引き連れだしたのは一度その頃。繋がりはあるのかもしれない。

「いろいろとあるみたいだけど今回はちょっと違う」

「知ってる。樋上でしょ。うちの会社に登録してるから知ってるよ。居場所わかつたら俺にも教えてね

「わかった。じゃあ行くわ」

教えるつもりはなかつた。自分は中立であり今回は依頼人が篠崎だつたにすぎない。何より自分は情報屋でもないリークなどできるはずもない。依頼がなければトウマの側につくが今回はそういうかない。

「あーい」とふざけた返事を最後に別れると適当に缶珈琲をつまんでレジへと向かつた。連中の誰もが夙夜に道を譲つて通した。支払いを済ませると篠崎達の待つ車へと戻る。すっかり暗くなつた空には月が姿を見せていた。

車に戻る道の中、まだ箱娘について知らない情報がある。またビルに囲まれた駐車場にやつてくるとドアを二度叩く。ドアを開けたのは篠崎だった。

「別にノックとかはしなくていいぞ」

「ちょっと聞きたいことがある。犯人の現れた時間は？」

「いつだつたかな。おい、あの時の映像をだしてくれ」

モニターを見ていた一人が足元からノートパソコンを取り出して起動させる。十インチ程度のモニターだつたが見る分には充分だつた。すぐに問題の動画が再生される。樋上が侵入する少し前からだつた動画のなかで壁に掛けられた時計は四時を指している。窓の外から差し込む橙色の光から夕方だとわかる。

動画は再生されつづけ、二番目の被害者が叫び声をあげる。聴いていられなくなり音量を絞る。最小限の音と惨酷な映像はドアを叩く音と警察のものとみられる声がするまで続いた。動画の最後では樋上がカメラ目線で中指を立てて窓から去っている。やはり魔術的な要素はない。

「あと、この部屋の場所を教えてくれないか？ 一度、現場になる場所を見ておきたい」

「見ておきたいって今から全部回つたら一時間は掛かるぞ」

「それは車だつたらだろ」

「わかった。ちょっと待つてろ」

篠崎は黒皮のバッグを引きずり出すとファイルから一枚の用紙を取り出した。用紙を裏返して部下の前にあつたボールペンを取ると何か記入していく。書き終わると「ほらよ」と差し出す。受けとると数字が並び「俺の携帯番号だ」と告げた。裏返すと新宿駅を上にして現在の位置を中心とした地図が載っている。地図の中にはAからEまでのアルファベットが書かれている。モニターにはAはなくBからEまでのアルファベットが張られていた。Aの場所は第二現場だつた。

「コピーは？」

「ある。そいつは持つてつていい」

「わかつた」と懷にしまう。今夜、やるべきことは決まった。

「俺はこれから現場を回つてくる。なにか動きがあつたら連絡をくれ」

「おう」「うう

車から出るとビルとの間にある一メートルもの壁を一蹴する。次はビルの外壁に付けられた排水管に足を引っ掛けるようにして跳ぶ。夙夜の身体は重力や筋力といった常識から外れたように夜闇に紛れていく。三棟のビルを順に使って屋上へと登つていいく様を見上げて篠崎は少年にこれまでにないほどの期待をした。

すでに太陽は落ちている。暗くなつた夜に夙夜はすぐに溶け込んだ。住宅の屋根と電信柱、足場になるものは何でも利用して東京の町を駆け抜けしていく。

夜の町はどの家庭も光を放っている。道端から見れば外灯と民家の光が幾分か消えてしまう。だが、空から見下ろせば昼間と変わらないと言えるほどの光が地上から溢れている事だろう。夙夜の身体は鳥の如く民家の上を翻る。一飛び五メートルはあろうかという跳躍で舞うとすぐに夜へと舞い上がる。

東堂夙夜が仕事をはじめてからしばらく経った頃の事、新宿を中心に戥が広まつた。噂とは一匹の黒い影が頭上を飛ぶというもの。争い事が起きるとやつてきては争つてゐる両者、または関係者一同を倒してしまつ。誰もその影の素性を知る者はおらず憶えもない。時季が変わる頃、影は黒い飛行体といつこともあつて鴉と呼ばれるようになつてゐた。

夙夜が空を飛ぶとき、必ずマントのように大きく広がる羽織を着る。これは魔術師の能力を高める道具の一つで鳥にとつて羽の役目を担つて匹敵する。厚みはなく半透明のような布はその先まで見通すことができるほど。羽織は夙夜が行動範囲を広げるには必要不可欠な道具である。鴉といつ名前の由来としても活躍した。羽織が広がつた時にできる影はまるで鳥の羽のようでもあつたからだ。

周りの民家を眼下に収める高層ビルの屋上へやつてきた時、篠崎より渡された箱娘の位置を示す地図を手前に広げる。手にした用紙に載つているアルファベットはこを中心に輪を描いてゐる。西新宿駅からそれほど離れていなかつた。車で移動した時、やたらと時間が掛かつたように思えたのは入り組んだ道を走つていたためである。アルファベットの文字と間に生える建築物の高低差と道路の具合を確かめる。

樋上が次に狙うのはどこか。逃走経路を作りやすい場所を選ぶのは確かだ。地図を見ればわかるがアルファベットはばらばらに配置されている。一箇所に集まつてこそいれば見つけるのは容易いが現

場を捜すのも困難。地図上で見る画では計れない現実を見ようと地図をします。

まず、一番遠くなるBへと向かつ。西南方面へと向かつて移動していくと目標の建物が見えた。足場にしている民家の赤い屋根からはとても飛び移れない高さである。用紙には十一階の五号室と書かれている。隣りの建物は高さが半分もない。窓から逃げるのは事実上不可能だ。かといって逃げ道がないわけでもない。また玄関はカード認証によつて部外者は入れない。外の壁を見ると足場になりそうなパイプと管が何本か上から続いている。よしあれだ、と助走無しに飛び壁と止め具に足をかけて登つていぐ。さらには一階以降にあるベランダの手すりに足をかけて一階の廊下に踊り出た。

一度でも屋内に入つてしまえば移動する事は容易い。一旦、羽織をしまつてエレベーターまで行く。非常用階段もあるが目的の部屋は十一階、エレベーターを使うほうがいい。十一階に着くと一階とは違う妙な感覚が夙夜の肌を触つた。まるでざらざらしたやすりで擦つたような感触がする。

目的の五号室の前にくると正体がはつきりとする。この部屋のなから感じるオーラとでも言つべき負の感情が肌に伝わつてきいた。夙夜は目的の部屋の前に來ても入ることはなかつた。立ち止まらずに歩いていく。前方から一人の男がやつてきていたからだ。男は別におかしな所はない。平凡なサラリーマン風で夙夜とは目を合わせない。着ているスーツは別段高額な物ではなかつたし袖口から覗く腕時計もブランド物ではなかつた。銀色は頭上の照明に反射して眩しかつたがそれだけでしかない。男とすれ違う時、いくらか興奮しているのか息が荒かつた。男の足音がするなかでケータイを取り出した。篠崎の番号は地図の裏に載つている。男の靴音が途絶えドアの動く音がした直後にかける。

「俺だ、どうした?」と竪つた声が聴こえる。まだ車中にいるようだつた。

「今、B部屋の近くにいる。一人男が入つたか?」

「なに？ Bだと」

ドアの閉まる音がした。振り返つて見ると男の姿は消えている。

「ああ、一人入ってきたな。スーツだ」

どうやら場所はあつていいようだ。地図に狂いはないようだ。

「しかし驚きだな。まだ十分ほどしか経つてないぞ、車で移動したつて……」

「普通の感覚は捨ててくれ。だからうちの事務所に来たんだろ？」

「そうだったな」

軽く笑う篠崎の声を聴いて電源を切つた。地図の確認が目的だつたため話す事はない。

このままB部屋を監視するのもいいと考えたがやることはある。再び羽織を取り出すと夙夜は地上に向かって飛び降りた。着地の瞬間にまた飛びあがる。他の場所も見ておきたいのだ。次にD部屋へと移動する。東側へと進んで場所の確認したのちにEも確認する。E部屋のすぐ近くに一度見たA部屋もあつたが行く必要はなかつた。A部屋の周囲は頭に入つている。

箱娘の部屋はAからEの五部屋。地図に書かれている分である。全てを回り終えたことになる。が、もう一部屋無駄だと解つていても見ておきたい場所がある。

樋上の部屋だ。犯人である樋上太一の住所も把握している。少しの間しか見ていないが文字は覚えている。今いる場所からなら十分も掛からない。携帯電話を開いて時間を見るとまだ夜の九時すぎ。十分な時間がある。休む間もなくまた空へと舞う。樋上の部屋は新宿から離れていたが電車の屋根に乗つてしまえばすぐに着く。空を飛ぶにも体力は消耗する。少しの間だけ休むつもりで発進した電車に飛び乗つた。

尻の下で轟音が響く。さしていい気分じやないなかで電話が鳴つた。樋上が現れたかと慌てて取り出すと千影だつた。

「ぼうや、今夜は十時までに事務所へ戻つて来い

「何があつたんですか？」

「この件には魔術式は必要ないと言つてゐる。少しばかり常人よりも高い身体能力があれば解決するはずよ。時を間違えなければいいだけ」

「了解です」と言つて通話を切る。

表示された待ち受け画面にはメールの着信が一件表示されている。夙夜のメールアドレスは自分の知りもしない人物にまで渡つてゐる。中学三年になり本格的に仕事をするようになつた時、情報は命だと教えられた。その人物からのメールだった

荒垣トウマとの出会いだ。篠崎と別れコンビニで会つた男とその仲間。彼らからの情報は欠かせない。トウマは父親の派遣会社の働く副社長。年齢はまだ二十代前半で高卒。夙夜が新宿を中心に動くために必要な仲間でもある。二十代と十代の情報なら彼を凌ぐ人物は相違ないだろ。トウマは派遣会社で働く傍ら新宿周辺の自警団を動かすトップもしている。彼の派遣会社に登録している者達の大半が組織の一員でもあることから街の情報は彼の元に集まると言つわけだ。

そんなトウマがクラスメイトの白瀬トオルの実の兄だと知つたのはつい最近の事。

内容はさつきコンビニで別れたときとほとんど同じで依知川に気をつけるというものだった。もう一つのメールを開くと今度は後藤とあつた。

『明日の放課後、いつものファミレスに来い』

そう書かれていた。こつちもこつちだ。荒垣トウマが二十代後半までの情報源なら後藤はその上をいく。後藤は新宿署のベテラン刑事で千影とも交流がある。その付き合いは夙夜よりも長いと聞く。仕事をし始めたとき色々とお世話になつた人もあるがこうやって直接メールを送つてくるようなことは滅多にない。

つまり依知川組と一緒にいることがばれてゐる可能性はある。『わかつた』と返信して携帯電話をしまつ。

そういうしてゐる内に電車が目的の駅に近付いていた。さすがに

駅の中に入つてしまつと見つかるため路上へと飛び出る。動いていた電車からのスピードで身体は勢いが増している。そのまま駆けて跳んでを繰り返し金融会社の看板を足蹴にする。ビルからかけられている看板は全て足場になつて屋上へと出る。人ごみを眼下にして無人の暗い世界を歩き行く。

樋上の住んでいたマンションへとたどり着くにはゴミで出来上がつたような臭い道を進むしかなかつた。壁に亀裂の入つた随分ボロボロで小屋のようなマンションだつた。住所どおりならここで合つてゐる。夙夜から見れば豚小屋のほうがマシだつた。隣りの部屋の玄関が異様に近い。おそらく壁は薄いだらう。大声を出せば筒抜けになる。金属のぶつかる音でさえきつと聽こえる。木でできた玄関扉には厚紙に田中と書いて取り付けられている。表札なんだろう。樋上が姿を消したのは二年前だ。新しい人間が住んでいても間違はない。戸口の隣には窓がついている。中からの光が漏れていて田中という男が生活をしているのが窺えた。

これで一応の現場となるべき場所はすべてになる。樋上はBからE部屋の四部屋のうちどこかに出現する。ビデオの様子から現れないことはない。何より洗敷事務所にやつてきた時点で行動を起こすことは間違いない。事務所の結界は非常に優秀である。時刻は九時半になる。千影は十時と言つていた。時間ぎりぎりまで仕事をするのがベターだ。夙夜は再び西新宿駅方面と飛び事務所から一番近いEの部屋を監視するため再び電車の屋根に乗つた。

今からなら十分ほど見られる。戻ってきたE部屋の玄関を目にするには最高の位置はどこかと見渡すと一件のマンションがあつた。丁度正面に位置していて高さも程よい。屋上に登ると夜風を感じながら見ることにする。するとまたしてもケータイが鳴つた。夙夜の携帯電話は深夜にならない限り良く鳴る。大半はメールの着信だが親しい人物からは電話となる。

「トウマだ」と電源を入れるなり聽こえた。「解つてるよ」と着信中に見ていたことを告げるとふふつと笑つていつもの調子はずれな

声になる。

「樋上のことだけども、もし見つけたら一十万分ぶんぶんしてくれない」

「なんだよ。追剥ぎでもしろってか」

「うん、そう。いつの子が被害にあつてんのよ。よろびくね~」

一方的な電話は一方的に切れる。返事もしていないというのに押し付けるようにして切れる。切れた電話を見て二十万分を考えてみる。しかし樋上が持つている可能性は低い。しかし頭の端に入れておくのは忘れない。貸しを作つておくのはいいことだ。とくに荒垣トウマはその点において最上の人物である。たかが一十万でも一百万の価値を引き出すことができる。

十時頃になると篠崎のほうから連絡がかかってきた。

「どうした?」

「今どこにいるんだ?」

「E部屋の玄関が見える場所」

「そうか、今日はもう上がつてくれていいぞ。初日だしな。なにか動きがあつたらこっちから連絡を入れる」

「そうか。わかった」

初日だからなどという事は夙夜にとつてどうでもよかつたが確証のない相手にじつとしているのも馬鹿馬鹿しい。なにより千影から十時に戻れといつ命令もある。断りを入れる手間が省けたと思って現場を後にした。

事務所に戻るなり千影が迫ってきた。彼女の色香に抵抗など一切できずに豊満な胸と尻を味わう。夙夜が中学三年になつた時、千影はこれから必ず必要になるといつて少年の性へ干渉した。人間が自分を見失う要因は数あれどもつともこの年頃にあるのは性だと彼女は言い切つた。

恋愛や性への関心が人の心を狂わす。

夙夜にとって洗敷千影の言う事は絶対である。少年は必要なんだ

と思つ反面、好奇心に包まれながら彼女と一夜を共にした。初めて味わう女の感触に酔いしれぬよう初めての夜は簡素なものだつた。かわりに四月からの一ヶ月あまり同じ歳の者達が絶対に味わえないような快樂を彼女から何度も得る。彼女とのひと時はまるで夢のようであつた。

「今回の事件つて」

肌を重ねながら夙夜は天井を見て言つた。千影の息をする音が耳元に鳴る。細くも鍛えた筋肉が彼女の枕になつていた。

「なに？」

赤ワインの香りを孕んだ吐息で千影は聴いた。

「何で受けたんです？」

「何でつて……必要だからよ。いつも言つてるでしょ、ぼつやに必要な授業としてこの事務所を作つたのよ。必要でないものは寄せ付けないように結界を張つてるのもそのため」

洗敷事務所が出来たのは彼女が夙夜を引き取つた後である。それまでは事務所の入つたビルはひとつテナントも出でていない崩壊寸前だつた。千影はそんなビルの一階を買い取り看板を出した。やがて夙夜が中学に入り力行使できるようになつたあと仕事を開始。すべては東堂夙夜の為だ。

「それはわかつてゐんですけど」

「気に入らない？ でもね、世の中きれい事ばかりじゃないって事を知つておくべきよ。でないと人間そのものに絶望するわ」

天井は光を失つた蛍光灯が二本並んでいる。目蓋を閉じると昼間の一幕が映る。車内に設置されたモニターだ。画面の中には箱娘と呼ばれる女性が籠の中の鳥のように生活し無残にも犯されていた。入れ替わりやつてくる男達とインターネットで見ている会員たちがいる。

「解つてゐるんです」と自分に言い聞かせるよつた言葉を吐いた。

言葉を吐いて彼女の胸に顔をうづめた。千影はまるで母親のように夙夜の後頭部に手を回して口元を緩めた。まだ少年は少年のまま

だつ
た。

夙夜は朝早く起きると朝陽が昇るよりも早くに事務所を飛び出し実家へと戻った。千影との熱い夜を過ごしたというのに身体は冷えていた。実家に帰ると寝てているであつメイドの北岡めぐみを起こそないよう自分の中屋へと進んでいく。東堂家は新宿から離れており東京都の都市部からも随分と遠くにある。マンションがずらりと並ぶ風景はなく東堂家も周りの民家も分厚い壁と門を設置していた。

夙夜の部屋は門をくぐり小さな池のある庭を歩き縁側を歩いてようやくたどり着く。洋式のドアはなく襖を開けるとすぐに部屋となる。いくら放課後が自由でもまだ中学校に通うことになっている。煩わしいと思いながらも支度を済ませる。日常を送るため昼間は学校生活に向かう。

洗敷事務所で魔術師としての生活と昼間の学生生活はすでに身体に染み付いていた。だがこの生活に慣れるには苦労がなかつたわけではない。夙夜には入院生活が一年ありその間に同じ歳の友人たちはすでに高校へと進学している。学生時代の一歳差は大きな壁を作り同じクラスや同級生に馴染む事は出来なかつた。唯一といつてもいい話し相手は水上恭司くらいだつた。恭司もまた飛びぬけた養子と性格のため孤立していた。

帰りのホームルームが終わると誰よりも早く教室を抜け出す。同級生たちの中で彼を目で追つたのは数人の女子くらいだつた。夙夜も恭司と同じとはいひながら女子の気を惹くには十分すぎるほど顔がいい。加えて成績は良かつたし運動神経は学校でトップ。モテないわけがない。それでも学生生活には興味がなくすぐにメールで指定されたファミレスへと向かう。

昨夜後藤から送られてきたメールをもう一度呼みながら歩く。学校からファミレスまでは歩いて十分程度かかる。ファミレスは新宿

駅に繋がっている大通りにでる手前にある。まだ人の数は少なく他の言葉あまり聞こえない。そんな通りには人目を惹き付ける建物は少なくファミレスでもちょっと派手ならよく見える。目的のファミレスは一階建ての建物で一階は駐車場になっている。夙夜は入り口に続く階段よりも先に駐車場へと目を向けた。暗がりで目を凝らすと停まっている車のなかに後藤の車があつた。黒のセダンでもう中にいると示していた。彼の到着が先だつた。夙夜はファミレスの階段を登つていく。

「いらっしゃいませ~」

やたらと甲高い元気のいい挨拶と共に店員が駆け寄つてくる。ピンクのミニスカート姿で太ももは下着が見える寸前だつた。来店した男の半数は虜にしそうな微笑みで「一名様ですか~？」と語尾を延ばして聞いてくる。しかし夙夜の心は揺れることなく店員に待つたをかけて店内の席を指差して「相席ね」といつた。指さす席にはとても学生の関係者とは見えない中年が座つており夙夜を睨むような鋭い眼光で見ていた。どう見ても機嫌がいい雰囲気は無い。しかもその隣には無表情でいるスーツの女が座つている。夙夜はその女性を見たことはなかつた。

「よう」

「俺、オレンジね」と店員に言つと「はーい~」と元気よく手を上げて奥へと向かつて行つた。

「なんだ、ジュースかよ。子供っぽいの頼むんだな」といつて珈琲を飲むのが後藤。

謎の女性の前にはこの店の特別メニューである「テラックスストロベリーパフェ」が置かれている。高さは一十五センチほどあり大人でも一人で食べるには無理のありそうな糖分の塊だ。子供っぽいものといえばこの女性もそうだろうと思つたが口にはしなかつた。

その座つている女性について紹介する気がないのか目もくれずに話をする。

「ここのは別格なの、長年通つてゐるんだから一回ぐらい飲めば」

「俺は柑橘類だめなんだよ」

「へえ～、で、何の用？」

店員がオレンジジュースを持つてくる。一口、口に含むと甘酸つぱいオレンジの味が広がる。

「何のつて、もう解つてんだろ。依知川の件だ。お前さんがあの組の奴と一緒にいたつて報告があるんだ」

「一緒にいたらなにか問題が？ 個人の付き合いに警察は首を突っ込むの？」

「しないが問題はあるよ。お前はこの街にとっちゃ必要な奴だ」

恥ずかしい台詞を何気に言つ。後藤は夙夜に対して回りくどい説明はしない。事実を在りのままに伝える事が多い。それも一人の間柄が立場同士ではないからだ。後藤と知合つきつかけを作つたのは誰であろう千影である。事務所を設立した頃から世話になつてゐる。夙夜が鴉という名前を広めるにも一躍買つてゐる。

「ありがたいけどそれはあんたにとつてだろ？ ヤクザでも自警団でもないからな。それより聴きたいんだけどさ。その可愛い人は誰？」

女は眼前のストロベリーパフェと真剣勝負でもするかのよう手にしたスプーンをどこから差し込もうかと悩んでいた。完成されたパフェはどこから食べても崩れてしまつ。なら好きなところから食べればいいのに彼女は真剣に悩んでいた。悩みすぎて夙夜が出したバスに気づくのが遅れた。

そして……「か、かわいいだと！」と店内に響き渡るよう叫んだ。今まで表情を変えなかつた女がテーブルを叩いて身を乗り出す。顔は真つ赤にしてポニー テールも大きく揺れた。

「いや可愛いと思うよ。特別仕様のストロベリーパフェ食べてくらいいだしな」

「まだ食べてない！ というよりこれは後藤さんが頼んだんです！」

「後藤さん、なんなんです。どうしても会わせたいって言つから来たのにこんな子供だし。こんな事なら」

身を乗り出したまま後藤へいづ。そんな彼女の肩を持つてさげる。「こつちは楠木朱美。今月からつちの署に配属になった刑事さんだ。お前に会わせておく必要があるって思ったのさ。こつ……腕はまだまだなのにつこにでも突っ込んでいくんでな、つこかでお前さんと衝突しそうだつたから先にと思つたわけだ」

「猪みみたいに言わないでください。それにそんな必要がつこにあるんです？ 子供ですよ」

確かにその通り。学生服を着てるからそのままでしか見えない。「見た目はな。今日は制服着てるからもつともだ。だけどな、言つたる、この街には中立に動く奴が何人もいるつて」

「はい。数年前から動いてるつて確か……鴉つて噂ですね」

自分で言つて夙夜を見る。夙夜と後藤の顔を何度か交互に見てはつとした。

「嘘でしょ」と大きく叫ぶと店の中だと思い出し周囲の視線に恥ずかしくなる。

「本当だよ。中学の制服着てるが実際の年齢は一つかれてる」
本来なら高校一年。

「顔見せだけなのか？ なら」

「まあちょっと待て。お前が今追つてるのはなんだ？」

「言えるかよ」

「じゃあこれだけ。俺たち警察は依知川の野郎をこつらでぶつ壊しておきたい。けどな、それには下つ端を捕まえる程度じゃ無理だ、解るな」

「ああ」

言われなくたつてわかつてるとばかりにぶつきらぼうな返事で答えると席を立つ。オレンジジュースを一気に飲み干す。

「いきなり組織の中核に潜り込むようなことは出来ないだろつが何かあつた場合は俺にも囁ませろよ」

何も言わずにファミレスを去つていく。その後姿をじつと見つめたのは楠木だつた。後藤はといふと去つていく夙夜に思い残しはな

いよいよ新着メニューに目を通していった。

後藤と別れた後、急いで事務所へ向かつ。着替えも道具も全部、事務所に置きっぱなしになつていて、実家に戻るとき手にしていた物はない。いつもなら学校から一度帰宅するが今日はそつする時間がなかつた。

荷物は事務所に預けることにしてさつと歩く。東京都庁の前を通りホテルを左手に曲がれば平日の昼間なのにどこからやつてきたのか解らない通行人でいっぱいだつた。事務所までそつは離れていない。時間にして十五分もあれば余裕がある。が、夙夜は人ごみが大の苦手だつた。正確には人ごみというより他人のペースに混ざる事が難しい。足の動きが違ひすぎてどうしてもあわせられない。急いでいるわけではないが動きの速さが決定的に違つていて、

事務所までの道が一本になると夙夜は一本裏手側へ姿を消すように入る。普通は誰も通らないビルの側面、裏側が並ぶ路地を進む。人の姿などあるはずもなく一息吸うだけでむせ返るほどの臭気が蔓延してゐる。もちろん路地を歩くことはない。そのまま路地を突き抜けて道に出る。こちらの道も少し迂回する形になるが新宿駅へと向かつて伸びている。夙夜はいつもこの道を使つていて、

洗敷事務所は新宿駅のすぐ近くに存在する。さつきまでの通りよりも大きく開けた道は車の量が増えていて、逆に人間の数は少なく人目を惹くものも飲食店ではなく商社ビルとなる。誰もが忙しく歩いてゐる。

駅方面へと歩くなかで工事現場に差し当たつた。こんな大通りで工事かと現場を見上げる。かなり高い場所まで鉄骨は組み上げられている。工事は随分と時間が経つていて、夙夜は知らなかつた。

道路には黄色の重機が三台停まつていて歩行者は全員左手側へと促されている。道は完全とはいかずとも真直ぐに歩くことが出来なかつた。夙夜も同じように他と一緒にされてまた一本裏へと入る。

今度は路地ではなく単なる迂回だつたが工事現場には小塚建設と書かれた垂れ幕が空から掲げられている。中は見えないがとても大きなビルが建つことは予測できる。

「よひ」「よひ」

いつの間にか見上げて足が止まつていた。そこへ前方から知った顔がやつてきた。白瀬トオルだ。荒垣トウマの弟もある。苗字が違う理由は両親が離婚したためトウマは父方、トオルは母方にいる。トオルはすでに私服に着替えて涼しそうな姿をしていた。

「よひ、トオル」

「そつちは学校終わつたばかり、なんか長くないか?」

「違うよ。後藤のおっさんに呼び出されたんだ。どこで知つたか俺がある奴らと一緒に聞きつけてやつてきやがつた」

言ひとトオルは肩を揺らして笑い上げた。トオルも後藤は知つていて面倒を見てもらつていい。夙夜とは違うがトオルもそこそこの素行が悪い。喧嘩つぱやく売られた喧嘩は全部買い取つていて。しかも負けはない。一応ボクシングのプロを目指していただけあって素人に負ける要素はない。タイマンなら尚の事。その喧嘩の後始末を後藤が手を回してなんとかという手はずになつていて。

「兄貴から聴いたんだけどヤクザとつるんぢるんだつて?」

「お前もか」

情報の出所はなんとなしに判明する。おそらくトウマが各所で必要な人物に言い回つたのだ。行動を押さえるため周りから固めていれる。

「今回もただの仕事さ。他意はないんだ」

「面倒そうだな。俺はそういう面倒くさいのは簡便だわ」

一人して笑つて手を挙げるとまた自分の進む方向へと歩きだした。事務所に着くと千影と挨拶を交して着替えと荷物を持って箱娘の地図に載つてている場所をまた巡るために事務所を後にする。

実家、学校、事務所、BからEの部屋、監視をする車、この五つの箇所を巡る生活が続くことになる。白瀬トオルの言ひ通り面倒く

さいことこの上ない生活だつた。自分の時間などない監視の日々は過ぎやがて三日が経つた。

犯人である樋上が次に現れるのはいつかと皆が待っていた。夙夜は参加してから三日しか経っていないが組の連中や篠崎はすでに長い日々が経つていて誰も彼もが苛立つていた。最初の頃は仲良くなつていた連中の間に亀裂が入つたように口を利かなくなり無言でモニターを見つめる時間が長くなつていく。

彼らの仕事は変わらなかつたがいつやつてくるとも知れぬ樋上の存在がストレスを肥大化させていく。一台の車のなかでは息苦しくなり最終的には誰か一人がいればいいだうとばかりに交代していた。

四日目、すでに疲労は限界に達していた。依知川組の連中は以下の隈をパンダのそれと同じように濃くして座つている。目前のモニターには男女の交わりが絶えず映し出されていたが股間が反応する事はなくただの映像になつていた。彼らが求めたのは直球な肉欲の形ではなく純粋な恋愛劇だつた。

監視を続ける車へとやつてきた夙夜はその光景を見て直感した。やつが動く。

洗敷事務所にやつてくる仕事はそう長くは続かない。最長二週間程度で結末を知ることになつていて。もし夙夜の能力が足りなければ、ミスをしていれば酷い惨劇で終わるだろ。だが、これまで少年は仕事を疎かにした事はなく直向に行なつてきた。成果は出ている。今のところ、達成できなかつた仕事は存在しない。

周りの男たちが苛立つと頭の回転が鈍る。篠崎の様子も出会つた頃とは違ひ静かになつていた。夙夜の人間的なところではないもつとシンプルな生物としての感覚が肌を貫いた。モニターのなかで繰り返される交わりから目を遠ざけて再び夜空へと飛び立つた。今日もこの街は冷たい風が吹いている。足元で走る車や歩く人を見る。そこに樋上の姿はない。奴がどこに現れるのか予想は出来ない。となれば待機する場所はどの部屋にも最短の距離で迎える場所になる。

夙夜が陣取ったのはどの部屋でもなく箱娘の部屋から線を引き点となるビルだった。

屋上の貯水タンクの上で田蓋を閉じる。肌に纏わりつく風の中から、ただ連絡を待つ。

今夜必ず奴が現れる。その確信が夙夜をその場に固定し続けた。

合図があつたのは深夜〇時ちょうど。

携帯電話が震えて鳴るとすぐに手を伸ばして耳に当てる。

「夙夜！ やろうが出やがつた！」

怒りに震えた声が耳を劈く。電話の向こうでかすかにエンジン音が響いている。監視の役目を担っていた車が動いている。

「焦るな、部屋はどこだ」

「D！ Dだ！ 野郎、玄関から入り込んできやがつた。こんな事なら電子ロックでも付ければよかつたんだ」

箱娘の部屋に入る方法はこれといってない。普通にドアを開けばそこは天国。それが箱娘である。

D部屋も他と同じくらい侵入するにも撤退するにも問題のある部屋。あえて選んだ理由はやはり自信か。

「それで樋上はまだ部屋にいるのか？」

「ああ。こつちはもう着く。夙夜、お前も来てくれ

「言われなくともな」

電話を切つて風の流れに混ざる。後押しされるように飛ぶ。D部屋まで掛かる時間は約五分。監視を続けていた篠崎たちのほうが早く着くだろうが問題はそこからだ。彼らが捕まえられればそこでこの仕事が終わるがそとはならないだろう。彼らが走つて捕まえられるなら自分の存在はここにない。暗い空の中で目を凝らせばD部屋のあるマンションが見えてくる。

かすかに声がした。

夜の住宅には相応しくない怒号は確かにマンションに響き渡り住民を震え上がらせている。夙夜は声の通る側、つまりはD部屋の窓

側が見える位置で止まる。民家の屋根だつたが仕方がない。D部屋は上、首を曲げて見上げなければならないが他に見を置く場所がないため屋根に伏せて待つた。

光の消えていた部屋がぱらぱらと灯りをつけはじめた。おそらく篠崎はまだ叫んでいた。隣りは愚か上下の階の部屋も電気をつけていく。しかしD部屋の様子はまだない。まだか、まだかと思つてみると窓に人影が映る。夜の中でも一点の光に向けられる視力はとても強い。

窓が割れると一人の男が落ちていく。はつとしたが落下ではなく男は自ら飛び降りたと判断がついた。その姿がまるで猿のように器用で驚く。マンションの外には小さいながらもベランダがある。夙夜がそうしたように男もベランダに足を掛けて身体を地上へ近づけていく。速さは窮地に立たされた者の動きではなく予測していた行動だった。いっぽう、D部屋のベランダでは篠崎が降りていく男を怒鳴っていた。そしてその手に携帯電話が握られたことを夙夜の目は捉えていた。

「夙夜が、まだ着かないのか？」

着信はバイブル音さえ鳴らさない速度で受け取つた。民家の屋根から見る男の敗走シーンはとても躍動的でスポーツマンの活躍にも似ていた。

「いや、もう追わなくていい。俺に任せろ」

「お、おうー、そうさせてもらつ」

男が、樋上が走る。どこへ向かっているというのか。駅までそう遠くない。電車に乗られると厄介だ。夙夜は一瞬にして駆け出し樋上を追い抜いた。

傑作だとばかりに顔が引きつって笑つていて。依知川の部下である篠崎源一郎が部屋にやつてきた時、すでに箱娘はその身体に刃を晒していた。女は叫び声を上げ顔を真つ青にしたが助ける義理はなく身体を無残にも切りつけられた。今回はどんな興奮が得られるか

と胸を躍らせていた樋上は自身の求める快樂を確かな形で得ていた。

「はあつ……はあつ……へへッ逃げ切つたか。あとは車に……」

駅が見えたとき樋上は勝利を確信した。誰も追つてこない道には点々とした外灯が並びすでにマンションで聴いたあの怒号もない。すべてが予定通りに進んでいたのだ。

「待てよ」

そんな樋上の前に夙夜は現れた。すでに駅の入り口に立つていた。さらには他の人間は消えていた。車の音も電車の近付いてくる音も消失している。

「あんた、てめー。邪魔だ、どけ」

しかし樋上にはそんな周りの状況が掴めていない。気がそこまで回つていらない。夙夜にとつて都合は良かつた。夙夜はゆっくりと近付き樋上を正面から見る。写真で見るよりも衰弱しているが心は見てとれるぐらいに表面に浮出している。

「そいつは無理だ。あんたもさ、もう逃げるのはやめにしたらどうだよ」

「ガキが……ぶつ殺してやる!」

樋上が走り出す。無作為に突つ込んできたように見えたが実は違う。近付くその手には長さ十センチ程度だが銀色に光るナイフがあつた。誰かが逃走を邪魔する恐れはあつた。箱娘を傷つけたナイフは手にしたままだった。

しかし逃げる必要はない。突進してくる狂気に引く事はない。

ようやくこの仕事が終わるのだ。なにより少しあは戦いといつものを愉しみたかった。ナイフが横一線になぎ払われる。銀色の光が夙夜の首があつた場所を切る。だがそこに夙夜はいない。少年の目はナイフの全てを見切つていた。対面した樋上の動きはやはり人間そのものであり異常な能力は見られない。

人間が持つ身体能力では夙夜を捉える事は出来ない。魔術師として培つた才能と能力。それは身体能力の上昇を促し五感から得る感覚までもはるかに向上させる。ナイフは止まつたように見えていた。

意識を集中すればコマ送りのようになる。そればかりか体の動きも早くなる。樋上が夙夜に追いつくことはない。

ナイフがまたしても空を切ると今度は夙夜の拳が腹をえぐった。腹筋は弱くたつた一撃で身体を折り曲げてナイフを落した。長い逃走の中で樋上の身体は戦えるような状態ではなかつた。攻撃の手を休めずにもう一度、今度は顔面に叩き込む。襟を持つて殴ると樋上の身体がぶつ飛んだ。

「これで、終わりだ」

樋上は最初の一撃だけで身体が動かなくなつてた。松風のときと変わらない。身体能力の向上は動きだけでなく単純な力でもある。見た目以上の衝撃を受けているはず。樋上が立ち上がる気配はない。初撃で決着は着いていた。

倒れた樋上に目をやるとその腰の膨らみが気になつた。こんな奴でも持つているんだ、と手にしたのは安物の財布だつた。荒垣トウマは樋上から一十万円分、得られないかと言つていた。そんなに持つているはずはないだろうが少しはと思って開いた財布には車の鍵と金一万円があつた。こんなものでもないよりはマシだとポケットにしまうと携帯電話を取り出して篠崎の番号を押した。

「夙夜！」

声は大きく耳元に近すぎた。

「よう。樋上ならここにいるぜ。駅で待つてる

「これで仕事は完了だな。サンキュー」

「大したことないや。それよりここからだけど、こいつをどうする？」

問い合わせに篠崎は答えをするのが遅れた。足元で倒れる男の処分は想像が出来た。彼らの本業を忘れてはいない。樋上が行なつた事はどの分野においても最低で下劣な行いである。それを由とする組織ではない。彼に未来はないだろう。

「それはお前の知るところじゃない」

「ようやく出た答えは非常に冷たかった。

「急に冷たくなるな」

「言いたくないんだ」

「そつか」

「こいつはやつちや いけねえ事をやつた。だからケジメはつけさせる。それだけだ」

「じゃあこれでさよならだ。報酬やらの話は千影先生とやつてくれ。俺は一足先に帰るよ」

「そうしてくれ」

樋上は動けるような状態ではない。駅の影に放置して夙夜はその場を後にした。ほどなくして夙夜の携帯に篠崎から連絡が入り「助かつた」と一言話をした。その頃、すでに新宿駅に着いていた夙夜は荒垣トウマと会っていた。樋上の身柄は渡す事が出来ないが彼に貸しを作ることには成功した。

樋上の持つていた財布と車の鍵を渡すと少し渋つたが「サンキュー」とトウマはいった。それから事務所へと向かい千影に事件の結末を告げると何気なしに新宿駅の広場にやってきた。考えなどなく約一週間に渡る監視の日々が終わった事によりやく休めると夜空を見上げる。

「やあ、夙夜」と友人の声が聴こえた。

見ればそこには恋人と腕を組んだ氷上恭司の姿があつた。雑誌の表紙を飾るモデルが一人して並ぶのはどうかと思つたがあまりにもお似合いすぎて何もいえなかつた。

「仕事は?」

「終わったところ。そつちは? 勉強捲つてる?」

「おかげさまで」と曾我部が言った。

彼女の喉は元に戻りすべてが順調に見えた。一年前、二人を救つた身としてはこれほどにない幸福であった。一人は先を急いでいるようで特に身のある話しあしなかつたがそれだけでもすさんだ心の浄化には最高だった。

再び一人になって夜空を見上げる。星は見えなかつたが濁りはな

く透き通っていた。

太陽が姿を消し数多の星が姿を現すと夜の代表である月の元、一件のカフェがバーに姿を変貌させる。店の名前はZERO。ちょっと氣取った名前は店長の趣味だ。しかしこの名前、実のところ似合っていない。カフェとして店のメニューにあるのは珈琲と紅茶のどちらかをつけたセットメニューだ。おまけに店内はカウンターと円形テーブル六つ。どれも木目のモダンな雰囲気。仰々しい看板を掲げるわけでもなく珍しいメニューがあるわけでもない。ただちょっと可愛い店員が数名存在するカフェである。

そんなZEROという店がバーに変わった直後、続々と客はやってきた。まず最初にやつてきたのは近くの工事現場からやつてきたような薄青の作業着を着た男達。髪は金、黒、茶と色々。顎には髭も生えていて整っていない。自然と生えた不精そのもの。とても昼間のこの店には釣り合わない風体。

作業着の男達の次は歌舞伎町から流れてきたと見れる美女数人。きらきらのドレスが店内の灯りに反射する。白い肌も胸の谷も惜しげもなく見せる美女達に男たちは興奮し鼻息を荒げる。しかし与えられた餌に飛びつくようなことはない。男達の興奮は紛れもない本物だったが彼らは女に向かわなかつた。女たちがカウンターではなく円形テーブルへと移動して話をし始める。

男たちはそんな彼女らを横目で見ながらなにやら準備をはじめだす。まずカウンターを乗り越えて壁に手をやる。壁には巨大なコルクボードが掲げられており両端から一人ずつ手をかけて降ろす。壁と思っていた部分には実は十五センチ程度の隙間が存在しており三段の棚があつた。棚には焼酎からカクテルの材料までが並んでおり均等に整理されて並んでいた。同時に天井から降り注ぐ光が琥珀に変わり酒瓶のなかの液体が輝いた。

「準備」苦労」と店の奥から一人の中年が現れた。長く伸びた髪を

耳の後ろ辺りで一本に纏めた長身の男、彼こそこの店の店長である。「ういーっす」と彼に対し男たちが今時の言葉にならないようなイントネーションの挨拶すると女達は手を振つてみせた。「俺はもう帰つて寝るから片付けよろしくな」と店長は店の鍵をカウンターに置いて店を出て行く。彼は最後の最後まで女達を見つづけていた。店内がすっかり昼間の顔を隠してしまったあと、またしても客がやって来る。これまで男も女も働いていたであろう格好をしていた。だが今回は違う。集団でやつてきた三番目のお客のなかに働いている素振りはなく全員が私服だった。彼らが到着するとそれまで準備していた作業着の男たちが整列し女達も立ち上がった。

「やつほー、ご苦労さん」

先頭を歩くのは荒垣トウマ。今宵もいつもと変わらぬ気の抜けた挨拶である。そんな彼に全員が頭を下げた。トウマを先頭に集団は店内最奥へと向かっていく。集団の先頭を歩くトウマは誰が見ても群れのリーダーそのもので、その隣には東堂夙夜もいた。さらにはトウマの弟である白瀬トオルも一人の父親である荒垣真治までもが立っている。彼らの向かう先には昼間はなかつたソファーが用意されていた。ソファーは四人は座れる大型でカウンターの端も合わせれば八人程度は集まる。「準備つて後、残つてんの?」とソファーに腰をかけるとトウマが言つた。すると「全部できます」と元気の良い返事が返つてくる。三度目の集団が全員店内に入りきると座つていられなくなるほど狭い空間となる。そのなかで誰かが話をすると声が籠つてざわつく。がやがやと五月蠅くなるとトウマは手を叩き全員の視線を自分に集めた。

「今日は俺の親父がみんなに日頃の疲れをとつてもらおうつて事でこの店を借りきつた! 皆じょんじょん飲んでストレス発散させていい!」

店内が一瞬、音を無くしたようにしんとする。が、瞬時に歓声が響いた。誰も彼もがグラスを手にした。カウンターにはドレスの女たちが陣取つており次々にグラスへ酒を注いでいく。そうやって全

員のグラスに酒が注がれると今度はリーダー名である四人、トウマとその家族にも酒が渡る。最後に「夙夜は?」と聞かれ少年は年齢の事など関係なくいつも飲んでいるようにジントニックを注文した。かくして店内にいる全員が酒を手にして頭上に掲げるとトウマは父親に「頼むよ」と小声で言つた。父親でありこの場の提供者である荒垣真治は場を盛り上げるのが好きではなかつた。自分で作り上げた派遣会社の社長ではあるものの実質、登録者の管理は息子のトウマに任せっきりで自分は経営ばかり。この場にいる九割は自分の会社に登録している者だというのに顔を見たことがない人物もいる。正直、苦手だったが全員の目が自分に向けられるとともに逃げられそうにないと観念してソファーアを立つた。どこへ向かうのかと何十もの視線が注視すると荒垣真治はカウンターに乗り店の中央まで歩いた。この場で一番の年長は自分の半分も生きていかない若年からの視線と期待を一身に受け「乾杯!」と高らかに言つた。

「乾杯!」

と全員が一斉に言つて酒が手元から吸い込まれていく。乾杯の一言が引き金になつてパーティーは始まった。男女入り乱れ普段を愚痴を言つ。職場の上司、気に入らないやつの話最初は誰もが不満を口にして叫びもした。店内は穏やかな日常をどこかに忘れてきたようにはしゃぎ回る。

ソファアの一角にはそんな光景を見ながら談笑する一団がいる。パーティーが始まって一時間もすると一団はある人物の豹変に笑つていた。

「イッエーイ! みんな盛り上がつてるかー!」

「おおー!」

「イエーイ! みんな盛り上がつてるかー!」

「おおー!」

昭和の香り漂つ叫び声がカウンターから怒鳴るように響きみんなが答える。集団をあおるように叫ぶのは荒垣真治だった。彼の顔は真つ赤になつて最初の頃とは比べ物にもならないほど酔つていた。

足元には空になつた焼酎のボトルが転がつてゐる。普段、大人しい彼は酒を飲むと性格が変わる。というより本性が現れる。枠が外れるといつてもいい。本来、祭り好きなのだ。

「今日は俺のおごりだ！みんなじやんじやん飲んで行つてくれー！」

「おおー！」

父親の姿を見て笑うのは一人の息子。トウマとトオルは変貌した父親に拍手しながら笑つていた。

「まったく、毎晩毎晩騒がしいな」

手にしたジントニックを半分くらい消費した夙夜が言つた。ソファに座つてゐる彼らも頬を赤くしてほんのりと酔いが回つてゐる。

「いいじやないの。みんなここでストレス発散してんだから」と言つて笑うは兄。「そうだぜ、夙夜。お前も飲めよ」と弟。当然、弟のほうは夙夜よりも一つ下。法律ではまだ酒は飲めない。そんな事を言つてしまえばここにいる人間の大半はアウトになる。眞面目な大人と言えるのは数人しかいない。だがここではそんな事は関係ない。

「お前は少し控えるくらいがいいんだよ」

トオルは今夜三杯目のビールを三分の一まで減らしてゐる。

「この歳から飲んでりや二十歳になつたら酒豪だな

「そうかもな、そういう幹部四人じゃ誰が一番強いんだ？」

ひとつ、ちょっとした質問だった。ソファ周りには三人のほかにリーダー各四人が座つてゐる。荒垣真治がいれば八人だが今はカウンターに乗つて叫んでいるため現在は七人だ。

「ん~、それは困る質問だな」。向坂は普段飲まないし、左近寺は仕事があるときや本腰入れないし、相馬はゆつくりだら、納屋は…どう？

「……俺は強くない」と真先に振られた納屋は答えた。納屋陸雄、彼はトウマと同じく荒垣真治の作った派遣会社の社員である。短く切つた髪は銀色に染め上げた四人のうち一番背の高い男だ。納屋は四人どころか店内でもつとも口数が少ない。納屋は手元にあるグラ

スの中で震える焼酎を一口含んだ。舌の上を這う麦の味を噛締める。「納谷さん、んなこと言いながらそれ、ロック三杯目でしょ。十分ですよ。僕なんか水割り一杯でダウンです」

少し控えめに言つたのは向坂雄一。納屋と比べると身体つきは幼く筋肉もない。肩は坂道のように下つており手元にはアルコール度の低いチューハイが握られている。おまけに味はストロベリーとお子様向け。向坂も派遣会社の社員で彼は登録者の管理をしている。会社でパソコンを操作、キーボードを打つばかりの仕事である。

「オレは焼酎とか駄目だなあ。あつ、でもチューハイとかカクテルなら五杯はいけるよ。度数の強いやつ飲まなきゃ普通だ」

へらへら笑つたのは左近寺。会社の関係者ではないレコード店の店員である。この場にいなが夙夜とトオルの友人である氷上恭司も通う店の従業員だ。そんな彼もこの集団と密接に繋がつており今夜四杯目のオレンジチューハイを手にしている。

「みんなよく呑むよね」

リーダー各四人の最後、相馬大輔があきれたような目をしていた。ツンツンに尖つた髪に時折触れる。もう片方の手にはハイボールがあつた。

「相馬だつて呑むじやない。それ何杯目?」

「さつきウイスキー飲んだからこれで四杯目かな」

トウマが声をかけたのは相馬だけだった。一人の仲は随分と昔から続いている。他のリーダー格と出会うよりも先で学生時代からの縁で繋がっていた。トウマが会社で新宿方面の管理をするいっぽうで相馬は池袋方面を任せられている。トウマほどのカリスマ性はないが相馬を慕う者は多い。

「……十分飲んでる。まだ始まつたばかりだぞ」

「そうそう。相馬君はペースも速いから強いほうだよ。でもやっぱトウマさんには勝てないよね」

「あとの人の遺伝だからね~」と言う先にはまだ飲んでいる真治がいる。父親は性格が変わるもの酔い潰れることはない。そんな彼の

息子一人は顔は赤いが酔つている感覺はなかつた。

「親父が酒飲みでおふくろが酒屋じゃ そうもなるわな」

荒垣家は派遣会社経営。ならトオルのいる白瀬家はとこつと酒屋経営である。場所は池袋駅近く。

「ここの酒もトオルの酒屋が卸しだつたつけ」

「ああ、そうだよ。親父の息が掛かつたところはほとんどやうじやね」

軽く言つがその息は新宿の個人経営店から夜の店まで広くかかっている。「それが営業つてやつなのよ」もちろん息をかけたのは父親ではなくトウマやここの登録者である。そのため白瀬酒屋店は繁盛し潤つていた。

「酒が強いのはわかつたけどトオルくんや夙夜くんに呑ますのはほどほどにね。一人も一杯くらいにしどきなよ。一応、中学生なんだから」

「いいの。保護者もいるんだし……一応」

その保護者は錯乱したように笑つていた。

「まじめな奴なんてここにはいないと思つよ

「それもそうだな」

皆して笑つているとカウンターの上で一人、立つていた年長者が指を差す。

「おい！ そこのかきどもー こっちに来てなんかやれ！」

「んだよ、親父がやれよ」

「俺はいいんだよ。皆だつてみてえよなー」

その言葉に店内が騒然となる。いつたい誰のどんな姿を見たいのか。答えは一つしかない。ソファーに座つている男達の中でもつとも格好良い男だ。店内の沸きだつ歓声を背中に浴びて「ほら見る、みんなお前らの一発芸が見たいんだ。さつさと来い！」と誰となしに誘う。最初から逃げ道などなくトウマは歓声に応えるように立ち上がるとカウンターの上ではないが店内中央へと向かっていく。ソファーに並んだ男達には見えなくなると歓声は消えてやがて期待の

目が注がれた。

なにをしているのか気にはなるが期待の眼差しが並ぶ中でトオルの目がどこか淋しくなつてゐるよう夙夜は感じた。

「トオル羨ましいのか？」

「アニキは前からモテるだろ。俺と違つんだよ」

以前からだがトオルは兄を見るとき、時々嫉妬深い目をすることがあつた。憎しみからものではなく憧れにも近い感情。荒垣トウマの持つ才能と能力はまるで兄弟とは思えないほど違つてゐる。トウマは昔から頭がよく運動も出来た。言つならば優秀な子供だつた。それに比べトオルは頭が悪く素行がよくない。唯一といつていいほど自分を魅せられたボクシングもこの歳にして昔の事だ。遊びに全力をかけても彼女の一人もできない。そんなトオルの目にトウマは仕事も遊びも全部を持つた完成されたように見えた。

「そんなこと言つてるとずつとできないぞ。モテるアニキを使って作りやいいのさ」

「それってなんか違わなくない？」

「大丈夫さ。お前にだつて出来る」

と、よく解らない説得をする相馬だが彼にも彼女はいない。リーダー格のなかで彼女がいるのは納屋と左近寺の二人だけである。さらに上のトウマにも彼女はいない。彼には彼女はおろか女の影さえ見当たらない。仕事上、風俗関係の女性とも面識があるが関係が発展する可能性はない。

相馬の説得に「根拠は?」とトオルが言つと「ない」と即答する。

「ないのかよ！」

「ま、そう言わず呑め呑め！」

どつと笑い声が店内に響いた。ソファの場所からはトウマがなにをしたかは解らなかつたが店内で起きた爆笑をつまみに飲み始めた。それからトウマはしばらくソファに戻つてこなかつた。罵詈雑言の嵐となつていた店内には笑い声が聽こえはじめ流れが変わつていく。夙夜たちも最近の出来事を話し穏やかながらも騒がしい時間が

流れる。店内に一つだけある時計が三時になるとようやく何人かが酒を飲むのをやめだした。店内に蔓延した酒の匂いはしらふの人間でもすぐに酔いが回るほどの濃さになり宴は終幕を迎えた。帰つていく参加者の大半がいなくなると壁にコルクボードを戻し大量のグラスを洗い終えるとようやく夙夜を含めたリーダーたちも店を後にする。

電車もなくなつた深夜にもなると人の数はさすがに消え街は静まつていた。歓楽街からはまだ呼び込みが行なわれてネオンが輝いているが店内から帰ろうとする彼らの目には止まらなかつた。帰宅方法は皆、手配済みで近場に車を停めている。比較的酔いの少ない人物にハンドルを握らせて運転する段取りだ。警察もそう簡単に呼び止めはしない。

ばらばらになりながらも車へと向かつていく彼らの一団に一足遅れて夙夜たちが追いついた。すでに車は走つていつた後のはずが一団は道のど真ん中で立ち止まり輪を作つていた。

「なにやつてんの？」

「あ、トウマさん！　いや、それがあいつ……」

声をかけられた男はどう説明していいかわからないといった顔をした。トウマ達が人を搔き分け中心を見ると一人の男がにらみ合つていた。一人は金髪で見たことのない男だつたが強暴な目をしている。しかしもう一人には全員見覚えがあつた。相馬はその男を見て「あれ、うちのチームにいる奴だな」と口にした。つまり彼は池袋方面で仕事をしている。

「そうなの？」

「俺たち駅に向かつてたんですけど向こうがいきなり因縁つづけてきやがつて……」

金髪を指して言つ。これだけの集団に喧嘩をしかけてくるなんて馬鹿もいいところだが血の氣が多いのか金髪はすでに目がいつている。いつ身体が飛び出すか解らない。

「向こうから喧嘩売つてきたの？」

「……はい」

「どうすんのや」

「どうもこうもない、止めてくる」

相馬は酔いが冷めていた。彼の管理する登録者で問題が起きた場合のことを考えれば当然だがそれ以上に金髪の目が尋常ではないためである。しかしトウマはそうではなかつた。

「まあ待とうよ。あいつ強いの？」

「いや、そんなことないと思ひますけど」

「売られた喧嘩も買えないようじやうちのチームに必要ないよ。それに相手側。武器持つてないみたいだし。大怪我はしないでしょ」

そうこう言つてゐる間に金髪が飛び出した。戦法もなにもない殴り合いだつた。一人の男が殴り合いをはじめ最初の一発が顔面を横から殴る。誰も手を出さなかつたがお互いに一発ずつ殴るとまるでテレビでボクシングの試合を見るかのように周囲が騒ぎ始める。その騒ぎに感化させられてか一人も激しさを増す。夙夜にとつてみればまるでスローモーションにしか見えなかつたが一人、目の前で行なわれる喧嘩に腕を震わす男がいた。

そして金髪が倒れる。

どつちが優勢かなどなかつた。ただ、ちょっとだけ相馬の知合い側が強かつたにすぎない。味方のいない一人の金髪は口元から垂れる血を拭きながらポケットに手を突つ込んだ。なにかぐしゃぐしゃと弄ると口元を緩めてにやりと笑う。「もう終わりかよ」と対峙する男が言つと金髪はポケットからなにやら青く光る瓶を取り出した。十センチ程度の長さに指の太さの瓶を手に持つと蓋を開いて一気に飲み込んでいく。

「なんだあれ？」

「……ポパイか」と納屋が呟く。

「なにそれ？」

「ん? 知らないの? 昔のヒーローなんかでさ。特定の物食べた強くなるの」と向坂が説明する。しかしながら夙夜もトオルも知

らなかつた。

「知らねえよ」

「でもあいつ、動きが変わつた」

さつきまでとは違つていた。立ち上がるなり最後の一押しとばかりに殴りに掛かつた拳は空を切るだけだつた。金髪の動きがどう変わつたのか、この場にいる連中のなかで理解できたのは数人しかいない。夙夜は拳の届く距離を正確に見極めていた。それと同じだ。金髪の目は性能こそ違つたが拳の届く位置を把握し限界の場所で回避している。口をめいっぱい開いて歯茎を見せて笑う。馬鹿にされたと思つて殴るスピードが早くなつたが金髪はその速度にも対応して笑つた。

「おわりかよ！」

一発だつた。金髪の一撃はこれまでと違い完全にノックアウトさせた。すぐに一人が倒れた男の介抱へと飛びつく。これで喧嘩は終わりだと誰もが思った瞬間だつた。金髪は介抱しに寄つた男を蹴り上げた。

「おい！ もういいだろ」

誰が止めるでもなくトオルが飛び出した。トウマの弟だと誰もが知つている。その中に乗り込んだのだ。

「なんだ、てめー」

「もう決着はついただろ。お前の勝ちだよ」

「知るか！ むかつくんだよ、こいつが！ それとも何かコイツの代わりにやるつてか？ いいぜ、ガキがぼっこぼこにしてやる」

金髪の目はすでに自分を失つていた。トオルは無言で構えると金髪はまたしても自分から飛び出した。まるでプロ野球選手の投げた球のようなスピードで拳が繰り出される。さつきまで呑んでいた酒の酔いはさつきの殴り合いで冷め頭は驚くほど冷静だつた。寸前のところで交す。何年もかけて練習したボクシングの基本は身体が忘れていない。金髪のパンチは早いがそれだけだつた。素人のパンチを回避するだけなら余裕だつた。回避しジャブ、ストレートと叩き

込む。

単なる暴力に負けるはずはない。トオルを知っている人物はそう思つた。だが倒れた金髪はすぐに起き上がり番犬のように噛み付く。『夙夜、どう思う?』

トオルと金髪の殴り合いから田を離さずにトウマが言つた。これまでにない真剣な声だった。

『さつきの青い液体飲んだ後、奴の動きが変わつたな。そういう薬物が出回つてゐるのか?』

『そんなの聞いてない。誰か知つてゐ?』

声を出した者はいない。全員が首を横に振つただけだ。

『らしいよ。てかそんな凄いのがあるなら俺らじゃなくて夙夜でしょう? ないの情報?』

少し記憶を探るがやはりそんな情報はどこにもない。麻薬に関してならともかく金髪が所持していたあの青い液体は全くの初見だった。

『ないよ。トオルの奴ちょっとやばくないか』

『そうだな』

次第にトオルに拳が掠めるようになつてゐた。回避は間に合つてしない。拳は腕の皮膚が赤くなつていく。まだ本格的な一撃に到達していながら徐々に追い詰められている。さらにはその掠つた拳だけでも相当な痛みがあるらしく辛抱強いトオルの顔が歪んでいる。

『あいつ酔いすぎてるんじゃない?』

『夙夜、いざとなつたら頼むよ』

いざ、そななる時間はなかつた。すでに金髪は頭の血管を千切り噴出しそうになつてゐたのだ。突然、殴るのをやめて辺りを見渡す。にかつと笑つた目の先にはどこでどうなつたか解らないが鉄パイプが何本か転がつてゐた。素手の殴り合いだと誰が決めたかわからなかつたがそんなルールなど無視して金髪は飛びついた。一本、手に取る。棒一本といつても鉄だ。集団は一步どころか数歩後ろに下がつた。あらうことか敵対してゐたトオルを放つて金髪は鉄パイプを

振り回し始める。

「全部、叩き割つてやる！」

鉄パイプの奔放さを止めるべく夙夜が飛び出す。夜風よりも速く駆け出して背後から蹴る。衝撃によって鉄パイプを手放した金髪が倒れる。

「な……ん……だ……よ」

何ともなかつたように起き上がる。かなり力をいれて蹴つたはずだった。

「そいつは頂けないな」

「手え出すなよ」

「こいつ普通じゃない。意識だけとばす」

もはや手加減などない。一度武器を持った相手に遠慮などする必要はない。夙夜はこれ以上事態が悪化させたくはなかつた。二人で並んで構える。トオルの拳が繰り出されると今度は夙夜の拳が飛び出る。と思ったらまたトオルと交互に拳が繰り出され金髪は成すべなくその身に受ける。回避などさせなかつた。足がふらつきもはやサンドバッグ状態になると二人の拳が同時に顔を殴り地に伏せた。立ち上がるうとはしたがさすがに立てなかつた。体力の限界だったのだろうか夙夜の言った通り意識が途絶えていた。倒れた金髪の状態を確認してポケットの中を探る。先ほど状況を変えたあの瓶がまだないかと調べたが残つていなかつた。道端に転がつた瓶を拾い上げるとポケットにしまう。

「こいつは貰つておく。いいよな」

トウマは頷くだけだった。

「救急車呼んだよ」

「後の処理はどうする？」

こちらの被害はと喧嘩していた男と寄り添い蹴られた男を見ると立つて歩けるようだつた。痣はあるがそれほど重症には見えない。本人達も問題ないと答える。救急車に乗せるのは金髪の男のほうだ。

「救急隊員は俺の知り合いだからなんどでもなるさ」

呼んだ相馬がそう言つとこに自分たちがいる事のほうが騒ぎになるからと全員を帰路へ立たせる。トウマが声をかけると集団はぱらぱらになつて駆け足氣味に場を離れていく。

「そうか。じゃあ、お開きだな。トウマ頼む」

夙夜は一人、長い帰り道を進むため路地に入りビルを駆け上がる。夜風に紛れると月明かりを背に街の空を黒い影がひとつ、飛翔した。

身体を熱くさせていたアルコールは夜風にまぎれると急激に冷めていった。しかし男を殴った拳はまだ熱を帶びている。身体の芯たる胸の内にも微かな熱を帶びていた。今、東堂夙夜の身体は炎の球のようになんで宙を舞う。

民家の屋根と電信柱を足場にして飛ぶ事、十分程度。新宿駅での一騒動を頭の中で再生する。今頃、意識をなくした男は病院へと運ばれている事だろう。彼についてはトウマたちがなんとかするはず。その後、聞けばいい。問題は懐にしまった空き瓶。男が喧嘩中に飲んだあの青い液体。あの液体を飲んだ後、男の力は変わった。構えも何もないただの喧嘩だったにすぎないがそれでも対峙した白瀬トオルと渡り合つたのだ。トオルは酒を飲み多少酔つていたがそれでも能力が落ちるほど弱くはない。一度構えれば身体が無意識のうちにも戦闘に対応する。拳に宿る力も減つていない。男は最初の一撃で倒れるはずだった。それで全てが上手く納まるはずだったのだ。だが男は何度も立ち上がり夙夜の手を借りてようやく意識を失つた。瓶の中身を調べる必要がある。

この街のことならトウマが知っている。彼の元には日々の情報が全て集まる仕組みが構成されており夙夜だけに限らず多くの人が利用する。そのトウマですら知らなかつた物がいま自分の手の内にある。千影先生に見せたほうがいい、そう思つたところで実家の門を飛び越えた。

庭に飛び降りると自室へ繋がる縁側廊下に腰かけていた北岡めぐみと曰があつた。彼女は空から降りてきた夙夜に驚く事もなかつた。門の高さは一メートルほどあつたが何一つ動じる事がなく帰つてきた主に寄つて行く。

「夙夜さま、ご伝言がありますよ」

「なに?」

庭は深海のように暗く足元がおぼつかない。東堂家の庭は両足をそろえて立つとぎりぎりなくらいの石が並んでいる。石は完全に埋まっているわけでなく大地と一センチほど差がある。この差につま先が当たり引っ掛けやすい。しかしながらめぐみは上手く石の中心に足を置いている。

「明日、アーサー・ライバックさまが日本にこられるそうです。是非、夙夜さまにお迎えいただけないかと」と告げた。

アーサー・ライバックの名前を聴いたのは久しぶりだつた。実際に数年ぶりのこととで直接会つたのは千影のところへ預けられる時だつた。彼、アーサー・ライバックは遠い親戚になる。東堂家の本家は京都にあり母方の親類に米国との繋がりがある。夙夜は純粹な日本人の血筋であり血の繋がりはない。だが、ライバックはよく親戚の集まりに顔を出し幼い頃の夙夜の面倒を見ていた。

「つてことはもう飛行機に乗つてるな。こちから連絡はしないほうがいいか……でも随分急だな」
めぐみの説明からするとすでに空の上にいなくてはならない。もうじき日の出なのだ。

「どうしますか？」

「どうもこうもないよ。あの人があんまり迎えを頼むつてのはなんとか理由が解るから行くよ、時間は？」

夙夜を洗敷千影に預けるようにしたのは誰であろう彼である。やの彼が何もなしにやつてくるはずはない。

「お昼に着くと申しておりました。私のほうから携帯電話の番号をお伝えしておりますので到着したら連絡してくるはずです」

「わかった。ありがと」

「えつ？」と表情の変化が見える。

「だつてそれ言うために起きてたんでしょう。」めんね

「そんなことないですよ、それではお休みなさいませ」

おじぎすると自分の部屋へと戻つていく。夙夜もまた自室へと歩を進める。当然、足を引っ掛けようなどではなく廊下へと移る。

すると携帯電話が鳴つた。誰からかと見ると洗敷千影の名前が表示されていた。

「朝一で帝のところへ行きなさい。なんでも渡したい物があるそうよ」と通話中になるなり声が聴こえてきた。「了解」と返事をすると驚くほどあっさりと電源が切れた。おそらく機嫌が悪かったのだろう。

すぐに太陽も昇る時間なのだ、とても眠る時間はない。夙夜は仮眠をとるだけにして服は着替えなかつた。

日本の首都東京に存在する魔術師の数は推定百四十人。内に東堂夙夜と洗敷千影は含まれていない。百四十という数は東京の魔術師を管理する者はじきだした数にすぎない。魔術師の行動、能力には制限が掛けられている。人知を超える力の所有者、魔術師……彼らを管理する者が必要なのだ。

帝と呼ばれる存在である。東京二十三区に住む魔術師たちを管理し他の地域との連絡係りもある。魔術師たちの行動を管理、統治する帝。帝とは二十三区全ての区域に作り上げた扉を介して会う事ができる。その扉は大抵どこぞの雑居ビルのエレベーターにありバスを持った人物が乗り込むことで仕掛けが作動する。

夙夜が利用するのは実家から何本か通りを隔てた場所にある汚らしい無人ビルだ。小さい頃はまだ飲食店が入っていたが今ではすっかりさびれている。しかしごりの中に入るのに問題はない、むしろ誰もいない空間で鍵がかかっている戸もない。コンクリートの箱そのもので電気も通っていない。夙夜は朝陽の昇る頃にはビルの中に侵入していく停止しているエレベーターの前に立つていた。

帝のいる空間へ向かうには魔術師たる証明が必要となる。いわゆるバスだが形ではない。エレベーターの下降ボタンを押せば自由と仕掛けは作動し魔術師だけを乗せて下降する。地下へと下降するエレベーターは長い時間をかけて移動し到着音を鳴らす。外の景色は一切見えず外には出られない。この仕組みは東京二十三区全てに存

在しコンビニのように利用できる、

到着音が鳴ると扉が開かれた。地下を降りていたはずのエレベーターの外は暗く広い空間に到着していた。夙夜が暗い空間へ足を一步踏み込むとどこかでぽつぽつと灯が燈る。桜の花びらが舞い散るようになに足元に光が反射すると赤い社が現れた。夙夜がエレベーターから完全に出ると乗つていた箱はどこかへと消えていく。変わりに社の奥に金色の光が現れる。さらに一段重ねられた座敷と仰々しく飾られた白い垂れ幕が姿を現し両側に背の高い灯籠が片側三本並ぶ。中央で光っていた金色の輝きが薄らになるとようやく形となつていく。

「なんじゃ、遅かったではないか、もう太陽は昇つておるぞ、夙夜」光が消えるとともに声がする。光の正体はこの東京の統治者たる帝、名を天元斎といつ。光の粒子が浮き出てくるような金色の髪をしており練乳のように白い肌の女だ。ほんの少僅かに尻上がりの目に桜色の唇は男の本能を惹きだす艶をもつてゐる。肌の上に乗る紅白の着物には髪と同じ金色の装飾物が胸元で光る。

「朝一って言われたのは一時間前なんだ勘弁してよ」

「それはそれはわしも連絡を入れるのが遅かつたようじゃな。しかし酒の匂いのする学生というのにはいかんな。またあの連中と飲んでおつたのか？」

着替えるべきだったかと今になつて後悔する。さすがにこの歳で酒の匂いを振り撒くのはよろしくない。

「いいだろ。付き合いは大事なんだ」

「わっちとの？ 突き合い？ はせんのにか？」 にやりと頬を緩めて夙夜へ擦り寄る。

天元斎の胸は大きく着物の帯びも止めが緩いためよく揺れる。脚は素足で爪の先から太ももまで露わになつてゐる。美女の進行に年頃の少年なら卒倒してしまうほどの色気が迫り来る。しかし夙夜にとって色気は対処済みであつた。毎日、艶の権化のような千影ともに過ごしているため動じない。

「付き合いつて言ったの。そっちの？ 突き合いつて？ じゃない。それで、何のようす？ こんな時間に呼び出すなんて」

「わっちがおぬしを呼び出した理由は決まつておるじやうひ、ええ。おぬしの事を考えて身体を火照らしておつたのじやよ」

進行は止まらず身体を寄り添わせる。止めなければ食つてしまつぞとばかりに覆い被さる一步手前でよつやく「だから」と言つて突き放す。

「千影とはもう何度寝たんじや？」

「関係ないでしょ。それに先生とはそういう間柄じやないの。全部、修行の一環。それに千影先生と恋愛関係になれるほど俺は優等生じやないよ」

「そうじやうか？ おぬしのこゝはけつひつ立派じやと思つが？」

「そう言つて指したのは股間だった。

「結局そこなんだろ？」

「長く生きておれば愉しみなど少ないもんじや。文献や過去の話が風化して退屈な物に見える。周りの科学技術もうそうじや、わっちの能力に比べれば所詮は子供だまし。さすれば気に入つた男と交わることこそ最上の快楽になるといつものじやよ」

そのとき天元斎のほつぺに三本の長い鬚が現れる。長く針金のように弾力のある線のようだつた。彼女の正体が垣間見える、彼女は人ではない。金の髪も白い肌も人外のもので人間が持つ肉体の美しさをはるかに超えている。人の持つ艶では到底たどり着けない眩さを持つている。彼此三千年の時を得て進化した姿である。人間の姿は三千年の間に身につい変化の術によるものだといつの日か夙夜は聴いた憶えがある。

「悪いけど今日は時間が無いんだ」

天元斎は鬚を引つ込めると「また言い訳か？」と言つた。

「違う。今日は親戚が来るんだ」

「どじからじや？ 東堂家といつ」とは京都か？

「どじからかな？ 多分イギリスじやないか」

「多分とは何じゃ、親戚なんじやる。どこに住んどるか知らんのか」「各地を転々としててね。一応、イギリスに実家があるって聞いてる。とにかくその人がやつてくるから空港にいかなきやならないんだ」

実のところライバックがどこに住んでいるか夙夜は知らない。親戚の集まりでしか顔を合わせない彼のだからおかしくはない。しかも彼の場合、土地を点々としているためどこに住んでいるかなど知る術がない。たまに話をする父親から聞くとアメリカ、イギリス、フランスのどこかで活動していると知る程度だ。

「なら仕方ないのう」とよつやく傍から離れて座敷へ戻る。

「呼び出した理由は」

「そう焦るな。実はな、夙夜にひとつ褒美をと思つたんじや」「褒美ね」

貰う理由を描いてみたが心当たりはなかつた。

「おぬしはこの東京で仕事を開始した魔術師のなかでも特に頑張つておるからね」「う」

煽てられてもやはり心当たりはない。何より自分は正規の魔術師ではない。天元斎の元で仕事をしているわけでもないのだ。

「だからと思つてある技師に作らせたんじや、刀をな」と夙夜の考えを無視して天元斎は一人、話を続けていく。そして一息して

「名は桜紋鴉」

と、真剣な声で言つた。

「さくら、もん、からす?」

聞いたこともない名前を出されてどう反応したものかと口にだして頭の中で想像する。天元斎の言葉と唱えた言葉は合つていたがそこから読み取れる物ではなかつた。

「うむ。鞘と鐔に桜の紋が彫つてあつてな。これが美しいのなんのつて。しかも刃は鴉のようく黒い。だからして桜紋鴉というわけじや。どうじや、おぬしの通り名のようで格好いいじや」

「そうなのか」とある程度の納得で相槌を打つ。

「さらには刃長八十八センチの野太刀じゃ。他の刀とはまるで違う迫力がある。そうそう刃にするものではないぞ」

「八十八つて……いくらなんでも長すぎや。俺の身長の半分以上あるじゃないか」

日本刀の長さで八十八はありえない。どれだけ長くとも約八十五であり通常の刀なら六十台である。八十八といえばそれこそ大多数人間の身体の半分以上になる。柄を装着すれば九十を越えるのは明白だ。ならそれを武器として使用することも容易ではない。しかしその考えを天元斎は真っ向から否定する。

「何を言う。魔術師相手に小太刀など役に立たんぞ。それに刃長だけではなく使用者の魔力を刃に変えることも出来る優れものじや。わっちはの予想ではおぬしの場合刃長は一メートルに達すると見ておるぞ」

「それをくれるのか？」

金の髪を揺らしてうなずいた。

説明どおりの物ならば喜んで受け取る品だ。持ち運びは難しいだろうが一メートルもの刃は魅力的である。

「だがちと問題が起きよつた。その技師が襲撃にあつてのう。昨晩じや、こちらから連絡をした後すぐに逝きおつた」

「刀は？」

「とられた」とあつさりと言つた。まるで他人事のように口にする。「随分と軽く言うな。あんたの管轄だろ、もつちよつと危機感とかないのかよ」

「重くも軽くも無い。わっちはおぬしら人間が粗相せんように見張つておるだけじや。今回のような小言に関与せん。じゃが今回はちと違つ。おぬしの褒美として作らせた刀を盗まれたわけじやからのう」

つまりは私用で作らせたに近いのだ。天元斎が独自に作らせたのだろう。この空間には彼女の姿しかないがれつきとした組織だ。目に見えない場所で魔術師たちを管理している。天元斎はその最たる

部分でしかない。彼女が部下を動かし魔術師たちに仕事として犯人を捕まえると言えば一四十もの魔術師が動き出す。

「それじゃ動くのか？」

「いやそれはまた別の機会じゃな。おい、あれを持って」

どこの誰に言つたのか天元斎の声に反応し何かが動いた。がさごそとまだ暗い部分で動く物体を目を凝らしてみると黒髪の巫女がなにやら長物を手にしていた。こちらの巫女は人間であり物腰柔らかに座敷に座る天元斎の傍に寄つた。長物を受け取ると自分の手の内で装飾を光に照らす。夙夜の日にも長物が日本刀だとはつきりと映る。

「これはある刀の「コピーなんぢゃがな、刀身に魔力を帯びさせておる。桜紋鴉よりは刃長はないし反りも無いがおぬしの体格には合つはずじやろう」

譲り渡されると鞘から抜いてみる。刃の長さは六十程度だろうか、重さも刃の長さもずつしりと感じとれる。自分にとつて最適の距離感だとも思えた。長すぎず短すぎずその適切な刃はまるで自分のためにあるかのような切先を見たような感覚。鞘に再びしまつと黒髪の巫女がどこからか今度はビリヤードのキューを入れる長方形型のバッグを持ってきた。巫女は何も口にしないがどうやら刀をこれに入れろということらしい。そのまま持つて行くよりはマシだとバッグを受け取りしまいこむと巫女はにっこり微笑んで再び暗がりのなかへと行つてしまう。

「別にいいさ。話を聞く限りこっちのほうが持ち運びも楽そうだしな。その桜紋鴉に関しては見かけたときに報告するよ」

「頼む。もし手に入れることがあつたらそのまま使つても構わんからな」

「ああ」と返事をすると座敷の隣りに立つてゐる灯籠から火が消える。天元斎との時間はこれにて終了となる合図だ。彼女と話をするときはこの空間で他の客のいない時と決まつてゐる。千影にはじめて着いてきた時もそうだつた。暗い空間は日本のどこのにあるのか全

くの不明でまさに彼女の作り出した世界そのものである。光が足元の花びらだけになるとどこかへと消えていたエレベーターの箱が現れ扉が開く。すると箱の中の電灯が眩しく光帰り道を示す。すでに空間の中には天元斎の姿はなく足元の光さえ消滅している。夙夜は箱の中へ入ると扉を閉めた。このエレベーターには有効な使い方ができる。入り口は固定されているが出口は選択できるのだ。

とてつもなく大きな移動用の箱となる。個人では到底できない魔術式だが皆、気にせず使っている。夙夜も同じで行き先は空港にした。乗り手の思考どおりに箱は移動をはじめ暗闇の中を動く感覚だけを伝える。夙夜の身体に僅かな重力と震動が伝わった。空港までの移動のなかで時間の確認をするとアーサー・ライバックのことが頭に浮かんだ。親戚の集まりは大抵京都の本家にて行なわれる。東京の東堂家にやつてくる客は珍しいほど少なくライバックは珍しい人物の一人である。彼は夙夜が小さい頃から年に数回、外国からやつてきていた。外国というのはアメリカ、イギリス、フランスと毎回変わつており特定されていない。本人に実家の場所はと聞いたことがあつたがそのときはイギリスだと答えていた。しかしライバックの容姿はアメリカ人であり名前もそうであつた。また屈強な身体をしており夙夜と腕の太さは倍ほどある。魔術師ではないが洗敷千影と関係があり夙夜を預けたのは彼の一存である。

数年前の事故より夙夜を救つたのは他ならぬ彼である。

「よつ、夙夜」

空港の中、ゲートから出てくるなり彼は腕を上げて言った。言葉は流暢でとてもその身なりからは想像できないほどだつた。短く切つた茶髪と細くも鍛えられた胸板をしている。その姿は夙夜にとつての理想であり特に高い背は憧れだつた。

「やあ、ライバックおじさん」

「おじさんつてのはやめろよ。まだそんな歳じゃない。アーサーとかライバックとか他の呼び方にしてくれ」

「わかつたよ、ライバック」

「やうだ」

合流するなり肩を組んで挨拶となつた。だが無駄話をする暇などなく空港を後にする。Tシャツにジーンズという鍛えた身体の表面だけを覆つたシンプルな服装のライバツクは旅行バッグだけ持つてタクシー乗り場へと向かつた。乗り場には一列に並んだタクシーがあり何気なく一台を選んで一人は乗り込んだ。

「しかし突然だな。もっと早くに言つてくれたならよかつたのに」しばらくは一人とも言葉を介さず外の景色を眺めていた。

「何か用事でもあつたのか？」

「いや、特に無い、気にしなくて構わない。で、そつちの用事は？」

「話が早くていいな。さすがだぞ、夙夜。洗敷女史に教育を任せたよかつた」

「突然、日本へやつてくるにはそれなりの理由があるんだろ」

「まあな」とライバツクは言つて黙つた。運転に集中する運転手を横目に見ていた。どうやら「」では具合が悪いらしい。家に着くまで口は塞がれた。

家に戻ると自室に戻らず居間に向かう。肩から下げていたバッグを壁にかけるようにして置くと北岡めぐみがやつてきた。彼女は簡単な挨拶と茶を注ぎ立ち去る。机を間に挟んで対面するとよつやく話は始まった。

「こいつを見てくれ

旅行バッグの中は見えなかつたがそこから出したのは青い液体の入つた瓶だつた。小さく細く見るものの興味を引く青い液体は見たことがあつた。昨夜、路上で見てふといこじまつているものとそつくりだ。

「これは……」

「ある新薬の写真だ。詳しく述べないがこいつが日本に運び込まれた情報が俺の元にきた。それで調査にやつてきたわけだ。できれば市場に出回る前に回収したいというのが目標

親戚一同の集まりもなければ両親もいない。ライバックがここ日本へやつてくる理由は限られている。出された瓶はライバックの手のひらへと移り指の間でくるくると回る。中身が泡立つほどの回転力が加えられていた。

「麻薬なのか」

首を振つて否定した。

「こいつに麻薬の代わりは出来ない。快樂を得るための物じゃないからな」

「なら効果は?」

「一時的な身体能力の強化だ。アンフェタミンって知つてるか?」

「聞いたことぐらいはあるよ」とさしいながらもどこかで得た言葉を思い浮かべる。

確かに麻薬の一種だつたような記憶がある。

「アンフェタミンは合成覚醒剤の一種だ。食欲低下や体重抑制なんかの治療に使われる。こいつを普通の人間が服用するとハイになるわけだ。まあ統合失調症様症状や攻撃性の増加から妄想と様々なデメリットを持つていいわけだがこの新薬はちょっと違つ」

瓶を机に置いた。

「こいつはアンフェタミンや他の薬の効果をさらに超えてる。医療用には絶対に使えない代物だ。通常、人間の力は脳が抑えているのは知つてるな? そいつを取つ払うのさ、そうやつて力を解放される。つまり自然に抑制してある部分を開放できるわけだ」

「どれくらい強くなるんだ?」

「それは人によつて変わるな。曰くろから鍛えている軍人ならともかく一般人ならせいぜい通常時の1・3倍だ、喧嘩でちょっと強くなる程度だろうな。結局、脳が持たないんだ、それと筋肉の細胞。強い衝撃を数発受ければ倒れる。手に入れても使うなよ」

「麻薬じゃないんだろ?」

「違うが副作用はあるんだ。言つただろ脳が持たない、と。そして神経が壊れる。過剰な筋力強化のために溢れた分泌物に脳や血管が

耐え切れず常人なら一回……三回には効果が持続しているなかで痙攣する。痙攣した後は意識がなくなつて倒れ、動けなくなる。そこから死亡まで数十秒で直行だ。医療用でさえ毒性を持つてる。完璧な治療薬なんてない。まして用途が違うんだ。使つたら最後、精神がぶつ壊れる

「そいつが日本に？」

「ああ」

言葉の重さが急激に膨れ上がつた。すでにその一本を見てしまつてゐる。使用したところもなにもかもだ。ライバックの説明どおり使用した男は力がつきトルオルと戦つた。夙夜自身も戦いに参加して倒した。男は今、病院にいるはずだ。

「危険だな。どれくらいの量なんだ？」

「そこまではまだ解らん。だがそれ程多くは無いはずだ。生産工場はもう潰したと報告はあがつてゐる。初期ロットは多くて五百未満」「それほど多くは無いな」

「一人で二、三回使用するのが限度なら多くても一百五十人程度になる。数だけならそれほど多くはないだらう。だがそこから連鎖する被害は図れない。

「だが出回れば犠牲者は出る。他の薬と併用していれば死亡に至らなくとも精神を病む可能性は十分ある」

「なら早く回収したほうがいいな」

すでにこの薬は出回つてゐる。ふとここの一本だけとも考えられない。緊張は自然とあらわれどこからともなく肩へと圧し掛かる。

「手伝ってくれるか？」

「当然だろ。俺のツレが手にしたら一大事だからな。それに」

「それに、もう見たつていうんだが、さつきの態度じやまるわかりだぞ」

「まあな」

察しがいい。ふところから回収した空き瓶を取り出してまだ未使用の瓶と並べる。空になつた瓶は机の色を映す。

「どこで？」

「新宿駅近くでさ。通りで喧嘩してる奴が持つてた」

「そいつはどうなった？」

「病院に運ばれたはずだ。連絡取れるか聞いてみようか？」

「頼む」

今度は携帯電話を取り出して番号を呼び出す。もちろん相手は荒垣トウマだ。彼は呼び出し音一回で出た。

「昨日のあいつはどうなった？」

「あいつって病院に行つた奴？　あいつならそのまま入院したよ。病院の名前はね」

トウマの言う病院は東京の端にある。夙夜は病院の名前を全て知つてゐるわけではない。ただその病院は自分も入院した事があつたから知つていただけだ。移動の方法も知つている。

「ありがと」

電話を切る。机の上には並んでいた一本の瓶はなくなつていた。ライバックの旅行バッグの中にあるだろう。

「場所がわかつた。どうする？」

「そつちには夙夜が行つてくれ」

「ん？　あんたはどうするんだ？」

「俺は俺で新宿一帯をまわつてみる。俺の知り合いもこつちに多いからな」

「了解だ、それでこいつの名前はあるのか？」

「ブルーポーションと呼んでる」

茶を飲み干すと一人してまた家を後にした。

トウマから聞きました病院までの経路は電車の乗り継ぎで一時間とかからない。昨夜の男のいる病院は東京の都心から少し離れた緑の山の上にある。最寄の駅からバスに乗り換えて坂を登る。東京の街が随分遠くに見える。

じきに坂を登りきると白一色のまるで要塞のような病院が現れた。バスから降りて中に入る。誰の目も向けられなかつた。受け付けに専念する白装束の一団は横目にちらりと見るだけで夙夜の存在など気にもとめない。独特な匂いのなかを突き抜けて三階にやってくるとやけにざわついた音が聞こえてきた。

廊下を歩く医師らしき人物は眉間に皺を作り、患者らしき人々は皆早歩きだつた。

ともかく入院している男を訪ねなければならぬ。夙夜が歩き出しその3号室へと歩を進める。エレベーターから最初の廊下の角を曲がり病室へ向かう。一人きりになると前方からの音が響いてきた。すると入院患者ばかりの階にしてはやけに五月蠅い声が聞こえてくる。

「お、おい！ なにやつてんだ！」

突然、背後から声を掛けられた。それも大きな声で周りに人がいれば誰もが振り返つただろう。

夙夜の前には誰もいない。

振り返るとそこには篠崎源一郎が立つていて。心の隅でなぜいるのかという疑問と懐かしさが溢れ駆け寄つた。

「何だよ、突然。そつこそこなにやつてるんだよ」「何つて……お前には関係ない」「やけに冷たい言葉だつた。

「あつそ。じゃあ俺にも関係ない」と振り返つて再び3号室を指す。すると「待て」と呼び止められる。またしても振り返るこ

となつた。

「なんだよ。俺がどこに行こうが関係ないだろ」「

何号室だ?」

「303号室」

「解つてて来たのか?」

驚いた表情をしていた。

「さつきから要点が見えないな。なんだつていうんだ」

「お前には借りもあるし報酬の件もあるから言つていいか……あの一件の後、うちの組はある物を仕入れた」

「それで?」

「その取引の最中ちょっとした事故があつてな。物が全部、奪われた」

「それは大変だな」

「だろ? で、うちの組はその物を追つてるわけだが手掛かりが無かつたわけだ。ところが先日うちにたれこみが入つた。新宿で馬鹿やつてる若いやつが物を飲んでたつていう話だ。それらしい奴を捜してるとここに着いたつてわけ」

ブルーポーションの買い付けが誰なのがはつきりした。依知川組の仕業というわけだ。だが篠崎の話が正しければ依知川組はブルーポーションを持っていない。まだ犯人が他にいる事になる。

「そいつは見事にあつてる」と夙夜もまた真実を話した。

「なんで解るんだ?」

「現場にいたしそいつとやつたからな」

「じゃあ聞かしてくれ、飲んだ後どうなつた?」

「そうだな。簡単に言えば強くなつたな」

「どいか満足げな表情になる篠崎。依知川組がどのよくな薬だと思つて購入したのかはわからないが篠崎の表情からすると多くは聞いていないう�だつた。

「で、俺は今からそいつに会いに行くわけ」

「話して聞いてないのかよ。うちの組が張り付いてんだ。病室は満員

御礼状態だぞ

肩を掴まれ動けなくなる。振り払う事も出来たがする必要はない。

「じゃあ源さんはなにやつてんのぞ」

「運転手。なんせ今回の件は幹部連中がやけに頭にきてるらしくてな。俺まで運転手扱いだ」

「それにしちゃ満更でもないよつだけど」

「まあな。ちょうど見舞いにもこれたからな」

鼻の頭を人差し指で搔きながら言つた。頬はどこか緩んでいてとてもその筋の人間に見えない。

「見舞いって」

「箱娘の第一被害者の依知川琴音だ。階は違うがここに入院してるんだ」

「そつか

仕事で関わった時、すでに被害にあつていていた人物の名前だつた。どういう間柄なのかは説明されてはいないが篠崎の言動や表情を見ていればなんとなく察しはつく。

「そんなわけだからここから先には行かないほうがいい。やつから何か情報が出たら俺のほうから連絡するから帰りな」

すでに携帯の番号は交換済みでいつでも連絡はとれる。

「そんなことしていいのかよ」

「ああ。洗敷さんから言われたんだ。報酬は情報で払うことだつてな」

仕事の報酬はまだ支払われていない。取り分けて聞くこともなかつた。箱娘は魔術師としての能力はいらすちよつとした身体能力の高さだけでどうにかなるような仕事つた。だから篠崎と共に箱娘襲撃犯だった樋上を追つていたとき千影から「必要だから受けた」と聞いた。その理由が少しわかつたような気がした。千影はここまで見通しての仕事だと受けたのだろう。

「なるほど。わかつた、ここは帰るよ」

これには納得するしかない。洗敷千影の名前が出された以上、夙

夜にとつてこれ以上ない信頼だ。

303号室による事はできなかつたがそれでも得た物はある。来た道を帰りはじめると「すまん」と篠崎が言った。

「源さんが謝ることじやない」

そう言い残して病院を後にする。篠崎の足音が遠ざかっていくのを聞きながら別れた。

帰りのバスは時間のせいか空席が多く夙夜は一人、空と近付く街の光景を眺めていた。眺める先にはなんでもない日常が繰り広げられている。背の高いビルに深緑地帯のないコンクリートの塊の中で今も人間は動いている。

胸がざわめきだすのを堪えながら目蓋を閉じると荒垣トウマたちの顔が思い浮かぶ。今もきっとせわしなく働いているだろう。自警団を名乗る傍ら本業の派遣会社の仕事も欠かさない。

昼と夜の生活を繰り返し日常は紡がれていく。

トウマをはじめとする自警団との関係は夜だけに限られていて昼間はほとんど連絡も取り合わない。しかし夜になれば昨夜のように一箇所に集まり酒を飲み馬鹿みたいに大声を張り上げる。土日ともなれば朝まで宴は続き昼に目を醒ます。

友達かと問われれば違うと言い、仲間なのかと問われれば違うと言いい、じやあ何なんだと問われれば知り合いだと答える。確かな気持ちとは裏腹に公言できないあやふやな関係が続く。

そのなかに一滴……青い雫が零れ落ちた。

今、目蓋に焼きついている物こそが繋がれた関係の間に割つて入るような気がした。彼らとの間に垂れた雫が埋まり集団を個に裂く。とてつもなく胸が痛くなり目蓋を開く。決してそんな事があつてはならないと固く誓う。

バスから降りるなり後藤の番号を呼び出し電話をかける。後藤は四コールで電源を入れた。

「どうした？ まだ昼間だぞ」

「ちょっと聞きたいことがあつてさ。最近、新宿辺りで新型の麻薬が出回つてるって話はないか？」

「……ないが？ なにか情報があるのか」

後藤の息を飲む音が聴こえた。彼は平静を装つていうようにした

が夙夜の耳には確かに動搖が聞き取れていた。

「特になしさ。ないならいいんだ」

「そりゃ」と言って後藤は電話を切った。

無音になつた携帯電話をしまうと事務所を目指して歩き出す。人の群れに混じつて一人歩くなか後藤は何かを知つていて踏む。後藤は金属二十五年以上のベテランだ。麻薬取締課ではないものの培つた仲間がいる。何度も話すうちに同期の中には幹部クラスになつた者もいて交友関係が続いているとも言つていた。警察の内部情報全てとはいかないが夙夜の動きが良くなるようにと働きかけてくれている。

夙夜に荷担する彼の行動は彼の信じる正義による行動だった。

その彼がどこか隠すような仕草をするということはまだ確信できていないのか隠さなければならない理由があるに違いない。後藤に寄せる信頼はトウマたちと何ら変わりなく存在している。

そうこう考えているうちに事務所の扉をくぐついた。千影はいつものように椅子に腰掛け紅茶を飲んでいる。白いカップには真紅の薔薇模様が刻まれており 型の取っ手には金が施されている。親指と人差し指でつまむようにして口元へ運ぶ、ただそれだけの動作があまりにも優雅で麗しかつた。

来客用のソファーにはいつ戻つてきたのか解らないアーサー・ライバックがいた。彼の前には何も置かれておらずどこからか集めてきた資料に目を通していった。夙夜が病院での出来事を話すとライバックもまた自分の情報を話したが一人の話には一切といつていいほど期待できるようなものがなかつた。携帯電話を取り出してみたが病院で別れたきり篠崎からの連絡はない。彼のほうにも何かあつたら連絡をしているはずが実はない。トウマ達も同様でいつさいここには手掛かりがない。

「収穫がないなんておかしい」

結局、朝から動いた割にはブルーポーションに対する情報はなかつた。

「手は抜いてないんでしょう?」

「やうやく

「もちろんですよ。トウマたちにも当たつてみたけど手掛かりは無いみたいですね」

「トウマ?」

知らない名前にライバックが首をかしげる。

「この辺りの自警団のリーダーさ、ライバックさんは?」

「俺のほうは少しだけな。新宿駅を中心に妙な連中が薬を売つてつて噂だ。噂なんだ、確かな情報じゃない。売人の正体や組織は不明らしいが確かにそういう新参者がいると、それぐらいさ」

そんなことは改めて聞かずとも想像はできる。昨夜、ブルーポーションが使用された時点でいくらか出回っている。残りいくつなんか不明だが売人がさばく前に捕まえる必要がある。ライバックの説明通りの代物ならばなんとしてでも食い止める。

「どこからの情報かしら?」

「俺の関係者だ」

「つまり政府の役人や警察よね」

彼の経歴を夙夜は詳しく述べない。ただ、それとなく話しに耳を傾けていると千影の言葉に該当する人物と繋がりがあると知る。

警察という言葉のなかに後藤はいるのかとふと思つ。ただの刑事がどれだけの情報を与えられているのか疑問が頭をよぎる。

「そういうこと。だから情報は正しいはず。なにも君らの情報筋を馬鹿にしてるつもりはない。解つてるだろ?」

「ええ、今回はそちらの情報が早かつた。それだけよ」

「そうかな」

「どういうこと?..」

ライバックが立ち上がり窓際へと歩き出す。彼の目に日差しがかかると眉間に皺を寄せて口を開いた。

「魔術師が寄せない情報つてのを俺が手に入れた。しかもブルーポーションを見つけたのは出回った後だ。この街にずっといたなら確かに情報は無くともなにか耳にしているはずだろ。それがなかつた

ライバックの語るとおりだ。夙夜は毎晩のように新宿駅にやつてくる。駅から事務所へと歩き繁華街を闊歩する。それは日課のようなもので露店を構える外国人から客引きさらには風俗嬢にまで声をかけられることがある。遊びに時間を費やす連中のなかには麻薬売買に関する話は事欠かない。ヘロインから始まりカクテルと呼ばれる合成麻薬まで噂は尽きない。だというのに今回のブルー・ポーションの話は目にするまで知らなかつた。

そこには絶対的な理由が存在する。

「相手は魔術師」

ライバックが口を開いたとき、ぞつとした。

夙夜の頭の中が空白になつたのだ。まるで自分がここからいなくなるような感覚に包まれた。

「そう考へてもいいわね。魔術師は基本一般人と接点を持たないから対魔術師除けの対策をしていればほぼ全ての情報をシャットダウントできるわ」と千影が話すとようやく呆然としていた自分がどこから戻つてきた。

驚くほど速く思考が進み答えにたどり着く。

「なるほど。それで俺がどこをどう捜しても見つからなかつたわけか。じゃあ打開策は?」

「魔術式を破壊する必要があるわね。そのためには相手の式がなにかを突き止める必要があるわ」

「ここ、洗敷事務所と同じだ。このビルには結界が張られている。洗敷千影が作り上げた魔術式によるもの、必要な人物以外は立ち寄る事はできない結界。ブルーポーションの売人が夙夜の目を搔い潜つた理由にもなる。相手が魔術師ならば出来る事。魔術師にしか出来ない事。この街で活動する魔術師は自分たちだけではないと改めて実感する。

得体の知れない者がいる。

普段は干渉しないはずの存在が動き出した。今朝、帝の言つていた魔術師による襲撃事件もそうだ。自分の周りで何者が動いてい

る。

特定できない相手に無言となつた事務所に携帯が鳴つた。荒垣トウマと表示された画面に飛びつくよう通話ボタンを押した。

「どうした?」

「今動けるかい? 例の物の取引現場に案内してあげる迷うまでもないとびつきりの情報だつた。

「本当か、助かる」

「売人との取引の方法は向こうが東口のロッカーに薬を入れる。こつちは南口のロッカーに入れて連絡。その後、鍵を交換して各自品を持つて立ち去る。どう?」

「何時だ?」

「四時」

「あと一時間か……」室内の二人に目を配ると二人の目と合つ。その目が何を言いたいのかは計らずとも察することができる。「わかつた。でも俺が行かなくても取引はやつてくれ」と告げる。

「どういう意味なのさ?」

「代わりが行くつてことさ」

返事を待たずに電話を切る。

「対魔術師用の術式なら俺が行けばいい、か

「ああ」

「絶対に成功するつて保障はないがそのほうがいいかもしねないな。相手の術式が働くのは避けたい」

「行くのは構わないが映像機器は持つてるの? できれば売人の姿が映つているものが欲しいのだけれど、もし記憶になにか干渉する式なら」

「俺の記憶は誰にも弄れないさ」

ライバックが人差し指でこめかみを突つつく。

自信に満ち溢れた表情に夙夜は頼る事にした。

「それもそうだな、君の脳を弄れるほどの魔術師は世界に数人……いや、それもどうかわからないな」と笑いながら千影は紅茶をまた

一口飲む。

荒垣トウマの連絡先をライバックに教える。時間はあと一時間。
ライバックは前準備のためにと事務所を出て行く。
「じゃあ行つて来る。少しの間待つてくれ。
去る前に言った言葉は自信に満ち溢れていた。

アーサー・ライバックの帰還は三時間後となつた。すでに日が暮れ始め事務所の外は橙色に染まつっていた。

夙夜はソファーで体勢を変えながらただライバックを待つばかり。千影が紅茶を淹れさせるが何度も飲むことはなかつた。ライバックはおろかトウマ達からも連絡がないまま時間が過ぎていつた。そのため正体不明の魔術師に頭を悩ます結果になつていた。

これまで他の魔術師と敵対したことはない。今回、敵とは決まっていながらブルーポーションを市民に売ろうとするならいつ接触してもおかしくはない。苛立ちよりも得体の知れない輪郭のない影に不安は募る。

師である千影は何も言わない。

必要ないというのだろうか、と横目にちらつと見るも氣にもとめていらない様子だった。だから夙夜もなにも言わず頭の中でひたすら想像と妄想を繰り返していた。

ようやくライバックが帰還した時には夙夜はソファーで寝転び天井を見つめていた。連絡してくれればいいのにと口を尖らせて言ったがライバックは愛想笑いもせずに抱えていた機材を事務所の古く廃品一步手前のブラウン管テレビに装着していく。シルバーの四角い機材は夙夜の知る物ではないがHDMI端子があることから映像機器だと判断はつく。またカードスロットが存在している。レンズがない事からおそらく映像を映す装置なのだろう。しかしHDMI端子はブラウン管テレビにはなくせつかくの高品質も赤白黄の三色線へと変換して繋がれた。テレビは電源コードだけ繋がれた状態で電源を入れても黒と白の波と雑音だけが映る。ライバックが繋げた機材の側面にあるボタンを押していくとテレビに変化がおきた。

「これで映るはずだ」

その言葉どおりテレビには十時線が入り四つに分かれた画面とな

る。画面が命を宿したように発色すると「取引現場、相手の使うロッカー前とこちらのロッカー前、それと使用した通路の映像だ。悪いが音はないぞ、とてもじゃないが拾えん」と言った。テレビ画面に映った映像が動きだす。一目見ればどこか解つた。右上は東口ロッカー前、左上は南口。どちらもロッカーの並ぶ壁が画面奥に見えていて人の行き交いが手前になる。ロッカーの蓋を開けば中身が確認できそうなほど鮮明な画だった。だが下側二つはよくわからない。どちらも歩行者の数が多すぎて壁も道も見えない。天井にぶら下つているはずの案内看板も映像が天井から映されているため映像に入らない。

「これどこなのさ？」

「東と南を繋ぐ一番速く動ける道だ。トウマと会って取引の方法を教えてもらつた結果だ。売人との接触は一度だけ。ここにトイレに向かう道があるのは解るか？」右下の映像、通路の端を指差した。人の行き交いは左右に動いているが、たまに指を差した場所へ入つていく人がいる。夙夜がうなずくと「売人はトイレで鍵を交換しろと言つてきたらしい。奴と接触するのはその一回だけだ」再びテレビから離れる。

再生された映像が流れ続ける。食い入るように見ていると「いよいよだ」とライバックが言った。彼の言うとおり左上のロッカーに大衆の流れとは別に一人、壁に並ぶロッカーへ向かっていく人物が現れた。非常に特徴のない若い男だ。体格は中肉中背で特に髪型も意識していないような横分け服装もTシャツとジーンズというどこのでもいる男だった。しかしその男のある部分だけが異様に他とは違っていた。

手にしているものは茶色の紙袋。それも硬く重そうな四角い形になつてている。かといって大きいようには見えず片手で十分だった。おそらく購入資金だ。男はロッカーの中からまるで指定されているかのように番号を見てひとつの中を開いた。紙袋を投入し鍵をかける。すると携帯電話を取り出した。

「この時だ。こっちの取り引きしてる奴と電話してる。このとき金を指定のロッカーにいれたって言つてるんだ。問題はこの後だ、右上」

言われたとおり右上に田を配るとありえない物体が歩いてきた。人間だらうという姿はしているが服装がまるで違う。まるで死神だ。巨大な黒い影がゆっくりとまるで歩を進めているというよりは漂つているようにロッカーへと近付いていく。じっくり見ると黒い影の正体はマントと帽子だと解る。

マントに帽子？

今はもう七月だ。気温は毎日三十度を超えるような猛暑が続いている。ありえない。何より周囲の人々はその人物に対し田を向けない。そんなことはないはずだ。あんな変な奴が目の前にいたら嫌でも見るだろう。

ロッカー壁の前にやつてくると黒い影の中からトランクケースが現れる。金属の輝きが反射する。左上の画面で男が携帯電話をポケットにしまうとまるで解つてているようにロッカーの蓋を開ける。今度はケースを開ける。カメラの位置はケースの中身をすべてくまなく映し出していてた。

ケースの中には海が広がっていた。一本の太さと大きさが手にしたものと同じだとするならケースの中には一百近いブルーポーチョンが並んでいる。黒い人物はロッカーの中にブルーポーチョンそのまま一本丁寧に並べて置いて鍵をかける。手品のようにケースがマントの中に収まるとロッカーの鍵を手にして踵を返す。いや、返したように見えたに過ぎない。カメラには黒帽子の下は見えない。体格はマントに隠れていて男か女かも解らないのだ。ただ黒い物体が移動しているにすぎない。

いつまう金をしまった男のほうはすでに左下の画面に映っていた。ライバックは左下の画面はいくつかのカメラに繋がつていて映像を切り替えることができると言つた。その通り男の姿が画面から消えると別のカメラに切り替わる。

相手側がロッカー前から消え右下のカメラに映りこむ。やはり周囲の人々は目を向ける事もない。その割にはぶつかりそうになるとすり抜けるように傍を通り。そして先に説明したトイレに繋がる脇道へと侵入していく。左下の映像でもトイレに通じる道へに入る男の姿が見えた。

「トイレの中は？」

「男のトイレを覗く趣味はない」

言つて馬鹿かと思った。トイレの中にカメラがあるわけない。映像は単調な人の行き交いだけを映して進んでいく。この間にトイレで鍵を交換しているのだろう。だがあの黒い人物とどうやって話をするのだろうか。あの黒い帽子の下にあるだろう顔を見て平常心でいられるだろうか。

思考に三分ほど費やすと先に男が現れた。黒いほうは差をつけて出てきた。お互い何も変わったところはない。先と同じ姿で現れると相手のロッカーを目指して歩き出す。どうやら鍵は交換したらしい。

右と左、ほぼ同じ感覚でロッカーの前に来ると男が先に鍵を差し込んだ。ぐるっとまわすと黒いほうも鍵を差し込み蓋を開ける。夙夜の目にはどうしても黒の人物の動きが奇妙見えて仕方がなかつた。腕の動き脚の動きがないように思える。マントがいくら身体を隠しても動く部位全てを覆い隠せるわけではない。人間が歩けば必ず肩が揺れる。

男がロッカーの中からブルーポーションを見つけるとポケットの中へとすばやく入れた。映像を見ている夙夜たち以外に誰も見ている様子はなかつた。黒のほうも同じだ。目を向けるほんのわずかな時間と同じ分だけ差を用いて金を掴む。またしてもマントの中へとしまつた。持っていたトランクケースは見えなかつた。

また男が携帯電話を取り出した。番号を入力しているらしい。耳に当たると黒いほうも携帯電話を取り出した。やはり黒い携帯電話で帽子とマントの間に差し込むように当てる。男の口が動きだした

ところでライバックが口を開いた。

「これは取引相手とだ。こちらがブルーポーションを受け取つたと連絡してる。これで取引は終了だ」

互いに目的は果たした事になる。

「映像は終わりなのか？」

「いやまだだ。取引が終わった直後、俺は走つて追いかけた。あいつらもそうさ、男何人で走つたと思う？ 答えは二十だ」

「結果は？」ライバックに答えを求めながらも映像から目を離さない。四つのモニターに全力疾走する男たちが現れる。どこからともなく走り出した男たちは一心不乱に黒い人物を目指してひた走る。映像が答えを出す前にライバックは「失敗だつた」と答えた。映像の中にライバックの姿はなかつた。

「俺は地上にいた。西側の出口を張つてたんだ。トウマたちは見たりおりそこらじゅうから走つていた。どの通路も塞いでる」

「なら捕まえられたんじや」

「それができなかつた」首を振つた。

映像が答えに追いつこうとしていた。黒いマントは近付く一団に気づいたのか動きを早めて出口を目指す。しかしその出口の先にはライバックがいるはずだつた。映像のなかから姿が消えると疾走する男たちが後を追つ。

「ここでフツて消えちまたのさ」

人差し指を口元で手首ごと回す。映像では男たちが出口でもめ始めた。ライバックが見逃すはずがない。確かに黒マントは出口をくぐつた。映像の場所は夙夜もよく知つてゐる。出口は一つしかない。姿を消せるはずはない。

男達のもみあいが続く中、映像が消える。いつたん黒いモニターに戻るとライバックがもう一度、映像をつける。また取引現場の映像が始まる。まだロツカーの前には誰もいない。夙夜の頭の中ではさつき見た映像が点々と一枚画のようになつてゐる。

再び取引が始まると「どう思つ、ぼうや。この映像から解ること

だけでいいから言ってみなさい」とこれまで口を開かなかつた千影が投げかけた。

まだ思考は続いており答えは出ていなかつた。上二つのモニターで取引が開始されると「まず、ロッカーのシーン」と声に出す。千影は時間を持つよには思えなかつた。

思考に追いつくよに黒い売人がロッカーの前に立つ。

「そう、ここ。どこもかしこもおかしいんだけどこの夏に厚着だ。しかも目立つ黒マントに黒の帽子、なのに誰も見てない」

周囲の人々は帽子とマント姿の人物に目もくれず歩いている。

「ならどうしてかしら?」

「おそらく魔術式において人の視線を避けているのか、視界に入らないようにしているかのどちらかだ」

魔術師のなかには普段から人目を惹く派手な服装をする者がいる。自身の魔術体系から派閥まで理由は多種多様。特に他国から流れてきた魔術師たちはそういう目立つ服装をする傾向にある。しかし魔術師の活動は人目を避けるように生活する。その場合、自身に魔術を仕込むのだ。それも簡単で苦にならない人目を逸らすというだけのものだ。夙夜も簡単に仕込むことができる。

「そいつを突破する必要があるな」

「ええ、このままライバックが一人で行動するなら別だけどさすがに一人じゃ無理でしょ」

「この仕事にはこっちの手助けが欲しいからな。魔術式とやらは破壊する必要がある。媒体が何かわかれればいいんだがな」

モニターに金とブルーポーションが投入される。黒い人物はトルンクケースをマントの中へと入れる。一人は歩き出し同じ場所を目指す。やはり黒い人物は人目にさらされる事はなく誰の目を惹く事もなくトイレへと繋がる通路へと足を運んだ。しばらく人の流れだけが映る。

取引を行なう二人が見えなくなるなか夙夜は自らの言葉に疑問を感じていた。

本当に人目を避ける魔術式なのか。確かに周りの目は「まかせる」だろう、だが自分はどうだ。今回の取引に自分が赴かなかつた理由には程遠い。人目を避けるなどという魔術式では魔術師の目は「まかせない」。そもそも情報を耳にしなかつた件に絡まない。結果、ブルーポーションは売られているのだ。

映像の中では鍵を交換した一人がロッカーの前にいた。トウマ側がブルーポーションを取り出すと黒い人物は金を手にした。続けて携帯電話で連絡をとりあう。

はじめ見たとき妙な違和感があつた。携帯電話をかけたとき妙に時間が食い違つていた。黒い人物のほうばかりを見ていた夙夜は電話の色に注視していて正解だつた。

「ここだ」と口にすると一人もモニターに目を向けた。

「この電話、電源が入つてない。少なくとも通話中じやないんだ、ただ会話しているつていう格好だけだ」

確信はある。少なくとも電話は発光するはずだ。帽子とマントの間が照らされるはずなのだ。なのに黒は一切変化なく電話を差し込んだ。

「ほう、それで」

どこか興味を持つたような千影の声に反応した。これまで自分の話があつていてるかどうか解らなかつたが彼女の言葉が一声あるだけで状況は一変される。夙夜の声に自信がついた。

「俺が思うにこいつはドールだ。取引を行なつた奴はなんて言つてたんだ」

「黒いやつの正体はわからないって。憶えていない、見ていないの一点張りでな……で、ドールつてのはなんだ？」

現場にいたライバックが取引に赴いた男と話していないはずがない。トウマ達もそうだ。映像に映つてゐる全員が接触したただ一人を問い合わせただろう。容易に想像できる。

「なるほど。人形というわけね」

「俺に解るよう説明してくれ」

二人の魔術師がお互にしか解らない言葉で意思疎通を図るといバックが両手を広げて要求した。

「ドールってのは言葉どおり人形ってことだ。魔術師が動かす人間に近い固体さ。マントの下は多分、空白か、それこそマネキン。そしてどこかで操っている奴がいる。ライバックさんが追いかけた後、一瞬で消えたって言つたな、それは術が消えたんだ。……いや、違う。結界の外へ出たんだ。千影先生、駅の一部に結界が張つていて人形がその外へ出たらどうなります？」

「そこで術式は途絶える。文字通り消えるわ」

映像の中で男たちが走り出していた。次第に黒い人物を追つて集まり全員がぼうっとなる。つまり取引は完全に終幕となつた。黒い人物は文字通り消えた。そこに結界の切れ目がある。

「つまりそこが結界とやらの切れ目だと？」とライバックは映像の切れ端に見える出口に指を這わせた。

「ああ」

「なら持ち去つた金は？」

「全部フェイクだ。本物はどこかにいる術者が持つてる。必要な時だけこいつが取り出すんだ。だからマントの下からケースを出した。しかもあの大きさだ、マントの中に入れて形を完全に隠す事なんてできない」

「ほう」

「あとは現場に行かなきゃ解らないな。それに場所を限定した結界なら何か結界を作動させているブツがあるはずだ。そいつを壊さなきゃならない」

「だが壊してしまつたら向こうにばれるんじやないか？」

「当然よ、結界の破壊に気づかない魔術師なんていないわ」

「そのとおりだ。タイミングが重要。

「せつかく売人の出現場所が確定してるんだ。逃す手は無いぞ」

「ならどうするんだ？」

「まずは駅へ行く。それと夙夜、お前の友達たちを数人集めてくれ。

あこづらも使つ

手際よく機材を取り外すライバック。夙夜は立ち上がりと千影を見た。

「それで千影先生、どうです俺の考え方

「合格よ、さうせ」とまるで母親のような笑みを浮かべた。

第三章 六話（1）

新宿駅周辺に魔術師らしき人物は見えなかつた。ライバックと二人して二日間、学校が終わるとすぐに走り回つた。一般人が入れる場所はくまなく捜したが目的のものは見つからなかつた。ほんとうに魔術師はいるのかと疑心暗鬼になりながらもいらないならという考えに答えは見つけ出せない。千影の笑顔を信じるしかなかつた。

連絡が来たのは前日の夜だつた。トウマからの連絡だ。翌日、朝の十時三十分に再びブルーポーションの売人と取引が行なわれる。相手の姿形さえ掴めないままだつたが夙夜は取引の現場に向かう事を決めた。

当日、学校には顔を出さず新宿駅のドトールにやつてくる。すでにトウマは幹部四人と仲間数人を待機させていた。新宿駅の各出口にも二人一組で配置している。これで逃すはずはないんだという大群が駅構内のいたるところに存在する。

朝一番の珈琲はエスプレッソで注文しバー カウンターに腰掛けた。右隣りにトウマが座る。トウマは砂糖五個は投入してクリーム三杯入れた甘くもはや珈琲ではない別の何かになつた液体を片手にしていた。

「取引まだ時間あるよ」と言つて取引の内容を話し出す。

取引内容は前回と全く同じ。こちらが金を西側ロッカーに投入し鍵を持つてトイレへ。売人も同じようにブルーポーションをロッカーに入れてトイレにやつてくる。トイレで鍵を交換し、お互い目的の物を手に入れる。なにもかも前回と同じ。

違つたのはこちらが用意する取引用の人材だけ。

「その取引は誰がやるんだ？ まさかトウマがやるわけないよな」

「そんなことしたらすぐ気づかれちゃうでしょ。俺が麻薬に手を出さないってのは皆知ってるんだから

「だよな」

「だから用意しました！」

バンとカウンターを叩くと同時に店員が「いらっしゃいませ」と新しい客に声をかけた。幹部四人が入り口に一瞬で移動しやつてきた客の姿を隠してしまつ。

「知つてるかな？ 夕夜君は男の娘つて」

「男の子？」

「違うよ、男の“娘”だよ。まるで女子にしか見えないっていう男の事」

「なんのことだよ」

テンションのグラフが目で見えるなら一人の方向は上下間逆になつていて、そこに幹部連中がふふふと笑いながらドールに妙な空氣を作り出した。すでに店員たちはあきれ返つて何も言わない。夕夜の目には隠された客のぴょこぴょこ動く端っこだけが目に入る。

「ではお披露目といきましょーーー！ 我らが自警団期待のホープ！ 渡瀬忍くんだ！」

幹部が左右に一瞬にして別れた。カウンターに置かれた珈琲を手にとる事を忘れてしまう。入り口でぴょこぴょこしていたのは夕夜よりも背が低く細い少女だつた。いや、美をつけてもいい。やや大きめの瞳に色素の薄い白い肌、ゴルフボールも転がりそうななで肩に細い腰。どこからどう見ても女だつた。

でも男だ、と夕夜は思った。

理由は渡瀬忍の服装にある。知つていてる高校の制服を着ているがどうみても男物だつた。あまりにも制服は似合つていなかつた。女が男の制服を着ていてるようしか見えない。

「は、はじめまして渡瀬忍つて言います」

ぴょこっと頭を下げる彼女……ではない彼の声はやはり女のもので電話で話せば絶対に女だと勘違いするほど。加えて袖口が手の甲を半分以上隠しているあたり少女率もぐんと増している。

「男なの、か？」

「だから男の娘だつて言つてるでしょ、夕夜君」

トウマが忍の隣に立つて肩を抱く。慣れていないのかそれだけで忍は頬を赤らめる。

おい、お前は男なんじやないのかとツツコミを入れたくなるがもはや女にしか見えなくなつっていた。

「この忍ちゃんが今日の主役だよ」

「本当にぼくがやるんですか？」

「うん」と満点の笑顔でうなずくと「がんばります」と両腕を胸の辺りにもつていく。ボクサーの構えにも似ていたがどう見てもそれは女の子の仕草だった。

「まあ誰がやろうと変わりはないだらうけどがんばれよ」

「はい！」と忍は返事した。

ようやく騒ぎが収まると再び席に着く。忍がミルクたっぷりの力フェオレを注文すると夙夜の携帯電話が震えた。篠崎の名前が表示されている。こんな朝早くからなんだと電話に出た。

「夙夜、お前さんもしかして新宿駅にいないか？」

「近くにいる。なにかあったのか、源さん」

「いやガキどもがそこらじゅうにいてな。もしかしてと思つたんだ。あの薬を追つてるんだろ？」

病院での出来事が甦る。篠崎は夙夜がブルーポーションを狙つている事を知つてゐる。おまけにトウマ達の仲間がそこらじゅうにいる。それだけでも自分がここにいる事を知らせているようなものだ。おまけに篠崎が運転手として借り出されるくらいの幹部たちが病院に押し寄せていた。依知川組も頭にきて追つかけている。ブルーポーションを仕入れたのは元々彼らだ。

「依知川組も狙つてるんだよな」

「ああ、だから駅の中にやたんまりとうちの奴らもいるぞ」ガラス壁ごしに構内を見渡すがそれらしい人物の姿は見えなかつた。それでもこうやつて電話をかけてくる辺りどこかにいるのだろう。緊張が増した。

「ありがとよ」

電源を切ると「誰から～」トウマが身体をくつつけてくる。忍とは違い冷静に席へ戻るようすに押しのける。

「知り合い。今日の取引は大勢になる、できるだけスマーズに終わらせよう」

「十分スマーズよん。南口ロッカーのすぐ傍にだつてめっちゃいるしね」

口振りは変わつていなかつたが目は笑つていなかつた。電話の相手が誰かまでは悟られていないだろうがこの駅構内の状況が芳しくないことはトウマも気づいてる。幹部連中にしてもそうだ。夙夜が目を配ればせわしく電話で誰かと会話している。おそらく配置についた仲間からの連絡だ。依知川組の動向もそのなかに入つている。

最後まで話していた納屋が電話からはなれると四人で話をあわせる。構内にいる仲間たちは全員の指揮系統がばらばらでトウマから四人へと、四人からさらにチームのリーダーへと伝わる。四人の間で報告がまとまるとき夜たちのところまでやつてきた。こういう時、口を開くのは納屋の仕事だ。

「トウマ、準備完了だ」と渋くクールな声で囁く。

取引の準備は完了した。あとは店内でゆつくりとカフェオレを飲んでいる男の娘、渡瀬忍が行動を開始すればいい。取引までの時間はまだ少しあつたが夙夜は立ち上がる。エスプレッソを喉に流し込んでカップをからにした。

「俺は俺の目的に向かう。そつちは任せる」

「オッケー、オッケーよ。夙夜くんへの連絡は俺の携帯でするから鳴つたら出でね」

「ああ解つてる」軽く笑つて店を後にする。

あの黒い人物との取引はトウマ達に任せればいい。そう考えて店の外にでるとどこかで見たような男たちがそこらじゅうに立つていた。二十代前半までは夙夜を見れば頭を下げる。大人の連中は目を合わせれば誰でも喧嘩をはじめそうなほど気を張つていた。

問題は依知川組だ。

時を同じくして新宿駅のすぐ傍。列を形成し客を待つタクシー乗り場に数台の黒いセダンがやつてくる。車から三人ずつ降りると運転手は地下の駐車場を目指して走つていった。タクシー乗り場には全員で十二人が集合となつた。集合した面子は歳も性別もまばらで統一されていたのは服装だけだった。炎天下の中、十二人は黒のスーツに袖を通して襟元のボタンも一つ残らずつけていた。窮屈なままで頑なな姿はつま先にまで緊張感を伝えており一人が前に出て何か言うと散らばつた。

それは夙夜がドトールから出た直後のことだった。

黒いスーツの集団が散らばり方々へと駆けて行く。車を置いた運転手達も同じだった。出口付近、電車乗り場、トイレ、構内に出店している商店。運転手を含めて全員で十六人が構内に広がつた。

うち一人が足を止めたのは自分の持ち場へと向かう途中だった。カツカツと音を響かせてハイヒールの音が聽こえなくなる。その姿を見ていた同じ黒いスーツの男が耳元に手をやって襟元からマイクを取り出した。

「どうした？ 楠木」と耳元で声がする。

声に背筋が振るわせられたように一本の槍のように鋭くなる。声をかけられたのは楠木朱美。新宿署の新米刑事である。彼女は朝一番で今回の任務に借り出された。同じく散らばつた黒のスーツたちも刑事である。新宿駅に十六人の刑事が集合した理由はひとつ。依知川組の動きである。彼らが麻薬の密売に手を出している事はもう数年前から知つていた事で何度も組員と売人を捕まえては刑務所へと放り込んだ。だがそれでは核たる依知川組を潰す事は出来ない。だが、数日前のこと。匿名で一報が入つた。依知川組がこの日、新宿駅で何かをすると。そしてその現場には麻薬の絡んだ取引が行なわれるのだと。一報は誰のものか知れなかつたが後藤がその情報の筋を確かだと断定した。一報を持ち込んだのは彼だつた。情報の

提供者の名前は明かさなかつたが彼は絶対だと仲間を説得したのだ。

「あの……後藤さん、例の子を見つけて」

止まつたままの楠木は視界のなかに入つた少年の姿を追つていた。

別の場所にいた後藤の耳にも彼女の声が届いた。

「夙夜か？ この時間だつたらまだ学校だろつ。見間違いじゃないのか」

「本人ですよ。後を追います」

誰かが持ち場に向かえと言つた。リーダーだ。耳に装着しているイヤホンとマイクは全員と繋がつてゐる。楠木の声は十五人の仲間に伝わつてゐる。リーダーの声とは違ひ五等が「……かまわんが騒動を起こすな。接触しても平静を保てよ」と楠木に声をかける。彼女は消えそうな後姿を見て「了解」と言い歩を進めた。

少年の姿はどこへ向かつていくのかわからない。西に東にとせわしなく動き回る。とても駅の中を動く足取りは目的がないように見えた。そして楠木は自分に気づいていない事を確信してゐた。少年は西側エリアの途中まで足を運ぶと左右に首を振つて何かを探し始めた。構内には電車の到着で出現した人の群れが少年の姿を隠す。立ち止まつていた少年を逃さぬように走り出す。

やがて少年人ごみに紛れるようにスタッフ用の通路へと入つて行つた。スタッフ用の通路を使う必要など少年にはない。なにがあるのだ、と楠木は全力で疾走する。人の川を搔き分けて角を曲がり後を追う。そう思考が先走る。気づかれてなどいないので。そう自分を冷静に保とうとするが現実は違つた。

顔が青ざめた。

角を曲がり人の流れと切り放された瞬間。背後を取られ身体の自由は封じられた。

「そろそろか……どうだ、動きは？」

東口のロッカー前に一人、男が立つてゐた。アロハシャツを着た眉毛がないスキンヘッドだ。誰が見ても普通じゃない。あきらかに

その筋の男。そのとおり依知川組の構成員だった。彼はロッカーの見える位置で携帯電話片手に視線を向けていた。口元には髭がびっしりと生えていた。

「ありません。でも妙な外人がいます」

視界のなかに妙な人物がいるとすれば一人だ。壁に背を預けている男はやけに存在感が強かつた。

「どんな奴だ？」

「背が高く、体つきのいい茶髪です。腕つ節の強そうなやつですよ」

「売人の姿はあるか？」

「いや……それらしい人物は……っ！」

言つた直後に自らの言葉を否定した。外人のすぐ傍をすり抜けるようにその人物は現れた。まるで陽炎のような黒い人物だった。男はあるがままに報告したが視界がぼんやりして直視できない。まるで砂漠の中にいるみたいだった。

「現れました」

「よしうまく尾行しろ。B班、ガキどもはどうだ？」

電話の相手は別の相手とも話していた。どうやら相手のほうは言い返事を貰つたらしく再び黒い人物を見ている男に声をかけた。「尾行しろ。どこかで接触する。取引の終了が俺たちの狙い目だ」「了解」とはいったものの男は困惑した。黒い人物は直視できないのだ。まるで霧のようなもので幻にも見える。近付く事さえ恐ろしい物体にも感じる。身体から汗が噴き出し足が震えていた。この道に入つてもう十年だというのに身体の震えはまったく初めてのものだつた。

身をよじる。楠木朱美は一種のパーティクに陥つていた。角を曲がつた直後、誰かの手が口を通り過ぎ口を塞いだ。甘い香りのする匂いとともに両腕を絡め取られ壁に押し付けられる。慣れようにも力が入らず抵抗することができない。

腕の自由を奪つていた手が離れるが相手は身体を密着させている。

腕はまだ自由にならなかつた。手は襟元のボタンをちぎつて侵入してくる。熱い指が肌に触れたとき眼を閉じた。

(……いやつ)

何をされるか解らない恐怖におびえると指が止まりマイクを掴んだ。手が自分の身体を触ろうとしているのではないと一瞬、安堵する。しかし乱暴にマイクとイヤホンを千切られ足元へと落される。マイクはばきつと音を立てて壊された。

「なんでここにいるんだ?」「

ようやく身体の自由が戻る。押さえていた身体を反転させて乱暴者の姿を見る。するとさっきまで自分の追っていた少年、東堂夙夜がいた。夙夜の背は低く、楠木の背は高い。楠木の目線には夙夜のおでこがあつた。

「なつ! 君こそーーーっていうか触らないでよ、ひやつ!」

振り返った力が強すぎた。ちぎれた襟元のボタンが胸の反動でもう一つちぎれた。純白のブラジャーが夙夜の目の前に露わになつた。急いで胸を隠そうとしたが抱えた腕によつてできた谷間は結果的に男を誘う形になつた。

「変な声出すなよ。無線使つてることとは後藤さんたちもいるのか?」

顔を真つ赤にして恥ずかしがる楠木に反して夙夜は冷静そのものだつた。まるで興味がないように声色を変えずに聞く。さすがにその態度には残念がつた。

「君に話す必要はないわ

「あつそ」と素氣ない返事。

俯く楠木の目にはマイクもイヤホンも無残な形で転がつていた。

「なんで俺の後ろをつけたのさ」

気づかれていないはずはなかつた。夙夜はいつの頃からか楠木の視線に気づいていた。知つてもなお行動しなかつたのだ。

「気になつたの。後藤さんは君を買つてるみたいだし。こんな時間に駅にいるなんて不自然でしょう。学校はどうしたのよ

「休んでるよ」と悪びれる事もなく言った。

「義務教育でしょ。今からでもいいから行きなさいよ」

はあと溜め息をついて首を振る。またに教科書のような硬い人物だと呆れるだけだった。

「なんことできるかよ。とにかく俺のことは放つておいてくれ」

「着いてこられたらヤバイことがあるってこと?」

「言えない。そつちも仕事に戻りな。俺のことは見失ったとか言ってさ」

「ふざけないでよ。それに」

マイクもイヤホンも壊したじゃない。そう言おうとしたが夙夜は強く壁を叩いた。またしても壁に背を預ける事となつた。少年の姿からは考えもつかない威圧の目を見た。

「ふざけてない」

強い声だつた。仕事だけじゃない、今まで生きてきておそらく初めて脚が震えた。身体の大きさなど超越した第六感のようなあやふやなもの。だがそれは確かに身体を覆い尽くしていた。

「もし次、邪魔したらちょっと乱暴にさせてもらうよ」

携帯電話が鳴ると夙夜は誰かと話し始めた。声は出さなかつたが楠木の耳には男のそれも若い声がかすかに聴こえた。電話を切ると「じゃあな」と言つてスタッフ用の通路を駆け出した。

「なんのよう、あのコ」

楠木はといふと追いかける事が出来ずただその場にへたれこんだ。まるで放心してしまい情熱の欠片もなくなつていた。いや、情熱の炎が色を変えて燃えていた。

第三章 六話（一）（後書き）

今回、話が長いので一回に分けています。

夙夜は無人のスタッフフルームを伝つて疾走した。再び構内に戻つて目指したのは西側だ。楠木とのやり取りの間、かかつてきた連絡によれば取引は行なわれトイレで鍵の交換を行なつたとのこと。時間は残り少ない。早く結界を見つけ出さなければならない。

この二日間、搜しまわつて解つたのは結界の発動条件が決まつているという事だ。確定ではないがおそらく取引の間だけ魔術式が作動し結界を造つている。その可能性が高い。取引が終わるまで後、二十分もない。あとは互いのロッカーへ向かい物品の確認をするだけだ。

構内で残すところは西側だけとなつていて、自分の魔力に干渉する全ての気流を感じとる。魔術師が術を使うとき少なからず流れが変わる。魔術師は魔力と呼ばれる力を使って術を行なう。魔力は空気のようなもので目に見えないが使用することで肌で感じ取ることができる。

今は夙夜自身が探知機となつていて、魔術師の気を無意識のうちに遠ざける魔術式であろうとも現場にいればさすがに完全に発動するはずはない。走り回る探知機は肌にざらつきを感じとつた。やすりで擦つたような感触が脚を止めさせた。

あきらかに不自然な一角が目の前に広がつていて、この新宿駅で人間が一人もいない場所など存在するはずはない。必ず誰かがどこかにいる。しかし夙夜の目の前には今は誰もいなかつた。歩き通りの姿さえもなかつた。

不気味なまでに無人の一角はポスターが何枚も横並びにされていた。夙夜はポケットから護符を取り出してポスターの上に貼り付ける。白くひっぱればすぐに破れるような護符には赤い文字がびつりとかかれていた。魔術師は総じて杖を振るう。術式の作動は杖によって行なわれるものが少年は杖を持つていない。弟子になつて

から変わっていない。今も少年は護符によつて術式の作動を行なう。ポスターの上から貼り付けると夙夜は口を動かし何語とも取れぬ言葉を呴いた。

まるで電源スイッチのようだ。

口にした言葉が意味するものはひとつ。携帯電話が唸りをあげる。「そつちはどう? 準備完了かな

トウマの声だった。

「目的の物を見つけた。準備完了だ」

トウマたちのほうがどうなつているかは聞く必要はなかつた。きっと今頃、渡瀬忍が孤軍奮闘しているに決まつてゐる。鍵の交換を行なつてからの時間を考えればロッカーの前にやつてきている可能性がある。今いる場所からならその姿を見るまでそつ時間はかかるない。

「で、どうすんの? 捕まえちゃう?」

「いや、俺に任せてくれないか」

「どう?」と、夙夜君とあのライバックつて外人さんとで全部もつてつちやうつもり? さすがにそれは欲張りすぎでしょ

「警察がいるよ」

「知つてる」と即答。

「じゃあ依知川組

「うそ

「マジ

「あつちやー……あんまり動かないほうがいいみたいね。ブルーポーションのほうはロッカーにしまつたままにするよ、鍵はあとで渡す

す

「サンキュー

「でも、じつちは勝手に動くよ。誰が捕まえるか勝負つてことでオーケー?」

電話の向ひでこやつとしてこつたトウマが思い浮かんだ。

「勝手にじりりよ

「勝手にします」とそれこそ勝手に携帯電話を切った。

東堂夙夜が電話を切った途端、構内に怒涛の如く足音が響きだす。怒号が飛び交い男たちが駆け出した。馬鹿騒ぎが起きたのだ。荒垣トウマがゴーサインを全員にだしたのだ。若い血潮がほとばしるのか見えない情熱に浮かされたのか新宿駅は騒然となつた。

若い血潮は構内を揺らし感化されたように中年の男たちまで走り出した。

全員の目的は一緒だつた。

ある一角に向かつて全力でダッシュしている。

南口のロッカーへと向かつて爆走する集団は誰が一番乗りするか大いに盛り上がつていた。そのうち黒いスーツの刑事たちまでもが集団に加わつた。

ロッカーの前にいたのは黒い人物。

帽子とマントで正体を隠した人間がいた。

集団の先頭にいたのは誰であろう率先して走つていたトウマだつた。トウマは迷う事無く黒い人物の肩に手を置いた。

「俺が一番だ」と勝ち誇つた声をあげた瞬間。掴んでいたものは消えた。あまりの出来事に勢い余つてこける。背後から迫る人間のビッグウェーブに身体はどんどんと押し寄せられロッカーの前は人間の団子が出来上がつた。

誰がどうなつたかはわからない。一同が正気に戻り立ち上がると無言のにらみ合ひが数分続いた。誰も何もいわない。自警団、依知川組、警察……三つの組織が一堂に会したが何も話す言葉がなかつた。ばらばらになつていたメンバーがそれぞれの仲間の場所へと戻ると最初に依知川組が退散した。そのなかには篠崎源一郎がいた。彼の目は東堂夙夜を捜していたがいなかつた。

次に警察が動く。一人、前に出たのは後藤だつた。この騒動の正体を掴むべくリーダーである荒垣トウマに近寄ろうとするとモーゼが十戒で見せたようにメンバーは左右に広がり道を作つた。

「なにをしてたんだ？」

「べつに。かけっこかな、俺たち皆暇なのよ。エネルギー余つち
やつてるし」

「なら外でやれ」と荒げる事無く言った。

二人の間、目と目で何かしらの合図がつたのだ。他の刑事には見えない合図が。それはきっと一人の少年の居場所に違いない。しかしその人物はここにはいないのだ。一人のやり取りが終わると自警団を名乗る若者たちは出口へと向かつて歩き出した。

警察はおろか誰も何も得るもののがなかつた。ただ一人を除いて。

騒ぎを遠くに見て大笑いする男がいた。男は笑いながら走つていた。誰もが男を気狂いのように見て避ける。他人の目を気にしない男はただ馬鹿な奴らがいたもんだとばかりに笑いながら西口地下駐車場へとひた走る。しかし足は重く走つているといつても駆け足程度の速度しかない。なぜなら手には重く大きいトランクケースがあつたからだ。

「ウヒヒヒッ、馬鹿だ、馬鹿だ。あいつら警察もヤクザも馬鹿だぜ
まつたく。お前らなんかに掴まるかよ」

駐車場へと踏み入ると携帯電話を取り出した。器用に片手で呼び出した相手と繋がると「こいつは取引は終わつたぞ。へへつ、こいつを使えばちょろいもんだぜ。一本で十万ぽんとくれたからな。すぐそっちに行くから車の準備してくれよ」とポケットに入つた自殺束を叩いた。

電話の相手は無言のまま電源を切つた。

再び足を動かした直後、男の顔から笑いが消えた。彼が誰にも見つからずに逃げ果せたのは“こいつ”的に他ならない。男のポケットには十万円の入つた封筒ともうひとつコインが入つていて、金色の王様が彫られた硬貨。それが結界の発動を促す道具だつた。今も結界は張られたままのはずだつた。魔術師の目を背け自警団、ヤクザ、警察の三組織を欺く術式。しかしその結界は男が駐車場へ

入った瞬間に消滅した。

「ど、どうなつて……くそつ。なんかヤベーんじゃね」

勝ち誇っていた表情が突然青ざめていく。今まで以上に力を入れて走りだす。だがその足もすぐに止まってしまった。前方に誰かがいると感じた瞬間に男は恐怖を感じたのだ。小さい身体の少年が一人。二、三発殴れば倒れるんじゃないかといつほどの子供に男は恐怖した。

「な、なんだよ。お前！ どけ！」

精一杯の強がりだつた。

「お前が売人の正体か」

現れたのは誰であろう結界を破壊した東堂夙夜だつた。ロッカーの前で一同が呆然となつた後、結界を破壊し男の魔力を追つていた。誰の目にも届かない場所で一人、犯人を追いかけていたのだ。結界が壊れた時、男のポケットの中にある「コインが手掛かりとなつた。

「あつ？ どけつつつてんだろ！」

道を譲る気のない少年に強く言つがそんなものはなにも意味がなかつた。

「そのケース、悪いが頂く！」

「ひつ！」

夙夜の身体が伸びるように跳んだ。一人の距離は一瞬にして縮まりケースに手が届きそうになる。後一歩だつた。男は戦う気などなくただ怯えていただけなのだ。邪魔さえなければケースは夙夜の手に収まつただろう。

二人の間に星が流れたように光が溢れた。

光は殺氣を放ち夙夜の袖を斬つた。足を踏ん張り後方へと跳ぶ。目に入ったのは黒い斬撃だつた。鈍く銀色の光を放つ物体は一目見れば刀だと判明する。思考よりも直感がものを言う。剣先に宿つた殺氣が強かつたため避けられた。動物の直感が命を救つた。

「りょ、龍馬……」

飛び退いた先にいたのは長い髪を生やした侍だつた。男が龍馬と

呼んだ侍は黒い羽織を着ており時代錯誤の風体で構えていた。夙夜は侍から魔力を感じられなかつた。異常なまでの殺氣を放つてはその手にある刀に他ならない。腰元には鞘が掛けられている。

「鞘と鍔に桜の紋が彫つてあつてな」

帝である天元斎の言葉が甦つた。言葉どおり鞘と鍔には桜が彫ら
れている。刃の長さも話どおりに長い。

「少年、ここには退いてもらひ。退かぬならばこの刀にて裂くぞ」
天元斎の話によれば刀の長さは増える。どこまで伸びるかは不明
だつた。ふところに飛び込むにはつりあいが取れない。ケースを抱
える男ががぐがくと震えるなか夙夜と侍のにらみ合いが続くことと
なつた。

（どうすればいい。いちかばちかやつてみるか）

武器がないわけではない。今の状態でも夙夜は炎を起す事ぐら
いはできる。刻一刻と進む時間の流れに身を任せていると痺れが切
れそうになる。

時間の流れを斬つたのは男三人の誰でもなかつた。

「そこの三人！ 手を上げなさい！」

車の影から突然、一人の女が現れた。あの騒ぎの中にいなかつた
一人がそこにいた。楠木朱美だ。彼女は手にした拳銃を両手で構え
て威嚇する。しかし拳銃の存在など侍にとつて取るに取らないもの
だつた。殺氣は夙夜から楠木のほうへと流れ躊躇なくなぎ払われた。

「なつバカツ！」

楠木は何が起きたのか解らなかつた。ただ目の前に夙夜が飛び出
し赤い血が飛び散つた。刀の刃が届くはずのない距離だつたが確かに左腕の川は裂かれ肉に切れ目が入る。血が噴出し宙に舞つた。

楠木の身体を突き飛ばし自分の後ろに匿つた。膝を付いてもなお、
侍から目を背けなかつた。

「おい、龍馬！」

「エンジンは温めてる。さつさと逃げろ……」

「そいつは無理な話だ」

声がした瞬間、駐車場の奥で一台の車が火を噴き飛んだ。天井にぶつかり粉々に吹飛ぶ。爆風と炎を背後に一人の男が現れたのだ。男の名はアーサー・ライバック。これまでどこにいたか不明の男が一人出現した。

「ひいっ！」

「しまつ！」

「相当驚いたようだな。原因はこいつか？」

手には男の持つケースと全く同じものが握られていた。

「……貴様、いつのまに」

「簡単なトリックさ。気を惹いてくれた優秀な仲間がいたおかげだ。そこの女刑事、夙夜なら大丈夫だ。顔を見れば解る」

斬られた痛みなど歯を噛み堪えればなんともない。少年の意識ははつきりしている。

「ライバックさん、あいつのケースを！」

「なあ侍さん、ケースの中身をくれないか？ 渡せば助けてやるぞ」「できんな」

侍の目がライバックに向く。どちらも退く気はない。まさに戦士の一人がにらみ合つなか一人、もう立つてさえいられない男が背後にいた。

「こ、こいつが欲しいのか？ 欲しけりややるぞ。だけど俺は見逃してくれよ、な、な？」

「お仲間はああ言つてるがどうする？」

「決まつている」

男が泣きそうな声をあげたとき侍の心は決まつていた。一瞬の斬撃は男の身体を文字通り真つ二つに切り裂いた。さらにその身体を噴きだした血」と刀の中に吸収した。男の存在自体が消滅してしまつた。残されたケースがその場に残つた。

「こいつを殺してケースを回収するまでよ」

「どうした？ やりんのか？ お前はそこの子供と違つてやれるだろ？」

「誰が子供だ！」

「その刀とやる気はない。」うちも死ぬ気はないからな」

「なら少年、おぬしはどうする？」

家に置いてきた刀を持つてくるべきだった。今更後悔しても仕方がない。

「ならば」と侍はコインを一枚ポケットから取り出すと指で弾いた。宙を回転しながら跳ねる。受け取る者はいなかつた。侍の姿は忽然と消えコインだけがその場に金音を響かせた。

「夙夜、怪我は？」

「大丈夫さ。すぐにふさがる」

傷口には護符を貼つていた。血は流れていない。夙夜は傷口ではなく自らの失態を噛締めていた。

「刑事さん、キミにこの場を任せると。いいな、余計なことは言つな、車が爆発した。それだけだ。行くぞ夙夜」

まだ駐車場では車が燃えている。ライバックが夙夜を連れてどこかへと行つてしまつと一人残つた楠木は携帯電話で後藤を呼び出した。事の次第をなんとか事情をつけて説明すると後藤は俺に任せると言つてすぐに消防車を手配した。

侍によつてばつさりと斬られてしまつた売人は見つからなかつた。侍の姿もその後を追えるはずはなく彼は忽然と消えてしまつたのだ。一時は騒然となつた新宿駅は静けさを取り戻しだだ一人、渡瀬忍がブルーポーションが一本入つた小包を抱えて戻つてきた。場所は西新宿のビルの隙間。荒垣トウマの勤務する派遣会社のすぐ傍である。部外者といえば東堂夙夜とアーサー・ライバックの二人だけだ。取引現場に残るわけにはいかない。散々となつた依知川組の構成員もどこに潜んでいるか解らない。できれば人目のつかない場所が良かつた。

渡瀬忍が今日の収穫物をアーサーに渡すと彼はにやりとした。取引に使つた一本五万円の計十万円は戻つてこなかつたが成果は得られた。部外者二人は西口地下駐車場を去つた後、怪我の応急処置とトランクケースの中身を確認した。夙夜の怪我は持つていた護符を貼り付けると次第に回復し今では傷口が塞がつてゐる。強力なバンドエイドとでも思つてくれると助かるとライバックに言つた。トランクケースの中身はというと百本のブルーポーションが均等に並べて入つていた。どこにも空きはなくおそらく新品のケースなのだろうと思わせた。

取引はこれで完全に終了となつた。

売人が死亡した事をトウマに告げると彼は何も言わずにうなづいた。正体不明の侍については語らなかつた。それ以上に追求もしなかつた。もしなにかあればまた合流する事になる。トウマは自分のやるべき事をすでに念頭においているようである。ライバックの話によればブルーポーションは約五百本。残り半分以上ここ新宿にあることとなる。

ともあれ、売人は消滅しこちらの手にはブルーポーションが手に入つた。依知川組は者の見事に敗れ去り警察は手柄なしに署へ戻る。

俺たちの勝ちだとトウマは腕を振り上げ叫んだ。仲間達は皆で腕を上げリーダーに大声で賛同した。

翌朝、ライバックは帰国となつた。またしても空港へとやつてくると彼は手にトランクケースを持つて立つていた。見送りにきた夙夜は何も持つていない。ケースの中身はブルーポーションだつたが検査は問題なく通つた。検問に引っかかるないところを見るとおそらく持ち込んだときも同じだつたのだろう。元よりその薬物は日本で作られた物ではない。

「結局、何本集めたのさ？」

「ケース一箱に百本とばらの五本……全部で百五本だ。ああ空を合わせればもう一本だな」

映像を撮りながらの最初の取引で得た一本。夙夜が夜道で拾つた空の一本。一度目の取引で手に入れた一本。そしてライバックが奪つた百本入りのケース。これが結果だ。

「半分以下だな。いいのかよ、こんな状態で帰つて」

「後はこの国の奴に任せるさ。とくにあの侍はお前がやるしかないだろ？ あの刀だつて知つてゐみたいだしな」

「そう、だな」

心当たりはある。

ライバックを迎えて来た田、ここで会う少し前のことだ。帝との話である刀について触れられた。

名を桜紋鴉という。

東堂夙夜のために作らせたという刀。

侍がなぜその刀を手にしていたかだが襲撃班なのだろう。ブルーポーションに関わっている犯人たちは必ずどこかで繋がつてゐる。今回、取引の際に持ちいれられた魔術式を封入したコインも気に入ることない。まだなにひとつ解明されていない。

「魔術師たちの相手つてのは好かないんだ、よろしく頼むよ」

「もちろんだ、俺だつてこのままで終わらせるつもりはない」

呼び出しのアナウンスが空港に響き渡る。

「時間だな。それじゃまたな」

「ああ」

名残惜しい別れだが時間がきた。二人はそれぞれ行く先に目を向けて歩き出す。

西口地下駐車場での一件は一人の女につらく響いていた。楠木朱美の頭の中では侍の斬撃と爆ぜる車と少年の血が離れないままだった。駐車場の火災は車一台となつたがその車の持ち主は割り出せなかつた。

新宿で何かが動いているということは後藤も他の刑事達も口にしなかつたが感じていた。刑事たちの住処では散々な目にあつた十六人が茶を飲んでいた。

「みんな聞いてくれ！」と部屋全体に聞こえるように男が言った。この新宿署の刑事課家長である。後藤、楠木の上司に当たる彼の隣には若い男が立っていた。

「本日イギリスから我が新宿署にやつてきた小塚英太郎君だ。彼にはまじかに迫る……ええ……シエラ。シエラのライブの警備隊長として指揮してもらうことになつてている。小塚君、挨拶を頼む」

要領を得ていなければ歯切りの悪い説明だった。

「おはよう。紹介に預かりました小塚です。迫るシエラ・ライブの護衛でやってきた。が、それだけではなくこの地域のゴミを一掃するため力を貸していただきたい」

とても人間とは思えない冷たい声をしている。目も鋭く刃物のように光っていた。楠木だけでなく室内にひしめく刑事達は背筋が凍るような思いで彼を見る。細く肉体的には負けるはずのなさそうな男達が単純に恐れを感じていたのだ。楠木は彼の言葉を復唱するようになつて、「ゴミ」と呟いた。

その声はとても聽こえるようなものではなかつたが小塚には聽こえたようで「そうだ、『ゴミだ』と話を続けた。

「私は昨夜この街へやつてきたが酷いものだった。若者はモラルを持たず好き勝手に暴れ大人は札束で少女を買っている。挙句の果てには自ら実を売る少女までいる。奴らはゴミだ。ゴミでいい。皆でこの新宿を美しい街にしようじゃないか」

「この街に美しい街にしようじゃないか」

「「」、小塚君……」

「課長が咳払いをすると「いや、すまない」と息をつく。

「この街を綺麗にすることも大事だがこれから名前を呼ぶ者にはシエラのライブを成功させることも念頭に入れてもらいたい」

小塚が名前を呼ぶ。呼ばれた刑事は返事をする。小塚の声はまるで刃物のように鋭く呼ばれただけで緊張した。呼ばれた後藤も緊張していた。同席している刑事のなかで彼はもつとも年齢が高いためその緊張が周りに伝わるとよけいにぴりぴりとした雰囲気になる。最後に呼ばれたのは楠木朱美だ。シエラという名前に彼女は一切の知識をもつていなかつた。

「君達には特別部隊としてライブの警備をしてもらつ、以上だ」

呼ばれた刑事たちは小塚から資料を受け取る事となつた。

資料にはシエラ・ザード・エルムンク・ビビッドハートという名前が書かれており巨大な船とライトに照らされたどことも知れぬ海があつた。

第二章 七話（後書き）

これにて、第二章は終了となります。ついで、更新は毎週金曜日となります。

新宿駅での騒動は一先ず幕を落す形となり駅付近には平穏が戻った。日は過ぎ東堂夙夜は中学校生活最後の夏休みをむかえた。夙夜は一歳が違つており順調に生活していれば今頃は高校二年になる。周りと違う少年は同級生とは遊ぶ事はなかつた。かわりに夏休みの序盤となる一週間を歳の離れた仲間たちと過ごしていた。

アーサー・ライバックの来日より活性化したブルーポーション撲滅の運動が荒垣トウマとその仲間達によつて新宿区全体で繰り広げられている。しかし売人たちは次々にブルーポーションの販売を行いつまで経つても根絶に至らない。夙夜もまた売人追跡に協力していたが後一步のところで逃げられた。

駅の地下で見た侍はあれ以来現れていない。結局、魔術師の正体にしても不明のままだった。

暗い地下の部屋。再びやつてきた帝との接見に夙夜はやつてきていた。帝が夙夜を呼んだのは先日の深夜。いつものように突然、理由もなく呼び出し会う事を強制した。会つて五分も経たないうちに新宿駅でのことを話すと彼女は首を縊に振つてにやついた。その笑みが他人事のようで夙夜には必死に駆け回る自分たちをひどく見下したように見えた。

「ほつほつほう。なるほどなあ、で？ その侍はどうしてあるのじや？」

帝にとつてブルーポーションのことなど興味はないようだつた。口にしないということはその程度の事で地上に蔓延る麻薬など人間で解決しろという事なのだ。帝はこの東京の魔術師たちを收めているものの実際は放任主義で地上の出来事を酒のつまみにしている。

夙夜はそんな彼女から目を背ける。

「逃したよ。でもあれで良かつたんだ。あの時は。とても戦える状態じやなかつたしブルーポーションもこちらが手に入れた。奴らは

失敗したんだ

「そうじゃの」

その言葉にやはり気はなく空氣のようく軽い声だった。だが帝の態度に夙夜は悪態をつくほど子供ではない。彼女との付き合いも彼此数年と経つ。これまで何が起きても手を出さずにいる帝をずっと見てきた。彼女にとつて人間がどうなるかなどほんの些細な事でしかない。なにより動かない帝に構つていられるほど事態は穏やかではない。

地下駐車場で出会つた魔術師の仲間と思しき侍。彼の持つていた刀はおそらく襲撃された魔術師の作り上げた桜紋鴉である。夙夜のために作られた刀は敵の手に落ちている。もし荒垣トウマやその仲間達が刀と出会えば唯ではすまない。夙夜は自らの体験で刀の力を観ていた。剣先は黒く歪んだ刃を孕み物質を越えた刃を形成していた。帝の話では魔力を帯びて伸びる代物。侍から魔力は感じられなかつたが確かに刃は伸びていた。

「桜紋鴉を作つた技師のこと教えてくれないか」

「いい男じやつたよ。年齢はもう七十は超えとつたがな……人里は嫌だと強情で山ごもりするような奴じや。本当ならわっちがそうする所じやのにのう。変わつた男じやつたよ」

「なんで狙われたと？」

「さあ心当たりはない。言つた通り人嫌いなどころがあつたから付き合いのある人物はそういうないと思う。怨恨の線はないな。おそらくわっちが作らせた刀の情報を掴んだ奴がいた」

帝の目を見る。嘘を言つては見えなかつたが存在 자체が嘘のような彼女に真意を求めるはどうなのかと内心呴いた。そして彼女が自分から情報を流すかどうか考える。おそらくはない。隠す事もなかつたのだろう。ある魔術師に刀の製作を依頼した。ただそれだけのこと。その話しを相手側が聞きつけた。そう解釈するしかない。

「やっぱりあの侍か」

「じゃろうな。じゃがの、その侍一人で済むはずないじゃろつ」

そのとおり。いかに年老いた魔術師といつても普通の人間相手ならどうにかして逃げる事ができたはずである。何より、帝も言つているとおり人嫌いで人里を離れていたのだ。結界の一つや二つあって当然である。とてもあの男に突破できるとは考えられない。

加えてもう一人。売人の男だ。正体不明のまま消滅してしまったが彼もまた魔術師ではない。現在、ブルーポーションを売り歩く売人達も同様だろう。

「奴らから魔術師の特徴は感じられなかつた。売人の男もだ。コインを使って姿を消したがあれば奴らの術式じゃない」

「コインかえ？」

「これだ」

駐車場で龍馬が消えた際、その場に残つたのは一枚のコインだつた。それを夙夜は拾つていた。たつた一つの手掛かりを帝へと差し出す。しつかりとした厚みがあり日本の硬貨でいうなら五百円玉よりも一回り大きかつた。コインは銀色で堀の深い女の顔を刻まれていたが傷がついており元の模様まではわからない。

「見た事ないのう。この絵柄は女か？」

「多分。とにかく魔術師の手掛かりはこいつだけだ」

「コインは夙夜の手に戻る。

「あまり関心ないんだな」

「そう見えるかえ？」

「ああ。まるで他人事だ」

「その通りじゃ。わっちに期待するでないわ」

この街の、いや、首都東京の管理者がこの有様である。帝はまた自分勝手にも部屋の灯りを消して去つていつた。一人残つた夙夜はいつものとおりやつてきたエレベーターに乗つて地上を目指す。暗室に留まる必要がいつさいなかつた。エレベーターは地上を目指し左右にぶれながら上昇していく。しかしそれは感覚でしかない。夙夜の乗つている箱は原理不明のまま地上へとたどり着いた。

エレベーターの到着音が鳴ると扉が開く。到着した場所は実家からすぐ近くの廃ビルで入り口にも使用した場所だった。

すでに陽は落ちていて外灯が足元を照らしている。

ビルを出ると大通りには出らずにすぐ路地へと向かう。四角いコンクリートブロックを何段にも積み上げた塀でできた迷路の入り口のような道が目の前に現れると迷いもなく踏み込む。塀の先には民家の屋根が見え隙間には庭から伸びる緑の木々がちらほらと目を癒す。人一人が通れるぎりぎりの幅の道を進むとちょうど廃ビルの裏手にやってくる。そこにはあまりにも風景と不釣合いなバイクが一台あった。

十日前のこと、アーサー・ライバックから夙夜宛てに大きな荷物が届いた。それが目の前のバイクである。CBRハ〇〇という型番のバイクは主を待っていた。ボディは黒く塗り込まれ外装パーツが取り付けられたオリジナルカスタム仕様と題されたこの一台はライバック帰国にあわせて届いた。車体の変更点はまだある、エンジンからマフラーまで消音システムが備わっており走行中はほぼ無音である。

届いた物は他に

『今回の依頼の報酬だ。受け取ってくれ』

という短い手紙が添えられていた。

ハンドルにかけていたヘルメットを取り頭から被る。当然のようにエンジンをかけて発進した。向かう場所は決まっている。バイクに跨る夙夜の姿は少し小柄に見えるが問題はない。ヘルメットを被れば容姿は消える。エンジン音もほぼ無いため周りからは特に注目されることはなくなる。とはいえたが、夙夜がバイクの免許を持っているはずはなかった。年齢は足りているがまだ義務教育のなかにいる。そこである免許の携帯となつた。

事情を千影に相談したところあるカードを渡された。カードには自分の顔写真が張つてあり住所や番号が所狭しと書いてある。

「そいつを持つてろ。万が一警官に呼び止められてもごまかせる

渡されたカードの作用である。おそらくカードを見た人物は本物だと誤解するのだろう。使用する機会はなさそうだがと思いながらも財布にしました。

後は運転技術だがぬかりはない。これまでの生活のなかでバイクを運転した事は何度もあつた。まるで計つたようにライバックと会う時はバイクや車の運転を練習させられた。それだけでは留まらず荒垣トウマたちとの出会いで何度も無茶な運転をした。高度なドライビングテクニックとまではいかずとも並んで走る車と車の間をすり抜けて進むくらいなら何とかなる。届いたバイクと偽の免許カードを手にして乗つたバイクはおぼつかない走りながらも車道に乗り出した。

無音のバイクが道を走り新宿を目指す。

赤いテールランプがラインを作り夜闇を切る。生暖かい風を身に受けながら走ると人の群れに出くわす。走行距離がかさむなか、人の群れを避けるように南方へと進行する。すると夜十一時に閉まつたカフェやレストランの通りに入る。背の高い丸い球の形をした外灯が均等に並ぶ。昼間はこの通りにも人の行き交いは絶えずあるのだが現在はというと日を跨いでいるため誰もいない。

会社帰りに遊んでいるサラリーマンや若者の歩く道とは世界が違つてている。

そんな通りには一店舗だけ灯りがついたところがある。やけに存在感を増していた。店にはピザの画が大きく掲げられておりポスターが何枚も貼られていた。

夙夜はバイクを店の前に停めると店内を見た。店は通りに面している部分がガラスになつていて灯りがだだ漏れになつていて、客の姿は無いようだがバイクの前には一台のバンが停まっている。彼らが先に到着している事はあきらかだつた。

店に入ると外からは見えなかつた奥のほうで腕が一本掲げられた。見れば手首が曲がつたり元に戻つたりをくりかえしている。手のほうへと向かつていく。

「これが今日の回収分だよ〜ん」

今夜も今夜とて緊張感の無い声で出現したのは荒垣トウマ。四人席を一つくつつけて幹部四人と一緒にピザを食っていた。ピザ屋なのだからおかしくはない。しかし男五人でピザを囲む彼らの今はすこし悲しいものがあった。女つけのないこの場所には全部で四枚のピザがばらばらに散らばっている。夙夜はトウマから回収分をいたバッグを手にしながらも空いている片手で一切れ頂いた。

ピザソースの甘味と野菜がふんだんに盛られた一切れは腹の隙間を一瞬で埋める。指についたソースを舐めると渡されたバッグのなかを見た。そこには灯りに反射するように蒼く光るブルーポーションがあった。数えると七本程度になる。

「サンキュー。でもこれはそっちで持つていてくれ」

渡されたバッグごとトウマの傍へ置く。「了解」と何も聞かずに了承する。今まで集めたブルーポーションはすべて彼ら自警団で管理している。

「それにしてもバイクなんて乗れたんだ」

「まあな

席に座ると納屋が何も言わずに黒い炭酸水が入ったグラスを置いた。トウマは店の外に見えるバイクをぼうっと見つめている。

新宿駅での一件依頼、彼らはブルーポーションの密売人を追っている。目的は仲間を守る事にある。ブルーポーションは数回の使用で人体を破壊しかない代物だ。仲間が手にしないとも限らない。トウマは自分の仲間全員に警告を出し手に入れた場合は渡せと指示を出している。

取り引きの回数は日増しに増えている。自警団の仲間はどこからか取り引きの情報を手に入れ、張り込みとブルーポーションを高値で買い取っている。今まで集めた本数はライバックが言っていた五百という目安に近付いていた。

魔術師の関与も続いていた。攻撃はいまのところない。トウマは妨害されてはいるものの仲間と上手くやっていた。現在、ブルーポ

ーションで死亡したといつてコース三流スポーツ雑誌にも載つてい
ない。

「これで通算三百本、あと一百か。まだ続けるのかい？」

「なくなるまで頼む」

次的一切れを掴んで口に含む。今度はカレーソースがかかっていた。腹がすいていてまだまだ食べられる。帰宅するにはまだ時間が掛かるためここで何枚か詰め込んでおきたかった。しかし、三枚目のピザに手を伸ばしたとき四人の幹部メンバーが一斉にテーブルからピザを持ち上げた。

「そりゃやるけどね。どうにも金の尽きが見えてきちゃってんのよ。そこん所どうにかならない？」

全員の顔が真剣だった。へらへらしているのはトウマだけであった。彼らもただで動けるわけはない。自警団の大半は荒垣トウマの父が立ち上げた派遣会社に登録し日々仕事をしている。多くても給料は月額三十万ほどで仕事を休めば当然、給料は低くなる。世知辛い世の中ではあるがわからない話ではない。

なるほど、そこまできつかったのかと伸ばした腕を引っ込める。

「資金問題は考えておく。なんとかするよ」

なんとか、できるほど持つているはずは無い。夙夜の小遣いは定額制で同級生と変わりは無い。千影からバイト代などでのはずもない。たまに依頼人から報酬として小額貰う事はある程度。ほんと出せる金は無い。

トウマの見る先にあるバイクは定額百一十万だと知っているが売れる代物ではない。なにしろ改造を施しておりとても買い取つてもらえるものではない。それに売り物ではない。

「考え方から」

「お願いよ」

真剣八割、「冗談」一割の声でトウマが言つた。ようやくピザがテーブルに置かれて食事は再開となつた。今度は六人が同時にピザへと腕を伸ばしていった。

新宿からだんだんと人がいなくなる。客も店もゼロになるなかコンビニの灯りだけが残る。そうなつてから六人は店を後にして新宿から遠ざかつた。店の奥から彼らを見送っていたのはまだ三十代の店長だった。彼もまたトウマの仲間である。

翌日の事、昼間は晴天だつたが夕方からは曇天となつた。いつ雨が降るかと歩行者のなかに心配する者が増えていたが雨は一向に振る事はない。曇り空の下、夙夜はバイクの運転練習がてらに新宿駅の周辺を何度も回つてから事務所へと向かつた。人通りの無い事務所の前には見慣れない車が一台停まつていた。車種はハマーH3、事務所前の通りは図々しいほどの巨躯で塞がれてしまつていて。自動車でさえスピードを落さなければ通れないほど道はせまい。

事務所側にこのような車に乗つている人物はいない。千影の車は事務所の裏側にある駐車場に停められている。長年付き合つて知る彼女の趣味はスポーツカーでこのような大きな車は好みない。だから彼女の車ではないのは明白だ。

現在、事務所のビルは他に借り主がおらず千影と夙夜の二人だけが出入りする。あとは依頼人だけだ。しかしハマーに乗りそうな人物に心当たりは無かつた。

新しい客が来ているのだろう。

脇を抜けるようにゆっくりと通る。事務所の裏側にある駐車場へしまう。やはり千影の車は駐車場にあつた。

通りに戻つてくるとすぐにはす向かいにあるビルに目を奪われた。一週間ほど前だつたか、この人通りの全くない道から一本外に出た大通りに一件のメイド喫茶ができた。すでにブームが過ぎ去つたような時期にできた店は夜遅くまでその光を放つていて。メイド喫茶は四六時中電気がついたままで絶え間なく光を与えている。それからというもの静かに怒つてているのが事務所の主こと洗敷千影である。下から見上げる店の光は事務所の窓からぴつたり平行になつて見える。絶えず事務所に光が差し込んでいる。

あんな店というと酷いが客は少なくないらしい、繁盛しているとこの街の住民は言つていた。入り口は大通方面にあり人の多さは変

わっていないのが幸いである。

今夜も賑わいを見せるメイド喫茶に背を向けて全く人気のないぼろいビルの階段を歩く。このビルの一階と二階は依然として無人のままである。ガラスの扉を開けるとすぐに事務所の中に客がいることに気づく。やはりハマーの乗り手はここにいた。

千影の顔が見えて客の後頭部がソファーから突き出している。肩幅は広く耳全体が見えるほどさつぱりした短髪はここ最近、知りあつた篠崎源一郎その人のものだとはつきりわかつた。さては報酬を渡しにきたのか。

この短期間でまた依頼を頼みに来るはずはない。何より一度目はそう滅多にない。

「よう、源さんじゃないか」

「よつ。やつと来たな夙夜」

もうただの知り合いというには言葉が足りない関係だった。随分、長い間待っていたように言った。いつもと同じようにスーツ姿だったが篠崎の隣りにはスーツケースではなく学生が持つようなバッグを置いていた。夙夜が目を向けると篠崎はにやつと口を緩めてバッグのジップを開く。

「今日はな、こいつを見せようつて思つてきたんだ。ほら洗敷さんの言つ報酬つてやつだ。現金よりも情報つて言つから上の連中を騙して持つてきた」

とても彼の職業からは想像できない笑顔だった。やはり彼からはその筋の男達とはちょっと違つた印象を受ける。ごちゃごちゃとしたバッグの中から取り出す源を見る。夙夜にとつてみれば現金のほうが良かつた。なにせトウマから急かされている。なにか手を打たないとブルーポーションを回収することも困難になる。

その考えを反転させるほど篠崎の取り出したものはそそられる代物だった。バッグの中に入っていたのはビデオカメラ。それも手でもつタイプではなくカメラの部分は小さくコードで本体と繋がつていた。所謂、車両用の搭載カメラだ。

事務所のテレビに三色線で接続すると本体のボタンを弄つて動画がはじまった。それほど画質はよくない。ライトで照らす夜道を走っている映像だ。どうやらカメラは運転席の横、車体の中心に取り付けられていたようであるで自分が運転しているようにも見える。車はどこか坂道を登つているようで車自体が出る光以外はない。しかも道は良くないようで随分揺れていた。坂を登りきるとコンクリートの平面に出る。どこかの山なのだろうか外灯が立つていて光に照らされた部分には土と木がコンクリートと混合していた。かなり開けた場所で車は停まつた。動画の中もすでに夜だ。少ない光の中で車内の声が聴こえる。やけに時間を気にしていた。右側に立つ外灯の光がちらちらと輝いている。車のライトが足元を照らす中、何度も映像が揺れた。

この映像がなんだと聞こうとしたが篠崎は動画の説明する様子はない。

彼もまた傍で動画に見入つている。

見てれば解るつて事か。千影先生も何も言わない。

黒服の男たちが車の前に立ち並ぶと前方からも一台の車がやつてきた。エンジン音は聴こえず静かな軽車両だった。ライトが眩しく画面を覆うとすぐに消えた。やつてきた車から男が四人降りてくる。どうやら日本人ではないらしい。肌の色は白く髪は金だった。黒服の男たちに負けじと劣らぬ体格をしていた。やがて互いに一人が前に出る。おそらく代表なのだろう。なにか話をはじめている。

「このあいだ……夙夜やガキ連中が駅で繰り広げた原因だ」
ようやく口を開く。

画面の中では前に出ていた男二人のほかにもう一人、続いていく。どちらも重そうなケースを次々と持つてくる。こちら側、篠崎の持ってきた男たちのほうは全部で三つ。金髪の男たちは全部で五つ。その場に置いた。

代表だった男二人が相手側のケースを開いて中身を確認している。

「ここだ。この先が俺たちにはさっぱりなんだ」

動画は正常に見えた。時間は確かにカウントされている。何がさつぱりなのか見ていてその奇妙さに夙夜が気づいたのは十秒ほど経つた時だった。動画の中で男たちが動きが止まっている。停止している。しかしカウントは止まっている。動画は正常に動いている。「どうなってる?」

口から漏れたとき画面に変化がおきた。

何者かが現れた。

たつた一人、その場に現われたのは車椅子にのつた男。ウェーブのかかつた長い髪をしていて顔までは見えないが足がやたら細く見えた。上半身も大きくは無い。きりきりと車輪の鳴る音が聴こえてくるようだった。

不気味な男。その瞬間から夙夜の背筋に汗が流れ出した。暑いはずはない。ただ車椅子の男があまりにも不気味なのだ。映像からいつでも浮き出でくるような存在感とその場を支配している力が伝わってくる。周りの男たちは固まってしまっている。彼らは一切の動きを封じられたように何一つ行動しなかった。

「解るか? こいつは時間を止めたようにしてやつたのさ」

篠崎の声もどことなしに震えている。

車椅子の男は金髪たちの運んだスーツケースに何かを貼り付けていく。画面の奥で動いている為、それが何であるかまでははっきりとしない。暗がりの中でもうじめく男は五つのケースを回るとまた来たほうへと進んでいく。

男たちはまだ動かない。かわりに動き出したのはケースだった。宙に浮かんでダンスでもするかのように陽気に跳ねる。

男の正体は言わずとして理解した。

奴は魔術師だ。

そしてケースの中身が何であるかも理解する。あれはブルーポーションの入ったケース。黒服の男たちが揃えたのはおそらく金だろ

う。これはブルーポーションの取り引き現場だ。あの新宿駅で一件を作り出した原因だ。

車椅子の男が画面から消えると次はケースたちも次々と消えていく。そしてようやく男たちが動き出した。まるで彼らは自分たちがどうなったのかさえ把握できていないようだ。口論が始まり先に手を出したのは黒服の側だった。四人の金髪と揉めあい次々にその場に倒れていく。最後は乱闘というよりは一方的な暴力だった。金髪のほうも一人足を引きずつていたが黒服達よりはましだった。彼らは全員がその場に倒れている。

結局、ケースは金髪たちが持ち去った。

篠崎は動画を止めた。テレビから線を引っ張りぬくとバッグにしまつ。

「あれが魔術師……敵」

真っ黒になつたテレビに向かつて言った。

「どういう魔術式かは映像以外には判断できんな。この構成員たちはいまどうしてる？」

千影も同じように動画に見入つていた。三人ともいつのまにか肩に力が入つていてカメラをバッグにしまるまで硬直していた。

「どうつて……特に問題なく働いてる。この動画で見たとおり止つてたのはあの時間だけなんだ。今は普通に仕事してる」

「敵は……あの魔術師は隠す気が無いのか」

新宿駅の一件もおなじだ。ライバックの持つてきた映像にも相手は映つっていた。今回も同じだ。気づいていないのか、余裕なのか意図は不明だ。だけど、こうやってビデオに写るつて言つのはどうなんだ。それにここにはあの侍野郎は映つていない。

「それで、今回はこれだけか？」

「そつちの報酬になりそつなのはこれだけしかない。でもこれだつて立派なもんだろ」

夙夜はうなづくだけにした。不満はあつたがこれ以上ない情報でもある。映像記録に魔術師の姿がそれも魔術式を披露するなどあり

えない。見れただけでもよしとする必要がある。

「篠崎さん、その映像コピーは？」

「とつてないが必要なら……」

渡そうか、そう告げようとしたが千影は「しないで」と口を塞いだ。夙夜も同じ気持ちだった。この映像は消したほうがいい。二人の目の力だけで篠崎は言わんとする事を感じとりうなずいた。

「上の連中はなんて言つてるんだ。そうとう揉めてるんだろ」

「まあな。この映像を見せても連中は事態が飲み込めてないんだ。薬はどこだっていうわ、金を取り返せつて叫ぶばかりだ。でも相手は連絡がつかない。でもな」

ふつと笑つた。

「一つだけ手掛かりつてのがある。保険とも言つべきだな。GPS発信機だ。それほど高性能じやないからある程度までしか感知できないがな」

カメラをしまったバッグからは手を放した。

「でも問題がいくつがある。今日、ここへ来たのは問題解決に手を貸してもらいたい。ここに映つてた二人……」

再びバッグに手を置いたが篠崎の言つているのはバッグではなく中の映像だ。黒服の男たちのこと。四人いたうちの二人なんだろう。「一人、俺の部下なんだが連絡が途絶えた」

「どういうことか説明してくれ」

「取り引きの最中に持つてつたトランクケースのうち一つにはGPSチップが取り付けられててな。万が一に備えてたつてわけだ。信号はだいたいの位置しか解らないが数日前に反応があつたんだ。ほら、夙夜があのガキ連中と暴れた日だよ。あの晩、一人が信号の場所へ行つた」

「一週間前か……随分前だな」

「で？」千影が話しを求めた。

「最初は連絡が取れていたんだ。GPS信号の発信場所についた時は確かに電話してきた。場所が山場だったから近くの民宿に泊まつ

てそこから固定電話つてわけだ

「最後の連絡は？」

「一週間前の昼間だ。これからまた山に入るとか言つてた。でもそこまでだ。それ以降連絡はない」

「なんで源さんがそいつらを助けに行くんだ？ そういうのはもつと下つ端の奴らが行くのが普通だろ？」

「そりやな。だからもう一組送つた。これで全部で四人だ。でもそいつも連絡が途絶えた。もう上の連中は馬鹿になつてゐるさ。だから俺が行つて見てくる羽目になつた。でもな、俺はちょっとラッキーでもあるんだ。部下の面倒を見ることができる」

本当にヤクザなのかと思いたくなるほどの穏やかな顔をしていた。「なんていうのかな。前にも言つたる、俺はこの世界から足を洗いたいんだ。そいつが今回の依頼もあるんだ。夙夜、前に病院で会つた時うちの偉いさんが集まつてたつて言つただろ。うちの親父なんて取り引き失敗の後はずっと火山が噴火したみたいに怒鳴り散らして喰いてばかりだ。それだけじゃない、新宿駅でしくじつた後は最悪さ、新入りは問答無用で殴られてたよ」

「なんか悪いな」

「気にするな。夙夜のせいじゃない。何よりあれについては礼が言いたいくらいだ。だつてよ、馬鹿になつたオヤジたちに部下四人を連れ戻して薬の回収をすることで俺を抜けさせてくれないかつて提案したら首を縊に振りやがつたんだ。だから俺としてはなんとしてもやり遂げたい。自分のためにも」

机に両手をついて頭を下げる。三人並べるほどのテーブルの大半を占拠してしまつた。

「今回の依頼は部下一人、いや四人の救出だ……手を貸してくれ」

篠崎源一郎の声は気楽なものではなかつた。真剣さは夙夜にも伝わつてゐる。十分すぎるほどの思いが事務所をいっぱいにしている。ヤクザが組を出るにはどれだけの苦労が伴うかは知らないわけではない。夙夜の目には指十本揃つていた。

「こちらに拒否する理由はないわ。貴方がここにきた時点では仕事を引き受けたて決めている」

「ああ。源さんの依頼は引き受けた。それでGPSの発信場所はどこなんだ？ ここから近いのか？」

「静岡だ。いつ出られる？ 僕としては今からでも」

「大丈夫。俺も出られる。幸い刀もここにある。千影先生」

「ああ刀は持つておけ、何が出るか解らん」

話がとんとんと進んでいくが物騒な言葉を発した少年に篠崎は驚いた。なぜ刀などという言葉が出てくるのかさっぱり解らなかつた。これから行くのは山の中でする事といえば発信源を辿つてケースの回収だ。なのに夙夜も千影も自分とは考えが違つていた。

「随分と物騒だな。ケースを捜しに行くだけだぞ」

「そちらはね。でも映像に映つていた魔術師が動いているのも事実よ。どこでどう巡りあうか解らないの。新宿の取り引き現場にもその魔術師の仲間らしき人物と接触してる。部下四人が連絡できない状況というのが現在よ」

「そう、だな。でもやり合つて危ないのか？」

「ああ。いつでも戦闘ができるようにしておく必要があるつてわけさ」

「なるほどな」

「じゃあ出発だ」

バッグを抱えて事務所を出していく篠崎。夙夜は事務所の奥へと向かつて行き備品を収納しているロッカーへと進んだ。事務所のなかは資料や千影の道具でいっぱいに溢れかえつていて。しまうような事は無いため夙夜は自分の物はロッカーにしまう癖をつけていて。ロッカーの中には帝から手渡された刀がキューバッグに入れたままになつていた。

光敷千影の事務所の前はやはり人が行き交う風景が無く、時折り餌を求めて舞い降りるカラスが数羽足元にいるだけだった。先に出てきた篠崎は薄暗い通りで空を見る。ビルの隙間から見える空の色は黒一色だった。背広の内側から煙草を取り出し火をつける。ぼうつと自分の顔の前だけが熱くなる。一息吸って肺の中に煙を入れた。一度目の依頼にやつてきた時、東堂夙夜はいなかつた。主である千影と二人きりになつた彼はひどく緊張して過ごしていたのだ。何も言わず問わずの千影は対面に座つて夙夜の到着を待つ。その間、時間にして三十分となかつたが篠崎は彼女の目をまともに見れなかつた。

映画のスクリーンや舞台を見にいつたとしても彼女と同じぐらい美しい人間は滅多に見られない。自分の美術感覚を根底から搖るがすほどの美女といてひどく不安になつつていた。美女と一緒にいられる幸福なんてものは感じられなかつた。いつとつて食われるかという恐怖が地に着けた足裏から背中にまでも感じていた。

「あれじや魔術師つていうより魔女だろ……」

夙夜とはあまりにも違いすぎる彼女の存在に意識はすでに食われていた。

「なにが魔女なんだ」

背中に投げかけられた言葉にはつとして振り返る。夙夜が長細いバッグを肩から掛けていた。「いや、なんでもない」と濁すと追求はしなかつた。夙夜の千影に向ける眼差しが自分へとは違う事ぐらいよくわかつっていたからだ。両親や親族に向ける眼差しよりも暖かいどこか信仰じみた目をしている。夙夜に対して千影のことは悪く言いたくは無かつた。

「準備は？」

「こつちは準備OKだ」

「OKってさつき言つてた刀はどこだ？　まさか……」
変わつた所といえば肩から下げるバッグぐらいなもの。

「ああ、こいつに入つてる。見てみるか？」

肩から下げるとした。

「いや遠慮しとくよ」

「靴にけつこなう綺麗な装飾が施されてたりするから見て損はないと思つけど」

「そういうことじゃねえ。服とか替えはどうするんだ？」

自慢気に語るが篠崎は興味が無かつた。それよりも夙夜の持ち物があまりにも少ない事のほうが気になる。しかし夙夜は「これだけさ」と両手を持ち上げて言つた。服装はいたつてシンプル。胸板にぴつちり張り付いたTシャツとジーンズで足元なんて革靴。それでも夙夜は問題なんであるのかといった表情で隣に立つ。

「必要ないさ。そんなに時間がかかるとは思えない」

「でも静岡だぞ」と念を押す。

「部下が四人、連絡が取れないんだろ？　だつたら急ぐ必要があるじゃないか。服の心配なんて後でいいよ」

「そつか。そうだな。わかつた」

心配はしているがここは東京でGPSの発信源は静岡にある。時間はどうしてもかかる。

「幸い今は夏休みで学校はないんだ、日を跨いでも問題ないよ。夜中までには着くさ」

「随分やる気だな。こっちとしては嬉しい限りだぜ」

ハマーに乗り込むとすぐにエンジンをかけた。巨大な団体をしている割に車内は静かで震動も緩やかだつた。一人の間には小型ノートパソコンが一台置かれていて画面は運転席を向いている。パソコンからは線が一本伸びていて一本はバッテリー、もう一本はカーナビに繋がつていて、篠崎がキーボードを捜査すると繋がつていたナビゲーションと連動し夙夜の側からも地図が見えた。

手で掴めるほどのモニターに線が走り赤い点が点る。赤い点は丸

い縁を外へ向かって放つ。その点がGPSの発信源、線は地図。場所は篠崎の言うとおり静岡を現していた。夙夜はその地図を見たが土地鑑が無く線上の地図では良くわからなかつた。

「信号があつたのは静岡の辺りなんだ？」

「南方に位置する……ここだ。この山の辺り」信号は伊豆を指している。夙夜に解るよう指を差して細かく教える。「あいつらの話によると草がぼうぼうに生えた場所らしい」

「だとすると俺よりも源さんのほうが問題かもな」

「なんでだよ」

「その靴」と指差す。篠崎の靴も夙夜と同じで革で出来ている。それも営業に出るサラリーマンが履くような安物ではなく硬く上物の靴を履いている。篠崎のほうこそ山に登る準備を怠つていて。

「その靴じゃとても山道を歩けるようなことは思えないってことさ。それにスージーなにかと不便だろ」

「スースは……替えはないが、靴ならあるぞ」と後部座席を指すとそこにはライトやらスコップが乱暴に詰まれていた。おかげで皮張りのシートは汚れ傷付いている。

「じゃあ連絡してきたつていう場所は？　どこに滞在してたんだろ？」

またモニターのほうへ指をあてがい、赤い点のちょっと下を押すように示す。

「もうりん予約してゐる。今夜中には着くつて言つてある。心配すんな」

「わかつたよ」

ハマーはよけやく走り出す。まっすぐに通りを抜けて大通りへと出る。ネオンと走る車のヘッドライトが流星群のように瞬く。群れに合流して北上し始めた。しばらく無音で走つたが煙草の火が消えるとカーナビを操作した。機械が動き音楽を奏でだす。機械じみた歌声が車内に響く。夙夜も聴いた事ぐらいある。シエラと呼ばれる外国のシステムだった。日本でもこの数年で大きく成長したシステ

ムで音楽のランキングにも影響を与えていた。シオラはアメリカの会社が造ったもので欧米でも高い評価を受けていたと世間にぎわしている。

「なあ」「もうじき東京を出ようとして篠崎がハンドルを切った。「どうしたのさ?」と声をかけたがすでに静岡へとは逆の方向へと進んでいた。

「ちょっと寄り道していいか?」

いいかどうかの判断をする事などできなかつた。夙夜は「好きにしろ」と告げてどこに向かつているのか聴いた。返答は「病院だ」とだけ短かつた。高速に侵入するとすぐ都心から少しだけ放れた丘の上にやつてきた。周囲にはビルは無く緑に囲まれていて。夙夜も走つている場所がどこか思い出した。あの日、篠崎と再会した病院の近くだつた。ハマーの窓を開けると澄み切つた空気が入つてくる。円を描くよつな坂を登り駐車場へと突き抜けた。

「お前もくるか?」と聞かれ、車の中で待つのもなんなので「ああ」と答える。

玄関口には警備員が立つていて一人がやつてくると他の人と同じように目を向けた。目指すのは入院患者のいる棟でずんずんと踏み進む。目的の場所までかなり離れている。

「それで誰の見舞いなんだ?」

「妹さ。といつても血は繋がつてないがな」

患者のいなくなつた病院の中は静かでスタッフも交代していた。深夜の顔に変わる病院でまつすぐ歩く一人の姿は異質な物に見えた。そんな廊下には一人以外が存在していないうにさえ思つてしまつほどだ。すると篠崎は声を小さく話しを始めた。

「実はさ、俺は孤児でな。篠崎つてのは俺の身元引受け人の名前なんだよ。だからどうしても馴染めない。源一郎つて名前だつて孤児院で付けられたんだ」

「じゃあ妹つていうのは?」

「孤児院にいた頃、仲がよかつた兄妹の妹のほうさ。名前は琴音つ

ていうんだ」

「俺はその兄妹よりも少し先に引き取られたんだがよく遊んでいたよ。俺を引き取ってくれた人たちもいい人でな。一人をよく家に招いてくれた」

「でも一人を引き取つたのは」

言葉を出すのが辛そうに見えた。篠崎の出そうとしている名前はなんとなくだが想像がつく。琴音という名前を聞いた時からある人物にいきついていた。

「……依知川」

「そうだ」

箱娘のとき、第一被害者の名前と合致する。犯人である樋上によつて傷つけられた具合は話によれば酷いもののはず。

二人はエレベーターに乗り密室に入った。

「依知川が目をつけたのは兄貴のほうさ。龍馬つて言うんだが非常に剣の腕がたつてな。ちゃんと練習できる環境にいれば県大会……いや日本一にだってなれるような奴だった。でもな俺達は孤児だ。そんのは夢だよ。防具も竹刀も手に入らない。そんな龍馬の腕を買つた組長は一人を養子にしたつてわけだ」

「なるほど」

「琴音はついでだつたんだ」

悲しい声をしていた。エレベーターの動きが止まるとい人はまた白い廊下を歩き出す。同じ白い壁だがさつきまでとは雰囲気は違つていた。まず空気が違う。どんよりとした肩に掛かる重いものだつた。夙夜はとくにその重さを感じて蔓延する消毒した匂いにも嫌悪した。自分の入院時代を思い出して嫌になる。

「じゃあ源さんが依知川組に入つたのは」

「ただの偶然さ。単純に性に合つてたんだ。最初はな。ここだ」

部屋と廊下を隔てるドアの前で動きが止まる。ネームプレートには依知川琴音と書かれたプレートが挟まれている。篠崎が間違つている事は無い。どうしたのかと彼の顔を横目に見るとやけに深刻そ

うにしていた。

「中へ入つたら驚くと思うがあまり動搖しないでくれないか」

「琴音さんはどういう病状なんだ?」

「病気じゃないんだ。箱娘の時を憶えているか?」

憶えている。おそらく身体的に治療しているのだ。夙夜はうなずいてみせた。篠崎は信頼したのかうなずいてドアをノックした。返事がないままにドアを開ける。スライド式のドアが開いていくと夙夜の目に彼女の姿が見えた。

「よう琴音」

篠崎の声が高くなつた。仲間に向けて発する声よりも高い。それだけ彼女のことを持つていてるのだろう。その彼女の姿は見る者の目を熱くさせるに十分だつた。ベッドから上半身を起こしていの彼女の右肩から手の先まで包帯に包まれており、篠崎の声に反応して動いた顔も三分の一が包帯だつた。目が見えない。眉から鼻の半分あたりまでが隠れてしまつていて。

「源兄さん? あつ……龍馬お兄ちゃんも?」

彼女の声は掠れていた。喉にも傷を受けていて。喉のあたりにも白いガーゼのようなものが貼られていた。

やつてきた一人に向けて表情の筋肉は笑顔を作ろうとしていたのだろうがひくひくとまるでひきつつていて見えた。篠崎が夙夜を見て一人でいるから誤解したんだと思った。ここに彼女の兄はない。

「違うよ。龍馬は来てない。こいつは」

「はじめまして東堂夙夜つて言います」

「夙夜さん……すみません。兄と同じ匂いがしたものだから私でつきり」

彼女の笑顔が消えてしまつた。近付くとベッドの上が全て見えるようになると心が絞めつけられる。服の裾から管が何本も見える。管の繋がる先は機械の山で光と数字が散乱していた。彼女の状態がどうかなど聞くまでもない。

「ちょっと東京を放れる事になつてな。その前に会つておひつと思つたんだが……龍馬のやつはやっぱり来てないのか？」

「うん。お兄ちゃん忙しいのかな。電話もしてくれないの」

「組……義父さんは？」

琴音は首を横に振るだけだった。

「まったくあいつらときたら」

「でもいいんです。私にはこうして玄兄さんが見舞いに来てくれるし今日は夙夜さんも来てくれました。私はそれだけで嬉しいです」
琴音の容態はひどいものだと解る。夙夜は自身の中にいる少女の魂に呼びかけた。心臓の隣りあたりからもう一つ熱く込上げるものが浮かび上がり今度は瞳に宿る。黒い瞳に青い靄がかかる。霞みがかつた瞳で琴音の身体を見ると身体の端々が赤く光っている。身体の中、胸の辺りには黒い塊が見えた。

過去の自分を思い出す。

交通事故に遭い死の一歩手前にまで追いやられた時の事。洗敷千影によつて助けられた日のことを。彼女は夙夜の身体に黒い塊を見たという。それは死を現す色。科学や医学では見ることの出来ない魔術師の目でしか確認できないもの。今、死を乗り越えた夙夜は内にいる少女を介して見ることができた。

黒い塊は死を告げる。

夙夜のように千影のような人物が現れない限り彼女は元に戻る事はない。しかし千影は彼女に手を差し伸べる事は無いだろう。彼女を救おうとする理由が無い。

「そうだ。これから静岡に行くんだ。土産ちゃんと買つてくるから待つてろよ」

「静岡？ 私も行きたいな」

「ああ。治つたら行こうな」

「源さん」

治つたら、その言葉に心臓がぎゅっと絞めつけられた。

「ん、ああ。そうだな。行かなきやな。顔見れて安心したよ」

「うん。お仕事頑張ってね」

部屋を出る最後まで彼女は包帯の無い左腕を振っていた。ドアが閉まり歩き出す。資料を見ていた看護士たちが一人の姿を見て頭を下げる。一人も同じようにしてエレベーターに乗り込んだ。

「驚いただろ？」

「桶上に襲われたあとずつとああなんだ。見たとおり体の殆どは切刻まれている。目だつて完治する事は無いつて医者が言つてた」

「義父さんは？ あんたの組長なんだろ」

「組長は知らんぷりさ。建前で命は助けたが琴音が言つとおり見舞いに来る事もない。龍馬を田当てに養子に入れたくらいだからな。あの子はついでなのさ、あの人の目には本当の娘だつて映つてない」

「本当の？」

「ああ双子の姉妹だ」

想像がつかない。

「でも源さんはこいつやつて見舞いに來てる」

「当然だ。俺がいなきや琴音は一人ぼっちだ」

「医者はそれ以外に何か言つてた？ 外傷以外に」

「ん？ なにもないと言つていたがどうした」

彼女の身体の奥に見えた黒い塊の正体は不明である。病氣で無い

というなら臓器の寿命かもしれない。

「いやなんでもない。ただ、ちょっとかわいそうだつて思つただけだ」

「そう思つてくれるだけまさ」

病院から出ると生暖かい風に吹かれながら駐車場へと向かつ。再びハマーに乗り込むと「さ、行こう。あいつらも待つてる」と言って出発した。

東京から出ると思い出したように篠崎が口を開いた。

「そうだ、報酬。今回の依頼のほうはどうすりやいいんだ？ あの

ビデオは前の分だろ、てことはまた何か払わなきゃならないよな

「それか」

「やっぱ情報なのか?」

「そのへんは俺じゃなくって千影先生に直接聞いてくれ」

「俺あの人苦手なんだよな。さつきだつてお前が来るまで緊張しつぱなしだつたんだぞ」

灰皿に置いた煙草の残りを見て言つた。あの緊張の正体はなんだつたのかと。

「なんでさ?」

「わかんね。なんていうんだ? 人間なんだけど人間じゃないっていうのかな」

「なるほど」

正直なところ、篠崎は夙夜が怒るのではないかと思つていた。千影に対する夙夜の目を見ると彼女に向ける感情はきっと小さなものではない。自分が血が繋がつていない琴音を妹のよつに見ると同じか、それ以上だ。

「な、なんだよ。何がおかしいってんだ」

「いやよく解るつて」と、その気持ち。俺もはじめはそうだったんだ

まだ小学校に通う頃、東堂夙夜は交通事故に遭った。一年に数回だが京都にある本家に出向く事がある。その時だけはいつも海外にいる両親が帰つてくるのだ。そして夙夜は憧れの女性に会いに行く日だといつも心躍らせていた。

事故に遭つたのは夏の頃だつた。夏祭りに出かけるなかで親戚の姉、月影蒼華が居眠り運転の車に轢かれそうになつた。まだ小さな子供だった夙夜だが大人達から言っていた言葉を実践したに過ぎない。

「自分が好きな人は何が何でも守れ」

幼い夙夜は自らを省みずその言葉に従つたのだ。そのせいで夙夜は病院送りとなり数日間意識不明となつた。この日、集まつた親族の中にアーサー・ライバックがいた事が全ての始まり。彼は病院に運ばれる間に一人の女に電話をつないだ。呼んだのは洗敷千影その人。彼女は夙夜の両親といくつかの約束を交し少年を救つてみせた。人間の生死はまだ科学、医学で解析できる範囲にない。血の巡り、細胞の損傷、肉体にかかる負担を取り除いたからといつても意識が戻るわけではない。もつと根本的な部分、いわゆる魂たる部分は未知数である。夙夜も同じである。少年の身体を治すには問題はなかつた。意識はなくとも生きている。身体の具合は回復傾向にあつた。集まつた数人の大人に千影は肉体の死と精神の死は別にあると説明した。現在の状態では肉体面の手術が成功しても目を醒ます事は無いと説明した。千影は魔術によつて夙夜の意識を元に戻すと言い体现した。それはまるで魔法か奇跡だつた。彼女の語る魔術といふに理屈めいたものとは違つてみえた。千影の処置に医者はどう判断したらいいか口を挟めなかつた。彼女はただやつてきて細く女子

中学生でも折れそうな杖を振つただけにすぎない。

医者の戸惑いをはるかに超えた次元でも少年は目を醒ました。入院していたのはそれから三日ほどだった。退院許可を申請するまでも無い。夙夜は病院を自分の家のように歩き回っていたのだから。その頃から夙夜の意識は強く大きくなつた。

今にして思う。

依知川琴音に自分にとつての千影は現れるのだろうか、と。千影によると生死の淵をさ迷う者の前に現れる人物が死神か天使かは決まつてゐるのだという。救われるには運命付けられた出会いが必要だと。夙夜と千影は出会いうべくして出会い命を救つたにすぎない。他の人間が同じとは絶対に言えない。もし、自分の前に助けたいと思つた人物がいても助けられない可能性は存分にある。その時は歯を食いしばれと教えられた。

完璧なまでの死の因子を見たのは今夜が初めてだつた。

ハマーがいよいよ東京から離れ山にできた高速を突き進む。同じ進路を辿る車はまばらであつた。シエラの歌がかかる車中では男二人が無言でいた。シエラは機械によつて操作されてゐる偶像の歌姫。声は合成音声で製作されたと公式に書かれている。車内に流れる歌声は機械音声などではない生の人間が歌つてゐるようしか聴こえない。とてもコンピューター・ソフトウェアのだせる域ではない。二人とも黙つて歌に耳を傾けてゐる。世間話なんてものが長く続くはずもなくおしゃべりなわけでもなかつた。

再び口を開いたのは大きな休憩所のあるインターに入つて缶コーヒーと地図を買おうとした時だつた。長時間の運転で肩のこつた篠崎が休憩のため停ると夙夜が聴いた。

「琴音さんのことだけど兄貴がいるんだろ？ 源さんじゃなくて本当の。その人はどうしたんだ。同じ組にいるなら

「龍馬は行方不明だ」

ハンドルに寄りかかるようにしてゐた篠崎が缶コーヒーを一口飲む。喉を鳴らすと万歳するように腕を振り上げた。

「琴音が入院してからすぐだ。組長と喧嘩してな。琴音の入院費や手術代が結構な額でさ。それだけでも払つてやつたんだぞと怒鳴つたのさ。琴音はまだ手術を必要としてて……」のままだとあと何ヶ月持つかわからねえんだ」

なるほどあの黒い点はそれか。

源さんは何ヶ月つて言つてるけど実際はもつと短いだろうな。自分の胸を擦る。事故のとき身体に受けた傷はまだ残つてている。時間が経てば消えると説明されたがまだ手のひらと同じ大きさの蜘蛛のような手術跡が残つてている。傷跡は肌の色より濃い。脱ぐとよくわかる。

「そんな状態の妹を放つたらかしにしてどこに行くつて言つんだよ」「わからねえ。けど俺が知つてる龍馬は琴音を放つてどこかへ行くような奴じやない」

「信じてるんだな」

「当然だ、妹は大事だからな」エンジンをかけた。

ハマーは再び高速に入り静岡へと向かつて走り出す。

「確かに、妹は大切だ」

「ん、夙夜にも妹がいるのか？」

「ああ、一人ね。でも学校の寮に行つてるから帰つてくるときは夏休みと冬休みくらいさ」

「そつか」そう一人して言つた。

暗い道路を見ると妹の顔がふと窓に映つたよつて思い出す。妹の玲子は金持ちの集まるお嬢様学校に小学生の頃から通つていて、学校は全寮制で家に帰るときは学校側へ申告する必要がある。場所はそれほど離れているわけではないが家に帰つてくる事は少ない。両親の気持ちとしては一人を平等に見ているが夙夜には千影がついているため玲子に対しては過保護になつてている節がある。

玲子も実家へ帰つてもそれほど親密に話すことはない。

静岡の県境へ差し掛かる。車内のカーナビには目的地がおおまかに表示されている。赤い点はここからだとまだまだ遠い。インター

で買った地図と合わせると発信場所はやはり山に囲まれている。街らしき場所からも放れていて道路も無い。携帯電話が通じるような場所じゃないのはあきらかだった。いうなら六のよつたな場所だ。

「GPSは大丈夫のようだな」

今度は映像に映っていた魔術師と侍を思い返す。やつもそういうば龍馬と呼ばれていた。なにか間違いであつてほしいと願いながら彼らの目的はなんだと探る。

映像がブルーポーションの取り引きだったのは間違いない。彼らがGPSに気づかないわけは無い。それに中身はどうなつてているのか。新宿で見つかったブルーポーションの数はまだ田安の五百に到達していない。その残りが捨てられているとでもいうのか。この田で確認するまで答えはでそこに無い。

「どれくらい正確なんだ？」

「発信位置から一・五キロくらいだ。それだけで充分だろ」

それはかなり危なくないかと考える。平地で一・五キロというのではない。山の中での作業だ。最悪、谷や崖があるかも知れない。

「山登りをしたことはある？」

「ないな」

即答。不安は募るばかりだった。

あと一時間もかからないだろう距離まで来るとまた適当な話しきはじめた。篠崎の眠気はないようだつたが喋りつづけていいと集中できそうになかった。見慣れた街と景色はがらりと変わり日が落ちた今は延々と高速道路のライトが続く。まるで巨大な血管のよう。日本という身体のなかに造られた大量の道という名の血管を二人の乗る車や他の車がわんさかと走っている。

「次の出口で出る、GPSは動いてないのか？」

標識に差し掛かったとき篠崎が話をぶつ切りにして言った。問題ないと返した。GPSの発信信号は何一つ動いていなかった。

月がぼんやりと光っている。高速道路を降りた車は山を切り開いた道を走っていた。高速道路を下りると東京とは違う別世界が広が

つていた。広がるのは田畠と山ばかり住宅街はコンクリートで固められた洋式の家ではなく日本家屋。スーパー や商店は店を閉じている。二十四時間のコンビニも少ない。

「夙夜は伊豆に来たことはあるのか？」

「ないよ。源さんは？」

首を横に振った。

「部下はどうしてる。一度連絡をとったほうがいいと思つんだけど。やつぱり繋がらないのか？」

「それもそうだ」

車は大きな駐車場へ停まる。キヤッチボールどころか子供が野球を出来るほどの大きさがある駐車場だった。その随分と先に一軒家程度の小さなコンビニがある。駐車場が埋まつた場合、店内に客は入りきらないだろう。広大な土地を持っている。おかしなバランスで成り立つていた。

「なんか買つてくるなら今のうちだぞ。カーナビで周辺を見たがここいら一帯、何にもありやしねえ」

「わかったよ。行つてくる」

携帯の通話ボタンを押していた篠崎を残して車を降りる。篠崎はといつとハマーから降りそうになかった。コンビニへと入ると小さな店舗にしてはそれなりの商品が陳列していた。高速の出入口になつてているだけのことはある。だが客は滅多にこないようで店員も煙草を吹かして奥にいるほどだった。夙夜が来店した事でようやく奥から出てくる。煙草の匂いは消えていない。ミネラルウォーターを一本買つて出る。やる気の無い挨拶を背中に受けるとハマーのながを遠めに覗く。

篠崎は携帯電話を睨んでいた。

ここまで来る途中、篠崎は他愛ない事でも笑つていたが内心そうではないと感じる。そうだ、部下四人の身柄は不明なのだ。篠崎が心配していなはずは無い。

彼から田を背けると周囲の暗さに驚いた。東京なら深夜でも昼間

より眩しことこはそちら中にある。背の高い建造物がないから良く見渡せる。今いるここは外灯がぱつぱつとある程度。遠くの空に浮き上がる壁から零れてくる明かりにこの街は照らされていた。高速道路の光がないとここは昔の暗いままだろ。

「買つてきたぜ」

車中に戻ると篠崎は肩を落としていた。やはり繋がらなかつたようである。じつと携帯電話の小さな画面を見ている。冷えきつたミネラルウォーターを渡すと「コーヒーじゃないのかと言つた。喉が渴いていいるのは解るがカフェインの取りすぎだと告げるとふつと笑顔が戻つた。

「あいつらまだ圈外だ。こつちに着信もメールも無い。まったく使えねえ奴らだ。休みは程々にしていくか

「それは構わないけど泊まる場所は？ もう遅すぎるぜ」

「そつちにも連絡した。遅くなつても構わないのでよ。GPSの信号からすぐの場所にある。先に信号の場所へ行つてからだ」

「わかつた。でもな、最悪の事態を想定して行動すること

「ん？ どういうことだ」

「うちの先生が言つ言葉さ。俺達はこれからあの大きな山の中へ行く。しかも天候は最悪」東京を出発した頃から空は曇つていた。もうじき雨が降る。夙夜は肌で感じ取つていた。「一歩手前なくらいですぐにでも雨が降るんじやないかつてことを考えれば準備していく方がいい。できるならな」

「じゃあカツバでも買つてくるか？」

「いらないさ。降つたら退散だ。部下のことが気になるのはわかるけど気持ちを落ち着かせる事も大事だつてことさ」

いつのまにか携帯電話を持っていた手が汗を搔いていた。篠崎は自分の気づかないうちに身体が強張つていた。自分の半生も生きていない夙夜に言われてようやく自分を取り戻した。狂乱したわけではないにしろ普通ではなかつたのだ。

ハマーが道を走り出した。山の麓にはもう閉まつてしまつたが土

产物屋が並んでる。どうやらさきほどコンビニ以外に夜の時間を営業している店は無いようだ。行き交う車も少なく一台でも通るものならスピードを落して食い入るよう見えた。

「違う」「こいつも違う」とぶつぶつ言つ。

部下の乗った車がどうかを調べていたのだ。幸い一人の乗るハマーは目立つ。こちらが気づかなくとも相手は気づくだろう。冷静になつても篠崎は部下を思つ気持ちだけは押さえきれていなかつた。

「ここを左に……つて一般車は進入禁止になつてるな」

山道の途中辺りでGPSの発信場所が少しづれていた。真直ぐに進んだ場合、そのまま頂上へと着いてしまう。その場合、全く別方向へと進んでしまう。けれども前には立ち入り禁止の看板が立つていて進めない。看板によると先は工事中とのこと。ヘッドライトの先には木を切り崩して作られた土の道があるだけだった。

「車を置いていくか……それとも行ける所まで行くか

「この時間に工事をしているとは思えない。進めるところまで行く」周囲に車を置ける場所は無かつた。GPSの場所まではまだ距離がある。この先をまだ進む必要がある。ハマーは看板を無視して走り出す。外灯が遠ざかるとヘッドライトで照らす部分だけが目に入る。両側後方が完全に黒一色に染まると明かりが欲しくなつたのか篠崎は車内の光をあるだけ全部光らせた。

真つ暗闇の樹海を走る。ライトに照られた土にはトラックの走つた跡でできた一本のタイヤ跡が残つてゐる。まるでなぞるようにして走ると徐々に坂道になつていて下つてゐる事が解つた。夙夜は辺りを見ようとしたが木に囲まれた細い道は外の景色を抹消していだ。不安になりながらの走行だつた。道がどこまで続いているのか見えないのだ。篠崎はアクセルを踏む力を弱めていた。

やがてそんな不安が吹飛ぶ。工事現場らしき大きな広場に出た。そこには縁はなく切られた大木が横になつて並んでゐる。どこからか運ばれた重機も並んでいた。広場の隅にはプレハブ小屋が建つていたが人の気配は無い。

「工事現場はここか。GPSはどうだ」

「こまま真直ぐだ」

広場を素通りしてまだ走る。現場を中心してまだ道は続いている。地図を見ると走り出した道を進むと山を降りた場所へつく。頂上付近から麓まで繋がっている。モニターに映される赤い点の中心はすぐそこだったが麓まで降りてしまつと点から遠ざかってしまう。GPSの中心地点に行くにはこのあたりで降り、暗闇に入るしかない。

「車はここに置く」

まだ坂道が続いているといふに停車した。右にも左にも寄れない狭い道に堂々とハマーは鎮座した。

「こんな時間に通る奴がいるはずないだろ」

後部座席に用意していた靴に履き替えはじめた。GPSの発進信号はすぐそこにある。夙夜はハマーから降りると周りを見た。が、やはり暗く視界は無いに等しい。篠崎から懐中電灯を渡されてようやく足元が見えるほどだ。篠崎もハマーから降りるとヘッドライトが消えた。

一本の懐中電灯をあわせるとある程度の明るさが前方に広がつた。「で、どこから捜す?」

「とりあえずこっちにするか」

発進信号はこれ以上詳しくならない。周囲に見えるすべてが搜索場所になる。先に篠崎が足を動かした。足もとは自由気ままに生えた草が噛み付くように跳ね返つてくる。力強い自然の力に東京ではなかつた不自由を伝える。ここがコンクリートだつたらどれだけ楽か、そう考えて夙夜も踏み出す。ぐいぐいと奥へ進む篠崎の背を追つていく。草を搔き分けるように篠崎とは別のほうへと進む。

「夙夜! そつちはあつたか」

草むらは一人で捜せるほど小さくは無い。懐中電灯の光が届く範囲で自分の周りを手探りしながら進むしかない。足元が見えないためケースがどこに落ちているか解らない。

「こつちにもない」

声を張り上げる。もう少しGPSの感度がよければと思いつつ自分たちの足場を捜す。実際やつてきて思うが信号から半径一・五キロというのはかなり無茶がある。自分の立っている場所さえあやふやで危険極まりない。

やはり昼間に来たほうが、と首を持ち上げ空を見る。嫌なことといつのは連鎖する。首筋にひんやりとした感触。上を見上げれば一番の恐れていたことが起こつた。感触の正体は雨の粒。ぽつりと雨が垂れた次の瞬間、雨は降り始めた。とてもすぐ止む気配は無い。

「こりや駄目だな」

「ああ、捜索は明日にしよう」

二人とも切り替えは早かつた。服に染み込む雨から逃げようと走つていく。ハマーまでは離れていない。すぐにたどり着いた。それほど濡れずにするんだ。

「さつさと予約してるので、この民宿に行こうぜ」

ハマーはエンジンが付くと麓を目指して走つて行く。雨はどんどん強くなつていいくばかりで坂道は獣道と変わりはしなかつた。走るには無茶な道に二人とも思えた。ワイパーの動きに拍車がかかる。麓に到着すると大きな道路に出る。山に入る前に走つていた道路だつた。やつてきたときと同じ方角に向かつて走ると風景が宿だらけになる。とはいえ旅行客がはしゃいでいる姿は無くどの宿も暗いままだつた。外灯が延々と続きそうな道を走るとコンクリートが途切れ砂利道に変わる。民宿が遠くに消えていってしまう。

篠崎は停まることがなかつた。車ががりがりと音を立てて走る树林を切り崩した広場に出た。左手側には一軒家があつた。

「なんだ、ここ」

夙夜の声に篠崎もまた「なんだ、ここ」と言つた。

一軒家の玄関には確かに谷津倉荘と書かれた看板が立ててある。家は一階建てのようだが見る限り幅は無い。商店街の一店舗が消えた場合すつぽりと入るほどの建物は周りに何もないため余計に小さく見えた。

くらべて車が停まつた場所は広すぎた。他に車もない。篠崎が捜していた部下の車もなかつた。彼らが泊まつていたというのが本当なら彼らの車が無ければならない。しかし駐車場には一人以外に存在していない。さらに夙夜は携帯電話を取り出して画面を見ると圏外と表示されている。携帯電話の電波は嘘ではない。

「しかし古い家だな。あいつらの車も無いし。どこかに出かけているのか？」

「さあな。でもここが圏外なのは確かだ」

一軒家は木造建築でかなり古く見える。暗い周囲に光を与えているのはこの家だけで周囲はやはり黒で統一されている。強くなつた雨のなかを小走りで移動すると玄関口に立つた。インターホンらしきものはなく仕方が無いと戸を開けた。がらがらという音を立てた。

外同様、建物の中も古めかしい作りをしている。床の板は掃除しているだろうが輝きはなく壁にも長い時間で出来あがつた染みがいくつもある。また右手側には二階へと続く階段がある。左手側には奥に繋がる廊下がある。

「「めんぐださい！」

奥に向かつて篠崎が叫ぶ。玄関の戸が開いた音では誰も迎えることはなかつたからか少々大袈裟な声量だつた。玄関から見える場所には全て電気が点いている。誰もいなればずは無い。しかし何一つ返つてくるものはなかつた。

「誰かいないのか！」

篠崎の声はむなしく消えていった。ふと下駄箱を見ているとホタルのフロントに置いているような丸いチンベルが備え付けられていた。それだけが銀色に輝いている。他とは違つているようだつた。篠崎が仕方なく押してみる。が、チンベルは壊れてしまつていてうんともすんともいわなかつた。壊れたチンベルの隣りにはさらにもうひとつ赤いボタンが壁についている。御用の方はこちらでお知らせくださいとまで書いてあつた。

「じゃあこつちか」

「なんだそよれ？」

「チンベルの替わりだろ？ 押すぜ」

赤いボタンを押す。変わった様子はない。音も鳴らない、光が放たれるわけでもなかつた。何事も起きない時間がただ流れただけだつた。ようやく痺れを切らした篠崎がもう一度押そうとした時、廊下の奥から誰かがやつてくる音がした。服を引きずるような擦れ音。

「あらあら、ようこいお出でくださいました」

調子よくリズムを刻みながらやつてきたのは木造建築のこの家によく似合つ着物姿の女だつた。

「すいませんねえ」

奥からやつてきたのは三十代の女だった。長い黒髪を纏めてあげているため着物と髪の間ではうなじが見え隠れしていた。その着物だが夙夜も篠崎も呆気に取られるほど豪華だった。この建物の古臭い外見にそぐわぬ宝物に出会ったように呆然と立ち尽くす。着物は深い藍と花柄で彩られており彼女の容姿を引き立たせている。彼女の美しさを引き立てるものはそれだけではない。彼女の髪に挿された金のかんざし。古風ではあるが黄金のように光るかんざしが眩いまでに心を惹く。

夙夜は一目見て彼女を怖いと思つた。

篠崎は一目見て彼女を美しいと思つた。

二人の目に映る女は一人しかいない。夙夜と篠崎、二人の感性の違いが出たにすぎない。

篠崎は女の少しばかり主張が強すぎる胸の脹らみに目を移す。押し上げられた見事な山を目は登つて降りた。

女の顔はといえば極上の美人である。このような美人が山奥にひとりで宿を経営しているなど考えも着かなかつた。一人はせつせと足を動かす女の動きに見蕩れそうになつていて。彼女が一步前へ出るたびに腰が左右へ揺れるのだ。身体のラインがはつきりと出るほどきつく締めた着物のせいで男の性を駆り立てているようでもあつた。

足を止めると美人が頭を下げた。見れば篠崎はいつの間にか頭を下げていた。夙夜がどこか妙に硬くなつていて篠崎の表情を窺うと岩石のような顔が赤くなつていて。それでもしつかりと目だけは女から離していなかつた。

「お待たせしたようで申し訳ございません。ええと……」

「昼間に予約した篠崎です。ああこつちは息子で」

頭を上げて話すがまだ硬さはそのままだつた。

なぜ、じぶんがここまで彼女に心ときめくのか解らなかつた。女をじつくりとみながら頭の中は半生を超絶的なスピードで再生していく。そのうち自分のよく借りる映画のシリーズに行き着いた。今週も近所のビデオレンタル店に行き借りた。その借りた映画というのはいわゆる任侠物で出てくる人物はヤクザばかりといった内容だ。ヤクザ同士の抗争を描き「玉を取つたる」や銃をハジキと呼んだりする作品。篠崎は自分の世界とは違う映像のなかのヤクザを馬鹿馬鹿しく思いながらも暇なときに見ていたのだ。

女は、その作品シリーズの女頭と似ていた。いや美貌も身についている着物も彼女のほうが上だ。だからこそ心が破裂する勢いで高鳴つている。

「篠崎さま……はいはい。ええ確かに受け賜りましたわ。一二名様で「いやあ遅くなつてしまつて申し訳ない」と頭をかく。

「いえいえ、どうぞお上がりくださいませ」

頬をやんわりと緩める。「おつ」と言つて篠崎が靴を脱ぐ。夙夜も同じだ。見れば一人の立つている隣に靴棚がある。もとあつた緑色が薄くなつたスリッパが並んでいる。外出用の靴は見られない。女は靴棚の上にあるノートを開いてボールペンと一緒に篠崎へ差し出した。

「こちらに記入をお願いしますね」

ノートには名前、住所、電話番号とあつた。篠崎は言われたとおりに記入すると女に返す。女は確認せずにノートを置いた。

「それにしてもこの雨の中大変だつたでしきう

「なんだよ。突然降つて来てな」

「どちらか外に出られておいででした?」

「一人とも肩から背中まで濡れていた。車から戸口までの間に濡れる量ではない。

「い、いや特に」

普通に否定すればいいだけだつたが高鳴る胸がどうにかならない

ようにするだけで精一杯だつた。

「そうですか。随分濡れてらつしゃるので外にいたのかと思いまし
たわ。お部屋は一階になりますので。ささつどうぞ」

スリッパに履き替えるとようやく足を踏み入れる。女の立つてい
る床は冷たく木のきしみは分厚かつた。外から見るよりもしつかり
している作りにすこしほつとする。そういえばと外で降る豪雨にも
似た強い雨の音も聽こえない。

「お荷物はそれだけですか？」

女が言つたのは夙夜の肩からぶら下つたキュー入れのバッグ。黒
くて長い、ジップ式ポケットが七つ付いている。他の荷物はすべて
車の中にあるままだ。

「はい。後は車の中になりますよ」

「そうですか。ああ、紹介が遅れて申し訳ございません。私、この
宿の女将……といつても一人しかいませんが女将の谷津倉雲と申し
ます。どうぞ、よろしく」

名乗つた谷津倉は頭を下げた。黒い髪がさらりと揺れる。夙夜た
ちも頭を下げるが挨拶も程ほどに歩き始める。先頭を進む谷津倉は
右手側に見えた階段を登りだす。階段は一人並んでいられるほど
の幅は無く篠崎が続き夙夜が最後尾となる。天井の光はどうと二階
のほうから降り注ぐものだけで足元の段差は見えにくい。さつさと
先を進んでいく谷津倉に足元を見ながら篠崎は後を追う。
「でもこんな夜遅くにどちらからこられたんですか？」

「東京からさ。こつちにいるツレに呼ばれてね」

彼女は先ほど篠崎の記入ししたノートを確認してなかつた。

「それはそれは」と言いながら夙夜のほうを見る。

よほど気になるのかキュー入れバッグに視線を向ける。

「で、息子さんの肩から下げる大きなものはなんですか？それだ
け持つて歩くなんてよほど大事なんですね」

不意に足が止まる。キュー入れバッグの中身はキューではない。
帝から預いた日本刀が入っている。あまり関心を持たれるのはよろ

しない。

「ビリヤードのキューだよ。近々大会があつてね。その練習をしていたらこんな時間つてわけ」

「ビリヤード……玉突きですよね。ええ知つてますよ。さあ」しづらの部屋が篠崎さまのお部屋になります」

にこやかに笑つて階段を登る。続こうとしたとき夙夜の目の端に蜘蛛が見えた。蜘蛛は人差し指程度の大きさだった。害はないだろう。ただ、一匹こちらを見ているように固まつていただけだった。夙夜はその蜘蛛はじつと見合つた。目をそらしてはならないと感じた。

魔術師は人間と感覚が違う。人間は物言わずに相手に意思を伝えることが出来る。魔術師はその感覚を何倍にも高める。第六感ともいふべき感覚が常人の比ではないのだ。そして感覚は人間以外にも感知する。今、目の前にいる蜘蛛はじつと視線を夙夜と合わせていた。

「どうかしました？」

「夙夜、どうした？」

二人がなかなか階段を登るつとしなかつた夙夜に声をかけた。

「蜘蛛がいる」

「蜘蛛ぐらいでますよ。こんな場所だといくらでも沸きます、潰さないでくださいね。彼らだつて雨宿りしてるだけなんですから」

谷津倉がそう言つと蜘蛛は走り出し奥へと行つてしまつた。二人の後を追つようにして夙夜も階段を登る。一足先に二階へ着いた二人に追いつくと左右の壁には襖があつた。さらに奥へ目を向けると丸いノブつきの部屋らしきものがある。両隣の襖が部屋だとは解るがその先はどうかしれない。

「なあ女将」と篠崎が谷津倉の行動を止めた。

「なんでしょう」と振り返る。

「俺の仕事仲間が数日前ここに泊まつたはずなんだが知らないか」

どうやら篠崎はあまり女に免疫がないのか谷津倉の顔をまともに

みれないようだつた。箱娘なる売春宿のよだれを管理している男とは見えない。だが、彼は谷津倉にお熱で言葉に詰まつていた。口だけならよかつたが手の先にさえ緊張が伝わつてぶらぶらさせられる。そして彼が右側の襖に手を置いたとき、

「あけないでください！」と大きく叫んだ。

さきまでの谷津倉の言動とは思えないほどきつと大きかつた。篠崎ばかりか夙夜も驚く。

「すまん、すまん。客がいるのか」

「いいえ。今夜お泊りになたれているのは篠崎さまだけです。ですがお客様でも勝手な行動は取らないでいただけますか」

声だけでなく目も本気の怒りを現していた。見るもの全てを威圧しようとする目だった。女の形相に頭を下げたのは篠崎だ。彼は対抗する事はなく自ら彼女に勝ちを譲つた。

「俺が悪かった」

まるで母親に怒られたようにしゅんとなる。

「二の家には鍵をつけている場所はありません。戸のある場所には勝手に出入りなさらぬようお願ひします」

本気の怒りように夙夜も篠崎へ「源さんが悪い」と小さく言つた。彼も「そうだな」と小さく言つた。鍵はついていないということは奥のドアノブにもないのだろう。管理は彼女一人で鍵はない。まともな宿じゃないな、と一人夙夜は思う。

「篠崎さまのご友人に関しては私は知りません」

怒りの収まつていない口調だった。

「なら昨日は？」

「誰も来おりません。この数日、閑古鳥が鳴いておりましたから」嘘を付いているように見えないが彼女の身なりからは本当だとは思えなかつた。閑古鳥が鳴こうが喚こうがこんな美女が一人で切り盛りしているのであれば男どもがやつてきても不思議ではないとうのに。

襖を開けると畳の部屋が現れる。どこまでも質素で壁も一色で統

一されている。部屋の中で目を惹くものといえば今では見ることの少ないブラウン管テレビだけだ。他に丸いテーブルと折りたたんだ布団があつた。夙夜は壁にバッグを立てかける。一人して腰をおろすと「お茶でも入れてきますね」と谷津倉だけが一階へと降りていく。

すると篠崎は部屋から首だけ出して階段を降りて行く彼女の姿をじいっと見つめつけた。彼の目には暗い階段を降りる彼女の背中、というよりうなじがはつきりと見えていた。さらに篠崎の姿を後ろから見ていた夙夜はとつと少しばかり呆れていた。彼女の姿が見えなくなると部屋に戻る。テーブル越しに向かい合つ。襖は閉めていない。夙夜の目からはもう片方の部屋との仕切りになつている襖が見えている。

「しつかしなにもあんなに大声で言わなくたつていいじゃねえか」
それこそ叱られた子供のようだつた。とはい、先程の谷津倉の顔といい声といい尋常ではなかつた。

「確かに。他に客がいないなら問題なんて無いだろうしな」

谷津倉の只事ではない形相には確かに驚いた。あれほど怒りを客に向けるなど滅多にない。しかも襖の奥には誰もいないのだ。彼女は泊り客は一人だけだと。何が問題だといつのか。

テレビの電源をつけるとザーッという白黒の砂漠が映る。チャンネルを替えてみるとどこも同じで何も映らなかつた、昔ならいざ知らず最近ならどの局も三時ぐらいまで放送している。まるで電波が届いていないようだつた。

しかしそんなことを思う気もないのか床に寝転がる篠崎。ここまですつと運転してきた彼の身体は非常に疲れていた。背を伸ばせばバキバキと音が鳴る。

しかし階段の下から再び足音が聴こえてくると座つて構えた。谷津倉がお盆にきゅうすと湯飲みを乗せて現れる。篠崎は背を正した。これまで見てきた彼とはあまりにも違つて見えて笑いがこみ上げてくる。そうとは知らずに谷津倉は茶を入れて二人の前に差し出した。

彼女にも篠崎の行動は面白く見えたのか頬が緩んでいる。

「ご夕食は食べられましたか？」

口にしたものは飲み物ばかりだった。腹はすいている。それも掴んでも何も搾れないほどに。一人して「いや食べてないな」谷津倉は胸の前で両手を合わせて今まで以上に微笑んだ。

「よかつた。材料を無駄にせず助かりましたわ。ではさつそくご用意致しますね」

「こちらこそ頼みます」

時刻は日を跨いでいたがよかつた。腹がすいていては眠れそうにも無い。

「では私はご用意を致しますので先にお風呂などいかがですか？ うちちは見ての通りのボロ屋ですが風呂は一級品ですよ」

「いいな、なあ夙夜」

うなずいて見せた。

「ではお風呂の方へ案内しますね」

茶を飲むと谷津倉を筆頭にまた一階へと降りていく。最後尾を歩くのはまたしても夙夜。廊下に出たとき、少年の足が止まった。不意に止まつたわけではない。もつと確信めいたものに惹きつけられたのだ。目蓋を閉じて気配を探る。建物のなから伝わる気配は確かに形で捕らえる事が出来なかつた。だが、何かが蔓延つているのは確かだ。部屋に戻りキュー・バッグを担ぐ。中身が震えていた。魔術師たちの感覚はそれぞれの持ち物に敏感に伝わる。刀の震えは何かと共鳴している証拠だ。

それが例え、魔術師でなくとも

歩を進め先を行く一人を追う。すでに離れていて玄関にやつてみるとさらに右へと向かつた。居間らしき大部屋が左に見えた。客用の部屋とは大違いでそこだけが山奥の民宿に相応しいなりをしていた。木目調の床は赤く燃え上がるようになに色を変えている。部屋の中

心で燃える火のせいだ。天井からロープで吊るされた鍋が火に宛がわれ熱を帯びている。鍋の中は木の蓋で閉じられていて見えないが漂つてくる味噌の香りに食欲がそそられた。

「こちらですよ」

再び前を向くと谷津倉が手招きしていた。廊下はかなり奥まで続いており先は曲がっている。彼女は曲がり角に立つて待つていて。谷津倉のいる角まで場所までいくと今度は半透明のガラスで区切られていた。

「こちら、脱衣所になつております。お風呂の方は露天風呂ですよ。丁度、見下ろす形になりますので下の街が綺麗に見えますよ」

「露天風呂か、そりやいいな」

「必ず身体を綺麗にしてくださいね。それとこちらが着替えになります」

そう言つて差し出したのは薄い着物だった。海のように澄んだ色合いをしていて肌触りも良い。

「きちんと言つたとおりにしてくださいね。でないと夕食はなしですよ」

注意深く言う彼女が去つていいく。じつと、この場所にいたのか彼女の匂いが残る。しかし少年の鼻腔をくすぐつたのは甘い女の色香とは違っていた。女の匂いは人ではなく獣の類。匂いをたぐれば捕まり食われる匂い、決して男を惑わす香りではなかつた。

夙夜には違いがわかつた。すでに緊張していたのだ。肩から下げたバッグの中でも同じ事が起きていて。少年の身に触れる他者の感触に刀が震えている。背後を歩く谷津倉の姿を見るとさきほど見た部屋へと入つていく。

どうやら襲つて来る気配はないようだ。

扉を開け脱衣所に入る。半透明のガラス戸に挟まれた部屋は男女を区別する事無く一部屋であつた。さらに奥のガラス戸の向こうには篠崎が上機嫌で鼻歌を口ずさんでいる。呑気な音をしている、彼にも手は出していなかつた。服を脱いでガラス戸を開けるとやはり

呑氣な篠崎がいた。すでに湯に使つており手を振る。

「何やつてんだ、はやくこいよ」

浴場は石畳で広がつており空は雨除けが作られている。篠崎が手を振る温泉の上にまで張り巡らされた雨除けの先ではまだ雨が降りつづけている。石畳は雨の熱に冷やかされ足の裏を冷やす。

女将の正体を知つたら彼はどう思うだらうかなどと考へながら湯を浴びて入る。冷えた足裏が湯に溶かされる勢いで熱くなる。篠崎の傍に行くと谷津倉の言つた通り夜の街の姿が見えた。びつしりと敷き詰められた箱の屋敷と螢の尾のように光る街灯が賑わつてゐる。

「おわつ

突如、篠崎が驚きの声をあげた。叫んだ彼の隣りには親指ほどの蜘蛛がいた。天井を見上げれば他にも小さな蜘蛛が雨除けにぶら下がつてゐる。どの蜘蛛も降りてくる気配は無い。じつとしているだけ。かれらも雨をしのいでいるにすぎない。

「なんだよ。ただの蜘蛛じゃないか」

「ただの蜘蛛つて……俺、こいつ足の多い生き物、嫌いなんだよ」でかい図体で何を言つてゐるんだか。蜘蛛から見ればあんたはじゅうぶん化物だよ。

天井からぶら下がつてゐる蜘蛛はせいぜい五センチ程度の小さな身体だ。とても人間が恐れるような存在じやない。

「潰しておくれ

「やめなよ」

蜘蛛は微動だにしない。石の上で固まつてゐる。

「気味が悪いのはわかるけど無意味に殺すのはよくないよ。それに何もしやしないさ。ちよつと我慢すればどこかに行くよ。こいつらだつて雨を避けているだけなんだ

「そ、そうか。解つた」

蜘蛛は夙夜の言つとおりそそくさと走り去り見えなくなつた。ぶら下がつてゐる蜘蛛たちもそこから動く事は無い。湯に浸かつて気分が落ち着いたのか篠崎が街を見下ろしながら言つた。

「なあ夙夜は歳いくつになるんだ」

「十六だけど、なに？」

「じゃあ高校生か。あれ？ 確か中学……」

「中学で合ってるよ。一年学校に行つてなかつたんだ。周りが眞面目でね、復学は同じ学年からだ」

「若いと思っていたがそこまでとはな。こんな事件に首突つ込んでいいのか？」

「先生の弟子になつたのはもう随分昔だからな。修行の期間は五年以上だし素質があるやつはもつと小さい頃から仕事してゐるらしいよ、それこそ幼稚園児くらいから魔術師の道に進む連中がいるらしいし」
全部、千影からの受け売りでしかない。他の魔術師とはつながりが無い。

「そう、なのか。魔術師つてのはなんでそんなに行き急いでるんだ？」

「別に急いでなんかないさ。それに親が魔術師だつたり家系がそつだつたりする人だけ。一部だよ。そのなかでも仕事をしているのはきちんと認可を受けたやつだけさ。全部が全部つて訳じやない。あとあまり聞かないでくれ、こういつた話はしないほうがいいんだ」

「そうなのか」

その問い合わせ。

「口伝にでも知つてしまえばその手の奴らに関わつてしまふんだ」

「どういうことだ？」

「自分が立つている場所があやふやになるんだ。世界の境界線が壊れる、みたいな」

「境界線か」

魔術師の世界は踏み込めば戻つてこれなくなる。千影から聞いた。我々の世界はきれいなものではない。あやふやな幻想でしかない。のめり込めば帰つてこれなくなる。人間の世界にいるうちは自ら足を踏み入れるな、と。

「知つてることでそういう類の連中と知らない間に繋がつてしま

うのや。その結果、よくないことが起きる。源さんは今ままのほうがいい

「深入りするなってことだな」

夙夜は踏み入れた人間。そうすることでしかその後の人生を歩けなかつた人間。死に触れ魔術師に命を救われた人間。すでに人とは違つ世界にいる。

篠崎は口を閉ざした。彼の好奇心を考えれば質問におかしなところは無い。興味が湧くのは当然だ。その興味を塞いでしまう。「悪い」と一言言つたら首を横に振つたがどこかさつきまでとは違う。口を開かなくなつた。

できれば深入りするようなことはしないほうがいい。源さんの場合、怪異との関連は居間のところない。谷津倉の正体も仕事の本質とは関係ない。トランクケースを回収することこそが彼の目的だ。妖怪、怪異と呼ばれるこちら側に近づけたくは無い。それが一番彼が安全でいる方法だ。あちらが襲つてくるのならそれは俺でしかない。

「で、源さんはいくつになるんだ？」

「俺は三十四だ。もう中年だよ」

聞けば答えを返す。拒絶したわけではない。篠崎もどう口を開けばいいのか解らないだけだ。彼にとつて少年はとても不思議で仕方が無い。なにも東堂夙夜という少年について調べていないわけではない。新宿駅から北西にある中学校に通つている事や周辺地域に仲良くしている連中が大勢いること。しかもその中には自警団を気取る荒垣トウマとその仲間たちがいることも知つていて。これまでにも依知川組の関与する部分で手を出した事もあると調べはついている。

しかし、本人と付き合つてみてはじめてわかる事もある。家の大きさを得としない少年は自ら泥を被つているようにしか見えない。

「ヒィイツ！ またかよ！」

まるで女のような声をあげる。また傍に一匹蜘蛛がいた。湯気に

隠れていたのか何匹か石の上に蜘蛛がいる。周囲を囲んでいる森からやってきたのか、雨をしのぐとはいえるこの数は多すぎる。

「もも、もういい！ 先に出る」

堪らなくなつた篠崎はおそらく身体を洗わないまま出て行つてしまつた。手のひらに乗り切る蜘蛛から足早にして逃げ出す男の背中はどう見ても弱虫でしかなかつた。一人残つた夙夜はとつと湯船の真中に移動した。湯の温度は程よく目を瞑れば眠りそうだつた。

蜘蛛たちの視線が向けられる。

こいつはもしかすると……胸の奥で鼓動が一つ増えた。

心臓の隣りにもう一つの鼓動。警告音。

東堂夙夜が今を生きている理由たる存在が早鐘を鳴らして伝えた。身体の汚れを落すのはまだ早い。

風呂場から慌てて飛び出してきた篠崎は谷津倉から渡された着替えに袖を通す。着ていたスーツを再び着ようとしたが指先が震えてままならなかつた。くらべ着物は適当に羽織るだけで済む。どちらを選ぶかは簡単だつた。ただ、どうしても譲れなかつたのが煙草。精神の乱れを直すなら尚の事、必要だつた。

ジャケットから煙草を取り出すとさつさと廊下へ出て行く。身体はまだ濡れておりせつかくの和服も所々滲み出していた。廊下に出た彼はようやく蜘蛛の大群から逃げ出せたと安心し、ふつと深く息を吸い込む。篠崎は周囲の人間よりも一回り身体が大きい。比べてさきほど逃げ出した蜘蛛はとつと小指にも負けている。これは身体を鍛えてなんともできなかつた生理現象のような物だつた。昔から虫が大の苦手だつたのだ。

できれば誰かが見ている前でのよつた醜態は晒したくは無かつたが嫌いなものは嫌いなのだと自分に言い聞かせて歩く。幸い、組の仲間でなかつたのが救いだ。

向かうは一階の部屋である。気分を落ち着かせよつと足音はいつの間にか建物全体に響くほどにまで増長していた。どうしても一服したいという思慮が歯止めを失わせていたのだ。手に握つた煙草のケースがぐちやりと握りつぶしそうになりながら進むと囲炉裏のある部屋からなにやらいい香りがしてくる。横目でちらりと見る。中央の鍋からの匂いだつた。さらに奥では谷津倉が正座してこぢりを見ている。

「もう、上がられたのですか？」

「え、ええ」

彼女の視線に自分の姿がどう映つているのだろうかと考え方の襟を整える。

「身体はきちんと洗いましたか？」

「い……いやあ、まあ」

歯切れの悪い声しか出ない。それもそのはず風呂に入った時間はわずかで身体を洗う時間などあるはずもない。その発言に谷津倉の表情は厳しくなる。そこまで拘らなくてもいいじゃないかと思いつながらも「後で入りますよ」と柄にも無い丁寧な口調で答えた。彼女の表情は変わらなかつた。目は厳しくこめかみに血管が浮かび上がりそうだつた。

足を止めていられず、愛想笑いと共に一階へ上がつていく。どうしてここは自分のペースで物事を進められないのかと疑問に思つ。自分たちの部屋の前にやつてくると先ほど怒られた反対側の襖に目をやつた。

押すなと書かれた非常用ボタンを見ると押したくなる。まるで子供的好奇心をくすぐるような襖だつた。谷津倉は言つていた。ここ最近の宿泊客は自分たちだけだと。しかしそんなはずはないのだ。篠崎は知つてゐる。自分の部下がここに泊まりトランクケースを捜していた事を。なら、谷津倉が嘘をついているのか。真意を確かめる方法は一つしかない。この建物を調べること。

トランクケースの在処よりも仲間の所在を突き止めたい。ただ、それだけで襖に手をかけた。部屋は無人で自分たちの部屋と変わりなかつた。畳まれた布団も床に放り出されている。

「いるわけないか。となると」

安堵にも似たため息交じりの言葉を吐く。

もし部屋の中を覗いて部下がいたら……それも自分の想像を遙に凌ぐ凄惨な状態だつたらと最悪の状況に追い込まれたらという恐怖から開放された。もしもそんな光景を見てしまつたら自分は立ち直れなくなる。

気を取り直して廊下の先を見る。この階にはもう一部屋ある。奥のドアノブの先だ。篠崎は足音を立てずに近寄ると間髪いれずにノブを回した。出現したのは左右へ広がる廊下と光の粒だつた。廊下のほかには木の板が斜めになつて前方に広がつてゐる。露天風呂の

雨除けだ。足を乗せる事は出来そうに無い。さうして二階から上には雨除けが無いため跳ねる雨粒のせいで足元が濡れる。とくに見るものもないため篠崎は中に入った。

「あいつら、どこにいったんだ」

部屋に戻る。いよいよ彼らはどこにいるのだろうか。携帯電話はまだ圈外で連絡は取れそうに無い。煙草を一本箱から取り出すと火をつけた。吸って肺を煙で満たすとよつやく少し落ち着いた。

湯船の真中で大の字になつて浮かぶ。耳は湯に浸かり音が聴こえなくなる。天井の木に入つた線を何本あるか数えられるほど頭の中は真白だった。

仲間がどこにいるのか。

トランクケースはどこにあるのか。

一つの難問は答えからかなり距離がありそうだった。雨を避けてやつてきた蜘蛛がじつと夙夜を見つめていた。小さな瞳に映し出された自分の姿と谷津倉の瞳が重なつた。彼女の体臭と雰囲気に入とは違つた空気を感じる。あれからは決して目を離さないほうがいい。そう、篠崎を一人きりにするのは危ない。

湯船からあがり脱衣所へと向かう。身体の汗はすでに落ちている。谷津倉から渡された着物には着替えずまた自分の服へと着替える。篠崎の服はまだ残つていた。彼がスーツから着物に着替えた事は明白だ。廊下に出ると鍋から漂う香りが強くなつていた。

「お風呂はもうよろしいのですか。きちんと身体は洗いましたか?」「洗つたよ。汗だくだったしね。それより源……オヤジは知らない?

「さつき慌てるよつに二階へ上がつていきましたわよ。彼に言つて

おいて下さい。もう一度お風呂に入り体を洗つてくださいと」

正直に言つたのだろう。谷津倉はくすくすと笑うだけで立とうとはしなかつた。

「言つとくよ」

立ち去らうとするとまた警告音が鳴る。

俺の中にいるあいつが何かを訴えようと/or/いる。大丈夫、何を
言いたいのかは理解できている。

「夕食の用意がでておりますの/すくに降りてきて下さいね
「すぐ降りますよ」

階段を上がる。この民宿で一人きりになるのはとても危険だ。

一階につくと煙草の煙が鼻先にかかる。煙草の匂いは嫌いではなかつた。師匠である洗敷千影もまた煙草を吸つ。それも一日に一箱消費する勢いだ。彼女の吸う煙草は甘い香りがしていつの間にか懐かしい匂いになつていた。

襖を開くと篠崎がテーブルの横でぼつとしながら煙草を吹かしてゐた。あまりにも危機感の無い姿に肩の力がぐつと抜ける。

「ど、どした？」

危険を伝えようとしたが本人はどうやらそんなに気にしているようではなかつた。部屋に戻つてさつそくの一服だ。右手に煙草を持つていて横になつてゐる。床にはスポーツ新聞を広げて読んでいた。「いやあ、今日は殆ど吸つてなかつたからさ。一本くらい、いいだろ」

「別にいいけど。そつちは？」

すぐそばにはティッシュが球状になつて転がつてゐる。思春期の男だつたら大体は想像がつくがそうではないと信じたかつた。

「蜘蛛だよ。また出やがつた。いくらなんでも多すぎるだろ」

いたるところ蜘蛛だらけ。その割にほかの虫は見ていない。ムカデやヤモリを一匹くらい見ても不思議ではないがいなかつた。なのに風呂も部屋も蜘蛛だけは出る。それも篠崎のいる辺りに這いよる。キュー/バッグのポケットを一つ開けると名刺サイズのカードを取り出す。カードは厚紙のように硬い。赤色の墨汁を垂らして文字を書いてある。千影からの支給品であり夙夜の仕事道具である。

「これを持つてて」

「なんだよそれ。お守りか？」

「虫除けさ」

カードの文字は篠崎には読めなかつた。蛇のよつよべこやりと曲がつた字で出来上がつてゐる。

「煙草吸つてんだ、近寄つてこないさ」

無言で突き出す。篠崎が受け取るまで引き下がらなかつた。しぶしぶ受け取ると両面を見て着物の腰部分にあるポケットにしまつた。バッグを担いでと立ち上がる。

「先に下へ行つてるぜ」

「ああ、俺は後一本吸つたら行くよ」

バッグの必要性を聞きはしなかつた。煙草を吹かすばかりの篠崎を残して廊下に出る。眼前に現れる襖を見て振り返る。

「どうした？」

足を止めた背中に投げかける。襖に手を当てる。篠崎には夙夜の行動がわからなかつた。さきほど自分が見たときは何も無かつた部屋だ。

「源さん、下に来る前に一度この戸を開けてみて」

「おいおい。さつき女将があんなに怒つたんだぞ」

「女将の相手は俺がしてるよ。だからそいつを吸い終わつたら、な

「……おつ」

一応、返事はしたものの篠崎はさつき開けた時を思い返す。夙夜は知らないだらうが変なところは何もなかつたのだ。

煙草の火は五分は持つ。渡した虫除けがうまい事働けば彼に危険が及ぶ事は無い。一階へ降り、谷津倉の待つ部屋に着くと彼女は先ほどと変わらず鍋の前に陣取つていた。部屋の天井には薄い琥珀色の電球がぶら下つており壁際まで光は届いていない。囲炉裏で燃える火が谷津倉の顔を赤く照らしている。鍋をじつと見る女の顔は非常に冷たく感じる。

「いい香りですね」

本心だつた。彼女の正体がなんであれ鍋の中で煮え滾つてゐる味

憎の匂いは甘い風味を轟かせていた。

「ええ、今夜の鍋は格別よ。あら、お父様さまは？ どうされたのかしら？」

「部屋で煙草吸つてますよ」

「……煙草ですか？」目線だけを動かして夙夜を見た。火の明るみに照らされた顔が不気味な美しさを与えた。ぞくりとしながらも彼女の対面に座る。

「ええ、一本だけ。駄目でしたか？」

「い、いいえ。そんなことはないわ。た、煙草ね」

「それとこの建物はよく蜘蛛が出るんですね。風呂もそうだし部屋にも」

「この季節ですもの。蜘蛛ぐらいでますよ……」

鍋の蓋を開くとどつと匂いが溢れ出す。泡立つ鍋には材料が入つていなかつた。見ればいつ用意したのか谷津倉の傍に切られた野菜がボウルに用意されていた。彼女は手づかみで鍋に投入していく。手が震えているのを見逃さなかつた。

「そんなに気にしなくたつて、もうすぐ来ると思いますよ」バッグを隣に置く。蓋は彼女のほうを向いている。

「部屋へ置いてくればいいのに。本当に、大事なんですね」

「大事なものだからいつも傍に持つておきたいんだ」

彼女はそれ以上、追求しては来なかつた。野菜は鍋の底に溜まり芯まで浸かる。再び蓋を閉めると囮炉裏に薪を足した。

「野菜鍋なんですか？」

「いいえお肉もありますよ。それもとても新鮮な」

どこにも肉はない。鍋の具はさきほどのボウルに入つた分だけだつた。さらに肉を加えるとしたら一人分にしては多い。

「今日の客は俺達だけ、でしたね」

「来られた時、言つたじゃないですか。ここには私とお一方しかいませんよ」

「オヤジの仕事仲間の一人、携帯電話が通じないんだ。先に来てこ

の民宿に泊まつてゐる手はずなんだけどね

谷津倉の表情に変化は無い。

「ですが泊まつてらっしゃいませんよ。そのお二人とはどこかで逢えますわよ。それより……」鍋の下で火が強く燃える。ばちっと音が立ち火の粉がふわりと浮いた。「なぜ、私が用意した着物を着ていないのでですか？」言いましたよね

彼女の声が深いところから聴こえてきた。下を向いている。鍋の下の火を見つめたまま。

「なぜつてこの服が気に入つてゐるからさ

「雨に濡れたその服が、ですか？」

肩の辺りは変色している。まだ渴いていない。ビートなく野生の匂いも染み付いている。下も同じで裾は湿つてゐる。

「そこまで……まあいいでしょ」

彼女が立ち上がつた。やはり肉は見当たらない。鍋を迂回し夙夜の傍へと移るとまた腰をおろした。あの獣じみたの匂いは鍋の香りよりも強い。あつという間に息が鼻にかかるほどの距離にまでやつてくる。身体は密着し服の下にある肉を押し付けられた。

「私、お客様がやつて来られたときからずっと見ておりましたのよ

「なにを」

「貴方のこと」

心臓の隣りで鼓動が鳴る。自分のものではない。本当にその臓器があるわけでもない。幻想のなかの鼓動が危険を伝えている。彼女を近づけるなと頭のなかでアラートが鳴る。危険信号だ。

谷津倉の腕が肩に伸びる。肌の感触は女の、それも見た目よりもずっと若い少女のようだつた。信号の鳴る音は聴こえているが腕を払いのけなかつた。漏れる吐息が甘かつたからだろう。彼女に身を任せると寝かされる。身体を密着させたまま寝転ぶ事になつた。夙夜の日には着物の間から覗く山間地帯が写つた。茜色に染まつた山は徐々に間が広がつていて、着物の帯びが緩んでいる。時期に桃色の突起が現れるだろう。

放つておけばどこまでするつもりか。部屋を遮るものはない。篠崎がやつてくれれば状況は目の当たりとなつてしまつ。谷津倉の動きは留まる事は無い。彼女の指が股間のチャックに伸びたときさすがにこれまでだと手をあてがい止めた。

「悪いけどこいつのやめてくれませんか」

「あら？ 私とじやあ不満かしら。それとも初めてなのかしらね、坊やは。いい匂いがするもの」

坊や、と呼ばれてすべてが終わつた。

千影先生以外に坊やと呼ばれるのは正直、面白くない。

「なにも童貞だつてわけじやないさ。あんたは美人だ。でもな、俺が相手にしている美人はあんたが役不足になるほど極上なんだ」 気分を害したのか手を振り解く。帯を締めて立ち上がつた。最初の位置に戻ると薪をくべる。

「さあ、さつさとお食べくださいね」

人間味を失つたように言つた。鍋から蓋を外すと碗を手にして中身を取り出す。碗一杯に注がれた野菜鍋だが夙夜は受け取らなかつた。

「どうしたのです？ 腹が減つてているのでしよう、さつさと食べなさいな」

「オヤジ、遅いなと思つてわ」

もうそろそろかな。

谷津倉の腕がじつと鍋の上で止まつてゐる。彼女が痺れを切らして中身を鍋に戻した。碗の中身が空になると同時に階段のほうでも足音が鳴つた。二階から男が降りてくる。篠崎だつた。彼は血相変えて階段を降りて廊下を走つてきた。

「夙夜！ 大変だ！」

開口一番、大きく叫んだ。振り返つた夙夜に向けられたのは鍋側からの殺氣だつた。

放物線を描いて飛んだ碗は夙夜の座っていた場所で一度跳ねた。椀の中で残っていた鍋の汁が飛び散る。二階から必死に降りてきた篠崎は夙夜の姿を目で追つ事が出来なかつた。自分が声をかけた少年は一瞬のうちに姿を消している。まるで少年が碗に変化したようにさえ見えた。

椀から目を逸らし部屋を全力で追う。夙夜はおよそ一步では移動しきれない壁際にいた。

「何があつた！」

叫んだのは夙夜だつた。またしても強い言葉で叫ぶ夙夜の声を聞く。いつの間にか呆然としていた。はつとして向けば夙夜の姿に安堵し思考力が戻つてくる。いつたい全体どうやつて移動したのか。

篠崎には夙夜を理解できていない。体格も歳もまだまだ少年の域を出ない夙夜に篠崎は呆気に取られるばかり。まるで狸か狐に化かされている気分だ。

碗がからからとその場で回転するのを見直していた。間抜け面をして立つてゐるだけでしかない。二階で夙夜に言われたとおりにし見た結果をどうしても伝えたかつたが口にしようにもなんと言つていいか悩んだ。一刻も早く伝えててしまいたいが口は開いた固まつてしまつてゐる。

それでも目だけは動いていた。一瞬で移動した夙夜と転がつてゐる碗ともう一人。部屋の奥で碗を放り投げたとみられる谷津倉の顔を見たとき間抜け面は吹き飛んだ。

この屋敷の中には三人しかいなはづ。奥にいるのは谷津倉で間違ひない。出会つた時の美しいと思つた女はそこにいなかつた。いるのはただの怪物。異物に違ひなかつた。谷津倉の髪がふわりと浮き上がる。髪止めは役目をはたしていな。髪がいくつかの束になつて持ち上がる。もはや彼女に抱く感情は映像の中で見る化物でし

かない。

「何があつた！」

またしても夙夜が言つた。これまでのどんな言葉よりも強く激しい声だつた。動かなくなつた身体の呪縛を解き放つ。電流が流れようじに「そうだ、言わなければならぬ」と脳が思考を開始する。ようやく篠崎はこの場にいることを実感できたのだ。

「襖の奥だ、奥！　お前に言われたとおり言つたらあいつらがいて！」

篠崎は夙夜の言つた通りにしたのだ。煙草を一本吸い終わるともう一本、新たに火を付けて部屋の外へ出た。夙夜から貰つたお守りを持つて。眼前に現れた襖を開く。さきほど見たときは何も無かつた部屋だ。だというのに緊張した。喉を鳴らしてつばを飲むほどに。

「それで」

「蜘蛛の糸みたいなのでぐるぐる巻きになつて……どうなつてんだ」

どう説明したらいいのか。

襖を開くと頭がぐらついてまるで車に酔つたみたいに気分が悪くなる。立つてさえいられない不思議な重力に倒れそうになつた。ぐつと堪えて壁に手を置いて姿勢を保つ。目を向けるとそこには壁が見えないほどに白色に染まつてゐる部屋があつた。煙草の火が部屋のなかに浮かび上がる。白色の中に黒い物体があることに気づいた。手で掘めそうなほどの塊に見える。床にはまだ進める部分がある。どういうわけかその黒い物体に身体が引き寄せられる。足を滑らすようにならぶと物体の数が増えていく。一つの大きさはさほど変わらないが数は六。篠崎は手で掘む寸前になつてようやく理解した……人間の頭だった。

「部下は見つかつたんだな」

思考の先を告げられた。口を動かすまでもない。

「そ、そうだ」

「そつちの男なんで動いてるの、なぜ、動けるのよ

立ち上がる谷津倉は目を開いていた。驚愕の表情を浮かべている。

「お守りのおかげさ」と返す。

手に汗を搔きながらもお守りを放さなかつた。ずっと持つたままだ。そしてお守りに目を向けた。赤い文字は光を滲ませたように光つてゐる。仕掛けはわからなかつたがこれが自分を守つたことにはうなずける。

「対策は万全だ。あんたが何者かも予想はついているわけさ。あんたが刺客として送り込んだ蜘蛛は今頃、息をしてない」

「つは！」

今になつてようやく何かに気づく。

「ぼうやのせいか！」

谷津倉の口が裂けそうなほど開かれた。彼女は気づいたのだ。やつてきた篠崎を捉えようとした蜘蛛の死を。

お守りの赤い光は効果が発揮されている証。篠崎の手の中で燃えるような赤はまさしく彼を守るために敵を排除した。赤を見て怒り満ち溢れる。人を殺せる眼は夙夜に向けられた。

眼前で繰り広げられる一人のやり取りについていけなくなる。いや、最初から立つてゐる場所が違うのだ。敵対する関係ながら互いに知り合う仲に篠崎は歯を噛んだ。一人、取り残されたのがあまりにも歯がゆかつた。

目の前の一人は彼を置いて先へと進んでいく。まるで自分はこの部屋に入る事は許されていないと。

「源さん、ここから仕事の本番だ」

茫然自失の男に少年は彼に声をかける。

仕事という言葉に胸が高鳴つた。

少年の仕事はなんだ。自分と静岡へドライブする事か？ トランクケースを捜すために深夜山奥へと出向く事か？ いや、そんなものは仕事ではない。そんなものは自分でできるのだ。少年を雇つた理由はひとつ……自分には手に負えないものがある。

あと数年で四十を迎えるとする篠崎が十代半ばの少年の力を借

りる理由は明白だ。まるで自分のほうが子供の頃に戻ったように高揚する。

「……なぜ……なぜ……」

心臓の高鳴りが早さを増していくなか、谷津倉の声も次第に大きくなっていく。彼女の表情はすでに人間のものではなくなっていた。口が大きく裂ける。肉も皮も避けた部分から見えていた。人間にあるまじき牙のように長く鋭い牙が現われる。瞳は赤く変色する。もう人だつた頃の美しさはない。あるのは恐怖と怖気を呼ぶ獣の姿だけだ。

「なぜ、なぜ殺した！」

着物の下で肉と骨が黒い塊になつて膨れる。両足が大鎌に変化するにつれ腰から下も膨張する。玉のようになつた尻には篠崎の身体が丸ごと入る大きさにまで脹らんだ。尻の左右に三本ずつの大鎌が生える。身体の膨張に伴つて着物の帯びが切れた。肩からするりと抜け落ちて彼女は変化した。彼女の身体は天井に迫るほどとなる。さなぎが蝶に羽化するように彼女は人から蜘蛛へとなつたのだ。さすがに夙夜も氣を引き締めている。余裕のない表情はここへ来るまでの雰囲気を一切持つていなかつた。

「源さん！ 左に飛べ！」

なぜ、という疑問よりも先に足の震えを利用して言われたとおりに飛び。全く同じタイミングで谷津倉だつた怪物が股の間から白い糸を吐き出した。糸といつても太く分厚い大木のようであった。糸は壁にぶち当たるとその壁を貫く。篠崎の行動が、夙夜の声が一秒でも遅かつたらば篠崎の身体に穴が空いていただろう。

「正体を現したな。この建物にいる蜘蛛の母親つてところか」

化け蜘蛛となつた谷津倉の人間たる部分が夙夜を見る。鎌のような足が持ち上がり床の木板を破壊しながら進みだす。天井から吊るされていた鍋は転がり火が消える。暗闇の中、部屋の外から零れる光が谷津倉の瞳を映した。

蜘蛛との距離が近付いても夙夜は動かない。手にはなにもなく背

中は壁に近い窮地だというのに。そう、逃げる術を持つていなかつた。いや、持つ必要が無かつた。

「発！」

最後の一歩だつた。

夙夜の声にあわせてバッグのジップがすべて開放される。キューバッグのポケットから大量の紙が飛び出した。紙は篠崎の持つお守りと同型の護符である。暗い部屋の中で赤い文字が浮かびあがる。夙夜が魔術を扱う際に使用する護符、それが蜘蛛の糸のように連なつて飛ぶ。蜘蛛の足に取り付け部屋の壁一面に貼られていく。

「よし！」

あと一歩。鎌の矛先が夙夜の頭を潰そうとする。
その一歩は踏み出せなかつた。

バッグから放出された護符がすべて出尽くすと蜘蛛の身体が動かなくなつた。谷津倉が身体をなんとかして動かそうと力を入れている。しかし脚は止まつたままであつた。護符は股間に貼られており糸も出せない。

そんな蜘蛛の前をゆっくりと歩き出しがバッグを手にとる。
「悪いけど動きは封じる。源さんは上の階にいる仲間を助けに行つてくれ」

「でも……」

「俺の渡したお守りがあんたを護つてるんだ。それと煙草に火をつけてれば大丈夫さ。あんた煙草の煙り、嫌いなんだろ？」

すでに谷津倉……いや、谷津倉だつた怪物の怒りは限界に達していた。勝ち誇つた夙夜に対し憎悪をぶつける。そこの人間味はなく獸の雄たけびだつた。

「行かせるものか！」

化物となつた下半身は動かない。動くのはその眼、その口。人間の身体を残した部分だけである。

腹いっぱいに息を吸つて人の口から糸を噴ぐ。

さすがの夙夜も戸惑つた。糸は下の口からしか出ないものだと思

つっていた。だが、人の口からも吐けたのだ。細いが速度はあった。糸の射角は篠崎を狙っている。囲炉裏の間と廊下に挟まれる壁は人差し指程度しかない。蜘蛛の糸がどれだけの破壊力を持つているかは先の一撃で証明されている。壁は貫かれるだろう。

どうするか、迷いはない。自ら断ち切ればいい。

「させるか！」

一閃。銀の光が煌めいて糸を切り裂いた。

キューバッグに仕込んでいたのは護符ばかりではない。手には刀が握られている。刀身がきらり輝き糸を寸断した。斬れた糸は勢いをなくし落ちる。

「おのれ……おのれ

「あきらめな

「臭い男はもういいわ。鍋の中に入れれば旨そうな肉だと思つたけど煙草なんて吸つてゐんじや臓器は美味しいでしようしね」篠崎が駆け出す。夙夜はまさに戦士として申し分ない力を彼に魅せ付けていた。

「こつちの坊やのほうが食べ应えありそつ骨の髓まで蕩けさせてあげる。さあお姉さんがじっくりねつとりと可愛がつてあげる」

谷津倉の目が夙夜へと再び向けられる。しかし蜘蛛の身体は動けるはずが無かつた。まだ護符は張り付いたままで硬直している。

「つるせえよ！ 自分の状態がわからないわけでもないだろ

「でもないわよ

にやりと笑うと張り付いていた護符が黒く滲み出す。護符は特殊な施工を施された魔術道具。墨で塗つても滲むことはない。なんだ、とよく見ると体内からなにやら液体が溢れ出している。護符を通じて液体の正体を知覚する。毒だ……体内に溜まつた毒素の塊だ。まるで汗か油のような濃厚な液体は護符の効力を破壊し剥がれていく。すかさずポケットから新しい護符を取り出し口元に当てる。神経を研ぎ澄まし護符に力を注ぎ込む。

「炎舞！」

放つ。護符は夙夜の声と力によつて姿を変える。トリックなど無い。ただ、魔術式によつて体現させただけに過ぎない。護符は東堂夙夜にとって杖も同様である。魔術師として魔術式を使用する際の道具。作動した式は護符を炎に変化し飛ぶ。

「炎ですって！」

向かってくる炎はまるで銃弾のようだつた。炎の弾の熱さは見た目以上にある。触れれば身が燃える。天井高くにそびえる身を屈め避けようとする。谷津倉の身体がいかに細くとも自由の利かない室内ではかわせそうになかった。

しかし炎は蜘蛛へとあたる事は無かつた。頬を露める程度ですり抜けた。

「これでも魔術師の弟子なんでね、みつともない戦いはできない」「やつぱりあの魔術師の」

「炎舞！」

二度目、炎が舞う。今度は顔面に向けて放たれている。今度こそ避けることはできそうになかつた。だが、二度目の炎も蜘蛛には当たらなかつた。夙夜は当たる直前に炎を自ら消した。変わりに部屋の壁に張り付いていた護符が剥がれだした護符の上から貼られていく。また動きが封じられる。

「えつ？ 殺さないの？」

動けなくなつたもの動かなければ別段痛みはない。人間の瞳で夙夜を見た。殺そうという意思はそこになかつた。

「無駄な戦いはしたくないだけだ。それより魔術師つて言つたな」「ええ」

二人の間に奇妙な空間が生まれた。谷津倉は怒りよりも放心にあり夙夜の声に耳を貸す。姿からは想像できないほど素直に話せるようだつた。蜘蛛も夙夜の言葉を受け入れたようだつた。

「そいつ、車椅子に乗つてなかつたか」

「なんで知つてるの？ まさか仲間？」

「違う、そいつは敵だ。俺はそいつを搜してゐる。その魔術師は今どこにいるんだ？」

「知らないわ」

「本当に？」

「ええ。嘘なんて言つてないもの。第一、あの男達は目的の刀が手

に入つたらどこかに行つちやつたわよ

「なつ！ 刀だと」

おそらく桜紋鴉に違ひない。

「ええ。なんでも凄く切れ味がいい大太刀よ。坊やの刀なんてちつぽけにみえるわ」

手にした刀に目をやる。帝より受けとつた刀にみすばらしさなど無い。これがちつぽけに見える刀など夙夜には一本しか心当たりが無かつた。桜紋鴉で間違ひない。本来、受け取るはずだつた刀。

「あの刀は盗品だ。造つた魔術師を襲つたのはあんたか？」

口元を緩めて首を縦にふる。

随分正直に認めるじやないか。

「決まつてゐるじやない。人間にある男の工房が解るわけないわ。魔術師達も喜んでた」

得意げに笑う女の顔は自分の行いがどういうものか解つてゐるようと思えなかつた。まるで私のおかげよ、と自慢げに話をしている。「そういう問題じやない。自分が何をしたか解つてないのか？」

「わかつてゐるわ。取り引きよ」

「取り引きだと」

「どうせ、坊やもあるの薬が欲しいんでしょ。匂いがするもの甘い、あの匂いよ。薬の。ねえぼうやは持つてないの？」

「ケースはここにあるんだな」

GPSの発信信号の位置はこの建物も含められる。

あやしく笑う。仕事の真の目的はトランクケースの回収だ。ケースがこの建物にあるならもうじき篠崎が見つけるだろう。彼女の笑みがどういうものかはもうじき解る。ここで得られたのなら儲け物だろう。あとは桜紋鴉の情報だ。彼女は誰と取り引きしたのか。その姿がちらちらと見え隠れしている。篠崎が持ち込んできたあの映像に映つていた車椅子の魔術師。

「おい。聞いてるのか？」

返事が無かつた。あれだけ話をしていたのに突然だ。嫌な予感が

した。女の口から薬、ブルーポーションの話がでた後での笑みは身体に緊張を走らせる。感覚が一瞬だけ鈍つたのだ。

「ツ！」

陶酔にも似たあの言葉が出た瞬間、少しでも気を緩めてはいけなかつた。蜘蛛の身体から膿を出すようにして生えでた青い瓶に遅れをとつた。女の腕は健在だ。ぐにやりと腰を曲げると瓶が握られる。やめる、と言いたかつたが間にあわない。女の腕は無理やりに瓶を身体に刺す。瓶には蓋がされているが関係なく刺さると身体の内側で瓶が割れる。赤い血と青い液が混ざり合つ。

「この薬の力がどんなものか試したの？」

目が血走つてしている。身体中の血管が浮き上がり青い線が浮かび上がつた。初めての使用でないのはあきらかだつた。内側の筋肉が盛り上がり人の姿であつた上半身さえ獣じみた色になる。

彼女がこれまで何度も、ブルーポーションを使用したか、その度合いは確かだつた。もはや、後戻りはできない。

「ほうら行くわよ」

人語を喋るだけはマシだ。奇声を上げて突進されるのは勘弁願いたいかつた。理性の外れた暴力に立ち向かうほどの圧倒的な戦力差はない。

身体の呪縛は振りほどかれる。すでに護符の効果などない。

下の口が糸を吐く。さつきまでは別物だつた。速度も、威力も。夙夜は切り払えず飛び退いた。すかさず追い討ちをかけるように脚が一本なぎ払われる。巨躯は残りの足で支えられている。一本ぐらいいなくなろうが問題なさそうだった。わき腹を抉るように激突すると少年の身体は飛んだ。

「なんだこの力？」

床に顔をつけながら思う。鍛え方が悪ければ骨まで折れていた。

「ハハハッ！ さつきとは違うわよ。この力、ぼうやだつて欲しいんでしょ。だから来たんでしょ。私のところへ」

狂つたように笑つてはいる。体勢を立て直し護符に火をつける。体

内のもう一つの鼓動が高鳴った。液体を身体に流し込んだ空の瓶が床に落ちた。

あんな物が無くても俺にはもつと大事な力がある。

護符から変化した炎を壁に放つ。壁際で小さな爆発を起こす。火の粉が舞い蜘蛛の動きが危機を察知し止まつた。夙夜は部屋自体を檻にすることで蜘蛛の動きを封じたのだ。

「そんな物飲まなくたつて俺は！」

二つの鼓動が重なる。夙夜の瞳の色が蒼く燃える。変色と共に視界が変わる。見ていた世界が色を変える。物質を色で判断できる。赤、青、黄の靄ような炎が瞳に映る。ブルーポーションによつて変化した蜘蛛とはまた違つた変化を身体に起こす。両者ともども、力の増すことに変わりない。

蜘蛛は毒を使つた。

夙夜は生命の限りを尽くした。

決定的な差がそこにはある。生命の火は少年に生きるための力を与える。化蜘蛛の体内を駆け巡る力の波を寸分違わずはつきりと見せる。その道を絶つ。

一太刀。

踏み込みから斬撃まで刹那。肉体に傷をつけず化蜘蛛の体内に流れるその力だけを断つ。刃は身体の芯を貫く。巡る力が止まり芯が冷えていく。彼女の瞳を見た。すでに正気は失つている。アーサー・ライバックは言つた。ブルーポーションは数度の使用で人間の細胞を破壊する。なら、眼前の蜘蛛はどうなる。彼女の身体が人間を凌駕していることなどはつきりしている。いつたい何本使つたらここまで酷い有様になるのか。

「へえ坊や強いのね」

「師匠がいいからな」

「でも！」

最後の一吐きだつたのだね。体内に溜めた糸を吐こうとした。

「ハアツ！」

夙夜は喉を斬り落とした。

「グヒイイツ！」

「本当なら殺さないがあんたを殺しておかなきや ここから出れそうにないんでな。それに、先は短いんだろ。介錯してやる」

胴と頭が分かれた。彼女の眼は夙夜を見てはいるがぴくりとも動かない。血が切れた首から滴り落ちる。それでも死には至ってはいた。

すでにブルーポーションの使用量が限界に近づいているのは読み取れる。あの薬は人間だけを犯すものではない。谷津倉という怪物までも壊していく。改めて危険な代物だと認識する。

谷津倉の髪を持つて自分の目の高さに持ちあげた。牙をもつた口がぱくぱくしている。蜘蛛の身体が燃え上がる。部屋の壁を燃やしていた炎が行き場を求めている。足元まで後少しだった。

首の下、血が滴り落ちていく。手を放そうとした。そのとき、口は最後の一息を糸から血に変えて夙夜に浴びせた。頬に数滴だが赤黒い血が付着した。

「……出ら、れないわ、よ、こ、こから……」

最後の言葉だった。

呪いの言葉だった。

谷津倉の瞳から生気が消える。首を炎のなかに放り込んだ。

しばらくして篠崎がやつてくる。彼の目には炎を前にして手を合わせる夙夜が立っていた。蜘蛛の怪物は消えていた。どうなつたかは見てしか判断できなかつた。

「夙夜、全員運び出したぞ、谷津倉さん……あのバケモンは？」

夙夜は炎をして何も言わなかつた。すでにあの巨躯は碎け炎の中で燃え尽きてゐる。

一人で建物を出ると同時に炎は竜巻のよくなつて燃やし尽くす。屋根にまで昇つた炎は建物を燃え上がらせる。

雨は止んでいた。炎を消すものはない。ハマーの中には部下四人が腰を曲げて座らされていた。端にはトランクケースも並んでいる。どうやらここにあつたようだ。しかし救助した仲間達の顔色は悪くとても無事だとはいひ難い。

「部下四人どじいさん、ばあさんか」

「犯人は他にいる。あれは協力したにすぎないよ」

民宿の経営者と見られる一人は横に並ばせているが息はしていかつた。篠崎が見つけたときはすでにこの状態だつたらしい。今夜やつてくる随分前から命を削り取られていたのだろう。ハマーに六人を収容すると夙夜は自分の荷物だけを持つて外に出る。運転席に篠崎が座るとドア越しに夙夜を見た。

「源さんは部下を連れて下まで降りる。俺の護符があれば出られるはずだ。そしたら病院へ連れて行けばよくなる」

「どういうこつた？ 夕夜、お前は？」

まだハマーには乗れる場所がある。

「俺は別ルートで東京に向かう。早く行かなきゃやばいぜ」

「だつたら車で」

一緒に行けばいいと告げようとしたが首を振つて否定した。

「駄目だ。俺といふと襲われる可能性がある。さつきあの蜘蛛に血

をかけられた。俺はこいつの協会に顔を出す必要もあるからこりで
お別れだ

「……大丈夫なのか」

魔術師の世界について口を出すほど無粋ではない。少年がそし
るというならそうしたほうがいいのだ。それでも心配はする。友情
のようなものがいつのまにか篠崎のなかにあった。

「問題はない。それより、ふもとに降りたらすぐにここへ連絡して
俺の番号を伝えてくれ。それで今回の仕事は終わりだ」

「わかった

ハマーが走り出す。テールライトが消えると携帯電話を取り出し
た。やはり圏外である。誰とも連絡はつかない。篠崎が電話をし救
援がくるまでおそらくあと三十分ほどかかる。蜘蛛が言った魔術師
と桜紋鴉の行方に考えをめぐらせる時間にちょうど良いことさえ感じ
るが周囲の草木がざわついた。

頬にかかった血の匂いは拭えていない。

「よっぽど東京に来て欲しくないんだな」

護符の残りはあとわずか。手にした刀と身体だけでどこまでやれ
るのか。ここで死ぬなんて勘弁だと、燃える民宿を背に一一番乗りで
飛びついてきた怪異を切り捨てた。

今宵、山奥にて時代はずれの剣戟が舞う。

アメリカからの長い船旅がようやく終わりを告げる。大陸からやつてきた一隻の船は東京湾の東側に入港していく。巨大な長方形の要塞はほどなくして停船する。

全長百五十メートル、幅一三三メートルの巨大な塊には一人の女。イラストが描かれている。大きな瞳に黄金の髪をした絶世の美女。美女の顔は人間的な面影はあるものの真の人ではない。3Dグラフィックスによるモデルでしかない。壁一面に描かれた巨大なイラストは港の男達のハートをぐつと驚撫みにする。これから毎朝、女神を見られるのは彼らにとつて幸いだつた。

船は背も大きい。甲板から数えて五階建ての超巨大要塞。地下も存在する。地下を含めれば全十階ともなる。この上、五階のうち95%は使用されていない。全ては地下の施設に要点が絞られる。なぜならこの船は一個のシステムであり機材でしかないのだから。

黒い船体部分より上には普通の船にはない装置が幾つも並んでいる。人間大の巨大な照明器具にスピーカーが端から端まで備わっている。

停船と同時に今度は船と繋がるコンクリートの道に一台の車がやつてくる。静かに唸るエンジンを回してやつてくる。運転は若い女。助手席には深いしわが何本も入った男が乗っていた。後部座席にも一人、男が乗つており三人とも船の入港を眺めている。車が停まると船の動きも落ち着いていく。従業員たちが慌しく動いて叫んで入港を完了させた。船とコンクリート道路が繋がると後部の男がドアを開けた。

「小塚警視正、帰りはどうするんです？」

「構わない。自分でなんとかするよ。一人とも」苦労

前席一人のうち、一人の男とは親子ほど歳が離れているというにも関わらず位は若い方が上だった。しかし後ろの男は顔色一つ変え

ず、「ご苦労」という言葉さえ気持ちは籠つていなかつた。まるで機械か道具に対するように言つた。かといって二人とも良い顔などするはずはなく男が車から出でいくのを確認した。車を降りた小塚は振り向くことなく船に向かつていぐ。

車は再び走りだし去つていぐ。小塚はひとり繫がつた橋を渡り船の中へと静かに侵入していく。足裏に響く靴音が彼の身体に染み付いた年月を思い出させていった。

操舵室は静かだつた。アメリカからの船旅でスタッフの疲れはピークに達している。途中、中国で一度、横浜で一度停泊したが疲れを取る暇は無かつた。四六時中、船の安全に気をつけ運ぶ機材を看病するように付きつきりで世話をした。東京に着くまでに休む暇などなかつたのだ。誰もが椅子に座つているだけで眠気に襲われてくる。それを察してか船長は自分の隣りでパソコンをじつと見る男に相談を持ちかけた。

石造のようなくまつっていた男はウイリアム・バークレイ。船長以下、数十名の乗組員を雇うプロジェクトのリーダーである。彼の目に映るパソコンのモニターには一人の巨大な女がスクリーンに映し出されている。女は船に描かれた美女と全く同じ。パソコンの中でも3Dグラフィックスが流動している。

音は左耳に掛けたイヤホンだけで聴いている。何かあつたとき声をかけられて反応できるようにしている。船長が彼に声をかけると固まつたまま口だけを動かした。休みが欲しいという船長の頼みを彼は首を縦に振るだけで合意を示した。

「各員持ち場のチェックが終わつたら休んでいいぞ」
「了解です」

船長の言葉はすぐに船員に伝わる。船のどこもかもで喜びの声が開放された。最後に力でチェックを終わらせる。着替えを済ませた者から次々に上陸していく。船員たちの行く場所は酒場と決まつていた。汗だくの身体を引きずつてビールの刺激とアルコールを求める

る。一人、そうしなかつたのがウイリアムだった。彼は一人きりになつてもその場を動かなかつた。パソコンのモニターに映る女の歌声をじつと聴いていた。動画の再生時間は船員たちが船を降りた時点で残り十分。彼はその十分を堪能し眺めていた。

動画が終わると電源を落す。甲板に出て東京の空を眺め無表情のまま船の奥へと向かっていく。船の中はいくつもの防壁によつて区切られている。どこもかしこも設備とシステムの乱立で出来上がっている。普通の客船や貨物船ではない。この船自体が一つの機材として存在している。

船員たちが移動できるのは防壁の前までで船の心臓部たる区画には余程の事が無ければ立ち入りを許されなかつた。防壁は上部にもあり船の六十%は船員の立ち入り不可域となつていた。防壁は厚さ三センチの鉄の塊で出来ている。重く、絶えず圧力が掛けられるため人間の力では開けられない。壁に設置されたロックを解く必要がある。ロックの引き金はカードと暗証番号になる。ウイリアムはすべての防壁を破る術を持つている。彼の入れない場所はない。

一枚、三枚と次々に防壁を開け閉めし通路を進んでいく。次第に電球の色が薄くなり洞窟の奥へとやつてきたと実感させられる。船の最奥たる部屋のドアを開く。

「さて……調子はどうかな。我が愛しの“シエラ”よ」

部屋の中に光は無い。ウイリアムが開いたドアから入る光が部屋の中を照らしただけだつた。光に暖かみは無い。部屋は小さく手足を伸ばす事さえできない。椅子が一つと女が一人入つてゐるだけだつた。

「いいわけないわ」

掠れた声だつた。絹のように美しい金色の髪にミルククリームのような肌をした女が下着姿で椅子に拘束されている。だが、彼女の肌は赤い線が何本も引かれ所によつては腫れあがつてゐた。両目はマスクで塞がれてゐる。彼女の身体で自由なのは指先と口と鼻だつた。

「悲しいことを言わないでくれ。君の声は天使の声なんだ。悲しい言葉を紡ぐためにあるんじゃない」

「ならここから出して……」

塞がれた目はきっと涙を流している。口元からは涎が垂れる。ここへ入る前の美しさは皆無となっていた。だがそれはウイリアムにとつての完成を意味している。彼女で必要な箇所はすでに整つている。

「駄目だ。君はここで生きていくんだ。？ シエラ？ として」

女の名前は違っていた。シエラと呼ばれた女は否定しなかった。なぜなら否定した場合を知つていていたから。また、ぶたれる。また、骨を折られる。その繰り返し。だから否定しなかった。

ウイリアムの指が頬をなぞる。彼の指は火傷しそうなほどに熱い。彼の心の熱を伝えているかのようであつた。熱に触れると女はウイリアムの心の中を知る術をもつと早くに欲しかつたと強く思つた。そうすれば今の自分は消えているはずなのだ。

「あなたなんか死ねばいいのよ」

「死ぬものか。君がいる限りはね」

恐怖のなかで言つた言葉に意味など無かつた。女の身体は心と同様にずたばろになつていていた。すでに生きる力さえ尽きかけていた。

「ライブの日取り今までまだ日はある。」こちらの調整はしておく。？

シエラ？ も準備をしておくように」

「私は？ シエラ？ じゃない……」

耐えられなかつた。名前を取り上げられた事。今の自分。なにより自分の都合だけで人を人とも思わない彼に対して押さえられなかつた。

「あぐつ！」

しかし状況が変わる事は無い。触れていた指は形を変えて拳になつた。女の頬が赤くなる。頬肉がゆれて腫れる。顔中に電気が走つた。ウイリアムの拳は彼女の腹に狙いを貰える。

「ぐえつ！ がつ！ えうつ！」

一撃」とに声がひりだされる。もはや彼女にとつての生はない、ただ彼の拷問に耐えるだけの煉獄となつていた。唯一の幸せがあるとするなら歌える事。

「もう一年だぞ。一年、お前に費やしたんだ。もうちょっと自分という物を考える。お前は？シエラ？なんだ。ええ？ そこをきちんと理解しておけ！」

「ぐうっ！」

最後の一撃はまた顔だった。口内が切れ血が流れる。鼻からも血が垂れる。痛みと悲しみに身体が震え最後には椅子の下に水溜りができた。彼女は殴られるなかで失禁していた。部屋の中に尿の臭いが蔓延していく。

「まつたく……四肢を切断せずにいるだけマジだと思えよ。お前の必要なパーツは声だけなんだからな」

「すいません……」

どうにか声を出す。

「調整、頼むよ。最近力が弱ってるからね」

「はい」

意識が朦朧としてくる。身体を拘束していたものが外されていくのがわかつた。部屋の扉は開けられたままだつた。痛みに耐えながら船内を歩く。傷の手当と“シエラ”のために喉を潤さなくてはならない。

彼女には救いの手が必要だつた。

船の中を自由に歩ける者は限られている。船員たちが上陸している今、ウェイリアム・バークレイが船内を歩いても誰とも会うことは無い。さきほどまで彼が可愛がっていた女も行動できる場所は決まっている。汚物にまみれた小部屋と飯を食う部屋がひとつしかない。彼のほかに自由に歩ける者達は船内を歩くことはほとんどない。船のなかにいる者達は自分の行動域をきっちりと守っていた。

船の最奥から出でると今度は下へと階段を降りていく。また何度もかロック式の防壁を開け閉めして辿り着いたのは鉄の壁が剥き出しへなった暗い通路だつた。靴音が奥の奥へと響く。船の中で一番、人気の無い場所だ。本来、貨物室として使う区画である。硬く重い扉が一枚、眼前に現れノブを回す。部屋の中は天井からのライトで光が溢れている。

「あまり彼女を痛めつけるでない」

部屋に入つてすぐ男の声がした。白髪と黒髪がちょうど半分ずつに分かれた初老の男がウェイリアムを見上げる。彼の視線は低くウェイリアムの腰辺りにある。彼は車椅子に乗つていた。瞳はこんがりと焼けた肌の黒よりももつと濁つっている。

部屋の中には小さなモニターが並列され壁を埋め尽くしている。初老の男の眼前に広がるそのモニターの中にはさきほどのが小さな部屋で食事をとる姿が映し出されていた。また隣りのモニターには女の閉じ込められていた小さな空間が映つている。この男はこの最下層たる鉄の部屋で船の全てを監視している。

「説教ですか？ ですが彼女にはあのくらいがいいんですよ。でないと急げてしまう。貴方だつて彼女に急げられては困るでしょう、アブドウル」

男の名前だつた。アブドウル・ジアー・マフディ。この一隻の船のオーナーでありウェイリアムの愛する“シエラ”プロジェクトに多

額の資金を投資する男だ。彼の資金援助なくしてこのプロジェクトの成功は無い。それどころかすぐに頓挫しウィリアムは夢を失う。優秀な人間がいようとも最高の技術者がいようと資金がなければどうもこうもできない。

とくに“シエラ”たる女をなくせば全てが破綻する。

シエラとはウィリアムを発起人とする偶像の歌姫をプロデュースする企画のこと。アブドゥルは企画をサポートする立場。男達が手塙にかけて育てたのは

シエラザード・ヒルムンク・ビッグドハート

という映像の姫君。

水で造る超巨大スクリーンに映像を投影させ音楽を奏でる一大エンターテイメント。シエラの人気が爆発的に加速したのは一年前のこと。まだ機械的音声によるボーカルしかなかつたソフトウェアに比べシエラは人間よりも人間らしい感情を持っていると評価された。市場に彼女の姿が映り込む。瞬く間に姫君は他の歌姫を抜きトップの座を勝ち取る。まさにウィリアムの勝利に他ならない。

船を拠点とするシエラのイベントは海岸沿いで行なわれる。そればかりかインターネットでの中継生ライブは世界中にファンを作り上げてきた。いまやファンは彼女の声を聴くために世界から集まる。「死なせてはもともこうもないということだ」

「それはそうですが、気づいていますか？ 最近、魔力の溜まり具合が悪かつたこと。もう残量も少ないのでですよ」

モニターの並ぶ壁の右隣り、ウィリアムの立つている入り口から真正面にはさらに扉がある。ウィリアムの眼は扉の奥を見つめていた。

「二ヶ月前からだな。シエラのシステムに不具合は？」

「あるはずないでしょ。メンテナンスは週一回、システムに限つては毎日チェックしているんです。すべては彼女の力の寿命でしょ

うな

彼らの言つシステムは科学の範疇を超えてい。彼らの本分たる魔術において成功した魔力吸収装置を指す。システムの完成は二年前になる。システムは女を使って行なうシエラプロジェクトの初期段階から何度も改造を繰り返してきた。一人あたりから吸収できる魔力量と貯蔵できる量の増加は完成した初期とは違つて。今ではライブで失神するほどの吸収量となつて。事実、ライブ中に失神するファンが多いとニュースにもなつた。しかし対策は万全だつた。警備の責任者は最高の人物だ。もし妙な噂が立つたとしてもライブ会場で倒れるファンがいても不思議ではない。興奮の余り倒れたと言えば問題はない。その興奮を味わおうとさらにファンが増えるだけのことだろう。

歌姫はすべてを吸収して巨大になつていった。

ウィリアム・バークレイは夢を手にしたのだ。自分の思い描く姫を作り上げた。

ウィリアムの夢を完成させた男にもまた夢や願いはある。続くよう現れたアブドゥルは彼をサポートすることで自分自身を守つている。

アブドゥルがこのプロジェクトに莫大な資金を投資している理由もシステムにある。人間の身体から魔力を吸収するシステムに自分の身体の命運がかかっていた。

魔力はシエラの人気に応じて溜まる量が変わる。アブドゥルは溜まつた魔力を資金で買う。システムの存続に金はどうしても必要だつた。膨大な電力に宣伝費、活動費は並みの歌手とは違う。シエラはプログラムなのだ、息をするたび金を食う。市販されているCDやDVDでは賄えない。

システムはシエラが活動するために必要不可欠な装置でもある。

そのシステムに不具合が生じたのは二ヶ月ほど前のこと。予兆はあつた。シエラのライブは一度に十万単位で人が集まる。システムが許容量を超えてしまつていた。膨大な力を吸収しきれなくなつて

いた。嬉しい誤算ではあつたが吸收しきれなくなつた力はシステムを故障に導いた。

「そんな事でこの先どうする？ 改善策はないのか？」

膝の上に手を置いてさする。アブドウルが魔力を必要とする理由は自分の身体を守るため。彼の足は細く筋肉がなかつた。骨に肉と皮がついているだけでぴくりともしない。完全に機能を停止していた。

筋萎縮性側索硬化症。

現代でも原因不明とされる病気である。五十歳を越えたあたりから兆候が見られた。まず足首の辺りがうまく動かなくなり立てなくなつた。続いてふくらはぎ、膝とまるで沼に使つていくように足が崩壊していく。病気の進行は速度を増し始めた。一年以内には腰まであがつてくるだらうと宣告された。

このとき彼は自分の力を最大限に生かすことを決めたのだ。普通ならすでに身体全身が動かなくなつていただろう。アブドウルが症状を脚だけで押さえているのは彼が魔術師だつたからである。科学も医学もなにも通じない。対抗できたのは彼の本分である魔術だけだつた。原因を調べることはできなかつたが症状を抑えることは出来ていた。代わりに大量の魔力を必要とする。絶えず生命力たる魔力を流す事で病気の進行を食い止める。他に術は無い。いや、無かつた。

「そのためのブルーポーションでしょ？」

事の発端は一ヶ月以上前。ある製薬会社の新製品にある。彼らの仲間である警備主任が昔の仲間から聞いたその薬について調べたのだ。まだどこの誰にも回つていらない情報だつた。ブルーポーションの効果は麻薬としてではなく身体能力の強化にある。詳しく調べてみると人間の細胞を極限レベルにまで活性化させることのできる代物だと判明する。しかし製品レベルは低く一定以上の使用量を超えると肉体が持たず内部崩壊がはじまるのだ。

加えて製薬会社が検査の対象になるという情報まで入る。

彼らは賭けに出た。

ブルー・ポーションというまだ未完成の薬を警察よりも早く回収し手に入れた。どこの所属だろうが情報を得るには十分な資財とコネがある。まんまと手に入れた彼らはブルー・ポーションの進化を科学から魔術へと切り替えたのだ。

魔術師が集まると欲望に歯止めが効かなくなる。

実験は成功。ブルー・ポーションは次第に精巧さを増していった。薬の能力を高める方法として用いたのはシエラのファンから奪つた魔力に他ならない。

だが、まだアブドウルの身体を治癒する能力を持つていない。

彼らが回収したブルー・ポーションはすでに底をつきかけている。たとえ薬の能力を高めたとしても増産することができる施設はなかった。

新たな情報が舞いこんで来たのは製薬会社の崩壊から数日後。ブルー・ポーションを持つていてる人間が他にいた。製薬会社のスポンサー企業だ。市場に出回る事の無くなつたブルー・ポーションを新製作の麻薬と偽つて処分するらしい。場所は日本だつた。シエラの次にライブ会場はすぐに日本に決定した。

残りのブルー・ポーションをすべて回収する。数は少なくとも関係なかつた。いてもたつてもいられないのはアブドウルだつた。彼は船からいつたん降りて日本を目指した。つきの出でいる間だけだつた。

依知川組という組織が取引相手であった。アブドウルは仲間と合流しブルー・ポーションだけを掠め取つた。なんとしても自分の手で回収したかったのだ。

すべてが手に入った夜だつた。それからというものアブドウルはブルー・ポーションの研究に没頭し続けている。研究と実験のなかで何人の人間が被検体として日常を送つていて。しかし現在の状態では脚を蝕む病魔を退治する事は出来ない。まだ彼の望むものは出来上がつていない。

「まだ使用できる段階ではないだろ？ 使った奴らの最後は暴走だ。あんなもの飲めるか？」

「なら彼女に期待するしかないでしょ？ それから……新しい？ シエラ？ を調達するか？」

「できるものか。学院もそろそろ気づくぞ」

女を手に入れたのはまつとうな手段ではない。拉致に近い形だった。しかし必要だったのだ。ウイリアムにとってシエラの完成に必要だったのだ。

「その時はその時でしょう」「う

「貴様はそれでいいかもしかんが」「

「解っています。貴方の足の事。貯めた魔力はあと一ヶ月分はここにあるのです。次のライブでまた蓄えが増えますよ」

「だといいがな」

シエラのライブは八月、もうすぐに行なわれる。場所はアクアラインのど真ん中。巨大な橋をすべて手中に収める。スクリーンは海を使って作り上げる。船に増設している巨大な機材が可能にする。チケットは全て完売しており推定客数は二十五万人を超える。資金と魔力の回収は十分すぎるほどに可能。

「なにをそんなに心配しているのです？ ここは日本ですよ。平和ボケしたやつらの国だ。なにも心配はない」

「君はこの国の魔術師を知らんのか」

心配があるとするならこの点以外他は無い。現在、陸で活動している仲間達から報告が入っている。市場に出回っているブルーポーションの大半は船で増産した改造品だ。売人には使用者の情報を流すように仕向けている。実験の結果は実地で行なわれている。

だが、問題は起こっている。取り引き現場に現れる集団がいる。地元の情報によると自警団らしいのだがその連中の中に魔術師がいると報告があった。

「なにをバカな。この国出身の魔術師など取るに足らない存在ばかりではないですか。学院でも日本出身など数えるばかりでしたよ。

いても大して目立つ存在じゃなかつた

「なら小塚はどうだ？ 彼もそつか？」

最後の一人の名前がでる。プロジェクトの警備班最高責任者である。引き入れたのはウイリアムでアブドゥルと出会うよりも前になる。彼らはともに魔術師の学院で浮いた存在だった。友人ではなく知人、同士ではなく協力関係。

「彼は特にそうでしょう。授業の成績は良かつたが実績はない。私と貴方が目をかけてやらなければアメリカでの成功もなかつた」

「ふむ」

深く息をする。眉間にしわが寄り険しい表情でモニターに目を向けている。彼の瞳にはひとりの男、小塚が部屋に向かって歩く姿が映っている。ウイリアムもその姿を見ていた。スーツ姿で冷たい目をした小塚は一定の歩幅で歩いている。

「貴方が足を心配をするのは解りますがそう気を病んでいると本当につましいきませんよ。どうです？ 外に出ませんか？ 私も記者会見やインタビューで留守にするんですから一緒にどうです？」

「そう、だな。久しぶりに太陽の下に出るか」

アブドゥルが太陽の下にいたのはもう何ヶ月も前のことになる。太陽の下で行動するのは嫌だった。脚を誰かに見られたくなかったから。

作業を終えた乗組員たちが船を下りると同時に一人の男が船に入つた。洞窟のようなパイプと縁の壁の中を一人無言で歩く。パトカーから降りた男だ。名前を小塚英太郎。彼もこの船の乗組員の人である。シエラの護衛が任務でありアメリカからの船旅では同船せずに空から一足先にやつてきていた。

彼の前にも他の者同様、カードキーによる防壁が立ち塞がる。船の中を全て移動できる人物は三人と決まつてゐる。ウィリアム、アブドゥル、そして小塚の三名だ。小塚の目指したのは一人のいる部屋。彼は船のどの部屋へも向かうことなく直行した。

「一人で何を話していた」

小塚が部屋に入るなり無言の一人がいた。

「べつに、あまりにも彼が病んでいただけですよ」

「気にするな。足の事が気になつただけだ。それよりどうだ？ ブルーポーションの具合は？」

「段取りはついている。すべて手配済みなのだ。私がミスをするはずはないだろう」

「あまり自身を過信するな」

「過信ではないよ。眞実だ。生産工場のほうも確認してきた。父の話によるとあと数日で完成する」

小塚の実家は小塚建設という土建屋である。規模はまあまあだが地元の政治家と繋がりがあるため大きな仕事を年何件か都合してもらつてゐる。新宿区の公共事業のうち実に見入りのいい仕事は彼の父が取つてゐる。

現在、ブルーポーションの数はせいぜい五百。市場に流せばすぐになくなる。とてもアブドゥルの身体を直す薬を造るには足りない。この日本で増産する必要があつた。が、すでに他の国では情報が回つてゐる。表立つて工場たる施設を作ることが出来なかつた。彼ら

は船内での製造に着手したが数が足りるはずも無かった。

増産と改造を両方共に行うには船では不可能に近かつたのだ。

「」の案件にまかせると言つたのは誰でもない、小塚だ。彼は自分の実家が新宿で幅を利かせられることを告げるとアブドウルが土地を買った。すべて突貫工事で社員は地獄のよつた業務を強いられている。

「そりか。で、改良のほどはどうだ？」

「まだ駄目だな。こればかりは私の手ではどうにもならん」

部屋の奥に輝く魔力に目を向ける。ブルーポーションはいまだアブドウルの欲する力を持つていない。これでは増産しても意味が無い。加えて船に溜まっている魔力はもうじき底をつく。

「だが、成果は徐々に出てきている。私のほうで用意した奴らの中にとびきり上等な女がいてね。彼女の身体で証明されている。特効薬はもうじき完成する」

「そりか」

アブドウルが足を擦る。小塚は少し冷ややかな目で見ていた。彼の身体に同情こそすれど特定の感情を持ち合わせていなかった。ただ、脚を見てある場面を思い出す。

船が港に着くまでの間、小塚は新宿区の警察に紛れていた。その初日、新宿区である騒動に出くわしていた。男たちが何人、何十人と馬鹿騒ぎをして駆けずり回っていたのだ。彼が市場に流したブルーポーションと密売人を巡つて。

「ただ一つ、気になることがある」

「なんだ？」

「市場に流しているブルーポーションを止めている連中がいる」

「ほう」

小塚が何かに対して危険だというような事を言つたことはない。彼はどんな仕事でもそつなくこなしていく。

「まあ、気にするほどの事でもないが目障りでね。改良した品質も確かめたい」

「私が出向こりうか？」

「かまわん。そのために私の女を使う。彼女はいいよ、きっと連中の目を欺いてくれる」

「あの男はどうする？」

あの男……小塚がこちらへ戻ってきたときブルー・ポーション奪取に協力した男がいる。名を依知川龍馬。ブルー・ポーションの取引きを持ちかけた依知川組の養子だ。彼は現在、小塚のために用意されたホテルに一人留守番という形で居座っている。

「龍馬か？ しばらくは様子を見る。彼の望みを叶えることも簡単ではないからね。アブドウル、心配せずとも貴方の望みは叶えられる。安心したか？」

「少しあな。あとはライブ当田か」

「そういうことだ。なに、お一人が心配することなど何もない」

部屋を出る。小塚はアブドウルの危惧する表情とウイリアムの焦りを感じていた。二人とも焦っている。すべてが順調に見えてそうではない。

当初、ブルー・ポーションの話を聞いたとき飛びついたのはアブドウルである。しかしブルー・ポーションは彼の目的に到底立ちそうに無い。現在もそう。魔術師として薬品の質を高めようとして入るが時間がかかってしまっている。あまり時間は掛けられない。

またウイリアムにとつても時間は無かつた。シエラの本体である彼女の存在はすっと前から落ちている。あの女がいつまで持つのかさえ解らないのだ。替えが存在しないシエラの寿命は見えていた。

船の中を移動する。

ウイリアムがシエラの本体である彼女を隔離している区画があるようすに小塚もまたある一部分を自分専用の箱にしている。

箱の中は薄暗く生臭い。血の臭いが充満していた。

小塚はこの箱の中に女達を閉じ込めていた。身元不明の少女からシエラのライブスタッフに選ばれた人間達だ。数は十五。年齢も背も国籍もばらばらの女達をひとつずつ部屋に閉じ込めていた。

部屋に入ると一人、立ち上がる。

髪はぼさぼさで長く全身を血の匂いで湿らせていた。

「さあ来なさい」

「なにをするの？」

日本語で話す彼女の足元には肉塊が広がっており白い骨が何本も転がっていた。彼女が勝者となつたのだ。アメリカからの船旅で彼女らに与えた餌はゼロ。最終的には誰かが誰かを食うことになる。生存本能による闘争だ。彼女は足元の元人間を食つて生きた。

「君のやりたい事をすればいい。人殺しでも、強姦でも、売春でもとにかくなんでもだ」

「なんでも？」

手をとると彼女の目に生気が宿る。人間の感情が今までなかつたように今、ここに復活を遂げたように息をする。

「そうだ。君のしたいようにすればいい。世間をちょっと騒がせらればいいのさ」

「そう……わかつたわ。あなたの考えがなにか知らないけどここから出られるならそれでいいわ」

「ここが嫌なのか？ 君にとつて最高の箱だと思つたけど」

「逢いたい子がいるのよ。それにあなたの言つなんでもつていうのがしたくつて堪らないわ」

「何をするんだい？」

「……決まつてるじゃない」

彼女の手には一本のナイフが握られている。人間の身体を分解するのにちょうどいい長さと切れ味を持った一品だ。そのナイフを渡したのは誰でもない小塚である。彼は箱に入れたとき、彼女が勝つように仕組んだのだ。すべて予定通り。小塚の予定通りに進んでいる。

「君の持つていた荷物は上の部屋に置いたまにしてあるよ

「ありがと。力をくれて」

彼女が笑つた。ナイフについた血を舐め取り抜き身のままで持つ

て行く。小塚は血と肉と骨の散乱する部屋を出る。唯一部屋に入る事のできる扉に手をあてて念じる。船は彼らの魔術師としての工房である。小塚の箱は彼の意思どおりに中身を消し去った。はじめから中に女など一人もいなかつたように。

第五章 登場人物紹介

登場人物紹介

主要人物のみ

氷上恭司

ひかみ・きょうじ

背が高くモデルのバイトをしている。
曾我部美耶子とは恋人関係にある。

曾我部美耶子

そがべ・みやこ

ドッペルさんを呼び出した高校生。

夙夜の手助けを借り、怪異を退けた後、恭司と付き合う。

芹沢遥

せりざわ・はるか

氷上恭司の元家庭教師。

一年前、恭司の前から姿を消す。

白瀬トオル（しらせ・とおる）

池袋の白瀬酒屋店、次男坊。

現在、恋人募集中。

荒垣トウマ（あらがき・とうま）

白瀬トオルの兄。苗字が違うのは両親が離婚しているため。昼は父親の経営する派遣会社の副社長。夜は自警団のリーダー。

後藤（ごとう）

新宿署の刑事。現場主義の男で地元の若者ともよく通じ合っている。かなりの人脈があり夙夜、白瀬親子とも繋がりがある。

依知川組に対しては以前から危惧している。現在は楠木朱美の教育係として同行する。

東堂夙夜（とうどうしゆや）

魔術師、洗敷千影の弟子。

二年間の休学のため、同級生とは一歳が離れている。

洗敷千影（いづしき・ちかげ）

東堂夙夜の師匠である魔術師。

新宿駅近くに事務所を持つており夙夜に指導している。

「ねえ……」の状況、どうやって覆す?」

黒い髪に白い肌。

長い指に少量の筋肉がついて弛みのない腕。

「そうだな、まずは腕を払つて僕が上になる……かな」

「へえ、私の腕を払うんだ? 怪我しちゃうかもしないわよ」

妖怪のように妖しい瞳。

服の隙間から出現する鎖骨。

贅肉のない完璧なボディ。

「しないようにすればいいよ」

「何なら私のことを抱き寄せてみるくらいの勢いを見せなさいよ」

「それは……」

「言葉が濁つてゐる。二 点」

妥協を許さない厳しい点数。

あの日、あの夜から随分と時間が流れた。氷上家では家主の氷上恵子を不在とし二人の年頃の男女だけがいた。男はこの家の長男で女は客だった。恵子は一人が家にやつてきてすぐに家を出た。気を利かせたわけではなく仕事に出かけなければならなかつた。

客が来たのは一時間前。夕方の四時ごろだった。三ヶ月ほど前から女の客はやつてきている。恵子がいる時は夕飯を一緒に作り三人で食べる。まるで家族のように接している。が、しかし。今夜は

違つた。向かい合つて座つてた机はひっくり返りいつのまにか恭司は女の下に倒れていた。

痛みはない。ただ、倒れ背中が床に着いている。客、曾我部美耶子の顔だけが目に映る。彼女の髪が垂れると先端が触れるか触れないかのぎりぎりに当たる。肌をくすぐる髪をこねばゆく思う。

「ねえ、ここまでしてまだしないつもり？」

顔色一つ変えないまま頬の筋肉を最低限動かして言つた。恭司の心臓は今にも破裂しそうなほどに脈を打つていて。が、表情は変えなかつた。美耶子の服が襟元からだらり垂れる。謎の空間足るべき穴が作られる。天井の光を浴びると服が透けて中の白と青の花柄模様の下着が見えた。

どくん。

よりいつそう大きな太鼓の響きの如く心臓が鳴つた。

「ほら、胸の谷間見えちゃつてるわよ。見ないの？ それとも興味がない？」

このまま手を伸ばせばその花をむしることができる。身体を引き寄せれば美耶子の身体はすんなりと自分の物になる。それは彼女をすべて自分の物にできるということ。力をいれて抱けば折れそうなほど細い腰も最近肉付きの良くなつてきたお尻も太ももも唇も何もかも全てを独占できる。思春期の少年なら喉から手が出るほど欲しくてたまらないはずだつた。

恭司自身、美耶子が欲しくて堪らなかつた。だが手は出していな

い。恭司はまだ彼女にキスをするだけで自分からは胸さえ直接揉んでいない。目の前の果実の匂いも形も知らないままだつた。恭司もまた年頃である。自分を好いている女に恥をかかせる気は無かつた。いつでもラブホテルなりこの部屋なりで行為に及ぶ事はできる。

しかし、事に及ぶことはなかつた。

美女に言い寄られても頑として手を出さなかつた理由はひとつ。恭司が利口だつただけだ。まだ中学三年生の恭司だが早くに子供が出来て結婚した人間達を自分の目で見ているからだ。もしもの場合を考えた時、恭司はどうしてもその手を動かせなくなつていた。自分にはやらなければならぬ事が決まつていたから。

いや、それは愚かな考え方でしかない。

自分の考えがどれだけ馬鹿げているのか理解していた。美耶子のことと言ひながらその実は臆病でしかないのだ。先の不安が目に見えて手を出せないだけだつた。

美耶子はと、うとそんな恭司に苛立つっていた。自分の身体に不満があるのかと一度関係が崩壊しかけた事もある。しかし恭司の心がそうではないと知つたからこそこれまで彼氏彼女の仲を続けている。自分を大切してくれている恭司を知つて、自分が恭司を好きな気持ちはこの一年でさらに大きくなつていて。だから別れることは無かつた。

そんな二人の間にちょっとした事件が起きたのは三日前。

一人で熱海へと旅行へ行つたのだ。恵子もい、ない正真正銘一人きりの旅行だつた。とうぜん部屋は一室で朝から晩まで一緒だつた。

だといつのに恭司は変わらなかつたのだ。そのへんの中学生と同じように接するだけで一人に甘い夜は存在しなかつた。

「私の子宮が疼くのよ」

美しい乙女の声だつた。

精一杯、振り絞つた欲情をせる言葉。

今、手を伸ばせばスカートを退ける事さえできる。彼女の黒いスカートは太ももをきつちりと隠している。もしも頭が逆の位置にあれば美耶子の下着はおろか尻の形まで丸見えになる。妄想が先走りする。

「それは困つたね。でも……解つてゐるでしょ。しないつて言つたよ

「できちやつたらつて事よね。私ずっと考えてるんだけどいいんじやないの、べつに?」

「それを言つちゃ駄目だよ。べつに美耶子が嫌いになつたわけじゃない。セックスだけが好きつて事を確かめる方法じゃないでしょ」

「じゃあ他の方法で教えてくれないかしら? でなきや落第よ」

恭司はそつと身を起こしキスをした。ピンク色の唇が重なる。美耶子の身体がどすんと落ちて密着する。足を絡ませ股間を擦りつけた。恭司は身体を離さなかつた。本心は今すぐにでも服を脱ぎ去りたい。

雄の本能をぐつと堪える。

スカートの薄い生地と下着がジーンズのごわごわした生地に触れると色をえた。四本の腕が互いの背骨にたどり着き唇の間に透明

の粘液が溢れ出す。ひとつつの塊にならうとする。むせむせむつなか
スに情熱を燃やす。

一人は身体を吸着し服越しに好きだと言い続けた。

唾液まみれになつた口をそのままに身体を離す。

「これで好きつてこと?」

「今はまだこれが限界だつてことだよ。せめて高校に入つたらつて
思つてる」

「そんなこと言つて……身体は反応してゐるわよ

「そりややうや」

股間の一物は限界に達していた。密着していた時、そのふくらみ
に気づかないわけが無かつた。美耶子は恭司の一物に気づいていた。
ベルトを脱がして下着の間から手を入れようとする。柔らかく白い
指は男の肌とは別の生物のように感じられまだふれてもいないので
震わせた。竿を扱き睾丸を弄ぶ。美耶子はいつもクールな恭司の顔
が真つ赤になるのがとても好きだつた。

もう、すぐ元でも発射しそうな恭司のモノを扱く。

初めてのことだつた。性器に直接触れることも、いきり立つた熱
を知ることも。

恭司は美耶子の顔を見たまま果てた。何分と持たず彼女に搾り取
られるように。白濁液は美耶子の制服を汚した。心のどこかで汚れ
た制服を見て嬉しさにも似た感情を憶えた。

「いめん

「気にしなくていいのよ。今は私の指でイツた事のほうが私は嬉しいんだもの。百点満点よ、恭司」

白濁液を指先ですくうと舐める。さっきまでの感情が突然、恐怖に変わる。たまらなく怖かつた。液を口に含む仕草にまるで自分が食べられたような感じがしたのだ。

「さっぱりしたでしょ。お勉強の続き、しましょう」

ひつくり返った机を元にもどすと数学の問題集が広げられた。

美耶子と付き合い始めてから二ヶ月後、つまり十一月頃になるが恭司は塾を止めた。なにも突然止めたわけではなく恭司の偏差値や前年度の模擬試験で合格点を超えたからである。加えて今は曾我部美耶子という家庭教師もいる。塾へ通う費用を無くせるならと考えた結果だった。

もう学力は問題なく後は時期を待つだけとなつた。ちなみに曾我部美耶子の学力は校内でもトップクラス。ドッペルさんの事件が終わり一息ついた後、復学した。登校していなかつた間も自主練習を欠かさなかつた彼女は成績を落す事は無かつた。社会復帰も時間はかからなかつた。

心強い教師が味方についている。今の恭司に受験に失敗する理由はない。

一人の生活は学校生活を終えた後始まる。今日のように夕方頃落ち合い氷上家へと向かうがどこかで勉強となる。だが実のところ、勉強というのは口実で今日のよつにイチャイチャするのが大半となつていた。

「……」

問題集に取り掛かるもすぐに否定される。甘く囁く美声はかつてのかすれた声を搔き消していた。気を抜けばまた身体の一部分を火照らすことになる。

恭司が前にしている問題集は目標にしているM高校よりもレベルの高い高校用だった。美耶子の授業は通っていた塾よりもきつくな学の授業がまるで幼稚園のように思えるほど難しいものだった。しかし嫌だと断らず受け入れた。すると美耶子の授業を半年も受けるとこれまで以上に伸びた。

夕方になると家を出る。夏の日差しは時の過ぎる時間を遅くしまだ昼間のように明るく照っている。今日の東京は34度。美耶子は日傘を差し日光をさえぎつて歩く。恭司は白のTシャツにジーンズというラフスタイルで外に出る。大人びた背とスタイルで着るとそれだけで決まりてしまう。

二人は並んで歩くどちら見てもお似合いの青年と美女に他ならない。肩を並べて歩けばそれだけで絵になる。しかし二人はそうしない。美耶子が先を歩き数歩送れて恭司が追うように歩く。

いつだつたか、ただ街を歩いているだけで声をかけられたことがある。声をかけてきたのは同年代の女の子。声をかけられたのは目を惹く美耶子ではなく恭司であった。美耶子同様、恭司もまたモデル業に精を出している。母の手伝いとしてやったモデルのバイトの成果を目の当たりにした。声をかけられる頻度は瞬く間に増えだし

た。嬉しく思えたが彼ら彼女らが声をかけてくる度、複雑な思いをする。

いつまでモ『テルの仕事を続けるのだろうか、と。

美耶子の機嫌はどうか、と。

心のどこかで美耶子の機嫌を伺っていた。彼女は他の女と話すだけで気分を悪くする。彼女のよく言つ点数に現れるだけなく時として暴力に訴え出る時があった。

何より事務所から問題とされた。完全復帰した美耶子の仕事量は恭司とは違う。今日のようにゆっくりした時間をするのは月に一度あるかないか。恭司も同じである。そんな二人が居合わせるわけにはいかない。どこで誰が見てているか解らない。

お互い、一歩ずつずらして動く。

美耶子の背後を歩く。今、自分の頭を悩ませるのは目前に迫る受験。なによりその先に彼女の未来がある。

学校生活に問題はない。学業を疎かにしておらず授業には退屈と感じられる余裕さえある。成績は校内でもトップクラスを維持している。M高校よりも偏差値の高い高校へと進学しようとしている同級生と同等。一切の不備はなく準備はできていた。

問題は……高校に入つてどうなるのか……不安は尽きなかつた。M高校は入学するだけでも困難とされる。また入学して終わりではない。その後、本当の実力が試される。三年間学校に通いその後、大学受験に突入する。長い人生のなかでまだ恭司のいる場所は入り

口に過ぎない。

自分が何でもできる天才ならどれだけ不安は消化されるだろうか。

駅に着くと切符売り場で並ぶ。

「仕事は？」

Suicaの普及により切符売り場に並ぶ人は少ない。一人も持っているがわざと切符売り場で立つ。当然、一人の周りに人は寄り付かず肩を寄せ合っても不思議に思う人はいない。

「今日は事務所によるだけよ。確認しないといけないことが多いですね。恭司のほうは？」

「僕もなんだ。ちょっと参考書を買いに行くだけ」「なら、そこまで一緒ね」

切符売り場からは一人揃つて行動する。電車に揺られて十分、新宿駅に最短時間で到着する。

学生が夏休みで全国一斉に休日になつているなか働くサラリーマンたちも暑いだろうスーツに身を包みながら出て行く。二人も電車を降りると駅の出口まで同行し別れた。

美耶子の事務所は新宿にあり徒歩十分とかからない。恭司は別方向に歩き大型書店の入り口に入つていく。二人の時間を名残惜しみながら。

電車の走る音が鳴り止まぬコンクリートの道に一人の女がやつてくる。黒い髪をざっくりと切ったショートカットで汚れを払っていない汗の染み付いた服を着ている。スカートは長く膝の下まで隠れていた。暗い夜の道に赤い双眸が映える。

死の淵からでもさらに死を感じるその赤き瞳に女を見据える男は目を背けられなかつた。

高架下の暗い道には一人のほかに人はいない。ゆっくりと女は歩く。殺意に似た双眸は何度も揺れながら近づいてくる。まるで酔っているような足取りで歩く彼女はある男の傍まで行く。懐から何も言わずに折りたたんだ一万円札を差し出した。くしゃくしゃの一万円を広げて確認すると男も無言のままポケットにしまう。

すると今度は男が腰ポケットから紙袋を取り出した。手のひらに埋まるほどの紙袋は女の渡した札と同じように、くしゃくしゃだつたが女は何も言わずに受け取る。

二人のあいだに言葉はなかつた。ここで会うことを約束したわけでもなかつた。ただ、ここに来る人間には理由が解つてゐるにすぎない。

目的の物を手に入れたことを確認できると女は踵を返して歩き出す。今度は駅を目指して歩き出した。男はやはり呼び止めない。彼もまた目的を終えたのを確認するとその場にひつそりと佇んだ。

女が日本へ帰つてきて幾日すぎたか。故郷たる東京に戻つてきたところで身体の渴きは満たされなかつた。古き知人に会おうにも現

状の自分を見せたくないと思がすくんだ。

外見の異常ではない。彼女の姿勢はそこいらの女性を凌いでいる。理由は彼女の内面にある。

まず箱から出て数時間すると五感が揺るいだ。視覚、聴覚、触覚、味覚の感覚が絶望的なまでに壊れたのだ。わけなど解るはずもない。ただ、彼女はそうなるべくしてなつた。そして残つたのは嗅覚のみ。絶望的状況のなか常人たる行動にでられたのは異常なまでに発達した嗅覚のせいだった。

外の匂いを嗅ぎ分けて歩き生活する。それだけで精一杯だったのだ。

次の異変は渴きである。喉が焼けるように身体が熱くなると止められない渴きに飢えた。緊急時に連絡を取るあの男に聞けば薬物の摂取によって改善されると説明された。

「コカイン、マリファナ、スピード……」この街で得られるいくつもの麻薬を買いあさり日替わり定食のように試した。まだ数日しか経つていながらすでに身体は汚染されている。しかし身体に加わる刺激はほとんど感じられず精神状態もさして変化しなかつた。

出回っていた麻薬は彼女の渴きを満たすことができなかつた。さうに男へ伝えると男はある薬を彼女に送つた。

ブルーポーション

東京全体、いや世界でも稀にみる新薬である。男は箱から出た女に一日三本、各地の売人へ渡す分を送つた。新宿駅を拠点とする売人は全員で一人。女の仕事は一人にブルーポーションへの供給することとなつた。

船旅で得た力はまだ使用していない。

あの日、あの時、得た力はまだ彼女の身体に眠っている。

彼女は箱のような部屋に同じ年頃の女達とともに閉じ込められた。食料はすぐに尽き貪りあう日々が続いた。隣にいる人間がただの肉に見えたとき彼女たちに崩壊は訪れ人ですらなくなつた。獣のように相手の身体を傷つけあつた。

特に箱の中では女が優勢だつた。箱の中に入れられる前に男から一本のナイフを持たされていた。他の娘達は何も持つていなかつたのにだ。最初から彼女が勝つように仕向けられたのだ。

唯一、凶器を持った彼女が最後まで神経を保つていた。気をやつてしまふ周りの女達が一人、死んだ後は簡単だつた。狂気だけが箱の中には存在し互いの身体に爪を立てる。女は箱に入れた男に渡された一本のナイフで場をぐぐつた。それが魔術師の作り出した式の中だと知らずに。

生き抜き箱から出た女には力が宿つていた。どうして自分にそんな力がついたのか彼女には知る由もない。ただ、箱から出たときに力が憑いていたのだ。

女はの懐には百万円程度の資金がある。男が陸に上がる前に用意した金だ。最初、手切れ金かと思つたが足りなくなつたら言えと言われた。さらにこうやつて身を案じブルーポーションまで振舞う。放つたらかしにしているわけではないようだつた。

実家に帰ろうとしたがやはり身体の異常に気をやるばかりで池袋駅近くのホテルに部屋を借りた。陸に上がつたところですることはなく快樂を求める事だけが目的になつていた。何をするにも不自由

な身体と渴きを潤すことが先決となつた。

渴きを癒すなら方法は選ばなかつた。麻薬だろうがブルーポーションだろうがなんでも……。

しかしだ。満たされない心もある。人と交わることによって得られる心情を欲した。

人は一人では生きていけないとはよく言つたものだと彼女は感心しながら我が身、我が人生を振り返る。いつも傍に誰かがいた。今は孤独のなかに身を置いている。

物思いにふけていいるといつの間にやら歓楽街へとやつてきていた。池袋の汚い雑居ビルが乱立する通りにいかがわしい看板が並んでいる。どの店も男をターゲットとした店で入れなかつた。

ホテルに戻るとケー・タイで店舗の検索をはじめる。もう何年も前に買った古い携帯電話だが支払いは続けられていたらしく機能する。

なにがいいだろうか、デリヘルといつものいいのか、女性客は断られないだろうか。操作する指が汗を搔き始める。そして一件の店に行き着く。池袋のSM専門店で女性客も大丈夫と書いている。SMに興味はなかつたが直感と合致した。彼女の身体には目いっぱい力を込めて握らなければ痛みも伝わらない。だからか……女はすぐ電話をかけた。

「お電話ありがとうございます。SM俱楽部アゲハです」

男の声がした。清潔感というよりは義務的な感情を消した声だつた。

「私、女なんだけど出張……頼めるかしり?」

「女性のお客様でも当店は出張可能ですが。場所はどちらになられますか?」

ホテルの場所を告げる。男は案内をはじめ掛かる時間と費用を説明する。女はすべてにイエスで答えた。途中、気になる嬢はいるかと言われたが特に答えは無かつた。誰でも良かつたのだ。歳があり離れておらず可愛げのある女を希望した。

電話で契約する。時間が過ぎるのを待つ。契約どおり一時間経つと扉をノックする音がした。出迎えると男と女が立っていた。扉を叩いたのはちょっと男のほうだった。男は一步前に出ていて女との間に立つ。

女は一週間海外にでも行くのかといつぐらい大きな旅行バッグを引っ提げていた。俯いて気の乗らない表情をぶら下げていたが出迎えた女と目が合うとばあつと花が開いたように明るくなつた。

一人を部屋に迎えると契約書を渡された。プレイの前に注意事項の説明と支払いを済ませるシステムになっていた。男は契約書にサインが終わるなり頭を下げて部屋を出て行く。一人きりになった。

「はじめまして、お客様。二ナ、と申します。お客様の事、何てお呼びしましょうか」

風俗の、それもＳＭ俱楽部で働いているとは思えないほど彼女は清潔そうに見えた。笑顔もぎこちなくは無い。可憐という言葉がよく合う。

「はじめまして。私のことは……そうね。男と同じで」主人様でいいわ。二ナさんは女の客ははじめて?」

「え、ええ」

二ナの頬を撫でると可憐さがひび割れた。肌が触れた瞬間、彼女の営業スマイルは破壊された。

「緊張しないで。することは男とそんなに変わらないわ。貴女を縛つたり、蠅燭をたらしたり、鞭で叩いたり……痛いのは、好き?」「好きですよ。でないとＭ嬢なんてできないもの」

女もＳＭなど初めてだったが二ナよりかは上手かった。一人の間には人生の経験が差として生まれ上下関係はいつのまにか決まつていた。

「それもそうね。じゃあさっそくそこの椅子に座つていただけるか

システム説明の際に確認は取っている。風呂はなく先に入つてから来る。すでに準備は完了している。二ナはベッドから少し離れた場所にある椅子に言われるがままに座つた。持つてきた旅行バッグを開く。用意してもらった道具が入つている。赤い縄を手にして二ナを追う。二ナは服を脱いでいた。肢体はとても美しい。もはや一メートル先さえ見ることのできない視覚で確認すると二ナの身体は傷がなかつた。

「綺麗ね。傷もない」

「残らないだけ……ですよ。それに良く見れば結構あざが残つてゐるはずです」

全裸で座る二ナは秘部をえりつけ出している。無抵抗のまま赤い縄が身体に巻きつけられていく。無抵抗のまま二ナは身体の自由を失つた。

「はあ……はあ……はあ……はあ……」

縄が身体を締め付ける。じんわりと出てきた汗を吸つていく。それだけで彼女の股間は濡れだした。彼女の臭いが部屋に香り始める。異常発達した嗅覚が匂いに敏感に反応する。

二ナの体臭……いやその奥から漂う生物の香りに身を狂おしく搔き鳴りたくなるほどの愛おしさを感じる。なぜかなど理解できなかつた。

ただ、鼻を刺激する二ナの体臭に異常なまでの興奮を覚えた。

「動ける?」

「無理……ですね……」

「次は口を閉めるわよ。アイマスクはしてもいいかしら?」

「契約書どおりであればお客様に従いますわ」

革のマスクで視覚を奪い、その言葉を最後に口を塞がれた。次はピンク色の丸いボールを噛ませる。言葉さえ奪われた二ナは女の成すがままになる。

「従順な犬ね。でもわたし……嫌いなのよ。なんでもはいつて言うヒトは」

ふとももをつねる。

「んふうッ！」

歯を噛締める。つねられた部分は赤くなる。手加減なしにつねつたせいか本物の声だった。

「その顔いいわ。汗も出てきたわね、二ナ」

女は自分が女王になつたように声を荒げていく。抵抗できない二ナの全身を舐めあげ、つねつて、叩いた。なにか一つ接触するたびに声をあげ身体をくねらせる二ナはまるで玩具のようだった。涎が下腹部に垂れだすと椅子からひょいと掴みあげベッドへと放つた。女の持つ腕力ではなかつた。

四つん這いで尻を掲げるようにして転がる二ナ。女は旅行バッグから鞭を取り出すと標的を二ナの尻に定めた。バシンと音が鳴り桃のような尻は赤く腫れあがる。叩くと身体がびくんと跳ねるのが堪らなかつた。何度も叩くうちに尻が真っ赤になる。そして赤で統一

されるとタイマーが鳴った。

最後の一振りを掲げたが夢の終わりを知らせる音に意識が現実に引き戻された。だがこの一時は麻薬などでは得られなかつた興奮を彼女に与えた。鞭を捨て二ナの身体を拘束する全てを解く。二ナは痛みのなかで極度の興奮状態にあつたようだ。股の間から透明の液をこぼししていた。

厭らしい牝の匂いは女の身体の渴きを潤す媚薬。どれほど上質な麻薬でさえ与えてくれなかつた秘薬に他ならない。

「よくするんですか？」

プレイが終わり、落ち着きを取り戻すと二ナが言つた。迎えがやつてくるまであと十分ほどある。

「いいえ、出張女を呼んだのは初めてよ。一年ほどアメリカについて帰ってきたの」

「アメリカ……」

「今日はありがとうね」

「また、指名してくださいね。女性のお客様だと安心できますからいい。

名刺を出すと女は躊躇無く受け取つた。店の名前と二ナといつ名前と携帯の電話番号が載つていた。店の番号ではなく個人の番号らしい。

男がやってきて二ナが帰つていいく。彼女のいたベッドに寝転がる。興奮は冷めていなかつた。火照る身体は次第に頭に熱を上らせる。目が覚めたままじつと二ナの名刺を見つめていた。

女は深夜一時になると起き上がり携帯電話を取りだす。名刺に載つてある番号を押した。ホール音が数回耳元で鳴ると「はい」と女の聞き覚えのある一ナの声がした。

「ねえ今から会えない？」

やはりもつと深いところで繋がらなければ愛は得られない。夜の闇に紛れた時と変わらず瞳は真紅に輝いていた。

今日も今日とて電車から周りの大人たちと一緒に恭司も降りる。サラリーマンたちは何を考えて仕事をしているのだろう。どんな学生生活を送り今に至るのだろうか。他人を見る恭司の目は羨望とも疑心とも付かぬ目をしていた。

悩みながらでも受けた仕事はするしかない。今日の仕事は母、恵子には関係なかつた。内容は雑誌の対談。あるグラビアモデルが対談したい相手を指名する「チーナー」。掲載されるページは四ページと多い。その企画に恭司は指名された。指名してきた相手のグラビアアイドルとの対談になる。

母、恵子によるとその企画を行つている雑誌はファッショニ誌ではなく書評が大半を占める文学誌らしい。四ページ中、見開き一ページに大きな写真つきとことだ。誰もが拒否することのない仕事というわけだ。

恭司を指名したグラビアアイドルの名前は西田リサという。恭司は彼女を知らなかつた。調べてみると週間少年漫画誌の表紙を飾る絶頂期のモデルらしい。顔ぐらいは知つておこうと昨日、参考書ついでに彼女の載つていた最新号を購入した。

髪はボブカット。背は百五十五センチ。痩せ型で胸のサイズはDとあつた。くびれにはぷよつとした可愛いお肉がついていて愛くるしい顔で笑いかけてくる。美耶子の涼しい美貌とは別の可愛らしさを持つていた。

駅から出ると大勢の人が喋る声と騒音が耳だけでなく身体に響き

渡る。スタジオの場所は新宿駅から南西にある。人の行き交いは常に多い場所だつた。

「本日未明、カメラマンの佐伯奏さんが……」

歩いているとふと耳に入る。テレビから流れる女の声が耳に入つたのだ。何気なしに足が止まつた。画面には白いスースを着た女性アナウンサーが映つている。その下には大きなテロップでカメラマンの名前が載つている。

佐伯奏。

その名前に心臓が高鳴る。数日前、彼女とは仕事で会つた仲だつた。貰つた名刺はバッグの中に入つていて。テレビ画面に彼女の顔写真が現れる。記憶の中の彼女と一致した。ウェーブのかかった肩までの茶髪に厚ぼつた唇。やはり彼女だつた。モデルの仕事は一度で何十人という人と会つ。スタッフ全員を覚えているなんてことはないが直接、接するカメラマンは憶えていた。

画面はスタジオに映像を映す。横に並ぶ四人と司会者が冥福を祈るように弔いを口にすると事件の内容に触れていく。彼女の死体がどのような状態であつたか説明される。

「またですね」

辛辣な顔をしたスタジオの一回。

「ええ、この事件昨日もあつてですね。今日で二入めということです」

「これは本当に人間の犯行なんですかね？ 残酷すぎますよ」

「メンテナーの女が言った。

最初の事件がフリップで紹介される。厚い板に書かれた絵と字が物語る。司会者が説明を開始するよりも先に恭司は理解していく。

最初の事件……つまり昨日おきた事件。被害者の名前は多田美奈とあり被害の状況が書かれていた。

遺体が見つかったのは路上。それも人通りの多い大通り。まるで放置されたように転がっていたらしい。外傷は一点のみ。首が鋭い刃物で寸断されており血が抜けている。切られた首は繋がっているよう供えられていたとあった。さらに抜けた血は一滴も現場に残つておらず犯人は何処から遺体を持ち運んだと見られている。しかし現場は人通りの多い場所、犯人がどうやって被害者を運んだのかはっきりとしていない。

あまりにも残酷な殺人事件。

「これは人のできることではないということですか？」

「まるでトリックですよ。しかも一人めです、なにか組織じゃないでしょうか」

しばらくして恭司にスタジオの進行がおいついた。

「それは捜査が進んで解明されるでしょう」

テレビの中では勝手な憶測が繰り広げられる。最終的に佐伯奏が死亡した、という事実だけが残る。他殺であることは明白だが方法はわからないままだった。

「やはり先日の多田美奈さんと事件が繋がっているということですかね？」

「はい。両者の状態や犯行現場が近いこと、殺害方法が一致していることからこれは連続殺人事件と断定しています」

多田美奈……この名前にも恭司は心当たりがあった。

画面の中で話が進むと多田美奈と名前が写真と共に写る。やはり記憶に間違いはなかった。佐伯奏と会った日のこと、多田美奈というモデルとも会っていた。多田はモデルだった。彼女のことは憶えている。その二人が相次いで死亡した。とてもいい気分ではない。

「犯人の特定は？」

「まだそこまで捜査は進展しておりません。ただ二人の遺体が酷似していたことから犯人が同じなのではないかと推測されています」「では次の犯行はあると思いますか？」

「断定できませんね」

その一言を最後にテレビは次のニュースへと切り替わる。映像が変わると出演者の表情もすぐに変わり人の死に対する表情ではなくなった。

氷上恭司も番組の切り替わりにあわせて再び歩き出す。

同じ犯人だというならこれは連続殺人事件になるのではないだろうか。

当日の現場を思い返した。二人とも誰から恨みを買つようには見えなかつた。多田は真面目だったしスタッフの言つ事にも素直に従つていた。モデルにしては妙に礼儀正しく我儘は言つていなかつ

た。カメラマンの佐伯は強気だったがこの業界においては普通だった。気の強い女性は五万といふ彼女は全体の中で見れば目を惹く存在ではなかつた。

全てを知つてゐるわけではなかつたが恭司のなかではそつだつた。

足取り重く撮影スタジオの前に着く。くしくも先ほど報道のあつた一人と会つたスタジオと同じだつた。フォトスタジオ・アガサというネームプレートが眼前にある。人の行き交いは背中で行なわれてゐる。時間ぴつたりで中へ入つた。

スタジオのなかは異様なまでに明るく振舞つてゐるようを見えた。スタッフも一人の死人に對して触れなかつた。スタジオに出入りする人間は様々で死んだ二人に構つていられないようだつた。だが一人に對して心を向けてゐるのは恭司だけだつた。ここにいるスタッフはあの日と違つう。そう思つがちらほらと見知つた顔が忙しなく動いていた。

やつてきた雑誌スタッフに案内されたのは明るい照明に照らされた場所ではなく影になる端だつた。椅子とテーブルが並べられておりスタッフが茶を注いだ。証明のなかでは世界が違つていて設営を行なう。数人の手で出来上がつていく世界に目を向けていた。

設営が終わりそつになつた頃、恭司の座る椅子の隣に一人の女が現れた。白いワンピースを着た女だつた。

「はじめまして、西田リサです。氷上くん、だよね。すつごくかっこいいね！」

「あ、ありがとうございます」

こきなり手をとりはしゃぐリサ。

「ずっと会いたかったんだ。よろしくね！」

笑顔は眩しかつたが恭司はなんとも思わなかつた。彼女に向ける神経が無かつた。

曾我部美耶子と付き合い始めて変わつたことがある。美耶子以外の女性に対しての接し方だ。これまでほどつち付かずの曖昧な態度を取る事が多かつたが頑なに心を寄せようとはしなくなつた。なぜなら美耶子の嫉妬心にある。恭司が他の女と接するたびに美耶子の感情は荒れた。ただファンが声をかけて握手する。それだけで会つた瞬間強く手を握る。足を踏むなどの行動に出る。

とにかく美耶子の自分へ対する大きな愛の証だつた。

リサは恭司との挨拶を終えるとわつそつとスタッフのところへ駆け寄つていく。雑誌の記者はもちろんのことカメラマンには念入りに挨拶をしている。恭司はその姿を見ていたが特に男性スタッフには強めのアピールに見えた。

雑誌に使う写真を一人数枚取るとセットを変更させる。かなり手の込んだ撮影だ。今度はカフェのひとコマのようにテーブルと椅子が用意される。白く花柄模様に縁取られた背もたれの椅子だつた。二人がテーブルを挟んで座ると対談は始まつた。

スタッフは質問と簡単な返答用台詞をある程度用意していた。恭司は自分の言葉に替えながら話をしていく。悩みは解消されていかつたが悟られまいとした。

話のなか、西田リサの事を知る。

初めて話す相手だつたが無理なく会話に集中できた。

対談の中で話すリサは眩しいくらいに可愛かつた。それはまぎれもない本心だつた。

「お疲れ様でーす」

その一言で現場スタッフは撤収作業へと移つた。恭司も待つ間座つていた椅子へと戻り渴いた喉に水を流す。西田リサはといふとまたスタッフのもとへ走つていった。暗い天井を見上げる。ふう、と息をつく。ここには母、恵子も美耶子もいない。見渡す限り恭司の知つているスタッフは一人もいなかつた。何度も足を運んだ現場とは思えなかつた。

さあ帰ろう。そう思つて仕度する。といつても持つてきたバッグを手にするだけだつた。その姿を見てか雑誌のスタッフと西田リサがやつてきた。

「ねえこれで終わりだよね」

「はい。お一人ともお疲れ様です」

恭司に聽こえるように話をする一人。恭司の視線が一人に向く。するとリサが急に恭司の腕をひっぱつた。まるで胸を押し付けるように引つ付く。

「じゃあさ、じゃあさ。」これからアタシと「」飯食べに行かない?」

「えつ今から?」

「そう、今から」

スタジオ内の時計を見ると十時になろうとしていた。

「もう十時だよ。僕は帰らないと」

「眞面目だなあ、恭司つてば。アタシが誘つてたのよ。断るつもり？」

何気なく名前を呼んでくる。見れば雑誌社のスタッフが後ろで田嶋を睨つて両手を合わせている。どうやら彼女の言うことに付き合つてやつてくれという雰囲気を出していた。誰もがそうしてくれると助かるといった顔をしていた。断れそうに無い。あきらめて彼女を見た。

「わかったよ。でも日付が変わるような時間までは無理だからね」「いいわよつ」

ぎゅっと腕をぴっぱる力が一段と強くなつた。

強引に連れてこられたのは駅から近いレストランだった。大通りに面した入り口は入つてすぐ、エレベーターになつており目的の店舗に合わせて移動する形式となつていて。恭司たちがやつてきたのは五階にある暗色の強い壁と蠟燭のよつた小さな明かりが演出する洋食店だった。

店内には静かな音楽が流れていた。スピーカーはどこか解らなかつたが店内に余すところなく響いていた。客の姿は確認できない。壁ではなく観葉植物が席の間に盛大に盛られて区切られていた。

西田リサは常連なのか出迎えたのは一介のスタッフではなく店長だった。胸のネームプレートにそつあつた。深々とお辞儀をする店長はどう見ても四十過ぎに見える。

「これはこれは西田さま。奥の個室が空いております。どうぞ」「ありがとうございます。店長さん」

腕を組み並ぶ恭司に対しては目もくれなかつた。客のいるフロアを過ぎると重そうな扉で仕切られた一角がある。リサは扉を軽々と開いて進む。店の雰囲気はがらりと変わる。どうみてもここは一般用ではない。一段と高級感のある個室が数部屋続く。どの部屋もきちんとした戸が付いており中は見えない。見れば足元に靴がある。すでに客が入つていてるのだ。リサは入り口の空いている部屋に恭司を連れ込んだ。

なすがまま、されるがままに部屋へ入るとよつやく身体が離れた。部屋にはカラオケボックスについている通信機が備えられており

リサは早速とばかりにボタンを押して注文を済ませる。恭司はすべてリサに任せることにした。

「でもー、そのスタッフたらサイマーなのよ。こつもやらしー田で見てくるしさーどう思つ?」

「どうつていわれてもな」

時間が経つに連れ、彼女の態度は豹変していく。テーブルの上にはアルコールはない。ただ、彼女の仕事場とは違う態度に恭司はなんとなくの相槌を打つだけだった。

あのプロデューサーは仕事ができない。
私の使い方を知らない。

口から出るのは不満ではなく他人に対する悪辣な言葉ばかり。我儘なきらいはあつたがそれ以上に口が悪い。恭司がスタジオで見ていた彼女は媚を売っていたにすぎない。恭司は口の悪さよりも彼女の態度の変化にうんざりしていた。じついう人物を見たことがないわけではない。母について現場を回つていれば目にする光景だった。だが、直接一対一で面と向かうことほんれまでなかつた。

あまりにも酷いものを見せられている。

「ねえ恭司くんつてこいつのイヤなの?」

「えつ」

「全然楽しくなさそうなんだけど……アタシの事イヤ?」
「イヤじゃないよ。ただ、僕には」

言葉が詰まる。リサに対する好意はないが嫌いにもなれなかつた。納得していないが理解はしている。スタッフに対する振る舞いは

当然のように思えたし彼女が悪態をつく理由もなんとなしに理解できたから。

しかし言葉が詰まつた理由はまつたく別にある。言つていいものか。美耶子も同業者である。恭司よりも仕事に関しては眞面目にやつている。おそらく自分から辞める事は無い。

「彼女がいるのね？」

「知つてゐるの？」

反応してしまつた。ふふつと笑うリサに今更、嘘は通じない。

「つうん。知らないよ。でもいるのかな～って思つてた。だつて格好いいし、いてもおかしくないでしょ」

「それつて外見だけ？」

「そりや そうでしょ。会つた事無いんだから人氣と外見以外知らないもん」「それもそつか」

まだリサと出会つて半口も経つていない。自分も彼女ことを知らないのだ。この場での態度が本当の彼女かどうか解らない。

「ねえ、カノジョつて誰？」

「言えないよ」

「言えないってことは関係者なんだ」

「なんで……そんな事聞くの？」

言葉を紡げばぼろを出してしまいそつだつた。できれば話を切り替えたいとこちらから質問をする。するとリサはまだ半分以上残つているオレンジチューハイのグラスを見た。グラスの縁を人差し指

でなぞり溜め息をつく。一瞬、リサの目が合った。

「危機感、かな。アタシみたいなのがつて次から次に出てくるでしょ。しょーもないアイドルの番組に水着で出て名前売ってるけどさ。いつまで続くかわかんないじゃない。さすと稼いで辞めたいけどどこかで大きく名前を売りたいわけよ」

口調はこれまでと違っていた。彼女の言いたい事はわかる。モデル業界はそんな簡単なものじゃない。恭司の場合、母の手伝いで顔を出すだけだが周りはそうではない。読モと呼ばれる連中が現れたときから現場の雰囲気は変わっていた。事務所に所属するモデルたちでも相当のレベルでなければ仕事にありつけない。それがメジャーな仕事であればあるほどだ。西田リサが背後から迫つてくる新人に畏れるのも納得できる。

「恭司くんはこの業界でやつてくつもり?」

「え?」

「だつてそうでしょ。高校に入つてモデル続けても結果良いようことはならないと思つよ」

自分のしたいこと、将来というのはあまりにも大きい悩みであつた。美耶子はおそらく大学に進学してもモデルを辞めないだらう。

なら自分はどうなる?

進学するのはM高校と決めている。しかしその先だ、最終学歴となるだらう大学はまだ決めていない。

勉強をし続けて何になる?

なりたい職業などない。あるのは母を少しでも楽にさせたいという願いくらいだ。

「僕はモデルの仕事を母さんの手伝い程度に考えてる。本業にすることはないと思うよ」

「ほんとに?」

それだけは決まっている。モデルなんてのは若い頃の蓄えが全てになる。芸能界で食つていこうなど地に足のつかない夢物語にはどうしても考えはつかない。氷上恭司という人間はどこまでも夢とは無縁の場所にいる。

「僕はそんなに夢を見ていないよ」

「そう……夢、ね……君には夢、なんだ」

リサは大きく溜め息をついた。

彼女のなかにある氷上恭司への評価だったのだろう。業界内では母親に氷上恵子という人物を持つ氷上恭司は大きなネームバリューがある。背は高く顔もいい、礼儀正しく仕事を疎かにしない。評判はよく本気を出せば雑誌業界だけでなくテレビを含むマスコミで取り上げられる事間違いなし。人間の身体的特徴というのは才能ではなく先天的に得られるもの。それに恭司は気づいていない。自分の身体がもつ真価に。

そろばかりでなくモデルは続ける気は無いとまで言つ。

「あたし、帰るわ。今日は……ごめんね」

口元を拭ぐと立ち上がった。テーブルの端に置かれた伝票を手にする。

「支払いはアタシがしどくから恭司くんはゆっくり食べて。あつ

「なに？」

出て行こうとしたリサが足を止める。

「シエラのライブ、行くんでしょ？ 聞いたよ」

「ああ、あれね」

シエラとは東京湾のアクアラインを舞台に繰り広げられる超巨大ライブのヒロインである。日本でも有名なコンピュータソフトウェアによるバーチャルアイドルの凱旋ライブ。シエラ・プロジェクトという巨大な組織がアメリカからやってきてライブを行なう。当日はアクアラインの端から端までを埋め尽くすだろう。プロジェクト側から日本の芸能界にVIP席が用意されている。恭司もまたチケットを貰っていた。

「けつこう芸能人も集まるって。VIP席のチケットってさ……」

「ごめん。あれ第三者に渡せないんだ」

「そつかじやあね」

深く追求しなかった。恭司はチケットを三枚保有している。友達を誘つてくれればいいと母親から渡されたのだ。

白瀬トオルと電話で話したときチケットの話を聞いたことがある。観客動員数はおそらく過去最高と言われ現在チケットの値段はインターネットオークションで原価の五倍になっている。最低三万円は出さなければ落札不可能と言つていた。

そんなトオルは兄からチケットを貰う予定だとも言つていた。手を振つて部屋を出て行くリサを見送ると一人きり部屋の中だし

んとする。テーブルに並んだ料理に箸を伸ばそうとしたが気づかぬうちに指が震えていて上手に動かせなかつた。

将来に不安ばかりが募つていく。

他人の目には自分はどう映つているのだろうか。

身体ばかりが成長し心はまだ年相応の悩める少年のままだつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2054t/>

蒼の月 鴉

2011年10月8日03時22分発行